

平成21年度
「山口大学のFD活動」

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

大学教育の質の保証が求められている。質の保証ということがそもそも可能であるのか。できるものであるならば、長い人類の歴史の中で千年、二千年前にできていても良いのではないか。もしできないのであれば、いくら努力したところで無駄ではないか。このような疑問が脳裏をかすめる。

10年前に、共通教育英語をめぐるような疑念をいただいていたことが思い出される。英語教育に求められる目標は高く、達成への道は遠い。一般的には、「読み、書き、聞き、話すの4技能をバランス良く身につけ、コミュニケーションの背景にある文化に理解を深め、国際的な場で活躍できる」というような目標が立てられる。これ自体、非のうちどころのない、まったくもって正しい目標である。しかしながら、私はここに大きな違和感を感じていた。その目標はどのくらいの期間で達成できるのか、達成できている人はどれだけいるのか、英語を教える教員でも十分達成できていないことを、学生諸君全員に求められるのだろうか。あまりに高い目標を前に、無力感に陥っていたと言って良い。しばらく、「大学における英語教育は無駄」というような発言さえしていたが、当時共通教育センター長であった丸本先生（現学長）は、議長席から「できないという話はもういい。できることは何かありませんか」と問いかけられた。「たとえば TOEIC のスコアを 50 点上げることならできる」それが私の答えだった。「できるというなら、それをやれ」という意見が他の委員から出た。そういう経緯で、山口大学全体に TOEIC を導入し、50 点上げられることを実証することになった。TOEIC 導入以前のスコアは推定するしかないが、先行して TOEIC を導入していた学部の平均点が平成 21 年の時点で 120 点上がっていることを考えれば、100 点近くは上がったと見なして良いのではなかろうか。

10 年後立場は変わって、私が大学教育センター長としてこの文章を書いている。「できないという話はもういい。できることは何かありませんか」という問いかけを改めて自分自身と大学全体に対してしておきたい。教育の質の保証という課題に対しては、結局「明確な目標を設定すること（GP、シラバスの到達目標）」「カリキュラムを可視化すること（カリキュラムマップ、カリキュラム・フローチャート）」「教育改善作業を継続すること（PDCA）」の3つによって答えるしかない。大学教育センターとして、システム基盤作りはやってきたつもりである。第2期中期目標期間においては、その成果・実績が求められるであろう。ここに平成 21 年度 FD 報告書をお届けするが、昨年度、一昨年度から改善が見られるであろうか。マンネリ化していないであろうか。学内外からご叱正をいただくとともに、大学全体の各組織において上記3つの点について点検していきたい。

山口大学大学教育機構・副機構長
大学教育センター・センター長 岩部 浩三

目次

第1部 全学FD活動	
第1章 大学教育機構及び事務局主催のFD活動	2
第1節 大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧	2
第2節 大学教育機構主催の講演会及び研修会の概要・報告	6
第3節 事務局主催の部局長等管理運営研修の概要・報告	29
第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動	30
第1節 FD活動	30
第2節 第57回中国・四国地区大学教育研究会報告	32
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	53
第1節 実施方法・実施状況	53
第2節 授業評価の結果について（全学）	58
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	75
第2部 学部・研究科のFD活動	
第4章 人文学部のFD活動	95
第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）	95
第2節 人文学部独自のFD研修会	100
第3節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加	103
第4節 人文学部における学部学生むけアンケート	104
第5節 その他のFD関連活動	105
第6節 FD実施経費報告	105
第5章 教育学部のFD活動	106
第1節 教育学部FD講演・研修会報告	106
第2節 教育改善FD研修会	109
第3節 学生授業評価と教員授業自己評価の実施	111
第4節 FD実施経費報告	115
第6章 経済学部のFD活動	116
第1節 平成21年度経済学部FD計画	116
第2節 ピア・レビュー	116
第3節 全学FD研修会への参加状況	122
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	122
第5節 教育改善FD研修会	123
第6節 ゼミナール活動改善研究会	124
第7節 FD実施経費報告	125
第7章 理学部のFD活動	127
第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）	127
第2節 大学教育機構との共催による教育改善FD研修会	144
第3節 大学教育機構主催全学FD研修会への参加状況	146
第4節 学生授業評価	147
第5節 その他のFD活動	147
第6節 FD実施経費報告	162
第8章 医学部のFD活動	165
第1節 医学科	165

第2節	保健学科	166
第3節	FD実施経費報告	170
第9章	工学部のFD活動	171
第1節	はじめに	171
第2節	公開授業	171
第3節	授業評価表彰	180
第4節	全学FD研修会への参加	182
第5節	FD実施経費報告	185
第10章	農学部のFD活動	186
第1節	はじめに	186
第2節	セミナー（農学部公開講演会）	187
第3節	ピアレビュー	188
第4節	学部・学科等のFD活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会への参加	188
第5節	大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医学研究科・医学系研究科（農学系）との教育改善FD研修会への参加	189
第6節	全学FD研修会	190
第7節	学生授業評価と教員授業自己評価	191
第8節	まとめ	199
第9節	FD実施経費報告	199
第11章	人文科学研究科のFD活動	200
第1節	教員間授業公開（ピア・レビュー）	200
第2節	人文科学研究科独自のFD研修会	200
第3節	大学教育機構主催FD研修・講演会への参加	200
第4節	人文科学研究科における自由記述式アンケート	200
第12章	教育学研究科のFD活動	203
第13章	経済学研究科のFD活動	206
第1節	平成21年度経済学研究科FD計画	206
第2節	ピア・レビュー	206
第3節	学生授業評価・教員授業自己評価	209
第14章	医学系研究科のFD活動	210
第1節	概要	210
第15章	理工学研究科のFD活動	211
第1節	理学系	211
第2節	工学系	214
第16章	農学研究科・医学系研究科（農学）のFD活動	217
第1節	はじめに	217
第2節	セミナー（農学部公開講演会と共催）	218
第3節	教員授業自己評価	221
第4節	学生授業評価	222
第5節	全学FD研修会	222
第6節	まとめ	222
第17章	東アジア研究科のFD活動	224
第1節	平成21年度東アジア研究科FD計画	224
第2節	東アジア研究科FD研修会	224

第3節	FD実施経費報告	239
第18章	技術経営研究科のFD活動.....	240
第1節	セルフレビュー	240
第2節	全学FD研修会	241
第3節	教育改善を目的とした評価活動	242
第4節	その他のFD活動	248
第5節	FD活動経費報告	268
第19章	連合獣医学研究科のFD活動.....	269
第1節	はじめに.....	269
第2節	共通セミナー.....	269
第3節	各大学における特別講義	270
第4節	E-ラーニング.....	271
第5節	FD実施経費報告	271
平成21年度	山口大学 教学委員会 名簿	272
平成21年度	山口大学 学部・研究科FD担当者 名簿	273
平成21年度	山口大学 大学教育センター 名簿	273

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 大学教育機構及び事務局主催のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む*）。まず第1節と第2節において大学教育機構主催の講演会・研修会一覧とその内容を報告し、最後に第3節において事務局主催のFD活動を取り上げる。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成21年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は44名であった。また研修会は14種類・計16回開催され、参加者は計461名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計112名であった。延べ617名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革 第1部：講演会「大学と社会との共育」 第2部：パネルディスカッション「目標達成型は教育改善に有効か？－取組と評価－」 (共催 大学コンソーシアムやまぐち)	平成21年8月10日(月)	13:30～16:30	吉田地区	共通教育メディア教室	末富 喜昭(山口日産社長、外部評価委員長)、岩部浩三(大学教育センター長)、兼石俊明(教育コーディネーター)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	第1部：山口日産の末富社長より、外部から見た本学の現状や教育改革の方向性について、ご意見やご感想をいただくと同時に、企業経営者の立場から見た社会人基礎力の育成とはどうあるべきかを解説する。 第2部：企業、高校、大学といったそれぞれの立場から本学が推進している目標達成型大学教育改革をどのように評価するか述べてもらうとともに、今後本学の進むべき教育改革の方向性についてご意見を伺う。	教職員38名 学生3名 その他3名
									参加者計44名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会	平成21年4月2日(木)	13:30～16:00	吉田地区	共通教育メディア教室、共通教育各教室、工学部E21番教室、医学部第3講義室	岩部浩三(大学教育センター長)、吉田香奈(大学教育センター准教授)、森本宏志(保健管理センター講師)、神田誠司(共通教育係長)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生及びTAを採用する教員	TAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員30名 学生65名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	障害学生に対する修学支援のための研修会	平成21年4月2日(木)	17:00~18:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	平田牧三(保健管理センター長)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	理学部教員、受講科目担当教員(共通教育・専門教育)、大学教育センター、担当事務。	発達障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教員11名
3	各学部・研究科FD推進者のための研修会	平成21年5月8日(金)	17:00~18:00	吉田地区	共通教育本館棟2F第2テレビ会議室、工学部図書館、医学部図書館(各地区をテレビ会議を利用して実施)	岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科のFD担当者	各学部・研究科のFD担当者が集まり、FD研修会・教育改善研修会、FD予算措置及び配分等について協議するとともに、今後の本学のFD活動のあり方について討議を行なう。	教員15名
4	平成21年度第57回中国・四国地区大学教育研究会	平成21年5月30日(土) 5月31日(日)	9:00~17:45 9:30~12:10	吉田地区	吉田キャンパス(1番教室および共通教育棟を中心に実施)	濱名篤(関西国際大学学長)、羽根拓也(株式会社アクティブラーニング代表取締役社長)、本学教員及び中国・四国地区大学教育研究会関係者	本学教育職員ほか及び中国・四国地区大学教育研究会関係者	「大学教育における学士力・社会人の育成を考える」と題し、会員大学間での議論・情報交換を行い、今後の充実に向けた方策を検討する。	全体173名(うち山口大学49名)
5	新規採用教育職員研修会(共催 人事課)	平成21年7月30日(木)	9:55~17:00	小串地区	医学部霜仁会館3F会議室	小川勤(大学教育センター教授)、吉田香奈(大学教育センター准教授)、木下真(大学教育センター准教授)	平成20年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員	GP、カリキュラムマップ、20年度に教育GPに採択された「目標達成型大学教育改善プログラム」、修学支援システム、観点別シラバスの作成方法、webシラバスの入力法、学生授業評価システム、教員授業自己評価システムの内容について説明する。	教員21名
6	複数教員による効果的な授業実施の方法ー共通教育「心理学」における「リレー講義」の実践から	平成21年8月24日(月)	13:30~15:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	小杉考司(教育学部専任講師)、他(福田・恒吉・沖林先生)	希望者	オムニバス型授業を実施している、または導入を考えている教員を対象に、効果的な授業展開の方法や評価について、このような授業方法を実施している共通教育「心理学」の授業担当者の研究成果を発表するとともに、研修会参加者との意見交換を実施する。	教員13名
7	最近の学生の実態と社会人基礎力の養成	平成21年8月25日(火) 平成22年3月25日(木)	13:30~15:30	常盤地区 吉田地区	工学部D23教室 共通教育棟2階会議室	小川勤(大学教育センター教授)	希望者	前半は、青少年の学習観や生活観について、各種の調査結果から分析した結果や他国との比較を示し、最近の学生の特徴に学ぶ。後半は、「学士力」の意義と設定の背景、また、「社会人(基礎)力の養成」について、大学教育の中でどのように実践して養成していくのかを他大学の事例も交えて学ぶ。	教員1名 教員8名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
8	多人数授業における学生参画学習の工夫－授業手法と評価－	平成21年8月31日(月)	13:30～15:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	林 徳治(立命館大学教授)	希望者	多人数でも学生が授業に参画できる授業手法、教材および形成的評価手法を例示し演習する。	教員13名 学生1名
9	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	平成21年9月8日(水)	14:30～16:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	永井 好和(メディア基盤センター准教授) 市川 哲彦(メディア基盤センター准教授)	希望者	昨年度の実施状況を踏まえ、第3週～第5週のテーマである、「情報セキュリティ(第3週)」、「情報モラル(第4週)」及び「コンプライアンス(第5週)」を中心に、共通教育「情報セキュリティ・モラル」を指導する上で留意すべき点について、研修を行う。また、DVDを活用した教育方法について学ぶ。	教員8名 教員13名
		平成22年3月30日(火)		常盤地区	工学部D23教室				
10	DocuWorksの使い方	平成21年9月11日(金)	13:30～15:30	吉田地区	メディア基盤センター2F情報処理演習室2	宮崎 陽子(富士ゼロックス)	希望者	DocuWorksの全体的な機能概要と具体的な使用方法について、演習を交えて初心者を対象に研修を実施する。	教員8名
11	「eラーニング研究会」(共催 メディア基盤センター)	平成21年9月25日(金)	13:00～17:00	吉田地区	メディア教育棟演習室、工学部D棟4階演習室	王 躍(メディア基盤センター准教授)、武本 Timothy(経済学部准教授)、小野 博(メディア教育開発センター名誉教授)、平野 秋一郎(放送大学ICT活用・遠隔教育センター特定特任教授)、杉山 秀則(放送大学ICT活用・遠隔教育センター助教)	希望者	近年注目を浴びているMoodleをプラットフォームにしたeラーニングとリメディアル教材の活用方法などについて開催する。	教職員22名 学生9名 その他10名
12	理系共通教育科目「地球科学2」の授業展開－参加と思考をうながす授業づくりの方法－	平成21年9月25日(金)	13:30～16:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	池田 幸夫(教育学部教授、附属教育実践総合センター長)	希望者	平成20年度に行った授業実践に基づいて、大学生の平均的な知的レベルに対応した分かりやすい授業展開とその方法について紹介する。	教員4名 学生3名
13	Less is more－効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考－	平成21年10月16日(金)	14:30～16:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	MARC LOHR(経済学部教授、大学教育センター主事)	希望者	パワーポイント・プレゼンテーションに求められる機能を再確認し、メディアのデザイン・レイアウト理論に基づいて、効果的なプレゼンテーションの作成と実施を考える。	教員15名 学生5名
14	学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－	平成22年3月19日(金)	13:30～15:30	常盤地区	工学部D23教室	兼石 俊明(大学教育センター・教育コーディネーター)	希望者	元高等学校教員の体験を交えながら「教育方法の改善」の方途について説明し、一緒に考える。	教員13名
									参加者 計461名

III 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと工学部・理工学研究科(工学系)・医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成21年8月21日(金)	13:30~15:40	常盤地区	工学部D23教室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田耕一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教職員20名
2	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成21年8月24日(月)	13:30~15:40	小串地区	保健学科研究棟1F大会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、木下真(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員11名
3	大学教育センターと人文学部・人文学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成21年9月25日(金)	13:30~15:40	吉田地区	人文学部研究棟2F第4演習室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員10名
4	大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成21年10月7日(水)	13:30~15:30	吉田地区	農学部本館2F会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、木下真、岡田耕一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員17名
5	大学教育センターと理学部・理工学研究科(理学系)・医学系研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成21年10月21日(水)	13:30~15:30	吉田地区	理学部12番講義室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、木下真、岡田耕一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員20名
6	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済学系)との教育改善FD研修会	平成21年11月4日(水)	13:30~15:30	吉田地区	経済学部会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、木下真(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員13名
7	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育学系)との教育改善FD研修会	平成21年11月11日(水)	13:30~15:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、岡田耕一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員21名
									参加者計112名

第2節 大学教育機構主催の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

(1) 目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革

主催：大学教育機構

共催：大学コンソーシアムやまぐち

日程：平成21年8月10日(月)13:30~16:30

場所：共通教育メディア教室

対象：教育職員ほか及び県内他大学関係者



第1部 講演会

題目：大学と社会との共育

講師：末富 喜昭（山口日産社長、外部評価委員長）

司会：マルク・レール（大学教育センター主事、経済学部教授）

概要：今回講演会の講師を引き受けた経緯は、昨年秋、大学と地

元経済界との交流会で塚原前副学長と数分立ち話の後、社会人の視点で大学にアドバイスをしてほしいという依頼を受けたことに始まります。この話の中で、11年前に息子の進学の際に山口大学の経済学部に進むかどうかを考える際に他校とのシラバスを経営者視点で分析した結果、息子を他大学に進学させたことや、二人の息子とテーマをもって親子で就職活動を行い有効であったことなどについて塚原先生にお話ししたら大変興味を持たれ、ぜひ、山口大学の教育・研究について学外からの意見を述べて欲しいとの依頼を受けました。

私は、社会人生活40年の体験と社会を広く観察し続けた結果から、社会人基礎力を独自の3つのセンス《情報センス・時間のセンス・人生のセンス》で分類するとともに、人材育成の基本として、《感性の育成》を中心にして経営を行なっています。21世紀の社会や各分野の課題とも関連性が強い《発見し・はぐくみ・かたちにする》という山口大学の教育理念・目的を達成するために、今後はカリキュラムの進化を図っていくべきであるという視点から今回はお話しをすることができればと考えています。

第2部 パネルディスカッション

テーマ：目標達成型は教育改善に有効か？ - 取組と評価 -

パネリスト：末富 喜昭（山口日産社長、外部評価委員長）

岩部 浩三（大学教育センター長）

兼石 俊明（山口大学 大学教育センター 教育コーディネーター、元山口県立宇部高等学校校長）

司会：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：平成20年度に文部科学省が実施した「質の高い大学教育改善プログラム(以下、教育GP)」に本学の大学教育センターが申請した「目標達成型大学教育改善プログラム」が採択された。

約1年間にわたる本取組の概要と成果を発表するとともに、パネリストたちに、それぞれの立場(企業、高校、大学)からこの取組に対する評価と課題について論じてもらう。また、パネルディスカッションに参加した教職員たちとの意見交換や質疑応答も併せて実施する。

報告：

情報メディア講義室で「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」をテーマに FD 講演会およびパネルディスカッションが開催された。基調講演会では山口日産社長の末富喜昭氏より、「大学と社会との共育」という演題で、日頃から企業経営を行なう際に考えている4つの観点、「マーケット満足度 (MS)」、「お客様満足度 (CS)」、「利益満足 (CS)」、「組織・人財満足 (HS)」を中心に大学改革に対する意見も含めて講演が行われた。2部では、岩部大学教育センターと兼石教育コーディネーターより講演会の感想や本学の教育改革について推進する立場と外部(高校)から見た立場からの意見発表と参加者との意見交換が行なわれた。当日の研修会参加者は教職員 44 人であった。参加者からは、ぜひ大学の執行部の方にも末富社長の講演を聴いて欲しかった。山口大学に足りないものを掲示して解決の進路・方向を示していたので参考になったという意見や感想があった。



基調講演を行なう末富喜昭山口日産社長



パネルディスカッションの様子

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	4.3%
どちらとも言えない	3	13.0%
良かった	15	65.2%
非常に良かった	4	17.4%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

2. 研修会

(1) 共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会

主催：大学教育機構

日時：平成 21 年 4 月 2 日(木) 13:30~16:00

場所：共通教育メディア教室、共通教育各教室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象：共通教育において前期に TA に採用された大学院生及び TA を採用する教員

内容：ティーチング・アシスタント(TA)制度は、「優秀な大学院生に対し、教育的配慮の下に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会の提供を図るとともに、これに対する手当での支給により大学院生の処遇の改善の一助とする」ことを目的として実施されている。本学で共通教育の TA に採用され

ている大学院生は年間 200 名を超えており、特にその充実が求められている。そこで、研修会を開催し、TA の役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業における TA の仕事の確認と留意点などについて理解を深める。

スケジュール

第 1 部 全体研修【13:00～14:00】

13:00～13:05

挨拶(大学教育センター長 岩部浩三)

13:05～13:30

共通教育における TA の役割(大学教育センター准教授 吉田香奈)

－ 共通教育の理念・目標・仕組み, TA の役割, 教育支援の方法

13:30～13:50

大学の授業における安全衛生((全学)労働安全衛生管理室主任、保健管理センター講師 森本宏志)

－ 授業における安全衛生と教職員・TA の責務

13:50～14:00

TA の勤務時間・諸手続等について(共通教育係)

第 2 部 個別研修【14:10～15:00】

報告：

共通教育の前期の授業を担当する TA のための研修会が 4 月 2 日 13:00 より吉田・常盤・小串地区で同時開催された。TA 研修会は年 1 回行われており、今年で 3 年目となる。参加者数は教員 22 名、学生 65 名、事務職員 8 名の合計 95 名であった。

まず、第 1 部の全体研修では大学センターの岩部センター長による開会の挨拶の後、大学教育センターの吉田准教授より共通教育の理念・目標・仕組み、TA の心得、職務内容、学生からの質問や意見に対する適切な対応方法等について説明があった。特に、共通教育教務手帳の平成 21 年度版には新たに TA の心得や授業支援方法についての説明が盛り込まれたので、事前によく読み、教員の授業支援にあたってほしい旨要請があった。続いて保健管理センターの森本宏志講師より、全学労働安全衛生管理室主任の立場から授業における安全衛生について説明があった。特に実験系の授業の TA は労働安全衛生管理室が発行している「安全衛生・健康の手引き」を熟読し、危機対応を行ってほしい旨要請があった。最後に共通教育係より TA の任用手続等について説明があった。

続いて第 2 部の個別研修では、共通教育棟の各教室に分かれてグループ別に TA の心得や機器の使用方法等について研修が実施された。ただし、グループ別研修に適さない科目については授業担当者が個別に事前研修を行うこととした。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会にお願いしたが、多人数・講義系授業科目については多数の分科会に関係するため大学教育センターが担当した。各グループでは、TA の心構え、留意事項、TA 経験者による事例紹介、共通教育係・印刷室等の案内、AV 機器操作実演、演習・実験補助の方法などについて研修が行われた。

参加した大学院生・教員からの事後評価では約 6 割から肯定的な回答が寄せられた。自由記述では「初めて TA をするので、役割・心構えなど説明してもらえて役に立った」「TA の仕事内容を具体的に知ることができてよかった」「安全、心得など多岐にわたり良い内容だった」「TA の意識を高める良い機会になった。今後も続けてほしい」といった意見が寄せられた。一方、「安全衛生については TA に具体例を分かり易く、使えるスキルを養うように指導してほしい」「リスクマネジメントは教員が行うが、TA はそのサポートを迅速に行えるように指導してほしい」「昨年も参加したが、同じ内容のものをまた受けなければならないのは無駄だなと感じた。以前から TA をやっているのなら必要ないと思う。」といった意見も寄せられた。

なお、今後受けてみたい研修内容については「授業中に何かトラブルが生じた時、TA が行うべき

対応」「実際に TA が行う実技指導やそのポイントを指導してほしい」「TA 同士でのスキルアップを目指す内容」「TA の事務手続きを個別で教えて欲しい」といった意見が寄せられた。

来年度は、第 1 部の全体研修の内容を充実させるとともに、第 2 部の個別研修の充実を図っていくことが課題である。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	2	4.4%
あまり良くなかった	2	4.4%
どちらとも言えない	12	26.7%
良かった	21	46.7%
非常に良かった	7	15.6%
無回答	1	2.2%
合計	45	100.0%

(2) 障害学生に対する修学支援のための研修会

主催：大学教育機構・理学部（共催）

日時：平成 21 年 4 月 2 日(木) 17:00～18:00

場所：共通教育棟 2 階会議室

対象：理学部教員、受講科目担当教員（共通教育・専門教育）、大学教育センター、担当事務

参加者：参加実績 11 名(内訳：人文学部 1 名、教育学部 1 名、理学部 2 名、大学教育機構 5 名、なお、後日説明を行なった者人文学部 1 名)

講師：平田牧三（保健管理センター長）、岩部浩三（大学教育センター長）、小川 勤（大学教育センター教授）

内容：発達障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。

報告：

発達障害を持った理学部数理情報学科の学生（2 年生）に対する授業のやり方や情報保障について、当該学生の前期授業を担当する教員を対象に研修会を開催した。

当日は、まず岩部大学教育センター長から、本学に入学後のこの 1 年間の当該学生の学習面や生活面での様子について報告が行われた。

次に、平田保健管理センター長より当該学生の本学入学前までの成長の過程や高校での学生生活の様子、両親と当該学生の親子関係等について説明があった。その後、ADHD やアスペルガーといった発達障害を抱えた人の行動や人間関係に関する特徴や一般的な対応の仕方について説明があった。

小川教授からは発達障害のある学生に対して、授業でどのように対応を行なったらよいのか具体的な事例や資料を使って説明が行なわれた。

参加者との意見交換では、「発達障害学生の指導方法がわかってよかった」、「発達障害学生支援については、個別に考えるべき点が多くあると思う。」という意見とともに、「場合にはよっては少し授業法を変えれば対応できるが、場合によっては全く新しい授業内容を準備しなければならない。後者の場合の支援をいただきたい。」というような要望事項も寄せられた。

また、何か発達障害を持った学生との間でトラブルが発生した場合の相談窓口の設置について要望があった。さらに、今回の研修会開催時期については、「研修会は授業開始 1 週間前で、事前の授業準備や心構えができてよかった。」というこの種の研修会開催をタイムリーに実施して欲しいという意

見が多かった。

(3) 各学部・研究科FD推進者のための研修会

主催：大学教育機構

日時：平成21年5月8日(金) 17:00～18:00

場所：共通教育2階会議室

対象：各学部・研究科のFD担当者

講師：岩部 浩三 (大学教育センター長)、小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：15名(内訳：各学部・研究科FD担当者10名、大学教育機構5名)

内容：各学部・研究科のFD担当者が集まり、以下の項目について協議するとともに、今後の本学のFD活動のあり方について討議を行なう。

1. 21年度教育機構主催研修会について
 - ①アラカルト研修 ⇒ 新規の研修会を中心に説明する。
 - ②講師派遣型研修会
2. 教育改善研修会について
開催趣旨(別添資料参照)、内容(GP、カリキュラムマップ、シラバス、カリキュラム全体の見直しを実施することの明確化)、作業手順(研修会の開催日程や会場のセンターへの報告、研修会の当日の日程等)
以上のことを説明した後で意見交換
3. FD予算措置及び配分について
4. 今後のFD活動について意見交換

報告：

研修会の冒頭に岩部浩三大学教育センター長より、挨拶を兼ねて今回の研修会の趣旨について説明があった。一昨年まではFD委員会があったが、昨年度から教学委員会にFD委員会が統合された。一方、本学では年1回はFD活動に参加することが昨年度より義務化された。また、教育GPに「目標達成型大学教育改善プログラム」が採択された関係で教育改善の実質化が求められていることが説明された。

次に、大学教育センターの小川教授より「21年度教育機構主催研修会」について、アラカルト型研修の中で本年度新規に開催されるFD研修会の内容や「講師派遣型研修」、「教育改善FD研修会」の概要について説明が行なわれた。

3つ目の内容としては、各学部・研究科と大学教育センターが一体になって開催する「教育改善研修会」について、大学教育センターの小川教授より資料を使って、開催趣旨や開催方法、研修対象者等について詳細な説明があった。この中で、昨年度(平成20年度)は、大学教育センターの専任教員が各学部・研究科を回り、拡大教授会の場で全教員に対して、グラジュテーション・ポリシー(以下GP)やカリキュラム・マップ(以下CUM)、Webシラバスの意義や関連性、さらに、これらを活用した山口大学における教育改善のしくみについて説明を行ったが、本年度は、各学部・研究科で教育改善のFD活動に携わっている先生方と大学教育センターとが一体となって、GP、CUM、シラバス、カリキュラムを再点検し、GPを満たすようなカリキュラムを各学部・研究科で組織的に考えていただくきっかけとなるような教育改善研修会を開催したいという趣旨説明が行なわれた。

その後参加者との意見交換が行なわれたが、参加者からは、「GPやCUMについて優れたモデルを示して欲しい」、「FD研修会のマップを作成したらどうか」という意見がだされた。

上記以外の議題としては、岩部大学教育センター長より、本年度のFD予算要求について説明があった。

今回初めてこのような研修会を開催したが、参加者からは各学部・研究科のFD計画を立てる今の

時期に、このような研修会を開催してくれてタイムリーであったという肯定的な意見が多くあった。

(4) 平成21年度第57回中国・四国地区大学教育研究会

主催：大学教育機構

日時：平成21年5月30日(土) 9:00～19:30

平成21年5月31日(日) 9:30～12:10

場所：吉田キャンパス 共通教育棟

対象：中国・四国地区大学教育研究会参加校教職員他

詳細については第2章の第2節を参照されたい。

(5) 新規採用教育職員研修会

主催：大学教育機構（人事課と共催）

日時：平成21年7月30日(木) 14:30～17:00

場所：霜仁会館会議室（医学部構内）

対象：平成20年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員

講義1 山口大学のGPとカリキュラムマップについて

講師：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：本学は教養教育及び専門教育において、それぞれGP(グラジュエーション・ポリシー)を作成した。またGPに対応したカリキュラムマップも作成した。その仕組み、意義等について説明する。さらに、20年度に教育GPに採択された「目標達成型大学教育改善プログラム」についても、その概要を説明する。

講義2 シラバスの作成

講師：木下 真（大学教育センター准教授）

内容：修学支援システムの説明と山口大学の観点別シラバスの作成方法及びWebシラバスの入力法などについて説明を行なう。

講義3 学生授業評価と教員授業自己評価

講師：吉田 香奈（大学教育センター准教授）

内容：山口大学の学生授業評価システムと教員授業自己評価システムの内容説明など。

報告：

昨年度に引き続き総務部人事課職員係と一体となった、新規採用教育職員研修会を実施することになった。午前中は、学長や副学長による大学経営に関する講話やメディア基盤センターによる山口大学の情報セキュリティに関する説明が行われた。大学教育センターが担当したのは、午後の14:30～17:00で、「山口大学のGPとカリキュラムマップについて（講師：小川勤大学教育センター長）」、「Webシラバスの作成について（講師：木下真大学教育センター准教授）」、「学生授業評価と教員授業自己評価について（講師：吉田香奈大学教育センター准教授）」の3つのテーマで研修会が実施された。受講者のそれぞれの研修内容について評価は以下の通りである。

今回は、総務部人事課職員係が従来実施していた新規採用教育職員研修会に、加わる形で研修会が編成された形での研修会としては3年目を向け、本学に初めて赴任した先生方に、山口大学における

教育改善の考え方やしくみ、Web シラバスの書き方、IYOCAN を活用した学生授業評価と教員授業自己評価について、ほぼ全員近い新規採用教育職員に対して研修が行われた意義は高いものと考えられる。しかし、一方で、まだ助教の先生方は授業を担当したことがないので、大学教育センターが実施した研修内容に対して実感がわからないという指摘をされる先生方もあった。今後研修会の内容をもう一度検討する必要性を感じた。

- ・山口大学の GP とカリキュラムマップについて
良かった 6名、やや良かった 9名、やや悪かった 3名、無回答 1名
- ・Web シラバスの作成について
良かった 6名、 やや良かった 9名、やや悪かった 2名、無回答 1名
- ・学生授業評価と教員授業自己評価について
良かった 8名、やや良かった 8名、やや悪かった 1名 無回答 1名

(6) 複数教員による効果的な授業実施の方法ー共通教育「心理学」における「リレー講義」の実践から

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 8 月 24 日(月) [吉田地区] 13:30~15:30

場所：共通教育棟 2F 会議室

対象：希望者

講師：小杉 考司 (教育学部専任講師)、他(福田・恒吉・沖林 先生)

内容：オムニバス型授業を実施している、または導入を考えている教員を対象に、効果的な授業展開の方法や評価について、このような授業方法を実施している共通教育「心理学」の授業担当者の研究成果を発表するとともに、研修会参加者との意見交換を実施する。

報告：

本研修会では、複数教員による効果的な授業実施の方法について研究を行っておられる教育学部の小杉先生、沖林先生、福田先生、恒吉先生の 4 名を講師にお招きした。先生方は共通教育「心理学」において 2 つのタイプのリレー講義 (ハーフ&ハーフ型、クォーター型) を実施され、学生授業評価や学生の成績にどのような違いがみられたかを検証する、という取り組みを行っている。そこで、全学 FD で成果をご報告いただき、学内の先生方の情報共有の場としたい、というのが本研究会開催のねらいであった。

研修会ではまず小杉先生より実践の概要・分析結果が示され、続いて福田先生、恒吉先生より実際に授業を担当された立場からリレー講義のメリットや課題について報告が行われた。両先生からは共通シラバスの作成、授業参観、実施後の効果の検証などを行うことで授業担当者同士の非常に良い FD になっている、という報告があった。

参加者からは報告内容について多くの質問や意見が寄せられ、貴重な情報交換の場となった。実施後のアンケートには「自分の授業を考えるのに良い機会になったと思う」「せっかくの FD なのでもう少し参加者が多いと良いと思った」という意見が寄せられた。また「講義の具体的な内容についてももう少し情報があるとうれしかった」「受講学生数と効果の関係に踏み込んでほしかった」「学生の注意持続時間 (attention span) に関するデータの提示をしてほしかった」「相関係数が低いのが気になった。特に採点結果が $Y=0.3$ だと、設問に問題がある気がしていけない。」といった具体的な要望も



寄せられた。共通教育の大規模授業を担当する教員にとって学生の授業への関心を高めたり、学習内容の理解度を上げるにはどうしたらよいかは常に悩みの種である。また、共通教育のマネジメントを行う大学教育センターとしては共通教育の必要コマ数を確保したり、人気の授業をなるべく受講制限しないようにするためにはどうしたらよいか頭を悩ませているところである。研修会を受講して、リレー講義はこのような悩みを解決する一つの処方箋となると思われた。基礎セミナーや総合科目での導入を検討すべきであろう。

心理学担当の先生方のこのような FD の取り組みは、外からの押しつけではない自然発生的・ボトムアップの FD であり、最も理想的な FD の姿であると思われる。全学 FD ではこのような取り組みを今後も積極的に紹介し、授業改善の取り組みに関する情報共有の場を提供していきたいと考える。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	2	18.2%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	4	36.4%
非常に良かった	5	45.5%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

(7) 最近の学生の実態と社会人基礎力の養成

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 8 月 25 日(火) [常盤地区] 13:30～15:30

平成 22 年 3 月 25 日(木) [吉田地区] 13:30～15:30

場所：常盤地区：工学部 D23 教室

吉田地区：共通教育本館棟 2 階会議室

対象：希望者

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

内容：本研修の前半は青少年の学習観や生活観について、各種の調査結果から分析した結果を示し、最近の学生の特徴に学ぶ。

後半は、中教審の大学部会から示された「学士力」の意義と設定の背景、また、経済産業省が検討している「社会人基礎力」について、大学教育との関係等について学ぶ。

報告：

平成 21 年 8 月 25 日(火) [常盤地区]

昨年度に引き続いて、同じ研修テーマで本年度も実施した。第 1 部では最近の学生の意欲の変化を日本、米国、中国、観光の 4 ケ国の高校生の相違を調査した報告書を参考に解説を行なわれた。また、教育学者たちは現在の若者の実態をどのように分析しているのかを説明が行なわれた。次に PISA や TIMSS の国際学力到達度調査の結果から見た最近の学生の学力について分析した結果が発表された。学力格差の広がりや親の所得格差が子どもの学力格差に結び付いているという教育社会学者の意見も紹介された。

第 2 部では、最近企業で働くことの意義が変化していることがまず示された。以前は将来の地位や所得の上昇といった「外部報酬」が仕事に取り組むことのインセンティブになっていたが、最近に若

い会社員はそれよりその仕事自体が自分の能力や興味を広げてくれるかどうかといった「内部報酬」を重視する傾向にあること。これによって従来の人事制度が変わってきていることが示された。次に経済産業省が示した「社会人基礎力」とこの内部報酬という考えとがどのように結び付いているのか。また、なぜ最近、企業等の社会から大学に対して「社会人基礎力の育成」が求められるようになった背景について説明が行なわれた。最後に他大学でどのような社会人基礎力を養成するためにプログラム（授業）が作られ取り込まれているのかについて5つの大学の事例を挙げて説明が行なわれた。

今回参加者が少なかったが、今後は研修内容の再検討やアラカルトFD研修会そのものをどのように変えていくかを必要があることを痛感した。

平成22年3月25日(木) [吉田地区]

昨年8月に引き続いて、同じ研修テーマで第2回目を吉田地区で開催した。第1部では最近の学生の意欲の変化や国際学力調査（PISAやTIMMSの国際学力到達度調査）の結果からみた日本の若者の学力の現状について説明を行なわれた。意欲に関しては、最近の日本の学生は現在肯定志向が強いが、海外の学生たちは未来志向であることが説明され、その原因と日本の学生が持っている意識の特徴について説明があった。また、教育学者たちはこのような日本の現代の若者の意識の変化についてどのように分析しているのかについても説明が行なわれた。学力に関してはマスコミ等で報道されるほどには海外の子どもたちに比べて日本の子どもたちは学力が劣っていないことや、学力格差の広がりや親の所得格差が子どもの学力格差に結び付いているという教育社会学者の意見も紹介された。

第2部では、経済産業省が示した「社会人基礎力」を大学教育の現場でどのように養成すべきかをテーマに説明と他大学の事例紹介が行われた。なぜ最近、企業等の社会から大学に対して「社会人基礎力の育成」が求められるようになったのかその背景について説明が行なわれた。また、他大学でどのような社会人基礎力を養成するためにプログラム（授業）が設置されているのかについては、同志社大学をはじめ5つの大学の事例が紹介され他。最後に研修会に参加した先生方に、自分の立場から社会人基礎力をどのように育成していくべきかについてそれぞれ意見を述べてもらった。

今回8名という人数であったが、講師の説明と参加者との意見交換が時間的にバランスよく配置され、先生方の反応もよかった。ただし、もう少し、具体的な取組事例を紹介して欲しいとの要望もあった。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	12.5%
良かった	6	75.0%
非常に良かった	1	12.5%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%

（8）多人数授業における学生参画学習の工夫—授業手法と評価—

主催：大学教育機構

日程：平成21年8月31日(月) [吉田地区] 13:30～15:00

場所：共通教育本館棟2階会議室

対象：希望者

講師：林 徳治（立命館大学教授）

内容：人文社会系の学生を対象とした参画型授業の設計と評価 大学では、共通教育や教養科目において、学部、学力、意欲が異なる多様な学生が100名を超える授業がある。

そこでは、出席確認や学生個々に対応した質疑応答などコミュニケーション活動が困難となり

どうしても伝授型の講義形態になるのが一般であろう。また評価についても、全授業での学習活動を評価する形成的な評価ではなく、レポートや期末試験などの総括的な評価が一般的である。本研修では、多人数でも学生が授業に参画できる授業手法、教材および形成的な評価手法を例示し演習して、教員の各専門分野への授業設計や評価面に役立ててもらえれば幸いである。

報告：

今回の研修会は多人数授業での学生参加型学習の進め方を中心に林先生に具体的な事例紹介を含めて実践的な研修会を開催した。受講生 100 名を超える多人数授業での出席の取り方、強制連結法やロジカルツリーなどのアクティブラーニングの手法を用いた学生参画学習の進め方や授業後の評価の方法などについて講義形式で紹介された後に、グループで強制連結法を実際にワークショップ形式で実施してもらった。

受講者の研修終了後の感想としては、「よかった」および「非常によかった」を合わせると 87.5% に達し全般的な内容については受講された先生方は満足されたようであった。具体的な意見としては、「講師の説明の手法等わかりやすくとても良かった。」「具体的な事例とともに説明がされていて、授業を行うよい参考になった」、「学生のレディネス（関心・興味）を知ることにエネルギーを使うことや具体的な作業を通して学生の集団構造に動きをもたせることなどを参考になった。」などという満足する意見が多かった。ただし、この一方で、「ロジックツリーに限定して次回やってほしい」、「授業の方法についてもっと深く議論したかった。強制連結に拘り過ぎたのでは？」といった研修内容に対する改善意見もあり今後研修内容を考えていく際に参考になった。



研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	5	62.5%
非常に良かった	2	25.0%
無回答	1	12.5%
合計	8	100.0%

(9) 情報セキュリティ・情報モラルの教え方

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 9 月 8 日(水) [吉田地区] 14:30~16:30

平成 22 年 3 月 30 日(火) [常盤地区] 14:30~16:30

場所：吉田地区：共通教育本館棟 2 階会議室

常盤地区：工学部 D23 教室

対象：希望者

講師：永井 好和 (メディア基盤センター准教授)

市川 哲彦 (メディア基盤センター准教授)

内容：昨年度の実施状況を踏まえ、第 3 週～第 5 週のテーマである、「情報セキュリティ(第 3 週)」、「情報モラル(第 4 週)」及び「コンプライアンス(第 5 週)」を中心に、共通教育「情報セキュリティ・モラル」を指導する上で留意すべき点について、研修を行う。また、DVD を活用した教育方法について学ぶ。

報告：

平成 21 年 9 月 8 日(水) [吉田地区]

山口大学の共通教育では、昨年度より従来の情報処理演習を情報リテラシー演習（主に前期前半）と情報セキュリティ・モラル（主に前期後半）に再構成して教授している。今回の FD 研修会では、主に「コンプライアンス（第5週）」、「リスクアセスメント（第6週）」、「リスク対応と課題演習（第7週）」の講義の進め方や評価方法について講師から説明と担当した他の教員との意見交換が行われた。講義の進め方については時間的制約があつてすべてを網羅



できない教材（Power Point 教材、video 教材）のどの部分を重点的に説明すべきかが示され、レポートの評価については具体的に評価と配点をどのようにしているかについて例示が行われた。また、欠席の取り扱いやレポート未提出者への対応方法などについても事例が紹介された。意見交換会では、第5週～第7週にかけての PowerPoint 教材の内容や文章は 1 年生にとって難解過ぎないか、video 教材は効果的であるが時間をとるために学生にディスカッションをさせる時間が不足する、講義内容を減らして単純化する一方で video 教材をもっと用いて現実感を持たせて学習させてはどうか等の意見が出た。

研修後に回収したアンケートには、「リスクアセスメント・リスク対応と演習課題の内容が分かってよかった」、「来年度の情報セキュリティ・モラルの授業を担当するのに参考になった」、「もう少し議論や意見交換が活発に行われれば良かった」等の感想が得られた。これらの感想と表 1 から、情報セキュリティ・モラルを担当する教員どうしの意見交換の場として本研修会は有意義であったと考えられる。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	2	40.0%
良かった	1	20.0%
非常に良かった	2	40.0%
無回答	0	0.0%
合計	5	100.0%

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「情報セキュリティやシステム監査」、「著作権の取扱い」、「学部間で同
一部会メンバーによる授業・実習についての意見交換（部会の連絡はメールが主なので、同じ部会内で担当教員同士の授業・実習についての協議の場がない。体系的な教育を行うために、学部内の教務委員会以外に FD 研修で部会の意見交換の場があれば良いと思う。授業改善にもつながると思う。）」といった意見が寄せられた。

平成 22 年 3 月 30 日(火) [常盤地区]

共通教育の授業である情報セキュリティ・モラルでは統一教材が整備されており、これをもとにして授業が進められている。統一教材にはパワーポイントや DVD 教材、ワークシート、出席確認課題などがある。これらは内容が充実している半面、授業時間が限られているため、どの部分に重きを置いて説明を行うかに工夫が必要である。また、どのような実例を織り交ぜながら説明するのかについても考慮する必要がある。今回の FD 研修会の前半部分では、第3回の授業のデモンストレーションを通じて、どの点にポイントを置いて説明すると良いのか、どのような実例を挙げて説明するとわかりやすいのか、パワーポイント資料や DVD 教材をどのように用いると効果的であるかについての解説がなされた。本研修会の後半部分では、メディア基盤センターが提供する学習管理システム (LMS) で運用されている情報セキュリティ・モラル用の教材（以下、Moodle 教材）が紹介された。この Moodle



教材の利用によって、学生への資料の配布が簡便になり、これまで紙ベースで行ってきた演習やテストをオンライン上で実施することが可能になり、各学生の学習状況の把握が容易になるなど様々なメリットがあることが示された。また、この教材のデモンストレーションを通じて、Moodle の基本的な操作方法等の解説も行われた。

本研修後に回収したアンケートには、「知識の前提が異なるので、ど素人でも分かるようにしてほしい」、「Moodle の使い方などが詳しく説明され、参考に

なった」等の意見が寄せられた。現在のところ、情報セキュリティ・モラルの授業を担当する教員は必ずしもこの分野に十分に通じているとは限らないため、今後もこのような研修会等を通じて教員自身の知識拡充の機会も必要であると思われる。Moodle 教材に関しては、まだ学内でそれほど知られていないと思われるので、今後もこのような研修会が有益であると思われる。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「授業の進め方など」、「Moodle 教材の作り方（発展編）」、「情報モラルの網羅的な内容の研修」、「共通教育に役立つようなテーマ」などがあげられた。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	12.5%
良かった	5	62.5%
非常に良かった	2	25.0%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%

(10) DocuWorks の使い方

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 9 月 11 日(金) [吉田地区] 13:30～15:30

場所：メディア基盤センター 2 F 情報処理演習室 2

対象：希望者

講師：宮崎 陽子 (富士ゼロックス)

内容：DocuWorks の全体的な機能概要と具体的な使用方法について、演習を交えて初心者を対象に研修を実施する。

報告：

電子ドキュメントには様々なファイル形式があるため内容を閲覧するために複数のアプリケーションの切り替えが必要であったり、ファイルをひとつにまとめにくいなど操作に手間がかかる場合が少なくない。また、紙媒体のドキュメントを電子化する場合、スキャナの有無や性能によって作業効率が大きく左右される。このような問題点を解決するひとつの手段として、DocuWorks の利用が考えられる。

DocuWorks を利用すると、異なるファイル形式の電子ドキュメントを簡単な操作でひとつにまと

めたり、複数のアプリケーションを切り替えずに内容の閲覧が可能となる。また、学内設置のゼロックスの複合機を用いて紙ドキュメントをスキャンして各研究室のパソコンに取り込むこともできる。本研修会では、DocuWorks の利用方法および DocuWorks と連携したゼロックスの複合機の使い方についての説明および実際の操作を各自で体験する講習会が行われた。

研修後に回収したアンケートには、「研究・授業に活用できそうである」、「山口大学では DocuWorks が全学的に導入されており既に事務業務では積極的に利用されているが、教員にはあまり知られていない。これまでの研修会は主に事務職員を対象としていたが、今後は FD 研修会などでもっと普及促進を図ると良いのではないか。」という感想が寄せられた。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「新しいプレゼンテーションソフトの利用法」、「エクセル・パワーポイントの操作（応用編）」、「今回のような DocuWorks の使い方の説明」といった意見が寄せられた。



研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	4	80.0%
非常に良かった	1	20.0%
無回答	0	0.0%
合計	5	100.0%

(11) 理系共通教育科目「地球科学2」の授業展開ー参加と思考をうなが

す授業づくりの方法ー

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 9 月 25 日(金) [吉田地区] 13:30~16:00

場所：共通教育棟 2 階会議室

対象：希望者

講師：池田 幸夫（教育学部教授、附属教育実践総合センター長）

内容：私が担当している「地球科学2」は、後期に開講している理系共通教育科目の一つである。平成 20 年度の受講者数は約 70 名、そのほとんどは農学部生で、残りは理学部と教育学部生である。地学を学んだことがない学生に対して地学を学ぶ意義や必要性を認識させて、地学に対する興味関心と科学的教養を高めることがこの授業のコンセプトである。

授業のポイントは科学概念を分かりやすく説明することよりも、大人数の講義であっても学生を授業に参加させ頭を使って考えさせる場面を多く作る場所にある。この研修会では平成 20 年度に行った授業実践に基づいて、大学生の平均的な知的レベルに対応した分かりやすいに授業展開とその方法について紹介する。

報告：

まず、大学の授業に対する学生と教員の意識の違い、学習指導要領の変遷のなかで大学に入学してくる学生の学力がどう変化してきたか等の話の後、共通教育における「分かりにくい授業」とは何か、また、「授業づくりの 5 つのポイント」とはどのようなものかについて説明があった。

「分かりにくい授業」とは①情熱がない、②力みすぎる、③押しつける、④ほめない、⑤一方通行、⑥詰め込みすぎる、といった授業である。一方、いい授業をつくるポイントは①知っていることから

入る(課題をイメージできる)、②授業に参加させる(自ら考え・表現させる)、③与えるより引き出す(知識を押しつけない)、④量はほどほどに(6～8分目が適切(ゆとり))、⑤矛盾の自覚から発見に導く(夢と驚き)、といった点が挙げられる。



なお、学生は授業の前にはすでに何らかの考え方を持っているが、これを「素朴概念」と呼ぶ。学生はこの概念によって授業を解釈するため、授業後に教員と学生が同じ考え方になるとは限らないという。授業が分からない学生には①勉強時間が足りない、まじめに勉強しない、②勉強はするが、素朴概念が理解を妨げている、という2つのパターンがある。どちらのパターンかを見極めて指導することが効果的である、とのことであった。

参加者からは様々な質問が寄せられた。「主体性のない学生をどう教えたらよいか」という質問については、授業中に何か作業(グラフを書かせるなど)をさせることで授業に参加させることが大切であるとの回答があった。また「共通教育は学生が多様で教えるのが、どこに焦点を当てればよいか」という質問に対しては、学力が低い学生に焦点を当てる方がよいとのことであった。研修会後のアンケートからは、「受講者が少なかったこともあり、細かいことまで質問できた」「院生が同席していたので、彼らの意見が聞いて良かった」「学生なので実際に授業をしたことはないが、これから教師を目指す上で、今日学んだことを現場で活かして行きたいと思った」「大学の先生側の話が聞いて良かった」という意見が寄せられた。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	0	0.0%
非常に良かった	5	100.0%
無回答	0	0.0%
合計	5	100.0%

(12) Less is more —効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再

考一

主催：大学教育機構

日程：平成21年10月16日(金)[吉田地区]14:30～16:00

場所：大学会館2階会議室

対象：本学教職員

講師：MARC LOHR(経済学部教授、大学教育センター主事)

内容：パワーポイント・プレゼンテーションに求められる機能を再確認し、メディアのデザイン・レイアウト理論に基づいて、効果的なプレゼンテーションの作成と実施を考える。

報告：

パワーポイントには文字や写真以外に、アニメーションや音声などのマルチメディアデータをプレゼンテーションに用いる機能が満載されている。そのためパワーポイントの普及に伴って、限られた時間内にアニメーションや音声などを多用したり、大量の情報を満載したプレゼンテーションを目にするようになった。しかし、このようなプレゼンテーションは聴衆を疲労させ、かえって内容の理解を妨げてしまう。

本来、プレゼンテーションは『送信者が伝達したいメッセージをもっと有効的（効果的）に受信者に伝達するためのコミュニケーション手段』である。しかし、具体的にどのようなポイントに配慮すれば効果的なプレゼンテーションができるのかについては意外に見落としが多い。本研修会では、パワーポイントの機能の解説ではなく、効果的なプレゼンテーションを行うために押さえるべき重要なポイント（「1 スライド、1 メッセージ」、「可読性への配慮」、「プレゼンテーションの構成方法」、「話し方」など）について解説が行われた。



研修後に回収したアンケートには、「プレゼンの思想・スキルアップにつながると思う」、「とても勉強になった。講義・学会などに生かしていければと思う」、「日頃悩んでいる点が具体的に話題に出て勉強になった」等の感想が得られた。これらの感想から、本研修は効果的なプレゼンテーションを再考する良い機会になったと思われる。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	2	13.3%
良かった	6	40.0%
非常に良かった	6	40.0%
無回答	1	6.7%
合計	15	100.0%

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「授業に役立つ企画」、「スキルアップにつながること（最新の知見・現状を知りたい）」、「ピアレビュー」、「学生にとって理解しやすい授業の進め方」、「今回のように技術的な問題の研修が多いと良い。応用ができそうで満足度が高い」、「さらなるプレゼンテーションに関する研修を希望する」、「WEB教材」、「ハンズオン e ラーニング教材作成」といった意見が寄せられた。

(13) 学習意欲を高める問題解決型の授業展開—その方法と展開—

主催：大学教育機構

日程：平成 22 年 3 月 19 日(金) [常盤地区] 13:30～15:30

場所：工学部 D23 教室

対象：希望者

講師：兼石 俊明（大学教育センター コーディネーター）

内容：「先生、（私たちは、）何故『物理』を勉強するんですか。」20 数年前、高等学校で教鞭を執っていた頃の、今でも忘れられない場面です。質問にきた生徒は、成績、態度とも非常に優秀な生徒でしたから。今でも、「この質問に対する正しい回答はどうだったんだろう。」と考えることがあります。

これは、高等学校での話ですが、大学教育にも通じるところがあるのではないかと思います。

元高等学校教員の体験を交えながら「教育方法の改善」の方途についてお話しし、また、先生方と一緒に考えていきたいと考えています。

報告：

研修会では、まず最初に教育の歴史についての概説がなされた。概説を通じて時代や国が異なっても教育方法の基本的な発想は普遍的であること、および、「教育はたやすすくない」ことが示された。次に問題解決学習の概要、長所と短所が示された。ここではいわゆる知識詰め込み型教育において、高校生から「先生、私たちは何故『物理』を勉強するのですか。」という質問を受けたエピソードを通じて、問題解決学習の必要性が示唆された。そして、問題解決学習の効果的な導入が社会人基礎力、学士力の養成にも必要であるとの見解が示された。またその一方で、問題解決学習を成立させる難しさが示された。最後に、問題解決学習を如何に教育に組み込むのかについて参考図書を目次をもとに説明がなされ、問題解決学習には個々の授業だけではなく授業間、ひいては学内の組織間の有機的な連携が必要であるとの見解が示された。

研修後に回収したアンケートには、「経験豊富なご年配の講師で良かった」、「問題解決学習の長所・短所を含め、教育の課題が分かった」、「高等教育に携わった経験を語ってくださり、別の視点での物の見方がわかった」というコメントがあった一方、「やや具体性に乏しい内容だった」、「正直に言わせてもらえば、冗長すぎて趣旨が不明確だった。また、御指導の内容は個人的には既実践している内容だった」というコメントも得られた。今後は抽象的な内容よりも、具体的な事例を盛り込み、ディスカッションを行う時間を拡充するなど実践につながりやすい内容に

重点を置くことによって、現場のニーズに応えられるようにする必要がある。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「教育・研究に関する研究成果や経験紹介」、「著作権・知財について」、「評価の高い教員の講義見学」、「配付プリントの活用法」、「コミュニケーションスキルアップ」、「任期休で業績を求められている若手教員が研究と教育と家庭を両立していく手段」、「教授法、特に社会人向け教育の参考になるような研修会」、「学生との関係・対応について」、「教育のスキルアップと効果的な準備方法」など、具体的で実践に繋げやすいFD研修会を求めるコメントが寄せられた。



研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	1	7.7%
あまり良くなかった	5	38.5%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	7	53.8%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

3. 教育改善研修会

平成 20 年度は、各学部・研究科と大学教育センターが一体になって、グラジュエーション・ポリシー(以下 GP)やカリキュラムマップ(以下 CUM)、Web シラバスといった山口大学の教育改善のしくみを全教員に理解していただくための同様な研修会を開催したが、本年度は大学の教育改善をさらに定着させ、組織的なFD活動を各部署で推進してもらうために、各学部・学科・コース・課程においてカリキュラム開発を担当している教員を対象に、GP、CUM、Web シラバスの見直しや各学部・学

科のカリキュラム内容について、大学教育センターと一体になって、教育改善を図っていく研修会を実施した。

具体的には以下のような内容について、意見交換を行った。必要であれば GP や CUM、シラバスの修正を組織的に行なっていただきたいと考えている。

- ・策定してから2年以上経っているが、その間、学科改編や科目改編等に伴って、GP の見直しや CUM の修正が行なわれたか？
- ・この2年間ですでに閉講した科目や新規に開設した科目、内容を整理統合した科目等が CUM の中身に反映されているか？
- ・設置している科目間が有機的に連携された系統性のある科目編成が行なわれているか？
- ・科目間で内容の大幅な重複がないか？
- ・GP や CUM の内容が所属する学生や院生に周知されているか？また、周知する方法を考えているか？
- ・履修する学生に分かりやすいように、学生の視点からシラバスが必要十分な内容が記載されているか？
- ・同様な系統の教育内容を取り扱っている他の教員のシラバスの内容を見て、自分のシラバスを見直したことがあるか？
- ・カリキュラム全体や GP、CUM について、外部からの評価を受けているか？
- ・それぞれの学部・研究科で今後どのようなカリキュラム改善の予定があるのか？

(1) 工学部・理工学研究科(工学系)・医学系研究科(工学系)

主催：大学教育機構

日程：平成21年8月21日(金) [常盤地区] 13:30~15:40

場所：工学部 D23 教室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発や FD 活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度1回目の教育改善研修会を工学部の教務委員・FD委員を対象に実施した。

研修会は2部構成で実施された。まず教学委員の田中俊彦教授の開催挨拶の後、第1部では、研修会の開催趣旨および依頼事項について、岩部大学教育センター長より話があった。学科改編や科目(カリキュラム)改編に伴うグラジュエーション・ポリシー(GP)・カリキュラムマップの見直し作業を年度内中に行なって欲しいこと、特に4年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育 GP をカリキュラムマップに加えて再編成して欲しいとの依頼が各学科に対して行なわれた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在の工学部の GP やカリキュラムマップに対して外部から見た場合の意見や疑問点について指摘があり、これに対する学科からの回答・意見交換が行なわれた。兼石コーディネーターからはカリキュラムマップでの○付けにおいて、丸の付け方が一つの科目に対して多く付けすぎていること、GP のたて方をもう一度検討し直して欲しいことなどが意見として挙げられた。

第2部では、最初に工学部機械工学科で H16 に作成された「履修科目計画表」の作成目的・方法



について工学部の江鐘偉教授より説明があった。機械工学科で作成している履修科目計画表は一枚のエクセルシートに学科の学習・教育目標（行）と履修年次（列）が表されており、一目で学生が4年間にどのような内容をどのような順番で学び、最終的にどのような教育目標が達成されるかが明らかにされている。江教授からはこの表の作成は JABEE の認定を受けるにあたって自主的に作成したものであり、数ヶ月かけて作成する過程が教員の非常によい FD の場となったと報告された。なお、機械工学科の表に示されている学習・教育目標は JABEE に対応したものであるが、同時に本学科の GP にもなっている。



続いて、機械工学科の履修科目計画表の作成を実際に体験するためワークショップを行った。なお、大学教育センターは履修科目計画表を「カリキュラム・フローチャート（以下 CUF）」と命名し、カリキュラム・マップとのつながりが分かりやすいよう表現することとした。ワークショップでは各学科に分かれ、科目名を貼り付けたポストイットを使って模造紙の上に CUF を作成する体験を行った。時間の関係やカリキュラムの改変などの理由から完成までには至らなかったが、研修会終了後に学科に持ち帰っていただき、学科内で作成作業を継続していただくことになった。

田中教学委員長や参加された先生方からは、平成 21 年度入学生用のカリキュラムで GP、CUM、CUF を作成するので最新のデータを提供してほしい旨依頼があった。工学部では年度内の完成を目指して作業を進めていくこととなった。

（2）医学保健学科・医学系研究科

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 8 月 24 日（金）[小串地区] 13:30～15:40

場所：保健学科研究棟 1F 大会議室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発や FD 活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度 2 回目の教育改善研修会を医学部保健学科の教学委員長、教務委員、FD 委員長、FD 委員を対象に実施した。

研修会は 2 部構成で実施された。まず、1 部では、最初に、この研修会の開催趣旨について、岩部大学教育センター長より話しがあった。学科改編や科目（カリキュラム）改編に伴う GP、カリキュラムマップの見直し作業を年度内中に行なって欲しいこと。特に 4 年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育 GP をカリキュラムマップに加えて再編成して欲しいとの依頼が学科に対して行なわれた。

次に、兼石教育コーディネータより、現在の保健学科の GP やカリキュラムマップに対して外部から見た場合の意見や疑問点に対して指摘があった。これに対する学科からの回答・意見交換が活発に行なわれた。兼石コーディネータからはカリキュラムマップでの○付けにおいて、丸の付け方が一つの科目に対して多く付けすぎていること。GP のたて方をもう一度検討し直して欲しいことなどが意見として挙げられた。

第 2 部では、学科や課程で設定されている科目間の順序性や系統性を明らかにするとともに、それぞれの GP にどのように各科目が貢献するのかを明らかにするために「カリキュラム・フローチャー

ト(以下 CUF)」(写真参照)を作成して欲しいとの依頼をセンターから行なった。最初に工学部機械工学科ですでに作成されている CUF について大学教育センターの小川教授より概要説明があった。その後 2 つの課程(看護課程、検査技術課程)に分かれて、模造紙と科目名を貼り付けたポストイットを使って CUF を作成するワークショップを行なった。あまり作業時間がなかったので、GP のうち 1 つの GP を取り上げて、これを満たすための科目の実施時期(実施順序)、系統性などを考慮しながら CUF を作成することを体験してもらった。

今回の研修会は大学教育の質保証の実質化を推進するために、4 年間一環の学士課程を意識したカリキュラムマップの再編成と、各教員に自分の担当している授業の全体のカリキュラムの中での位置付けや GP との関連性を意識してもらうために鳥瞰図としての役割を持つ CUF 作成を体験してもらったが、今後組織的な FD 活動を推進する上でも、それなりの効果のある研修会になった。参加者も大変意欲的に研修に取り組んでいた。

第 1 部の意見交換会の様子



第 2 部 カリキュラムフローチャートの作成作業



(3) 人文学部・人文学研究科・東アジア研究科(人文系)

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 9 月 25 日(火) [吉田地区]13:30~15:40

場所：人文学部研究棟 2 F 第 4 演習室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発や FD 活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度 3 回目の教育改善研修会を人文学部の教学委員、教務委員、FD 委員、コース委員等を対象に実施した。

当初研修会は 2 部構成で実施される予定であったが、1 部のみの内容で研修会が実施され、2 部のワークショップは来年度以降実施することになった。最初にこの研修会の開催趣旨について、岩部大学教育センター長より説明があった。学科改編や科目(カリキュラム)改編に伴う GP・カリキュラムマップの見直し作業を年度内中に行なって欲しいこと。特に 4 年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育 GP をカリキュラムマップに加えて再編成して欲しいとの依頼が学科に対して行なわれた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在の人文学部の GP やカリキュラムマップに対して外部から見た場合の意見や疑問点に対して指摘があった。これに対して学部からの回答・意見交換が活発に行なわれた。

岩部センター長および兼石コーディネーターからは、GP の立てかたが各学科・コースの共通要素を取り上げたものであり、GP の数が少ないのではないかという指摘があった。また、シラバスに掲載されている内容とカリキュラムマップに掲載されている科目との整合性が取れていない部分があるという指摘があった。また一部の科目には○付けにおいて、丸の付け方が一つの科目に対して多く付

けすぎていることなどが指摘された。

学部の委員からは、この研修会は誰のためにやるのかといった基本的な質問が出た。センター長からはこれはあくまでも先生方、学生のために行なうのであって、外部評価は2次的なものであるという説明があった。また、人文学部は2年生から4年生まで同一のクラスで授業を受ける場合も多く、必ずしも理系のように順序性や体系性を示すことは学部の特色として難しいという指摘があった。したがって科目間の関連性もある程度はあるが、GPを満たすために各科目が順序性をもって学年進行によってそれが達成されるような科目構成になっていないという意見があった。これに対してセンターからは事情はよくわかるが、その代替として「学習ポートフォリオ」を個々の学生に作成させてGPの達成度を測ることが考えられるが、理論的な面や運用面で支援システム開発などを行なう必要があり、実際の取組は難しいことが説明された。

今回の研修会は大学教育の質保証の実質化を推進するために、4年間一環の学士課程を意識したカリキュラムマップの再編成と、各教員に自分の担当している授業の全体のカリキュラムの中での位置付けやGPとの関連性を意識してもらうために鳥瞰図としての役割を持つCUF作成を体験してもらう予定であったが、人文学部はカリキュラム・フローチャートを作成する際には理系学部のような作り方ができないことが判明したため、今後どのように対応するかについては大学教育センターと協議を重ねることになった。

(4) 農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科（農学系）

主催：大学教育機構

日程：平成21年10月7日(水) [吉田地区]13:30~15:30

場所：農学部本館2F会議室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度6回目の教育改善研修会を農学部の教学委員、FD委員長、FD委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。GPやカリキュラムマップは作成時点から時間が経過しており、学科改編や科目(カリキュラム)改編内容をこれらに反映させる必要がある。特に4年間一貫の学士課程教育を意識してカリキュラムマップに教養教育GPを加えて更新する作業の依頼が農学部各学科に対して行われた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在公開している農学部のGPやカリキュラムマップに対して学外者からみた意見や疑問点が指摘された。これに対して回答および活発な意見交換が行われた。兼石コーディネーターからは、全体的にいずれの学科のCUMもおおむねわかりやすく記述されているが、学科によってGPの数やCUMへの丸付けの数に差があることなどの指摘とともに、GPはその達成度の評価が可能であるように記述されているか再確認すべきであるとの指摘がなされた。これに対して、各学科からは様々な意見が述べられた。獣医学科からは、全ての科目は一貫してライセンス取得を目指した構成になっている故の説明がなされた。生物機能科学科からは、この学科の研究分野は非常に細かく専門分化しており、それぞれの分野の最先端を深く掘り下げる学問分野としての特徴があるとの説明がなされた。生物資源環境科学科からは、生物機能科学科と比較すると各専門分野とその周辺に関連する分野の裾野が広い特徴があるとの説明がなされた。これらの説明を聞いた各委員からは、GPの達成度をチェックする上ではGPの設定(数や各項目の表現)はある程度そろえる必要があるのではないかという意見が出される一方で、前述のように各学科のもつ専門分野の特徴の違いがあって、更には互いに他の学科との関連性が希薄であるから、各学科によってGPの設定やCUMへの丸付けに違い(ある程度の数や丸の偏在性)が生じるのは当然であるとの意見が出た。また、GPやCUMに対するそもそも論として、◎や○、△といったあまりにも細かなレベル分けは

実際にはほとんど意味がないのではないかといった意見も出た。第1部の研修は前述のような各委員からの意見を中心にして、非常に活発な議論がなされ、予定していた第2部のワークショップの時間を変更して議論のための時間として用いた。そのため、第2部のワークショップは本研修時間中には行われなかったが、GPやCUMやそれらの問題点に関する各委員の理解は十分に深まったと考えられる。研修後にCUMを検討するための機材を各学科の委員に手渡し、今後各学科でCUMを更新する際に役立ててもらった。

今回の研修会で様々な議論がなされたことによって、今後組織的なFD活動を推進する上で有意義であったと考えられる。



(5) 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

主催：大学教育機構

日程：平成21年10月21日(水) [吉田地区]13:30~15:30

場所：理学部12番講義室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度5回目の教育改善研修会を理学部の教学委員長、教務委員、FD委員長、FD委員、学科主任、コース主任等を対象に実施した。

研修会は2部構成で実施された。まず、1部では、最初に、この研修会の開催趣旨について、岩部大学教育センター長より話があった。学科改編や科目(カリキュラム)改編に伴うGP、カリキュラムマップの見直し作業を年度内中に行って欲しいこと。特に4年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育GPをカリキュラムマップに加えて再編成して欲しいとの依頼が学部・学科に対して行なわれた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在の理学部のGPやカリキュラムマップに対して外部から見た意見や疑問点に対して指摘があった。これに対して学科から回答・意見交換が活発に行なわれた。兼石コーディネーターからは学科の教育目標とコースのGPとの整合について意見が述べられた。すなわち、教育に責任を持つ最小の教育単位であるコースごとに教育目標とGPを設定した方が外部からはわかりやすいとの指摘があった。これに対して学部からは言われることはわかるが、このGPを作成する際には学科単位で教育目標を設定し、GPはコース単位で設定することを統一的方法として理学部として行なったこと。しかし、指摘された点は今後教育目標やGP、カリキュラムマップを見直す際に検討したいという回答があった。

第2部では、学科やコースで設定されている科目間の順序性や系統性を明らかにするとともに、それぞれのGPにどのように各科目が貢献するのかを明らかにするために「カリキュラム・フローチャ

ート（以下 CUF）」（写真参照）を来年度以降作成して欲しいとの依頼をセンターから行なった。最初に工学部機械工学科ですでに作成されている CUF について岩部センター長および研修の進め方について大学教育センターの小川教授より概要説明があった。その後、それぞれのコースに分かれて、模造紙と科目名を貼り付けたポストイットを使って CUF を作成するワークショップを行なった。あまり作業時間がなかったため、GP のうち 1 つの GP を取り上げて、これを満たすための科目の実施時期（実施順序）、系統性などを考慮しながら CUF を作成する体験をしてもらった。

今回の研修会は大学教育の質保証の実質化を推進するために、4 年間一環の学士課程を意識したカリキュラムマップの再編成と、各教員に自分の担当している授業の全体のカリキュラムの中での位置付けや GP との関連性を意識してもらうために鳥瞰図としての役割を持つ CUF 作成を体験してもらったが、今後組織的な FD 活動を推進する上でも、それなりの効果のある研修会になった。参加者も大変意欲的に研修に取り組んでいた。

第 1 部の意見交換会の様子



第 2 部 カリキュラムフローチャートの作成体験



（6）経済学部・経済学科研究科・東アジア研究科（経済学系）

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 11 月 4 日（水）[吉田地区]13:30～15:30

場所：経済学部会議室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発や FD 活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度 7 回目の教育改善研修会を経済学部の教務委員長、大学院運営委員長、評価委員長、教務委員、大学院運営委員、評価委員を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。GP やカリキュラムマップ(CUM)は作成時点から時間が経過しており、学科改編や科目(カリキュラム)改編の内容をこれらに反映させる必要がある。特に 4 年間一貫の学士課程教育を意識して、CUM に教養教育 GP を加えて更新する作業の依頼が経済学部各学科に対して行われた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在公開している経済学部の GP や CUM を学外者として閲覧した場合の意見や疑問点が述べられた。ここでは経済学部全体としてはいずれの学科の CUM もおおむねわかりやすく記述されているが、GP や CUM の内容や表現、学科や課程の構成についてわかりにくい点があるとの指摘がなされた。これに対して、各委員からは様々な意見が述べられ、活発な議論が行われた。ここでは GP と到達目標との直接的な関連性がわかりにくい(GP と到達目標の間を科目が介在するならばわかるが、両者の直接的な関係はあるのか)、GP の達成度の客観的評価は実際には可能なのか、公開している GP と CUM の読者は誰を想定しているのか、履修順序を限定しない科目が多い場合はカリキュラムフローチャート(CUF)で示す意味がないのではないかなどの質問や意見が出された。特に経済学部では入学後(2 年生時)に学生の所属学科を決めるため、現在の GP や CUM を受験生や保護者に公開するよりは、もっと単純でわかりやすい別の形で示した方が

理解しやすいのではないかといった意見が出た。

第1部の研修は前述のような活発な議論がなされ、予定していた第2部のワークショップの時間を変更して議論のための時間として用いた。そのため、第2部のワークショップは本研修の時間中には実施できなかったが、GPやCUMに関する各委員の理解は十分に深まったと考えられる。研修終了後にCUMを検討するための機材を各学科の委員に手渡し、各学科でCUMを更新する際に使用してもらうことになった。

今回の研修会で様々な議論がなされたことによって、今後組織的なFD活動を推進する上で有意義であったと考えられる。



(7) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

主催：大学教育機構

日程：平成21年11月11日(水) [吉田地区]13:30~15:30

場所：共通教育棟2階会議室

対象：学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方

講師：兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)

報告：

本年度の教育改善研修会の最後であった。教育学部のFD委員および各課程・コースのカリキュラム責任者等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。GPやカリキュラムマップ(CUM)は作成時点から時間が経過しており、学科改編や科目(カリキュラム)改編の内容をこれらに反映させる必要がある。特に4年間一貫の学士課程教育を意識して、CUMに教養教育GPを加えて更新する作業の依頼が教育学部各学科・課程・コースに対して行われた。

次に、当日不在であった兼石教育コーディネーターに代わり、センターの小川教授より現在公開している教育学部のGPやCUMを学外者として閲覧した場合の意見や疑問点が課程・コースごとに述べられた。教育学部全体としては教育学の専門家であり、GP、CUMとも詳細に分かりやすく書かれているとの指摘があった。しかし、GPやCUMの内容や表現など部分的に分かりにくい表現や○付けが行われていない科目が一部あるとの指摘がなされた。さらに新たに設置された小学校教員養成課程のGPやCUMが存在していないため、早急に作成して欲しいとの依頼があった。また、課程・コースによっては、GPが3つ程度しか設定されていない。このため全て科目が全てのGPに○付けが行われているコースがあるという指摘があった。これは各科目の共通的な要素を抽出したものと考えて良いのかというセンター側からの質問があった。これに対して、当該コースの担当者からはその通りであるが、コースの中がいくつかの専門的領域に分かれているため、そうせざるを得なかったという回答があった。また、それぞれの領域別にGPを立ててもいいのかという逆質問がセンターに寄せられたが、これに対して岩部センター長からは、それぞれの領域で特に必修になっている科目などは

全員にその資質を育成することを目標としていると考えるべきなのでもう一度それを含めて GP を再検討して欲しいというお願いがあった。

第 1 部の研修は前述のような活発な議論がなされ、予定していた第 2 部のワークショップの時間を変更して議論のための時間として用いた。そのため、第 2 部のワークショップは本研修の時間中には実施できなかったが、カリキュラム・フローチャート (CFC) の作成方法について小川教授から説明があった。研修終了後に CUM を検討するための機材を各学科の委員に手渡し、各学科で CUM を更新するための FD 活動を行う際に使用してもらうことになった。今回の研修会で様々な議論がなされたことによって、今後組織的な FD 活動を推進する上で有意義であったと考えられる。



第 3 節 事務局主催の部局長等管理運営研修の概要・報告

山口大学では、文部科学省大臣官房審議官 (高等教育担当) 小松親次郎氏を講師として招き、1 月 26 日 (火) に部局長等管理運営研修を開催した。

本研修は、学部長等幹部職員を対象に、その職務遂行に必要な知識や広範な識見を付与することによりマネジメント能力の向上を図り、組織の管理運営に資することを目的に毎年実施しているもので、今回は 110 人が受講した。

小松氏は、「国立大学法人を取り巻く現状と課題」をテーマに、近年における大学を取り巻く状況について、数値的、政策的な事柄を踏まえながら講演し、今後の大学の在り方についてポイントとなる事項について示唆した。高等教育行政の最前線で活躍される小松氏の講演は、山口大学の今後の基本姿勢の参考となるもので、大変意義深いものとなった。

また、小松氏は講演終了後、民間資金により今年度開設された O - HARA 山口大学就職支援施設を視察し、丸本学長等から山口大学が推進する就職支援事業に関する説明を受けた。



小松氏による講演風景



O - HARA 山口大学就職支援施設
の説明を受ける小松氏 (左)

第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動

授業科目別分科会は共通教育を円滑に実施するために専門分野別に設けられた組織である。山口大学の教員はすべて23分科会のいずれかに所属しており、各分科会内で授業の実施コマ数や担当者を検討し、大学教育センター・学生支援部教育支援課との調整の上、授業を実施している。各分科会はFD活動も実施しており、なかには教材開発まで行っている熱心なものもある。そこで、本章では第1節で各分科会のFD活動を報告し、続いて第2節で本年度に山口大学で開催された「第57回中国・四国地区大学教育研究会」の様子を報告する。後者は山口大学が開催校を引き受けるにあたり、各授業科目別分科会の先生方に研究会での司会・研究発表等を依頼したためである。当日は中四国地区の他大学とのよい情報交換の場となった。

第1節 FD活動

1. FD活動を実施した授業科目別分科会

(1) 情報処理分科会（分科会長：大学教育センター 小川勤）

情報セキュリティ・モラルを教えるための教員を育成するためのFD研修会を吉田地区と常盤地区で年2回開催した。21年度から初めて情報セキュリティ・モラルの授業を担当していただく先生方に対して教授方法や教材の使い方などについてFD研修会を開催した。講師はメディア基盤センターの永井先生と市川先生にお願いした。

また、昨年度実際に情報セキュリティ・モラルの授業を担当した先生方の意見を踏まえて、メディア基盤センターと大学教育センターの先生方を中心にテキスト教材の発行にむけた検討を実施するとともに、教材のeラーニングを目指してテキストワーキンググループを立ち上げて2回ほど会議を開催した。

(2) 初習外国語分科会（分科会長：経済学部 齊藤匡史）

5月末に本学で開催された、第57回中国・四国地区大学教育研究会に取り組んだ。シンポジウム、総会、部会への参加、外国語（初修）分科会の司会進行、中国語から「共通教育初修外国語の現状と課題」の報告、ドイツ語から「山口大学の初修外国語教育における制度上の問題点」が報告され、質疑応答、他大学の情況紹介が行われた。

ハングル：後期末の授業アンケートの際、自由記述アンケートに授業改善のアイデアがあれば書くよう、受講者に依頼した。その結果、小テストの形式の変更や、留学生を授業に呼ぶなどの提案があった。

(3) 英語分科会（分科会長：教育学部 松谷 緑）

- 1) 第57回中国・四国地区大学教育研究会 外国語（英語）分科会「大学での教育を支える英語コミュニケーション能力の育成への取り組み」（5月31日）
- 2) Basic English オンライン課題についての操作法習得と、操作法や評価法に関する意見交換・討論会（非常勤講師含む。また、実施に際し木下大学教育センター講師とアルク教育社の森下光氏の協力を仰いだ。）（6月16日）

- 3) 統一シラバスについての授業の進め方、オンライン学習の管理については、前期の終わりに、非常勤講師を含め、授業担当者全員にメールで意見を募り、それを整理して、意見として紹介し分科会でも協議した。

(4) 哲学分科会 (分科会長：教育学部 村上林造)

平成 21 年 7 月 30 日の分科会会議において、21 年度 FD 活動として、アラム先生「宗教学」、村上「漱石の思想Ⅱ」のピア・レビューを実施することで合意する。

10 月 8 日 (木) 「漱石の思想Ⅱ」に岡村先生、来栖先生参加。

1 月 28 日 (木) 「漱石の思想Ⅱ」に柏木先生参加。

(5) 教育学分科会 (分科会長：大学教育センター 吉田香奈)

平成 21 年度は大学教育機構主催全学 FD 研修会「複数教員による効果的な授業実施の方法ー共通教育「心理学」における「リレー講義」の実践から」(2009 年 8 月 24 日、講師：教育学部・小杉先生)への参加を呼びかけ、教育学分科会より 4 名の教員が参加した。

(6) 心理学分科会 (分科会長：教育学部 白石敏行)

平成 21 年度は、大学教育機構主催(平成 21 年 8 月 24 日)の FD 研修会において、有志による『複数教員による効果的な授業実施の方法ー共通教育「心理学」における「リレー講義」の実践から』を行った。

内容は次のとおりである。オムニバス型授業を実施している、または導入を考えている教員を対象に、効果的な授業展開の方法や評価について、このような授業方法を実施している共通教育「心理学」の授業担当者の研究成果を発表するとともに、研修会参加者との意見交換を実施した。

(7) 数学分科会 (分科会長：理学部 中内伸光)

- 1) プレースメントテストの実施と学力別クラス編成
- 2) 工学部の学生対象の「数学Ⅰ」と「数学Ⅱ」については、標準シラバスと標準テキストを用いている。

(8) 物理学分科会 (分科会長：理学部 原純一郎)

- 1) 「物理寺子屋」(学生に対する物理学の学習相談室)の開設
数年来続けている学習相談室を開き、TA の大学院生が相談員となり、授業内容や演習問題について学生の質問に対応した。
今年度の前期実施回数は 13 回で、63 名の学生が利用した。
 - 1 年生 17 名 (理 8, 医 0, 工 8, 農 0, 教 1)
 - 2 年生 29 名 (理 29)
 - 3 年生 12 名 (理 12)
 - 4 年生 5 名 (理 5)
- 2) 放送大学利用の試行
理学部、工学部、医学部の間で検討し、平成 21 年度前期に 3 学部合同クラスで「初歩からの物理

学」を利用することを決定し、試行的に開講した。当初 36 名の受講者(工 21, 理 6, 医 10)があったが、授業の時間帯など授業環境の問題もあり、通信指導のレポートを提出したものは 9 名、また、単位認定試験を受験したのは登録者の 1/4 の 9 名で 5 名合格という結果であった。

3) 医学部からの要望に対する対応

上記のように、放送大学利用の「初歩からの物理学」は、残念ながらあまり教育効果が上がらないと判断し、来年度は実施しないことにした。医学部から、物理学 I,II を受講するための準備として、これに変わる何らかの対応をしてほしいとの希望が出された。授業内容の理解のため有効である方策のひとつは個別指導である。医学部学生の寺子屋の利用度が上がるよう努力することにより、医学部の希望に添いたいと回答した。

物理学分科会は、数年来物理学共通教育の改善に関して、

- ・「物理学実験 A・B」テキストの大幅な改訂
- ・「物理学実験 B」の指導体制の改善と独自アンケートの実施
- ・「物理寺子屋」の開設

などの活動をしてきた。

(9) 生物学分科会 (分科会長：理学部 宮川 勇)

平成 21 年 5 月 25 日 7-10 時限に生物学実験のピアレビューを実施した。当日は岩楯好昭および渡辺雅夫の 2 名の教員が「アミノ酸の薄層クロマトグラフィー」の実験を行った。ピアレビューには理学部から 5 名の教員が参加した。実験終了後に各教員から感想、意見、改善点などを文書で報告してもらいそれらを集約した。実験担当者に今後の参考にってもらうこととした。生物学実験は受講者への安全対策がとられており、ピアレビュー参加教員にとって参考なる点が多かった。

(10) 地球科学分科会 (分科会長：理学部 宮田雄一郎)

10 月 31 日 (土) に地球圏システム科学科主催でピアレビューを実施した。対象科目は地球科学実験 (共通教育; 初年次の野外教育)、当日は日帰り巡検 (秋吉) のため参加者はバスを利用、11 月 2 日 (月) にはこの授業に対して授業研究会を実施した。

(11) 運動健康科学分科会 (分科会長：教育学部 上地広昭)

今年度は山口大学において第 57 回中国・四国地区大学教育研究会が開催された。本研究会において、他大学教員との間で活発な意見交流が行われた。

また、8 月 21・22・23 日に、社団法人全国大学体育連合 中央研修会 (メインテーマ「大学体育における FD 活動の進め方」) が本学で開催され、本学のみならず多数の大学の参加者とともに、FD 活動に関する意見交流を深めた。

第 2 節 第 57 回中国・四国地区大学教育研究会報告

1. 日程・テーマ

日程：平成 21 年 5 月 30 日(土) 9:00~19:30

平成 21 年 5 月 31 日(日) 9:30~12:10

会場：山口大学（吉田キャンパス）

◎平成 21 年 5 月 30 日(土) 9:00～19:30

・シンポジウム メインテーマ：大学教育における学士力・社会人力の育成を考える

第 1 部 趣旨説明と基調講演

趣旨説明 山口大学大学教育機構大学教育センター長 岩部 浩三

講演（その 1）

演題：「"教育力"のとらえ方と学士課程教育の構築～"学士力"のインプリケーション～」

講演者：関西国際大学学長 濱名 篤 氏

講演（その 2）

演題：「今企業が学生に求める能力・人間力「社会人基礎力」とは」

講演者：株式会社アクティブラーニング代表取締役経済産業省社会人基礎力プロジェクト委員・山口大学客員教授 羽根 拓也 氏

第 2 部 質疑と討論

- ・総会
- ・部会（テーマ別セッション）
 - ①第 1 部会 「FD活動の現在そして未来」
 - ②第 2 部会 「学生支援（学習支援、修学支援、就職支援）」
 - ③第 3 部会 「障害学生修学支援」
 - ④第 4 部会 「学生の自主活動（特色ある大学教育）」
- ・部会報告
- ・懇親会

◎平成 21 年 5 月 31 日(日) 9:30～12:10

分科会（研究若しくは実践報告）

①人文・社会科学分科会

「雑草のようにたくましく、生き抜く！」

②自然科学分科会

「学士力向上のための自然科学系授業の改善」

③情報科学分科会

「大学の共通教育における情報教育の再構築への取り組み」

④外国語（英語）分科会

「大学での教育を支える英語コミュニケーション能力の育成への取り組み」

⑤外国語（初修）分科会

「共通教育初修外国語の現状と課題」

⑥保健体育分科会

「大学教育における体育の位置づけ」

⑦日本語・日本事情分科会

「留学生30万人計画」に対応する留学生教育」

- ・全体会
- ・閉会行事

2. 報告

(1) 本学からの参加者および参加部会・分科会

大学教育センター長	岩部 浩三	第 1 部会	
大学教育センター教授	小川 勤	第 3 部会	情報科学分科会
大学教育センター准教授	吉田 香奈	第 1 部会	
大学教育センター准教授	木下 真	第 1 部会	
大学教育センター助教	岡田 耕一	第 1 部会	
コーディネーター	兼石 俊明	第 1 部会	自然科学分科会
学生支援センター長	吉村 誠	第 2 部会	日本語・日本事情分科会
学生支援センター教授	平尾 元彦	第 2 部会	
学生支援センター講師	辻 多門	第 4 部会	
保健管理センター所長	平田 牧三	第 3 部会	
留学生センター 教授	田 梅		外国語(初修)分科会 日本語・日本事情分科会
留学生センター 教授	福屋 利信	第 2 部会	外国語(英語)分科会
留学生センター 准教授	赤木 彌生	第 2 部会	日本語・日本事情分科会
留学生センター 准教授	中溝 朋子		日本語・日本事情分科会
人文学部 教授	本田 義昭		外国語(初修)分科会
人文学部 教授	林 伸一	第 1 部会	日本語・日本事情分科会
人文学部 教授	井上 三朗	第 1 部会	外国語(初修)分科会
人文学部 教授	太田 聡	第 2 部会	外国語(英語)分科会
人文学部 准教授	武本 雅嗣	第 4 部会	外国語(英語)分科会 外国語(初修)分科会
人文学部 准教授	山本 真弓	第 1 部会	人文・社会科学分科会
人文学部 准教授	尾崎 千佳	第 1 部会	
人文学部 准教授	柏木 寧子		
教育学部 教授	丹 信介		保健体育分科会
教育学部 教授	松谷 緑		外国語(英語)分科会
教育学部 教授	杉浦 崇夫	第 2 部会	保健体育分科会
教育学部 准教授	中田 充	第 4 部会	情報科学分科会
教育学部 准教授	上地 広昭		保健体育分科会
教育学部 准教授	曾根 涼子		保健体育分科会
教育学部 講師	沖林 洋平	第 1 部会	自然科学分科会
経済学部 教授	マルク・レール	第 4 部会	人文・社会科学分科会
経済学部 教授	齊藤 匡史		外国語(初修)分科会
経済学部 教授	成富 敬	第 4 部会	人文・社会科学分科会
経済学部 准教授	武本 ティモシー		外国語(英語)分科会
理工学研究科 教授	朝日 孝尚		自然科学分科会
理工学研究科 教授	山本 隆	第 1 部会	自然科学分科会
理工学研究科 教授	宮川 勇	第 4 部会	自然科学分科会
理工学研究科 教授	小宮 克弘	第 4 部会	

理工学研究科 教授	森田 昌行	第 2 部会	
理工学研究科 教授	増山 博行	第 2 部会	自然科学分科会
理工学研究科 教授	今岡 照喜		自然科学分科会
理工学研究科 教授	藤島 政博	第 1 部会	自然科学分科会
理工学研究科 教授	金折 裕司		自然科学分科会
理工学研究科 教授	石黒 勝也	第 2 部会	自然科学分科会
理工学研究科 准教授	野崎 浩二	第 4 部会	自然科学分科会
理工学研究科 准教授	宮澤 康行	第 3 部会	
理工学研究科 准教授	堀 学	第 4 部会	
理工学研究科 助教	原田 由美子	第 4 部会	自然科学分科会
医学系研究科 教授	村上 柳太郎	第 1 部会	
医学系研究科 准教授	山中 明	第 4 部会	

(2) 部会報告

1) 第1部会

「FD活動の現在そして未来」(大学教育センター長 岩部 浩三)

①「学生・社会人・教員の連携による教養教育FD活動」

大橋 眞 (徳島大学 大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

徳島大学では、教養を「総合的な視点から問題の本質を捉える能力」と定義し、「生きるための知性」を「良識ある地域住民としての行動力」に学ぶという形で、教育改善を図っている。具体的には、地域の社会人の中から大学教育ボランティアを任命し、大学入門科目、社会性形成科目、教養科目の教育に参加してもらっている。教員と学生に1クラスあたり数名の社会人が加わることで、一方通行になりがちな講義を学び合いの環境に変化させ、エンターテインメント的な要素も加えながら、学びを楽しみに変え、同時に学生参加型、ボトムアップ型のFD活動として定着させることを目指している。

生涯学習や地域貢献という視点からも、新しいFD活動の発想として興味深い報告であった。地域社会人が中心的な役割を果たすという点で、成功すれば大きな効果を上げることが期待できる一方で、果たしていつもうまくいくものであろうかという疑問があったが、質疑応答を通じてやはり授業のマネジメントに難しさがあるということもわかった。大学教育ボランティアとしてどんな人を選ぶかに成否がかかっており、特定の領域に非常に詳しい社会人を入れて、楽しさと教育効果を高いレベルで達成したケースもあったが、適切な人材に恵まれなければ効果を上げることは難しいということであった。今後の課題としては、まず「取組にふさわしい地域社会人のリクルート」が第一であり、次に「教養教育に携わる教員の自主参加者確保」が必要とのことであった。

②「島根大学における全学FDの展開」

山田 剛史 (島根大学教育開発センター)

島根大学からは、学生の学習効果を最大限に高めるためのFDとして、概算要求プロジェクト「学生の学びを中心に据えた教職員ネットワークの構築とFDの組織化」の報告があった。この取組には、以下の5つのプロジェクトが含まれている。

- (1) 学生参画プロジェクト：キャンパスゼミナールネットワーク
- (2) 教育調査プロジェクト(卒業生・修了生調査)：学生パネル調査(入学時から卒業時にいたるまで5回にわたって記名式で調査)
- (3) 教養教育・教育改善プロジェクト(質保証システム)

(4) ICT活用実践プロジェクト

(5) 地域連携プロジェクト

全学講演会等のマクロなFDは実施しやすいが学生の学習効果を高めるという視点からは効果は薄い。学習現場に直結したミクロなFDが重要であるが、全学組織としての教育開発センターの立場からは、カリキュラム改善を中心としたミドルレベルのFDを中心に推進しているようである。

いずれにしても、効果的なFDを推進するためにはFDの構造化・位置づけの確認が重要である。

③「厳格な成績評価に向けての端緒」

桐山 聡（鳥取大学教育センター 教育開発部門）

鳥取大学からは、問題解決力や論理的思考力といった能力の客観的な評価手法の確立に向けて、「教養特別講義鳥取大学の知の最前線」の受講生の受講メモや「教養特別講義Ⅱ～他者と私～」の受講生レポートを用いた試みの紹介があった。

まず、前者では受講生が受講メモに基づいたレポートを作成し、その内容が講師の授業のために用意したメモと一致しているかどうかを検証するという形で学習理解度を測定しようとするものであった。

後者は、レポートの評価基準を以下のように設定している。

- (1) 字数は4000字以上であること
- (2) 「他者と私」、特に「なぜ人のために何かをするのか」について考察されていること
- (3) 講義名に「教養」と冠している意味について考察されていること
- (4) 大学の内外で勉強することの意義について考察されていること
- (5) 文章全体が、事実や感想の単なる羅列になっていないこと
- (6) 講師の話からの引用部分が全体の文字数の15%以内であること
- (7) ノートの提出

このように多数の評価基準を設けることで、客観的な評価が可能になるとのことであった。

後者の例では、評価基準の工夫により、レポート内容に課題解決力の一部が求められていることはよく理解できる。しかし、課題解決力とは思考する能力や文章表現力にとどまるものとは言えないであろう。また、受講生が講義の趣旨を理解してメモを取ることもたしかに論理的思考力の一部ではあろうが、同義とは言えないように思われる。課題解決力や論理的思考力は複合的な能力であって、その構成要素の分析が必要であると考えられ、その方向に一步踏み出した試みであると言える。いずれにしても、オムニバス形式でかつ大人数の授業ともなると客観的な成績評価が最も困難な形態であり、学生には楽勝科目とみなされがちで授業になりがちであるが、そのような環境にあえて挑んで客観的な評価を試みた意欲とかかった手間は高く評価されるものであろう。

2) 第2部会

「学生支援（学習支援、修学支援、就職支援）」（学生支援センター長 吉村 誠）

まず山口大学学生支援センターの専任教員で六年前の発足以来就職支援の任に当たられている平尾元彦氏より報告をいただいた。山口大学は山口と宇部にキャンパスがまたがっており、7学部ある総合大学である。各学部でもそれぞれに対応した就職支援が行われているが、学生支援センターでは全学的な視野に立った就職支援を行っている。そのことを踏まえて考えるとキャリア教育は、①わからない（学生は社会、会社、適性、仕事の内容等がわからない）、②ボリューム（全学的な多くの学生）、③一人一人（個別指導）、④効果実証という論点があろう。そこで本学の取り組みとしては、①に対しては職業リアリティ（実際の仕事、会社に学ぶ）、②③として教育連携と相談重視。特に授業は初年時と高年次の2段階で行って学生への自覚を促している。④はCHECK-MANIFESTO-ACTION ループと名付けて、社会人力を付けるのに自分の位置への自覚化や自己目標を立てて、それへの検証といった数値では測れないものへの強化を行っている。また具体的には様々な情報提供や各学部との連携

などにも力を入れている。ただし今後の課題としてはOBやOGの組織的な協力や大規模な学生数に対する個別指導などへの対応方法が掲げられるというのが主立った内容である。それに対して、2段階の授業形態の理念や全学就職支援体制の実態などの質問があった。

2人目は広島工業大学健康情報学科女子学生キャリアデザインセンターのセンター員の村上香氏から報告をいただいた。当該センター発足の契機は、就職率に表れた女子学生の工学系・技術系職種への就職の困難さである。そこで入学後のキャリア意識への高揚と女性技術者受け入れのための社会環境の改善を目的として2007年に当該センター（JCDセンター）が発足した。支援の基本的な内容は、①キャリア形成、②就業支援、③再チャレンジ支援の三本柱である。学生支援GPにも採択されたことにより、この活動は本学の女子学生のみならず全国的な問題解決の糸口ともなるものである。実践プログラムとしては、①に関しては女子学生の就業意識の向上と特定スキルの向上。②としては学生が望む職場に定着して働ける支援。③は職場から離れ、「学べる環境」から距離を置いた女性技術者に対する再教育の3点を掲げることが出来る。その具体的な活動の中でもユニークなものとしては、学生の自主的な企画によるラジオ番組の制作。企業との懇話会の実施などがある。特に後者は企業間の温度差が見えて新しい発見がある。また情報発信基地として機関誌の発行やシンポジウムにも力を入れている。そうした活動における成果としては、学生のキャリアアップへの自覚、就業率の向上はもとより、企業からも好評であり、地域からも注目されていることなどを掲げることが出来る。また外部評価を含めたPDCAサイクルの中での実施を行っており、絶えずその効果の向上に向けての努力を行っている。しかし課題も存在する。それはセンター員の人数不足から来るスタッフの負担が大きいのということ。参加経験のない学生への対応などである。従って今後の計画としてはプログラムの改善や、再チャレンジ支援の強化を掲げている。このプログラムの充実により全国規模での展開ともなれば技術系女子学生の問題解決になるばかりでなく、男女共同参画への意識改革の一端ともなり、大きな成果を掲げることが出来るであろう。

この報告に対して、学生の自主的なラジオ番組制作へのセンター教員の関わり方や再チャレンジにおけるe-learningの方法、男子学生への対応などの質問が寄せられた。

3) 第3部会

「障害学生修学支援」（大学教育センター 教授 小川 勤）

第3部会では障害学生修学支援について2つの大学から発表があった。障害学生の修学支援に対しては各大学では受け入れに対して現在様々な模索が続いている状況である。すなわち、入学前の受験指導に始まって、受験上配慮すべき事項の検討、合格後から入学前までの間に、保護者、本人との面談と履修指導、さらに授業開始前の授業担当者に対するFD研修会の開催、入学後の共通教育、専門教育における授業保障、情報保障といったような一連の複雑な作業や指導を連続的に実施しなければならないのが現状である。今後、障害学生の大学への進学ハードルは益々低くなり、受験生も増加する傾向にある。今までのような特定の教員や職員個人のボランティアに頼ってはいけず、障害学生の修学支援はいずれ行き詰ってしまう可能性は高い。今回の発表を機会に大学間で連携し、情報交換を活発化させる一方で、各大学では全学的にどのように組織的に取り組んでいくかを検討する必要性が増していることを感じた。

今回は比較的規模の大きい総合大学を対象にした先進的な取組事例の紹介が中心であったが、実は小規模な大学ほど障害学生を受け入れる機会が多く、そのような大学ほどマンパワーの問題や施設設備の整備の問題で課題が多いことが、発表後の各大学・短大からの質疑から明らかになった。今後は今回のような部会を定例的に開催して情報交換する場を設けておく必要があることを痛感した。

①「広島大学における障害学生支援について」

岡田 菜穂子（広島大学アクセシビリティセンター）

全ての学生に同一で質の高い教育を提供することを目的に全学体制で障害学生支援に取り組んで

いる。広島大学の場合には全学的なセンターが存在しており、入学前相談から始まって、合格後相談、授業前相談、支援内容の決定、支援後のチェックといった障害学生の修学支援に対する PDCA サイクルがすでに確立され、専任教員も配置されているという他大学から比べるとかなり恵まれた環境にあるといえる。アクセシビリティセンターの役割としては、①アクセシビリティ支援、②教育・人材育成、③支援方法開発などが主な業務である。平成 17 年度から毎年 15 名前後の障害学生の支援を行っている。このようなセンターを設置した成果としては、個別対応のための支援体制の整備が推進され、教職員や学生の意識改革が進み、バリアフリーの実現が促進された。また、教育の一環としての障害学生支援を取り込んだことが大きな成果となった。

一方、課題としては、最近増加しつつある発達障害学生への対応がまだ十分できていないことや現実的な障害学生支援のために、ニーズと状況に適したレベルでの支援を検討する必要がある。具体的には生活支援や地域サービスとの連携をどのように行なっていくかなどが課題としてあげられる。

会場からは保健管理センターとアクセシビリティセンターとはどのような関係になっているのかについて質問があった。これに対して、保健管理センターも参加している全学的な障害学生支援検討組織で話し合っ互いの連携を図っているとの回答であった。また、最近は発達障害を持った学生も増えているので、保健管理センターの医師との連携を取り合っ互いに対応していくことが増えてきている。アクセシビリティセンターの職員は医療資格を持っているのかという質問には持っていないとの回答であった。医療行為が必要な際には保健管理センターに随時お願いしているとのことであった。

②「アクセシビリティリーダー育成プログラムについて」

山本 幹雄（広島大学 アクセシビリティセンター 准教授）

広島大学では「人にやさしい社会」をリードする「アクセシビリティリーダー（AL）」の育成を、学内の障害学生修学支援組織と連携しながら進めている。大学独自で育成プログラムと資格認定制度を実施している。資格取得は大学が決めた授業に参加して単位を修得することによって取得することができる。資格取得者は希望によって地域社会（例えば、東広島市の介護施設など）に派遣したり、マイクロソフト社に派遣したりして障害者支援に貢献している。この成果を活かして平成 23 年度からこの資格のオープン化を目指している。

会場からは、手話通訳の対応はどのように考えているのか質問があった。これに対しては、専門的な教育では筆記通訳が主になるのではないかと。したがって、必ずしも手話通訳はすべてに有効ではないと考えているとの見解が示された。ただし、そうだからといって手話通訳の指導を行っていないわけではない。入試での対応について、障害学生の障害の程度を測るアセスメント表なるものを入学前に利用しているのかという質問に対しては、入学前の相談会では本人の様子を見て障害の程度を判断している。本人がはっきりした意思を表明できない場合には高校の先生や保護者とも面談し、ある程度障害の程度を把握するように努めているとのことであった。

③「山口大学における「障害学生修学支援」の取り組みと課題」

小川 勤（山口大学 大学教育機構 大学教育センター）

山口大学では、平成 19 年に「山口大学における修学に障害のある学生の支援に関する基本方針」が策定された後に障害学生の受験者が増加した。この中で重度の聴覚障害を持った学生が平成 19 年度に入学してきた。また、平成 20 年度には ADHD およびアスペルガー症候群を併せ持った学生が入学している。これらの障害学生に対する支援は入学前の保護者・本人との面談から本格的な支援活動がスタートし、各種の授業保障や情報保障が行なわれている。この 3 年間を通じて感じていることは障害の種類や程度に応じて支援方法が異なるだけでなく、同じ障害でも個人差が大きく、結局個々の学生にきめ細かく対応しなければならないということがわかった。山口大学の特徴として、障害学生の修学支援のためのセンター的機能を持った組織が存在しない。このため、各支援組織が相互に連携を取りながら対応している。障害学生の数から考えて現在の支援体制が比較的スムーズに機能してい

る。しかし、今後入学してくる障害学生が増加してきた場合には、現在の支援体制で対応できるのかどうかはかなり難しいという見解であった。

発表後、会場からは発達障害者は人によって症状の程度が異なると思うが、入学後のアセスメントや卒業までのサポート体制を入学前に考えているのかという質問があった。これに対して、入学後のアセスメントはやっていないが、入学前に本人の担当医と情報交換を行ない本人の症状を把握することに努めたり、高校の先生と接触し高校時代の様子を聞きながら障害学生の障害の程度を把握することに努めている。また、卒業までも見越した支援体制を計画的に作っているのかという質問に対しては、それぞれの支援組織が相互の連携や意思疎通を図りながら対処していく方法が現在取られているが、この方式が現実的には有効に機能しているとのことであった。しかし、障害学生が増加した場合にはセンターを設置し、専任教員を配置するなどの対応が必要になってくるかもしれないという回答であった。

最後に、部会全体に対する質問として、筋ジストロフィーの学生は各大学にどの程度在籍しているのかという質問があった。これに対して、山口大学には現在在籍している学生はいないが、広島大学ではこの種の軽い症状を持った学生が在籍し、学生ボランティア組織等の支援を受けながら修学しているとのことであった。

4) 第4部会

「学生の自主活動（特色ある大学教育）」（理工学研究科 教授 小宮 克）

山口大学における2つの学生の自主活動（前記 [1]、[2]）の事例報告が行われた。30余名の出席者あり、それぞれの報告の後では活発な質疑応答、意見交換、情報交換等があった。

[1] と [2] は互いに対比的な特徴をもつ：

活動経費：[1] は大学の通常予算からの支出であるが、[2] は複数の外部資金に申請し採択された助成金で賄う。

授業との関係：[1] は正規の授業外での活動であり、「単位」は出ない。一方 [2] は正規の授業に取り込んだ活動であり、「単位」が与えられる。

教員の参画：[1] は基本的に学生のみでの活動であり、教員は学生からの求めがあった場合に助言を行う程度であるが、[2] はサイエンスワールドの活動全体としては教員と学生の協働である。

全学・学部：[1] は全学にわたる取組であるが、[2] は主として理学部のみが関わる取組である。

質疑応答等の一部を以下に示す。

▲「自主活動ルーム」は特色 GP の助成で運営されてきたというが、特色 GP の期間終了後はどうなったか？

△昨年度末で GP の助成は終了した。それまではコーディネータ1、事務補佐員2で運営してきたが、本年4月からはコーディネータ1、事務補佐員1と縮小して大学の予算で運営している。

▲おもしろプロジェクトの採択率は50%弱だというが、不採択になったプロジェクトのフォローはしているのか？

△不採択とした理由を学生たちに伝え、次年度の再応募の際の参考にさせている。

▲サイエンスワールドに参画したことにより単位が与えられる授業科目「サイエンス実習」や「数理企画」は選択科目か？ 卒業に必要な単位数に算入されるのか？

△いずれも選択科目である。卒業に必要な単位数に算入される。

□理学部を中心としたサイエンスワールドの実施を他の学部にも広げたらどうか？ 小中高校や地域の人たちの参画を考えるのもよい。

▲サイエンスワールドの現場で参加者たちに「わからないけど面白い」、「わからないから面白い」と思わせることは重要である。そのための何かいい仕組みはないだろうか？

△そのために手品的な手法をとるのはまずい。現象の裏付けを考えるきっかけを与えることが重要。

▲サイエンスワールドは11月に開催しているが、これを小中学生の夏休み期間中に開催すれば、宿題や自由研究の題材にも利用できるのではないかと？

△夏休み期間中の開催も検討したが、いろいろな理由（高校では補習授業がある、大学では集中講義がある等）により、11月に開催している。

（3）分科会報告

1) 人文・社会科学分科会

「雑草のようにたくましく、生き抜く！」（経済学部 教授 成富 敬）

本分科会では、「雑草のようにたくましく、生き抜く！」というテーマを設定させていただいた。このテーマには、厳しい社会でいろいろな人と関わりあいながら生を全うするには、「何としても生き抜く！」という強い意志が必要との思いが込められている。余裕のないあわただしい世の中、効率よく結果を手にすることを重視するあまり、他者に対しても性急に拙速に結果を求めてしまいがちである。このことが他者への寛容さを奪い、ひいては社会に様々な問題を齎していると考えられる。

学生が余裕を持って他者と接し、社会でたくましく、楽しくそして思いやりを持って生き抜いていく力はどこから生まれるのか？この問いに対して、以下の実践的な取り組みに解決の糸口を見出すことができる。「道に迷って、道を知る」、本分科会でご報告いただいたどの取り組みにおいても、学生が迷いや困惑あるいは不安のなかで、ああでもないこうでもないという試行錯誤する姿を垣間見ることができる。

報告の概要は次のとおりである。

①「観光学における「実習」の現状と課題」

マルク・ルール（山口大学経済学部観光政策学科）

山口大学経済学部では、必修の基盤科目（マイクロ経済学1、マクロ経済学1、簿記1、法学1、法学2）が設定されている。また、他学科の授業も受けられるコース・カリキュラム制を採用しており、学科間の「壁」が低くなっている。いっぽうで観光政策学科の観光経済分析コースと観光コミュニケーションコースにおいて学科特有の授業科目群が設けられている。経済学部では伝統的に少人数教育の演習に特徴がある。なかでも観光政策学科特設のプロジェクト演習では、事前講習から実習、そして事後講習へと続く一連の取り組みにより、社会との接点すなわち実践をととした企画力の育成、学外実習による理論と実践の融合、プレゼンテーション能力の向上が達成され、結果として「体験」の「理論化」や学生が主となる「立場の逆転」が見られる。

演習のテーマは「観光とメディア」であり、学生は自分で研究テーマを設定することが求められるものの、最初からはっきりした問題意識を持つことは難しい。ただ、現場での調査（情報受信）や宣伝の作成（情報発信）とあいまって、グループワークがテーマを引き出すきっかけの働きをしている。県内日帰り旅行、県外一泊二日旅行、外国旅行などを学生が自発的に企画し責任をもって実施することがいい経験となっている。

学生が「主催者」となる「立場の逆転」！

②「セミナー活動を通じて、学士力・社会人力養成」

小林武生（徳山大学福祉情報学部福祉情報学科）

徳山大学福祉情報学部では、1年次に基礎セミナー、3・4年次に専門セミナーが開かれている。セミナーは社会福祉士を目指す学生が中心であり、社会福祉士を目指すことはもちろんであるが、セミナー生同士の関わりの中で、自己理解及び自己覚知を促すことや、自分たちが関係する地域をフィールドとした活動を行うことを目標としている。特に「楽しみながら」活動することを意識している。またセミナーでは、1分間スピーチをおこなっており、発表者を毎回くじで決めている。誰が発表者

になるかわからないという緊張感もあり、たとえ1分間のスピーチといえど、長く続けることで内容や話しぶりに各段の向上が見られる。

卒業研究のテーマとしては、福祉分野における広報効果、福祉教室による意識変容、特に、地元社会福祉協議会による小学生高学年を対象とした福祉学習を企画し、企画の立案段階から参加し、テーマ決定、演習・体験コーナーを分担している。また、地域の盆踊り（さんさ踊り）を通じた3世代交流事業では、地域住民からセミナー生が盆踊りを習い、さらにセミナー生が地域の幼稚園・保育園に行き児童に盆踊りを教えることにより、学生の視点の広がりや地域への関心の拡大があった。一連のセミナー活動をとおして、学生の自己理解の深まり、自分の感情・意志の伝達力の向上、自己・他者・地域・社会に対する視点の広がりがある。

先生は先生だけど、先生じゃない！

③「地域が学校・地元が先生」

安溪遊地（山口県立大学国際文化学部国際文化学科）

山口県立大学は、地域貢献大学を標榜し、大学のもつ教育力と地域の教育力とを、うまく合わせて学生を伸ばしていく方法を実践している。とりわけ「地域共生演習」は、実践のなかで地域が抱えるさまざまな課題の解決を目指すユニークな取り組みとして、文部科学省の現代GPに選定されている。この取り組みの基本は、これまで培われてきた地域住民と大学教職員との人間的信頼関係にあり、学生は「地域共生演習」をとおして地域を知り、地域住民とも係わりをもつことになる。もちろん地域にはいいところもあれば欠点もある。欠点も含めて地域を好きになり、地域の人に共に地域を創っていく仲間として認知してもらい、さらに住んでより深く知る。この地域との「知・係・愛・創」のスパイラルが、学生や教員と地域との絆を太くし地域を元気にしていく。

2007年度前期の地域共生演習は、1年生45人、留学生3人、先輩学生10人、地域住民300人以上、ボランティア教員1人を含む教員6人で実施された。山里フォーラムのんたの会あったか村（阿武町）、マロニエの森の会（山口市宮野）、もりさま祭（山口市荒高商店街）等、九つの受け入れ先の住民と共に汗を流し、地域住民の願いや悩みの一端を共感することができた。実施にあたっては、学生と受け入れ側とのマッチングが大切である。

はずむ地域、はじける学生！

一緒に汗を流し思い悩み、そして学び教えあう時間のなかにこそ、「君だって大変かもしれないが、私だって大変なんだ」から「私だって大変だけど、君も大変だね」へと変えていく働きがあると考えられる。この気持ちの余裕が、他者に引きずられぬ自らの判断の軸を醸成し、自らの幹を太くすることにつながる。3人の報告者は学生に、「よく迷わせる術」をご存じであるとの印象であった。学生は give and take ならぬ take and give をとおして、受動から能動へのスイッチの切り替えがおこなわれている点が興味深いことであった。

なお、本分科会には、予想を超える30名ほどの参加者があった。せっかくご参加いただいたにも関わらず、時間内に十分な議論ができなかったことをお詫びするとともに、報告に対するご不明の点は、直接報告者にあらたな縁を求められたい。

2) 自然科学分科会

「学士力向上のための自然科学系授業の改善」（理工学研究科 教授 宮川 勇）

高校での履修状況や学力レベルの異なる学生集団に、いかにして自然科学をより深く理解させ、学習目標を達成させるかについては、これまでも様々な試みがなされているが多くの問題も抱えている。この分科会では、学科改組に伴う授業カリキュラムの改善、共通教育における新しい授業科目の導入、および新しい授業実施形態の導入に関して、3つの大学からの授業改善の試みを報告していただき、

活発な質疑応答を行った。

①「物理に関する教育改善の取り組み」

(発表者：山口大学理学部 物理・情報科学科 朝日 孝尚)

山口大学理学部では、平成 18 年度に学科改組を行い、物理分野は自然情報科学科（物理、生物、情報分野）から物理・情報科学科に属することになった。自然情報科学科では、コースに分かれる 2 年前期までに学科共通選択科目が多く、1・2 年生の物理の必修科目は 3 科目 6 単位と少なかった。そのため、専門科目を履修するための学力が不十分であった。そこで、新学科では、2 年前期までに学科共通カリキュラムで基礎的な数学・物理・情報科学を学ばせるために、必修科目を 28 単位まで大幅に増やした。さらに、新しく講義と演習をセットにして 3 単位の授業を開講できるようにカリキュラムを改訂したことが報告された。今年度学科改組の完成年度を迎え、教育効果の検証を行う予定である。次に学習相談室として従来から「物理寺子屋」を開設しており、大学院生が学部生に教えることで教育効果を上げている事例が報告された。また、共通教育の物理教育に関して、物理学実験テキストを平成 18 年度にページを増やして大改訂を行い、その後も小改訂を重ねた結果、今年度から一般刊行物として出版されることとなったことが報告された。テキストの中には、物理未履修の学生のための説明などの配慮がされている。物理実験では毎回、レポート添削を行い、学生からの評価が高いことが報告された。

発表に対しては、1・2 年次に必修科目が多いため共通教育の単位履修にどれくらい時間がかかるのか等の質問があった。質問に対する回答の主なものは以下のとおりである。

・ 1 年後期では必修科目や実験が多く、自由に履修できる科目が少ない。そのため、2 年前期で共通教育科目を多く履修し、2 年後期までかかって共通教育科目を履修することになる。

②「学士基礎力の育成を目的とした自然科学実験を組み込んだ体験型授業」

(発表者：愛媛大学教育・学生支援機構・共通教育センター 古賀 理和、松久 勝利)

愛媛大学では共通教育で平成 21 年度より、全学部の学士基礎力（共通教育で育成する学士力）の育成を目的として、新規授業科目「科学リテラシー」を開設している。対象として現在は、文系理系学生の約 1/4 の受講を想定している。この発表では、科学リテラシー開設の経緯から具体的実験の中身まで詳細な報告が行われた。「科学リテラシー」では、「エコを考える～光合成システムを題材に～」をテーマに今年度、「生命（いのち）の営み」と「地球の未来」2つの開設科目が開講されている。全学部 1 年生（医学科以外の文系および理系学生）を対象とする授業であり、文系学生にもかなり高度な実験を行っている事例が紹介された。実験例としては、クロロフィルの合成や無細胞タンパク質合成系での緑色蛍光タンパク質の合成、DNA の電気泳動など、先端的な自然科学を体験できる授業内容となっている。学生は講義を聞くだけでなく実験にも取り組み、教員による演示実験も視ることができる。発表者からは、実験を行ううえでの工夫の事例、安全性への配慮などについても報告があった。質問に対する回答の主なものは以下のとおりである。

- ・ 授業の 15 回目の発表会はこれから企画するが、班単位での課題の発表などを考えている。
- ・ 講義と実験の工夫はそれぞれの担当者が行うが、講義と実験を半分ずつの比率で行うのがよいと考えている。また、学生には e-learning で使用するソフトを渡すので、時間外学習ができる。
- ・ これまでの共通教育の理系の実験で必要なものは、それぞれの専門の授業で行うことになる。
- ・ 改革は 2 年前の学長からの指示で始まり、分科会でも検討チームを作って行っている。

③「協調演習による理学的知力の育成支援—「知ること」から「わかること」への知識昇華をめざして」

(発表者：広島大学理学研究科 泉 俊輔)

広島大学での取り組みとして、「協調演習」の実施と学習効果の向上について報告があった。「協調演習」とは、学生が互いに教えあうことによって学ぶ、認知的学習方法を演習形式で実施する授業をさす。広島大学では、分野横断的で広領域のセミナーである教養的協調演習（教養ゼミ）をすでに実施しており、その中で学生と教員の信頼関係を培っている。その人間関係をもとにして、専門科目での協調演習を行っている。協調演習では担当教員がヘルパー学生を加えた班編成を行い、教える学生と学ぶ学生からなるコミュニティーを構成して、演習問題を解答させる。解答をどの学生に解説させるかはその場で決めるため、学生同士はお互いに教えあって学習する。この方法を実施することによって、成績下位の学生の成績が伸びただけではなく、成績上位者の成績も向上した。さらに学生同士がリンクすることによって、留年率の顕著な減少が起きた。最後に本発表では、協調演習を行う際に注意すべき問題についても報告があった。

発表に対して多くの質問があったが、質問に対する回答の主なものは以下のとおりである。

- ・ ヘルパーとなる学生を教養ゼミで見つけるのが教員の大切な役割である。
- ・ グループの分け方については、学生の希望を考慮するというよりも教員の判断で分ける。
- ・ 化学以外の分野でも生物、物理、数学でもそれぞれ方法は少しずつ異なるが、協調演習は有効である。
- ・ グループ割りでは、女子学生の比率も考慮して班編成を行っている。いろいろな条件を考慮して、6～7名の学生で1班を構成している。
- ・ 演習問題を厳選することによって、教員にはどの演習問題が本質的に重要かが見えてくるよい面もある。
- ・ 誰がヘルパーの学生かは他の学生には分からず、むしろヘルパー以外の学生が班の中心になることもある。

3) 情報科学分科会

「大学の共通教育における情報教育の再構築への取り組み」(大学教育センター 教授 小川 勤)

I 初めに、福元和行・鳥取大学教育センター教授より、同大学の全学共通科目・健康スポーツ科学実技の概要と標記議題の提案趣旨が説明された。

(1) 概要と授業目標

- ① 鳥取大学では、工学部の2学科を除いた全学部・全学科で1単位必修である。定時開講授業数37(前期22、後期15)・集中開講授業数2を、常勤教官8名・非常勤講師5名が担当している。
- ② これまでの健康スポーツ科学実技のシラバスでは、各種目の授業目標として、種目の特徴を理解し、技能を身につけ、スポーツを楽しむ習慣を獲得する、といった生涯スポーツに対応した準備教育を意図した目標を掲げていた。
- ③ 最近、大学は、「人間力を根底におく教育」を教育のグランドデザインとして採用し、人間力の養成を教育課題としたため、シラバスには、②で述べた生涯スポーツに関連した目標だけでなく、人間力養成に関連した目標も併記するようになった。例えば、ある種目では、「高等学校までの教育課程において養われた基礎体力および技術力を維持することと、生涯にわたる運動習慣の動機づけを目的とする。人間力としては、体力の維持・増進に、また班別練習を通してコミュニケーション力、実践力の向上にも役立つと考える」と記載されている。このような変化は、スポーツの教育だけでなく、スポーツによる教育も重視していく方向を示している。

(2) 成績評価

- ① 鳥取大学では、担当教官ごとに評価の項目と配点が異なっている。評価の主な項目は、出席率・学習意欲(学習態度、上達意欲)・種目理解・技能などである。
- ② 大学体育連合が174大学についてアンケート調査(2003年)した結果では、項目と配点を統一

している大学・項目だけを統一している大学・両者とも統一していない大学がほぼ同数であった。評価基準の項目を多い順にあげると、出席(97%)・学習態度や意欲(90%)・技能やスキル(71%)、レポート(59%)であった。学習態度や意欲に含まれる項目は、積極性、遅刻の有無、準備や片付けへの参加、リーダーシップであった。同調査では、配点内容は記載されていない。

(3) 今後の課題として、以下の事項が述べられた。

- ① 項目と配点の大学内での統一の必要性
- ② 採用項目の妥当性
- ③ 採用された項目についての人間力の観点からの評価方法
- ④ 項目間の適切な配点

II 鳥取大学の発表についての質疑、および各大学の体育実技の授業目標・評価項目・配点などについて意見交換がなされた。

(1) 鳥取大学の発表についての質疑

- ① 人間力の理念は誰が作ったのか？実効性を考えれば、学生の意見も必要なのではないか。
- ② 人間力は、教養・専門課程の授業の中で育てるものではなく、大学生活全体で育てることを考える必要がある。
- ③ 記載されている要素の全てを身につけた人間の育成は、本当に可能なのだろうか。
- ④ 記載されている人間力の要素以外に重要な要素があるのではないか。

(2) 各大学の体育実技の授業目標・評価項目・配点など

- ① 大学の教育目標との絡みでシラバスの内容を書くことはなく、またその内容は、授業を担当する教員が生涯教育の観点から独自に作成されたものであり、配点についても統一していない、ことが多くの大学から報告された。
- ② 実技種目は異なっても、身体づくりや身体の動きの重要性は共通するので、授業開始の3～4回は共通内容にすることを検討している。このことで、評価内容は一部統一されることになる。大学内では、評価項目としての「出席」はふさわしくないとの意見が紹介された。
- ③ JABEE では、出席点を評価項目としていない。現状では、出席点を授業態度の観点に置き換えて評価項目にしている大学も多いようである。実技・実習については、JABEE の規制はなじまないとの意見があった。
- ③ 法人化以後、全国の約 50%の大学において体育の位置づけが必修から選択に変更された。しかし最近では、再び必修化に変更した大学が増えており、約 70%となっている。本会でも 2 大学で変更があったことが報告された。
- ④ 体育実技に関する学生の授業評価は、実施していない大学、講義と同様の評価項目で行っている大学、講義とは異なる実験・実習用の評価項目を設定して実施している大学など、授業評価の現状が多様であることが報告された。

4) 外国語（英語）分科会

「大学での教育を支える英語コミュニケーション能力の育成への取組み」（教育学部 松浦 緑）

それぞれの発表の後、活発な質疑応答や意見交換が行われた。

まず、武本氏の発表について、授業の中で受講者の積極的なコミュニケーション活動を促すという点から、教師が自らの外国語学習体験について話すことは効果があるのではないかと、また、授業においても学生が話しやすい環境や雰囲気作りについて、何か有効な手だてがあれば聞きたいとの要望があった。それについて、発表者からは、教師が自らの体験を活かすことは有効であろうが、ただし、受講者にも様々なタイプがあり、こういった動機付けが有効かは一概にはいいにくく、特に日本の学生については、ある程度の強制や発言すると token 所謂ご褒美がもらえるとといったような、仕立てが有効と思われること、話しやすい環境としては、教室で輪になってすわりリラックスできるような工夫をしていることが示された。

次に、English Speaking の受講と TOEIC スコアとの相関について尋ねられた。発表者より、TOEIC との相関は見られない、ただし、この English Speaking 自体が山口大学でのカリキュラム上 TOEIC のスコア 400 未満の学生を対象としていることが作用しているかもしれないとの説明がなされた。それについて、質問者からは、English Speaking はむしろスコアが高くない学生に意欲をもたせ、英語学習を活性化する効果がありそうで、評価できるとの意見が述べられた。山口大学からの出席者で以前に English Speaking を担当した経験のある参加者からは、受講者は 1) 前もって準備ができる、2) 会話をするペアがどんどん入れ替わる、3) 授業内で雑談風に話せる といったような点からも学生が授業を楽しんでいたという印象を持っているとの発言があった。加えて、オンラインによる課題とセットになって、学習効果が期待できるという指摘もなされた。続いて、English Speaking を担当している教員について尋ねられ、発表者より、現在は 5 名の英語のネイティブスピーカーと 8 人の日本人合わせて 13 名が受け持っていることが示された。必ずしも、英語のネイティブスピーカーだから担当者として好ましい訳ではなく、授業の運営をきちんとすることが重要と考えている点も付け加えられた。

参加者からは武本氏作成のテキストへの興味が示され、自分の大学の授業でも利用可能かといった問い合わせもあった。これについては、発表者から可能であること、更に、授業の目的に応じた編集も可能であることも伝えられた。

ウィルソン氏の発表については、教員の TOEIC 指導法セミナーでの成果として特に効果的だった点について詳細が求められ、発表者からは、具体的な例が示され説明された。例えば、疑問文の聞き取りにおいて最初の語を注意して聞くことといったようなポイントがむしろネイティブスピーカーにとって新鮮だった点などが報告された。

次に、大学が中期目標として掲げる TOEIC スコアについてどの程度学生に示されているのか、また、評価法についてどのように算出しているかといった点について質問があった。発表者からは、当然学生は大学の中期目標として掲げるスコアには疎いが、ある程度学生に対して目標を示しつつ、コースの説明をしていること、評価は学生が受ける 3 回のスコアの上昇率を計算式に基づき算出しており、スコアのレベル毎の算出方法も考慮していることなどが解説された。学生の学習意欲に結びつく指導を心がけており、計算式については学生の強い要望があれば詳細を教えるが、細かいところまでは示していないことも述べられた。

オンライン課題について、ログイン回数では不十分ではないかとの質問に対し、発表者からは、時間も合わせて見る必要があると今後そういった配慮をしたい、ただし、きちんと学習していないと結果的にスコアも上がらない事を学生にも理解させたいとの考えも述べられた。さらに「ぎゅっと e」(広島市立大学)について、頻繁な短時間のアクセスに便利で学生に好評だった事も付け加えられた。

また、参加者から TOEIC の授業の担当教員としてネイティブスピーカーである必要があるのか、英会話ならばわかるが、TOEIC のテクニックについてはむしろ日本人教員のほうが適しているのではないかとの意見が述べられた。発表者からは、これまでの慣例で、英語の授業はネイティブスピーカーで、というムードがあるが、例えば、文法等については、日本人のほうが適している部分もあるかもしれないと答えられた。

TOEIC 受験料について、学生の負担は課題であろう。参加者からも、学生の負担感は大きく、スコア上位者には受験料を還元するという方法を試みている大学もあるが、他に可能な対応策があるだろうかという問題提起もあった。山口県立大学では入学前に受験料を払い込むことになっており、あまり不満の声は聞かないが、学生のまじめさに因るところが大きいかもしれないとの見解が述べられた。英語の社会的ニーズについてどの学部においても意識させるよう努力している点も述べられた。

コミュニケーション能力の育成、オンライン自習、TOEIC の活用法といった、まさに現在多くの大学が抱える課題に関連した実践的内容を含む情報量の多い発表に参加者は熱心に聞き入り、質疑応答や意見交換も活発であった。

5) 外国語（初修）分科会

「共通教育初修外国語の現状と課題」（経済学部 齋藤 匡史）

①「山口大学の初修外国語教育における制度上の問題点」（発表要旨）

本田 義昭（山口大学人文学部 言語文化学科）

1. 大学設置基準の大綱化以前のカリキュラムと現行のカリキュラム

大綱化以前、週1コマ1学期で1単位という履修で、学生は8単位ないしは4単位を修得し、それぞれ第一外国語、第二外国語として単位認定されていた。意欲のある学生は「中級」まで学習でき、その後の独習の基礎となっていた。

大綱化以降（教養部廃止）、現行カリキュラムでは単位計算が変更され、週1コマ1学期で2単位となり、共通教育の単位数に変更がなかったため、実質、単位は半減、学習量も初級で終了となった。その結果、8単位、4単位、2単位履修のための入門・初級期の科目のみとなり、文法など中級で学ぶべき項目が学習できなくなり、独習の基礎さえ提供できなくなっている。

2. 現行カリキュラムの問題点

- ・複数の外国語を学ぶことで世界を複眼的にとらえることができるのに、大勢の学生が英語以外の外国語を学ばないまま大学を卒業する。
- ・英語や一般教育の人文・社会系科目と初修外国語とを一括りにして〇〇単位履修する学部、学科があるが、初修外国語はたいてい上限が4単位になっている。

3. 制度上の問題点

- ・一般教育の各科目の担当者と各学部の代表とが顔を合わせて、その科目に関わる諸問題について話し合う仕組みが存在しないし、今や学部単位ではなく、学科単位さらにコース単位で初修外国語のカリキュラムが違うのでますます交渉しづらくなった。
- ・初修外国語を担当する教員の多くが一般教育と専門教育の両方を担当しており、専門学生がいる専門教育を重視しがちである。また初修外国語の担当教員が複数の部局に分散しており、所属部局や担当外国語によって利害、関心が必ずしも一致しない。
- ・初修外国語部会という組織があるが、皆多忙のため、初修外国語のありかたについてじっくり話し合う時間があまりない。
- ・人件費抑制のため、新規の非常勤講師枠はほとんど認められない。コマ数が増えるような改革案を提案すれば、専任教員の負担増になる。

4. 初修外国語に対する学生の意識

本年度、ドイツ語初回授業（初級、初歩クラス）において、授業の説明の前になにも情報を与えない状態で、アンケート調査を行った。その結果、文系学部生は初修外国語学習の意義を十分に認識しており、「初修外国語を学ぶことの負担」も多くは感じていない。しかし理系学部生は理学部生が学ぶ意義を肯定しながらも、負担に感じており、医学部、工学部では、学習の意義を認識していない者が多く、負担を感じる割合も大きかった。こうした結果から、理系学生には興味喚起の工夫が必要であり、また英語だけでは世界を見るできないということを知らせるチャンスでもあると思う。他大学ではこの点どのような工夫をされているのか知りたい。また他大学では科目担当者と学部の意見をどのようにすり合わせているのかお教え願いたい。

Q：アンケートはどれぐらいのサンプル数か？

A：複数クラスのみであった。サンプルは少ないが大方の傾向が見てとれる。

Q：大綱化以前と以後では、学習内容の到達目標に変化はあったか？

A：履修単位が実質減少しており、中級に相当する内容はなくなった。初級科目の内容は教員個人にゆだねられている。

Q：中級相当のものはどのように学ぶのか？

A：共通教育は最大8単位で、中級はない。学部の専門科目として開講されているのみ。
中国語は学部共通の中級相当の科目を独自に開講している。

②「共通教育中国語の現状と海外短期語学研修について」（発表要旨）

齋藤 匡史（山口大学経済学部 観光政策学科）

1. 共通教育中国語のカリキュラムと受講者について

共通教育において開設されている初修外国語は、独仏中韓の4カ国語である。開設科目については、各学部からの要望によってカリキュラムや履修形態が決まる。開講コマ数、開講曜日と時限、非常勤の必要数については、中国語分科会が責任を持っている。直近のカリキュラム改革では、半期2単位「中国語初歩」が開設され、週1回授業の「中国語入門」（4単位）、週2回授業の「中国語初級A、B」（8単位、A：日本人教員、B：中国人教員）と3種類の履修体系となった。運営上、時間割編成が一番苦勞する点である。時間割に初修外国語科目の枠が特に設定されておらず、前年度の履修状況参考にして、各学部が履修を科している1年次必修科目と重ならないように配置しなければならない。この情報は各学部や共通教育事務局から中国語分科会へ特に通知されないので、中国語の担当者が目配りをしなければならない。

2. 授業運営

中国語は履修希望が多いため、初回授業で抽選を行うことを周知しており、各クラスでの抽選は定着している。しかしながら、各クラスの初回授業で、一人一人抽選を行っている。ほぼ50クラスで1週間にわたり、抽選が繰り返され、抽選に漏れた履修希望者には、「履修相談日」を設けて対応に当たり、履修ができるよう指導を行っている。このクラス編成の仕方に改善の余地はないか苦慮している。

中国語入門、初級A、Bでは、それぞれ統一テキスト・シラバスで運営している。初級A、Bは、リレー形式の授業形態をとっているが、学生の所属クラスがまちまちであるため、教員同士の講義内容の連絡・連携は十分でなく、シラバスの進捗を信じて授業を進めてゆくしかない。また担当教員の個性の違いが授業進捗に影響し、往々にしてシラバスの目標であるテキスト全てを学習し終えるに至らない。

初級Aの学習内容の規範化を図るため、平成17年度から教員3名により編纂したテキスト『中国語スタンダード（文型・表現編）』を使用開始し、翌年度、姉妹版の『中国語スタンダード（コミュニケーション編）』を初級Bのクラスで使用開始した。

また、ことばの学習には、異文化理解、現代中国事情理解が欠かせないが、1回の授業時間に適した、既成の視聴覚教材は、極めて少なく、中国理解に役立つ教材の制作を模索中である。

3. 今後の課題

- ・中・上級レベルの授業を全学共通科目として履修できるような環境づくりを目指す。
- ・全学的な課題として、初修外国語の担当できる教員をこれ以上減員せず、非常勤講師も削減しないよう求める。
- ・中国語部会を機能させ、テキストや視聴覚教材の作成を独自に行う。また学生の現代中国理解を進めるためにプレゼン教材等を製作する。
- ・海外短期語学研修、中国留学のメリットをアピールしていく。

4. 海外短期語学研修

語学学習の動機付け、異文化理解の興味喚起には、実際にその言語環境に身を置き、生活、学習することが大きな効果を上げることは言うまでもない。中国語独自の短期派遣の企画をへて、大学教育

センターが交流協定大学への派遣が制度化された。

しかし、中国語研修の参加者は年度当たり全受講者の約 0.5%という低調ぶりであったため、国際センター所管の共通教育科目として「海外語学短期研修」として、平成 19 年度から中国語圏の学生交流協定を締結している大学への派遣とし、事前研修+実地学習で 4 単位を与えることとした。このほか山口大学から、研修終了後、数名に若干ではあるが奨励金が支給される。募集も制度化され、学期はじめに語学研修の全体説明会を実施し、各プログラムごとにも詳しい説明会を実施し、参加申し込み確定後、数回の渡航のための事前研修会がもたれ、航空券購入、保険加入、研修費支払い、事前課題、安全管理などの詳細の説明を行っている。

しかし、制度化、単位化されても、参加者が飛躍的に伸びるということがなかった。山東大学の研修企画は、参加者少数のため能力別のクラスが編成できなかったこと、さらに山口大学の学生のみで、各国の学生との交流の希望に添えなかったことが、参加者の増加を阻んでいたかもしれない。平成 20 年度春期に新企画として募集した北京師範大学の研修は、能力別クラス、各国学生混合クラスが実現したため、平成 21 年度の研修企画は、参加者の増加が見込まれよう。

平成 18 年度から、台湾国立中興大学の学生招聘企画「サマープログラム」が実施されている。これは中興大学が各国の大学生を招聘し、2 週間にわたり、中国語や中国文化に親しみ、小旅行なども組まれた企画である。参加者は日本からの往復航空交通費を負担するだけで、他の費用はすべて中興大学が負担するというものである。その結果、長期派遣交換留学先に、中興大学が浮上してきた。「短期」や「語学研修」と銘打つよりも、もう少し学生にとって気軽な 2 週間程度の「異文化体験」をまず先にとすることが必要かもしれないことをこの「サマープログラム」の事例が示しているかもしれない。

Q：短期語学研修の引率者の費用はどのようになっているのか？

A：教員、事務員ともに公費出張扱いである。研修先大学まで学生を送り届け、生活・学習環境が約束どおり行われるかを確認する。数日程度で引率者は帰還する。

Q：安全確保についてどのような対策がなされているのか？愛媛大学では「安全マニュアル」を作成しているが。

A：安全には十分注意を払っている。まず渡航について保護者の同意を求め、説明会で危機管理について繰り返し注意喚起している。また現地で研修する学生との連絡が必ず確保できるように努めている。

Q：短期語学研修の事前研修とは、どのような内容か？

A：7 回程度にわたり、現地研修の上で必要な、生活習慣などの知識、社会ルールをことばの学習をしながら学んでいくもの。

Q：1 単位 45 時間の実質化が初修外国語にも求められていることについて、例えば予習復習などどのように指導しているか。

A：特に意識して指導は行っていない。

Q：2 単位の授業で学習効果は上がるのか？

A：ことばの学習という面では不十分であるが、もともと 2 単位科目は異文化理解科目の発想であり、工夫次第で学生の興味は高まるのではないかと。

Q：(山口大学より) 各大学では、外国語授業担当者と各学部・学科との意見交換や授業科目の編成についてどのような仕組みになっているのかお教えいただきたい。

A：(広島大学) 総合科学部が全学共通の外国語教育の責任母体であり、同学部学務委員会が全学ルールを決めているので、時間割編成や科目設定に問題はない。(香川大学、岡山大学も全学組織で決定している)(島根大学) 外国語教育センターが全学共通科目の外国語教育の責を負っており、単位数などもセンターで決定している。(愛媛大学) 初修外国語は「自由化」されてしまった。(複数の参加者から)「初修外国語など必要ない」という意見に対し、英語だけでは国際交流に対応でき

ないし、交流協定大学に対し失礼であるという主張が必要。

6) 保健体育分科会

「大学体育における体育の位置づけ」(教育学部 上地 広昭)

本分科会では、愛媛大学(日野先生)および山口大学(丹先生)より、それぞれの大学における教養教育の中での「体育」の位置づけ、授業内容、カリキュラム構築、運営体制、施設整備などについて報告していただいた後、フロアから多くの質問・意見を受け非常に活発な議論が交わされた。また、本分科会に参加していただいた各大学の先生より、自身の大学における教養教育としての体育の位置づけや特色についても紹介していただいた(ただし、本報告書では紙面の都合上割愛した)。

①「初年次科目「スポーツ」における E-fit(愛媛大学版フィットネス・エクササイズ)による授業モデル開発」日野 克博(愛媛大学教育学部)

愛媛大学では、「スポーツ」(必修1単位)の位置づけを平成21年度より従来の「基礎科目」から「初年次科目」へと移した。この「スポーツ」の授業では、ライフスキルの向上を目指して、共通指導プログラム(愛媛大学版フィットネス・エクササイズ、通称 E-fit)を作成し、第6週目までは全クラス共通で実施している。E-fitの作成に際しては、「今あるものを活かす」ように心掛け、教育学生支援機構の協力を得て、「スポーツ」担当の全教員に対しヒアリングを行い、他大学(慶応義塾大学など)への視察も行った。E-fitには、ストレッチ、筋力トレーニング、コーディネーショントレーニングなど様々な種目を組み込んでおり、E-fitに対する学生の評価も非常に高い(9割以上が肯定的評価)。ただ、「面白い」「様々なスポーツを体験できた」など肯定的な意見が大多数であるものの、「物足りない」「メジャーなスポーツを行いたい」との意見もある。今後の課題として、「FDの推進(教員のコンセンサス)」、「単位の評価基準の統一」、「多様化する学生への対応」などに取り組みたい。

質問1 鳴門教育大学(木原先生): 共通指導プログラムを行うことに対する担当教員内のコンセンサスをどのようにまとめればいいのか? 「私にはできない」、「私の好きなようにやらせて欲しい」という教員に対する対応は?

回答 日野先生: たしかに、担当教員間に温度差はある。しかし、抵抗を示す教員に対しては、いま教育改革が叫ばれる中、「それでは外からの評価に耐えられない」、「何もしないわけにはいかない」ことを説明する(危機感を促す)。愛媛大学ではそれで一応の合意(賛同)を得ている。ただし、同時に、共通指導プログラムは授業全体ではなく部分的(前半だけ)に行い、ある程度は教員の裁量に任せる(柔軟性を持たせる)よう工夫も行っている。

質問2 香川大学(石川先生): 共通指導プログラムを行う場合、各教員のシラバスの書き方や評価方法についてはどのようになっているのか?

回答 日野先生: シラバスについては、教員間であらかじめある程度コンセンサスを持って書くようにしている。評価方法に関してはこれからの課題である。

質問3 川崎医療福祉大学(朱先生): 私の大学では、学生の質(体育授業中に他人と交流を持とうとしないなど)が落ちてきたが、どのように対応すればよいと思うか?

回答 日野先生: 私のところでは、まず、始めにレクリエーション、アイスブレイキングなどを行い、スムーズな導入を目指している。また、スポーツを手段として、他者との関係性を学ばせるよう心がけている。

質問4 山口大学(丹先生): E-fitに対して、非常勤の教員はどのように取り組んでいるのか?

回答 日野先生: 現在、私の大学の約4割は非常勤教員であり、現在大きな改革が行われていること

を事前に説明している（非常勤を引き受けてもらう際にそのことについて了承を得ている）。さらに非常勤への説明にも活用できる授業モデルの DVD を作成予定である。

質問5 山口大学（杉浦先生）：愛媛大学では、どのようにして「体育（E-fit）」に対する学生支援機構からの協力を得たのか？

回答 日野先生：学長を筆頭に執行部がスポーツに大変理解があり、そこに価値を置いている。また、こちらも、いかに執行部を味方につけるかを考え、「学生のため」であることを前面に出し、積極的に執行部に訴えてきた。

②「教養教育の GP（Graduation Policy）における保健体育領域の位置づけ」

丹信介（山口大学教育学部）

山口大学では、学部の Graduation Policy（GP：卒業認定）に加えて、教養教育における GP を定めている。教養教育の GP の中に、健康科学（健康で文化的な生活を営むために必要な基礎知識と方法を習得し、自らの生活の質を高めることができる）があり、この部分を「健康とスポーツ」分野（保健体育領域）が担っている。

本分野においては「スポーツ運動実習」および「運動健康科学」（両科目を学内常勤教員 11 名、非常勤教員 9 名で担当している）などの科目を開設しており、教養教育の GP の中に健康科学が入ったことにより、本分野は全学 1 単位以上の必修となった。それに伴い、「運動健康科学」については、2007 年度以前は全 15 回（半期）であったが、2008 年度より全 7 回（クォーター制）に変更した。「運動健康科学」の講義内容については、ある程度、各担当教員間のコンセンサスが得られており、「運動と健康（生活習慣病予防を含む）」、「健康づくりのための運動実践方法」などについて講義している。また、担当教員によっては、「身体活動・運動量や食生活の調査」、「ダイエット」、「運動生体反応」、「行動変容」などについても講義している。2008 度の「運動健康科学」に対する学生からの「満足度」は、前年度と比較しても高く、これは、講義回数を半分にしたことにより「内容がコンパクトになったこと」、「クラスの規模が小さくなったこと」がその原因として考えられるかもしれない。「スポーツ運動実習」の満足度に関する 2008 年と前年度との年度間の比較（講義回数減少前後の比較）では、大きな差は見られなかったが、全体的には肯定的な評価（「満足あるいはやや満足いくものであった」との回答が 8 割以上）が得られている。

質問1 岡山大学（鈴木先生）：「健康とスポーツ分野」には、体育の教員しか担当しないのか？「健康運動科学」や「スポーツ運動実習」の達成目標はどのようなものか？

回答 丹先生：主に教育学部の教員が担当しているが、いくつかの科目では医学部や農学部の教員も担当している。科目の達成目標については、教員間で統一されていないので各教員で独自に立てているのが現状である。

質問2 香川大学（石川先生）：「運動健康科学」がクォーター制になったようだが、学生は残りのクォーター（もしくは、前のクォーター）をどのように過ごしているのか？

回答 丹先生：現状では他にクォーター制の授業が少ないので、履修後（もしくは、履修前）は、学生の時間が空いている状態になっている。

7) 日本語・日本事情分科会

「『留学生30万人計画』に対応する留学生教育」（留学生センター 中溝 朋子）

①「日本語・日本事情テキストの作成について」発表者：林 伸一（山口大学人文学部）

《発表内容》

1994 年より山口県のボランティア日本語教室のために作成された『おいでませ山口（旧題名：山口

で学ぶ日本語』の開発・改訂の状況、教科書の特徴（マインド・マップの使用等）・内容の分析・紹介（採用語彙・方言等）、今後の課題（生活言語から学習言語へ・山口事情から山大事務へ）についての発表があった。

《質疑応答》

質疑応答では、改訂の回数、同テキストの現在の利用状況、マインドマップの語彙選定の方法等について質問があった。改訂については、現在14年間で14回と多く改訂がされているが、山口事情というセクションに掲載されている内容の更新が必要であること、テキストは、県内各地の県国際交流協会が認可したボランティア団体6団体中5団体で、主に山大留学生の同伴家族、ALT、日本人の配偶者、技術研修生等を対象に使用されていること、マインドマップのいくつかの例（上位概念やその下位概念の例）・使用方法について回答があった。

② 「LOLを取り入れた『やまぐち地域遺産スタディーズ』の構築を目指して」

発表者：シャルコス・ロバート（山口県立大学国際文化学部）

《発表内容》

文科省のGPにも採用された標記の実践について、8年に渡る実施・改善の経緯（英語で開講される科目の数と内容の充実等）、現在のカリキュラム（4つの科目群）、中でも山口にスポットを当てた「やまぐちスタディーズ」の概要、およびその中で取り上げられているLOL(Learn on Location)の考え方や授業での具体的な実践方法、今後の課題（予算の確保、外部講師との連携、教材開発等）と展望について具体的な発表があった。

《質疑応答》

質疑応答では、留学生および受講者の出身地域の内訳、授業を担当する教員の英語力、今後の予算の計画、外部研修の時間の設定方法等について質問があった。留学生の内訳は、正規留学生はアジア圏が圧倒的に多く、欧米からの留学生は短期の交換留学生が主で、昨年度は15名であった。ただ海外留学を希望する日本人学生は主に欧米圏を希望しており、送り出しを可能とするための受け入れの充実が課題であった。今年度は当該授業の受講生の約半数は日本人学生である（計約24名）。また英語で授業ができない教員には発表者が通訳をする場合もあるが、3年前より授業担当者を対象に英語による授業の仕方、シラバスの書き方などのFD研修を行い、LOLも経験してもらっている。予算については、このプログラムの学内的なコンセンサスは得ているが、位置づけなど検討中の部分もあり、近日中に回答が出る予定である。外部研修は15時間を想定し、金の午後および土日に実施している。研修の予定を伝えた上で受講させているため、今のところは研修に出席できないなどの問題はないとの回答があった。また同様の日本事情の授業や外部研修を伴う授業を実施している大学より取り組みの紹介や抱えている問題点等についてのコメントがあった。

③ 「コンピュータを利用した日本語教育の実践」発表者：赤木彌生、中園博美、中溝朋子（山口大学大学教育機構留学生センター、島根大学外国語センター、山口大学大学教育機構留学生センター）

《発表内容》

山口大学が島根大学等と共同開発し、使用しているJ-CAT（日本語コンピュータ・アダプティブ・テスト）について、その概要や特徴、理論的背景、使用状況の紹介、評価、結果の分析例、今後の課題（受験時の不具合の解消、動画を用いた問題作成の試み等）の発表があった。後半は、現在開発、試行中の日本語初級学習のためのe-learning教材の概要と内容の紹介（渡日前・渡日後日本語初級教材）、とその使用状況等について発表があった。

《質疑応答》

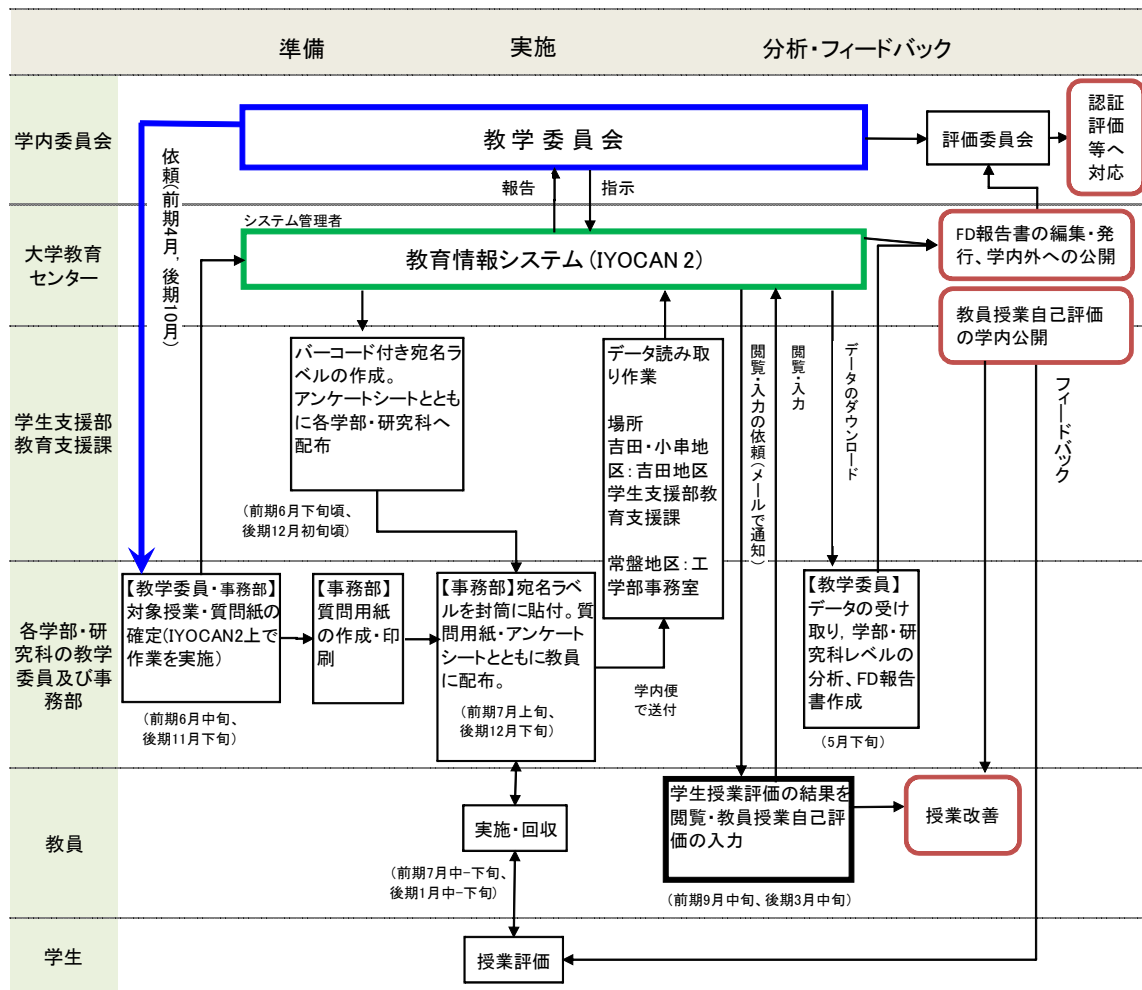
質疑応答では、e-learning 教材は学外の学習者も利用可能であるか、e-learning 教材開発に具体的に携わっているのは誰か等の質問があった。学外者の利用については、現在、e-learning 教材が他の授業の教材同様、山口大学メディア基盤センターの Moodle 専用サーバ上にあり、同センターが学習者の管理を一括して行っているため、学外者は使用できないこと、e-learning 教材開発についてはまだ開発が始まって間もなく、メディア基盤センターより技術的な支援は受けているほか、学生アルバイトが作成作業に参加し、教員は発表者 1 人であるとの回答があった。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

1. 実施方法

(1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員はWeb上で結果の

確認と自己評価を行っている。なお、今年度の改善点は新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動を実現した点である。これにより、修学支援システム上の様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

●授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



(2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

●医学部医学科 医学教育総合電子システム

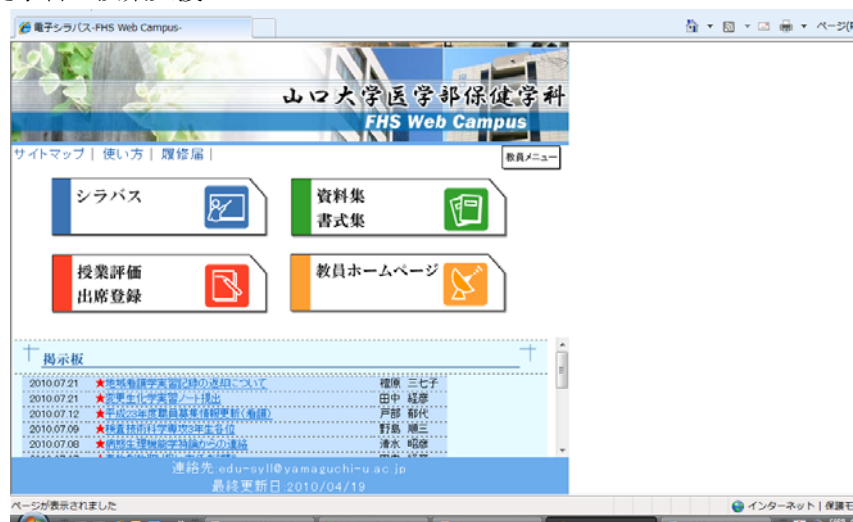


(3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が

登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

●医学部保健学科 授業支援システム



2. 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようにになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用 もしくは TOEIC 準備用
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

3. 質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習(予習・復習・宿題や関連した学習)を行いましたか? 授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか?
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか?(講義、語学、TOEIC 準備)、内容理解や技能のレベルは向上しましたか?(演習、実験・実習)
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか?
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか?

4. 実施対象授業

(1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例: 教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項 (H17ー)

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が5名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

(2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法（H18ー）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法（H18ー）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28.授業実施上の工夫】（10項目）は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

5. 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web 上での閲覧システムの導入が共通教育は平成 16 年度から、また専門教育は平成 17 年度から導入された(医学部医学科は平成 13 年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web 上では過去の評価結果も閲覧でき、PDF でダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が 5 人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前にまず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

6. 学生への結果のフィードバックについて

平成 18 年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】を Web 上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



第2節 授業評価の結果について（全学）

1. 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている表は教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価の実施率である。

学生授業評価の実施率は次のように計算されている。まず、「開設科目(B)」とはすべての開設科目のうち学生授業評価を実施した授業数の割合である。また、「対象科目(C)」とは開設科目(B)から実施対象外(例えば卒論など)の授業を除いた場合の科目数と実施率を示している。さらに「履修登録者ありの科目(D)」とは今年度に履修登録者がいた科目数と実施率を示している。以上の3つの数字の最大値、つまり「学生授業評価の対象科目のうち履修登録者がいなかった科目を除いた実施率」が計算されている。2009年度の場合、次頁の上表の右端に示された数字がこの実施率となる。

ただし、ここには医学部や人文科学・農学研究科といった IYOCAN を利用せず別の方法で学生授業評価を実施している学部・研究科の数字が含まれていない。そこでさらに次表「学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化、2010年6月15日現在)」を作成した。これを見ると、16学部・研究科のうち、最も学生授業評価の実施率が高かったのは技術経営研究科の100%であり、最も低かったのは医学系研究科の51.5%であった。また、昨年度より上昇した学部・研究科は5、変化なしは3、低下は8であり、低下したものが多い。特に医学系研究科(64.4%→51.5%)、教育学研究科(88.5%→73.1%)では1割以上低下しており、工学部(90.6%→82.1%)、農学部(93.0%→83.9%)も1割近く低下している。教学委員会では、大幅な低下がみられた学部・研究科に対して実施率向上に向けた取り組みを依頼した。

2. 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価については医学部保健学科を除くすべての学部・学科で実施された。次頁の下表は IYOCAN で処理された教員授業自己評価の実施率である。計算方法は基本的に上記の学生授業評価と同じであるが、大学院研究科の「対象科目(C)」の部分のみ計算方法が異なっている。これは、大

学院ではすべての授業で教員授業自己評価を実施することになっており、「開設科目(B)」＝「対象科目(C)」となるためである。例えば「修士論文」といった科目についても教員授業自己評価を実施することになっている。

この表に医学部の情報を入れたものが次表「学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧（経年変化、2010年6月15日現在）の右側の表である。2009年度の場合、教員授業自己評価の実施率は理学部の67.5%が最も高く、大学院技術経営研究科の15.2%が最も低かった。15学部・大学院のうち昨年より上昇したのは3、変化なし0、低下12、とほとんどの学部・研究科で割合が低下している。2008年度は2007年度よりも上昇した学部・研究科の方が多かったが、今回は低下した学部・研究科が多い。この理由の一つに時期の遅延が挙げられる。2009年度はIYOCANの旧システムから新システムに移行を行ったため、前期の授業評価の閲覧・時期が大幅に遅れ、後期分と同時に実施せざるを得なかった。また、後期分と同時に実施とはいっても、前期・後期分を一括して表示できるシステムとはなっていないため、前期分のを忘れた教員も多かったことが推察される。よって、来年度はIYOCAN2への移行が完成するため実施率は改善されると予想される。

2009年度 学生授業評価・教員授業自己評価 実施率 (IYOCANより)

2009年度 学生授業評価アンケート実施状況(前期・後期)														
部局名(コード)	全教(A)	開設科目(B)	対象科目(C)	履修登録者ありの科目(D)	B & C	B & D	C & D	B & C & D	実施率最大					
	実施数	実施数	実施数	実施数	実施数	実施数	実施数	実施数	実施率	実施数	実施率	実施数	実施率	
C A B O S 登録科目														
教育学部(071)	771	590	771	590	765	748	590	78.9	661	549	83.1	643	549	85.4
人文学部(101)	767	315	767	315	41.1	372	314	84.4	597	301	50.4	347	300	86.5
経済学部(171)	322	161	322	161	50	186	161	86.6	296	160	54.1	182	160	87.9
理学部(221)	249	163	249	163	65.5	173	163	94.2	214	160	74.8	169	160	94.7
工学部(251)	527	369	527	369	70	476	369	77.5	460	363	78.9	442	363	82.1
農学部(341)	289	117	289	117	40.5	140	115	82.1	174	106	60.9	124	104	83.9
共通教育(Y11)	1051	916	1051	916	87.2	1044	909	87.1	992	895	90.2	985	888	90.2
大学院教育学研究科(修士課程)(072)	236	125	236	125	53	235	125	53.2	145	106	73.1	145	106	73.1
大学院経済学研究科(修士課程)(172)	195	40	195	40	20.5	89	40	44.9	120	37	30.8	76	37	48.7
大学院理工学研究科(博士前期)(273)	287	153	287	153	53.3	216	153	70.8	245	151	61.6	212	151	71.2
大学院医学系研究科(博士前期)(703)	151	52	151	52	34.4	116	52	44.8	121	51	42.1	99	51	51.5
大学院技術経営研究科(808)	34	32	34	32	94.1	33	32	97	33	32	97	32	32	100
2009年度 教員授業評価アンケート実施状況(前期・後期)														
C A B O S 登録科目														
教育学部(071)	771	371	771	371	48.1	749	370	49.4	661	336	50.8	643	335	52.1
人文学部(101)	767	238	767	238	31	373	181	48.5	597	205	34.3	347	168	48.4
経済学部(171)	322	77	322	77	23.9	186	58	31.2	296	74	25	182	57	31.3
理学部(221)	249	120	249	120	48.2	173	115	66.5	214	117	54.7	169	114	67.5
工学部(251)	527	95	527	95	18	476	95	20	460	94	20.4	442	94	21.3
農学部(341)	289	88	289	88	30.4	142	76	53.5	174	71	40.8	126	69	54.8
共通教育(Y11)	1051	359	1051	359	34.2	1051	359	34.2	992	341	34.4	992	341	34.4
大学院人文科学研究科(修士課程)(102)	193	22	193	22	11.4	192	21	10.9	66	15	22.7	66	15	22.7
大学院教育学研究科(修士課程)(072)	236	70	236	70	29.7	236	70	29.7	145	57	39.3	145	57	39.3
大学院経済学研究科(修士課程)(172)	195	75	195	75	38.5	195	75	38.5	120	59	49.2	120	59	49.2
大学院理工学研究科(博士前期)(273)	287	62	287	62	21.6	287	62	21.6	245	62	25.3	245	62	25.3
大学院農学研究科(修士課程)(342)	149	50	149	50	33.6	147	50	34	45	19	42.2	45	19	42.2
大学院医学系研究科(博士前期)(703)	151	37	151	37	24.5	151	37	24.5	121	32	26.4	121	32	26.4
大学院技術経営研究科(808)	34	5	34	5	14.7	34	5	14.7	33	5	15.2	33	5	15.2

学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2010.6.15 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	対象外の授業
I Y O C A N	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	なし
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	卒業論文演習、演習I・IIを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	特別研究、集中講義、一部の実習等を除く
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く
	農学部	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	授業評価の必要なものに限定

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	対象外の授業
I Y O C A N	39.1%	43.6%	34.4%	なし
	49.7%	68.8%	48.5%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	52.1%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	31.3%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	67.5%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	21.3%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	54.8%	学生授業評価と同じ
独自	—	—	83.3%	なし
独自	—	—	—	—

<大学院>学生授業評価

データベース		学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	対象外の授業
I Y O C A N	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	学外特別演習、特別講義、演習等を除く
	技術経営研究科	—	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	なし
	医学系研究科	—	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	特別研究除く
	教育学研究科	—	—	—	88.5%	73.1%	授業形態・規模等を考慮して決定
	経済学研究科	—	—	—	54.3%	48.7%	授業形態・規模等を考慮して決定
独自	人文科学研究科	—	—	—	24.1%	35.3%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。
独自	農学研究科	—	—	—	28.6%	54.6%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	対象外の授業
I Y O C A N	36.9%	33.1%	25.3%	なし
	56.3%	29.4%	15.2%	〃
	53.5%	28.8%	26.4%	〃
	22.4%	38.0%	39.3%	〃
	36.5%	58.1%	49.2%	〃
	27.3%	38.0%	22.7%	〃
	48.8%	70.8%	42.2%	〃

※理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除く

回答数									
	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教	語学(農学部	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	32,922		4,425	2,590			25		39,962
共通教育(2006)	34,504		3,701	2,682					40,887
共通教育(2007)	33,743		3,657	2,491			9		39,900
共通教育(2008)	41,399			1,544			998		43,941
共通教育(2009)	28,988			2,147	9,512				40,647
人文(2005)	5,519	567	998	15					7,099
人文(2006)	4,977	568	1,042						6,587
人文(2007)	5,017	531	1,117						6,665
人文(2008)	4,927	626	1,368						6,921
人文(2009)	4,852	564	1,212						6,628
教育学部(2005)	7,607	97	817	714			2,679		11,914
教育学部(2006)	8,268	76	1,002	762			2,920		13,028
教育学部(2007)	8,325	68	894	811			2,794		12,892
教育学部(2008)	8,167		712	635			2,501		12,015
教育学部(2009)	7,404		859	599			2,726		11,588
経済(2005)	7,657						14		7,671
経済(2006)	10,057								10,057
経済(2007)	10,627								10,627
経済(2008)	10,454								10,454
経済(2009)	9,316								9,316
理(2005)	5,431		1,159	458					7,048
理(2006)	5,329		860	550			167		6,906
理(2007)	5,132		428	577			400		6,537
理(2008)	4,599		469	433			442		5,943
理(2009)	4,457		389	383					5,229
工(昼)(2005)	14,807		1,391	1,526			1,346		19,070
工(昼)(2006)	14,128		1,639	1,464			1,312		18,543
工(昼)(2007)	13,920		1,532	1,432			1,264		18,148
工(昼)(2008)	14,301		1,243	1,981			1,462		18,987
工(昼)(2009)	14,667		1,643	1,981					18,291
農(2005)	3,473		325	1,083					4,881
農(2006)	3,483		252	1,051					4,786
農(2007)	3,753		365	1,023					5,141
農(2008)	3,691		268	1,082					5,041
農(2009)	3,198		204	757					4,159
大学院・理工(2005)	3,344		29				24		3,397
大学院・理工(2006)	2,653								2,653
大学院・理工(2007)	3,062		118						3,180
大学院・理工(2008)	5,442		140						5,582
大学院・理工(2009)									
大学院・技術経営(2005)	167		49						216
大学院・技術経営(2006)	247		67						314
大学院・技術経営(2007)	371		57						428
大学院・技術経営(2008)	315		67						382
大学院・技術経営(2009)								356	356
大学院・医学系(2006)	92		37						129
大学院・医学系(2007)	213		150						363
大学院・医学系(2008)	234		108						343
大学院・医学系(2009)	350		24						374
大学院・教育学(2008)	208		83	38			112		441
大学院・教育学(2009)	247		104	26			128		505
大学院・経済学(2008)	187								187
大学院・経済学(2009)	146		4						150
合計(2005)	82,321	664	9,262	6,557			4,295		103,099
合計(2006)	84,730	644	8,661	6,606			4,492		105,133
合計(2007)	84,747	599	8,332	6,398			4,488		104,564
合計(2008)	94,033	626	4,470	5,728			5,515		110,373
合計(2009)	75,898	564	4,558	5,904	9,512		2,854	356	99,646

3. 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

（1）共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、学部段階では2009年度の平均値データは2008年度の平均値をすべての学部で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びているとことがわかる。

しかし、大学院では技術経営研究科は3.25→3.69と伸び、過去最高の平均値を記録しているが、他の研究科はすべて低下している。特に医学系研究科は2006年から一貫して低下し続けており、授業外学習時間の減少が懸念される。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

（2）共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほぼ全ての学部で平均値が上昇している。人文学部が0.03ポイントわずかに低下しているが、そのほかは軒並み上昇している。特に、今年度から修学支援システムが新たに導入され、授業の登録時にシラバスをweb上で読んでいる学生が増えていると考えられ、授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとならないのでは大きな差がでる。新システムの導入が

学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとなれば喜ばしいことである。

(3) 共通質問項目 3 「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目 3 は授業の理解のレベルについて尋ねた設問である。

全体平均では 5 つの学部・研究科で昨年度より低下したが、最も低い工学は 3.55 と 4 年連続で上昇しており、最も高い経済学研究科では 4.84 から 4.32 に低下したものの依然として非常に高い水準にある。これは経済学研究科の授業がほとんど 10 名以下の少人数で行われており、質の高い授業が実施できているためであると考えられる。

(4) 共通質問項目 4 「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目 4 は授業の満足度について尋ねた設問である。全体的にみて、約半数の学部・研究科で平均値が低下している。昨年度はほぼすべての学部・研究科で上昇していたが、今年度はさらに前年度を上回ったものもあれば、大きく下回ったものもあり若干ばらつきがあった。特に人文学部は昨年度は大きく上昇したが、今年度は非常に大きく低下している。この理由は定かではないが、学生からの意見聴取を行い、低下に影響を与えている理由を究明することが必要であろう。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目 5 「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？ (括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値)

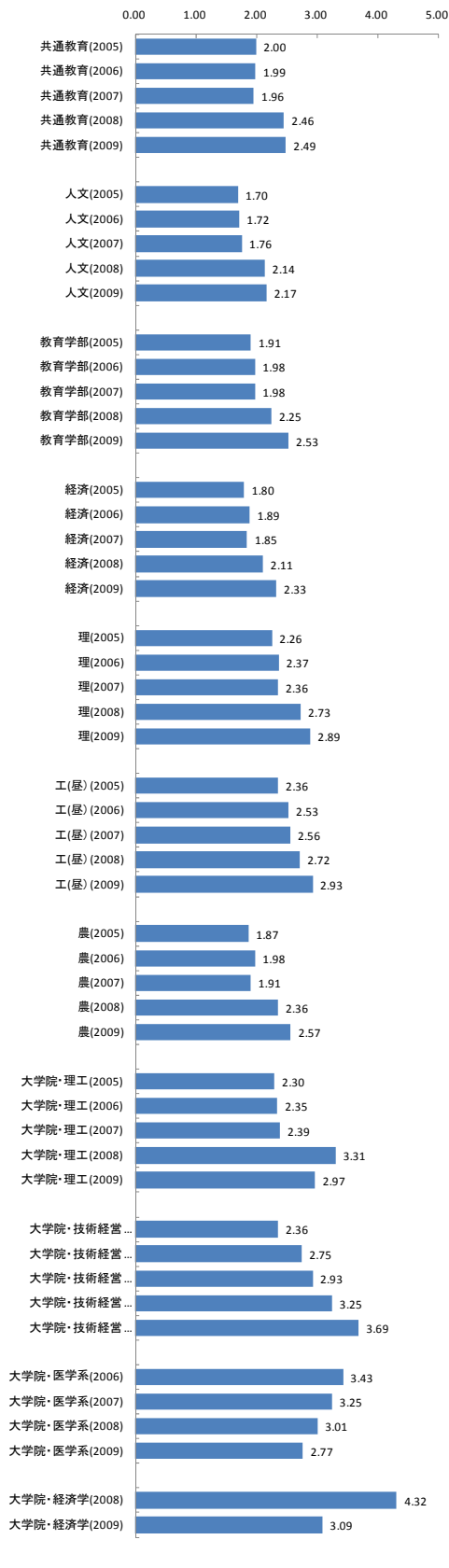
1. 90%以上 (14 回以上) 2. 80~90% (12~13 回) 3. 60~80% (9~11 回)
4. 40~60% (6~8 回) 5. 40%未満 (6 回未満)

共通質問項目 5 は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢 1 の 90%以上を 5 点、選択肢 5 の 40%未満を 1 として計算を行った。例年どおり、多くの学部で 4.5 以上の高い平均値となっている。昨年度より若干下がった学部・研究科もあるが、全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

<全学共通質問項目 1 授業外学習時間>

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	1.95		2.00	2.62			0.44		2.00
共通教育(2006)	1.93		2.04	2.71					1.99
共通教育(2007)	1.88		2.09	2.79			1.89		1.96
共通教育(2008)	2.42			4.26			1.70		2.46
共通教育(2009)	2.29			3.07	2.97				2.49
人文(2005)	1.44	2.67	2.54	2.33					1.70
人文(2006)	1.38	2.89	2.70						1.72
人文(2007)	1.48	2.75	2.53						1.76
人文(2008)	1.80	3.04	2.95						2.14
人文(2009)	1.80	3.26	3.13						2.17
教育学部(2005)	1.65	1.74	2.57	2.66			3.50		1.91
教育学部(2006)	1.73	1.61	2.51	2.75			2.13		1.98
教育学部(2007)	1.74	1.66	2.57	2.87			2.10		1.98
教育学部(2008)	2.05		3.11	3.15			2.13		2.25
教育学部(2009)	2.32		3.25	3.31			2.68		2.53
経済(2005)	1.80						2.93		1.80
経済(2006)	1.89								1.89
経済(2007)	1.85								1.85
経済(2008)	2.11								2.11
経済(2009)	2.33								2.33
理(2005)	2.08		2.66	3.32					2.26
理(2006)	2.16		2.96	3.39					2.37
理(2007)	2.19		3.32	3.27					2.36
理(2008)	2.55		3.33	3.82					2.73
理(2009)	2.79		3.17	3.84					2.89
工(昼)(2005)	2.17		3.07	3.84			1.78		2.36
工(昼)(2006)	2.37		3.05	3.70			2.65		2.53
工(昼)(2007)	2.43		2.91	3.73			2.34		2.56
工(昼)(2008)	2.52		3.19	3.87			2.22		2.72
工(昼)(2009)	2.76		3.31	3.91					2.93
農(2005)	1.75		2.22	2.16					1.87
農(2006)	1.83		2.49	2.35					1.98
農(2007)	1.78		2.34	2.22					1.91
農(2008)	2.21		3.48	2.59					2.36
農(2009)	2.44		3.31	2.92					2.57
大学院・理工(2005)	2.29		3.24				2.50		2.30
大学院・理工(2006)	2.35								2.35
大学院・理工(2007)	2.36		3.08						2.39
大学院・理工(2008)	3.29		3.94						3.31
大学院・理工(2009)	2.95		3.39	2.45					2.97
大学院・技術経営(2005)	2.19		2.92						2.36
大学院・技術経営(2006)	2.58		3.39						2.75
大学院・技術経営(2007)	2.92		3.02						2.93
大学院・技術経営(2008)	3.15		3.71						3.25
大学院・技術経営(2009)								3.69	3.69
大学院・医学系(2006)	3.40		3.51						3.43
大学院・医学系(2007)	2.97		3.65						3.25
大学院・医学系(2008)	2.90		3.24						3.01
大学院・医学系(2009)	2.67		4.13						2.77
大学院・経済学(2008)	4.32								4.32
大学院・経済学(2009)	3.09								3.09

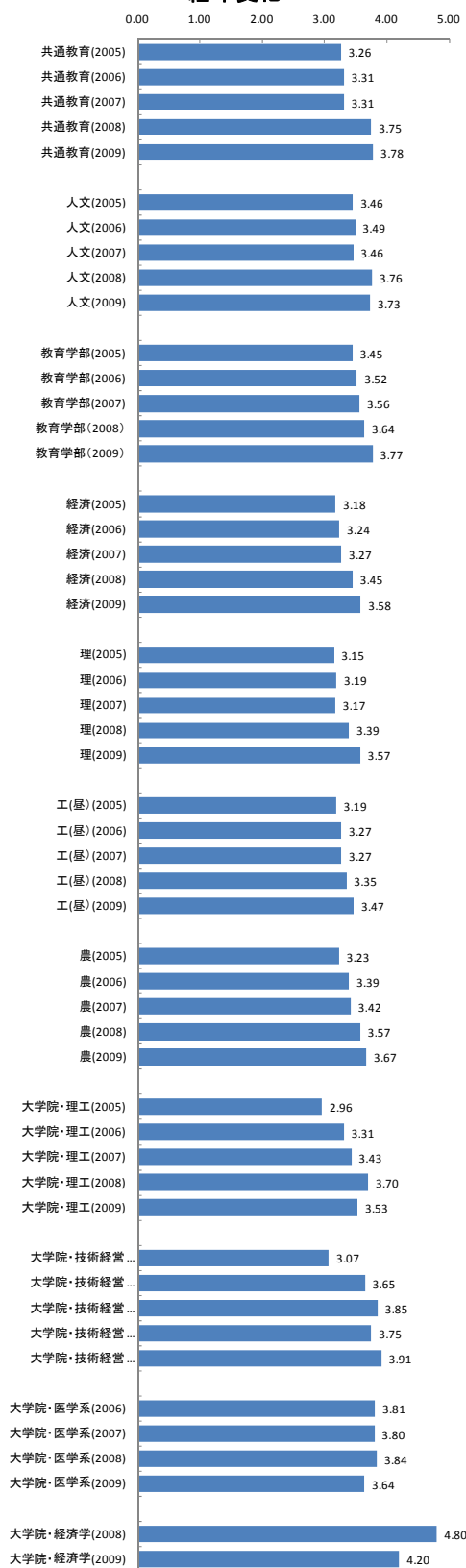
授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



<全学共通質問項目 2 学習目標達成>

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.22		3.38	3.69			1.96		3.26
共通教育(2006)	3.27		3.40	3.70					3.31
共通教育(2007)	3.27		3.37	3.69			3.78		3.31
共通教育(2008)	3.72			4.12			4.21		3.75
共通教育(2009)	3.73			4.13	3.87				3.78
人文(2005)	3.39	3.64	3.72	3.47					3.46
人文(2006)	3.40	3.78	3.76						3.49
人文(2007)	3.37	3.75	3.76						3.46
人文(2008)	3.73	3.81	3.75						3.76
人文(2009)	3.66	3.91	3.93						3.73
教育学部(2005)	3.42	2.94	3.74	3.54			3.04		3.45
教育学部(2006)	3.45	3.07	3.86	3.73			3.47		3.52
教育学部(2007)	3.49	3.16	3.76	3.85			3.43		3.56
教育学部(2008)	3.60		3.84	3.95			3.63		3.64
教育学部(2009)	3.70		3.97	4.05			3.82		3.77
経済(2005)	3.17						3.86		3.18
経済(2006)	3.24								3.24
経済(2007)	3.27								3.27
経済(2008)	3.45								3.45
経済(2009)	3.58								3.58
理(2005)	3.11		3.17	3.56					3.15
理(2006)	3.14		3.32	3.48					3.19
理(2007)	3.12		3.45	3.51					3.17
理(2008)	3.32		3.77	3.78					3.39
理(2009)	3.53		3.71	3.95					3.57
工(昼)(2005)	3.15		3.45	3.54			3.71		3.19
工(昼)(2006)	3.24		3.38	3.50			3.35		3.27
工(昼)(2007)	3.25		3.35	3.48			3.25		3.27
工(昼)(2008)	3.28		3.52	3.62			3.35		3.35
工(昼)(2009)	3.44		3.60	3.62					3.47
農(2005)	3.15		3.16	3.50					3.23
農(2006)	3.31		3.45	3.61					3.39
農(2007)	3.34		3.72	3.60					3.42
農(2008)	3.47		3.95	3.83					3.57
農(2009)	3.63		3.90	3.80					3.67
大学院・理工(2005)	3.12		3.38				3.38		2.96
大学院・理工(2006)	3.31								3.31
大学院・理工(2007)	3.41		3.86						3.43
大学院・理工(2008)	3.70		3.62						3.70
大学院・理工(2009)	3.52		3.78	3.36					3.53
大学院・技術経営(2005)	3.08		3.06						3.07
大学院・技術経営(2006)	3.62		3.76						3.65
大学院・技術経営(2007)	3.85		3.86						3.85
大学院・技術経営(2008)	3.72		3.85						3.75
大学院・技術経営(2009)								3.91	3.91
大学院・医学系(2006)	3.92		3.54						3.81
大学院・医学系(2007)	3.76		3.86						3.80
大学院・医学系(2008)	3.81		3.90						3.84
大学院・医学系(2009)	3.62		3.96						3.64
大学院・経済学(2008)	4.80								4.80
大学院・経済学(2009)	4.20								4.20

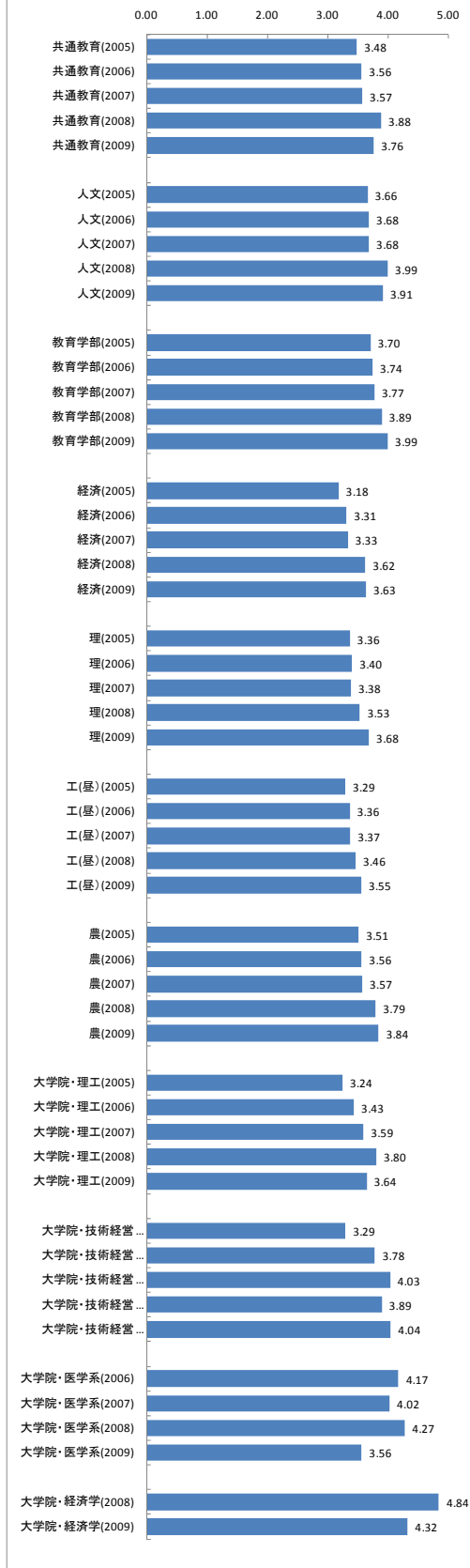
学習目標達成(全体平均)
一経年変化一



<全学共通質問項目 3 理解>

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.42		3.68	3.84			2.56		3.48
共通教育(2006)	3.50		3.78	3.93					3.56
共通教育(2007)	3.52		3.77	3.96			4.33		3.57
共通教育(2008)	3.85			4.15			4.52		3.88
共通教育(2009)	3.89			2.14	4.12				3.76
人文(2005)	3.58	3.89	3.92	4.07					3.66
人文(2006)	3.58	4.02	3.98						3.68
人文(2007)	3.57	3.95	4.02						3.68
人文(2008)	3.84	4.09	4.03						3.99
人文(2009)	3.84	4.07	4.14						3.91
教育学部(2005)	3.69	3.27	3.97	3.84			3.71		3.70
教育学部(2006)	3.68	3.29	4.06	4.01			3.70		3.74
教育学部(2007)	3.72	3.32	3.95	4.07			3.62		3.77
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	3.94		4.21	4.26			4.01		3.99
経済(2005)	3.17						4.71		3.18
経済(2006)	3.31								3.31
経済(2007)	3.33								3.33
経済(2008)	3.62								3.62
経済(2009)	3.63								3.63
理(2005)	3.32		3.39	3.81					3.36
理(2006)	3.35		3.62	3.85					3.40
理(2007)	3.34		3.74	3.76					3.38
理(2008)	3.47		3.89	3.91					3.53
理(2009)	3.63		3.89	4.05					3.68
工(昼)(2005)	3.24		3.64	3.70			3.41		3.29
工(昼)(2006)	3.30		3.56	3.68			3.29		3.36
工(昼)(2007)	3.31		3.56	3.72			3.34		3.37
工(昼)(2008)	3.40		3.57	3.69			3.59		3.46
工(昼)(2009)	3.51		3.72	3.71					3.55
農(2005)	3.36		3.68	3.92					3.51
農(2006)	3.43		3.87	3.94					3.56
農(2007)	3.42		4.16	3.91					3.57
農(2008)	3.66		4.55	4.08					3.79
農(2009)	3.76		4.47	4.01					3.84
大学院・理工(2005)	3.24		3.41				3.58		3.24
大学院・理工(2006)	3.43								3.43
大学院・理工(2007)	3.57		4.14						3.59
大学院・理工(2008)	3.80		3.91						3.80
大学院・理工(2009)	3.63		3.87	3.27					3.64
大学院・技術経営(2005)	3.28		3.33						3.29
大学院・技術経営(2006)	3.74		3.94						3.78
大学院・技術経営(2007)	4.03		4.02						4.03
大学院・技術経営(2008)	3.84		4.14						3.89
大学院・技術経営(2009)								4.04	4.04
大学院・医学系(2006)	4.21		4.08						4.17
大学院・医学系(2007)	3.92		4.16						4.02
大学院・医学系(2008)	4.23		4.36						4.27
大学院・医学系(2009)	3.75		2.17						3.56
大学院・経済学(2008)	4.84								4.84
大学院・経済学(2009)	4.32								4.32

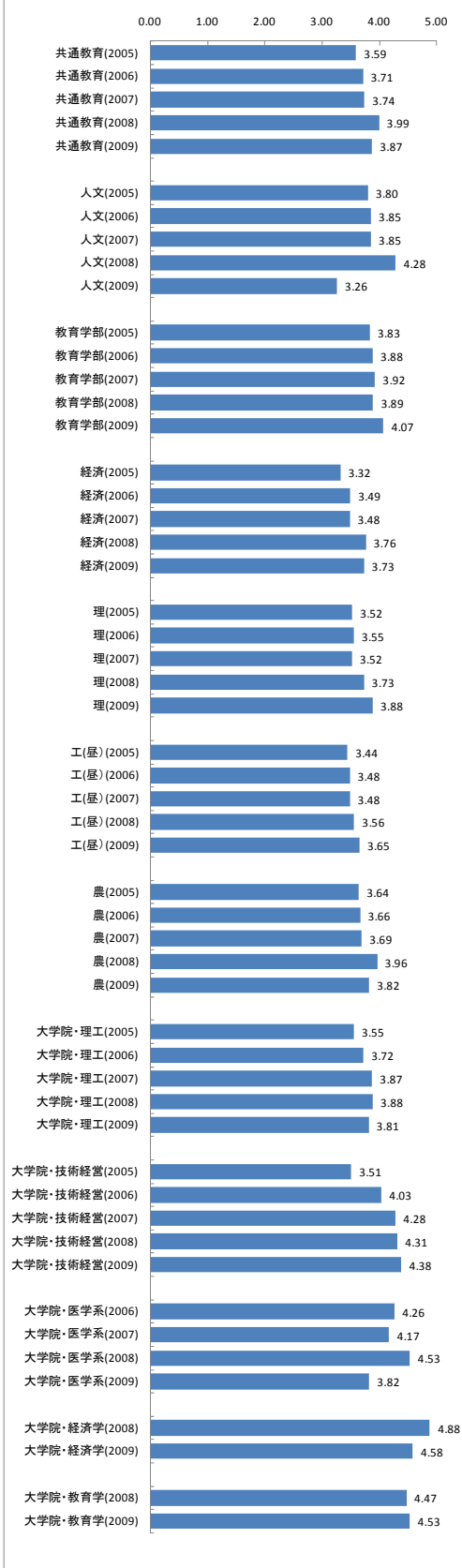
理解(全体平均) — 経年変化 —



<全学共通質問項目 4 満足>

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.57		3.60	3.93			2.40		3.59
共通教育(2006)	3.69		3.69	4.05					3.71
共通教育(2007)	3.72		3.75	4.07			4.33		3.74
共通教育(2008)	3.97			4.26			4.60		3.99
共通教育(2009)	3.97			1.87	4.18				3.87
人文(2005)	3.72	4.06	4.08	3.93					3.80
人文(2006)	3.74	4.22	4.13						3.85
人文(2007)	3.75	4.21	4.12						3.85
人文(2008)	4.22	4.50	4.39						4.28
人文(2009)	4.05	2.23	2.16						3.26
教育学部(2005)	3.79	3.42	4.19	3.97			4.54		3.83
教育学部(2006)	3.82	3.49	4.27	4.17			3.82		3.88
教育学部(2007)	3.87	3.51	4.16	4.27			3.70		3.92
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	4.02		4.38	4.34			4.06		4.07
経済(2005)	3.32						4.43		3.32
経済(2006)	3.49								3.49
経済(2007)	3.48								3.48
経済(2008)	3.76								3.76
経済(2009)	3.73								3.73
理(2005)	3.48		3.57	3.91					3.52
理(2006)	3.52		3.62	3.85					3.55
理(2007)	3.48		3.95	3.78					3.52
理(2008)	3.68		3.99	4.05					3.73
理(2009)	3.84		3.94	4.23					3.88
工(昼)(2005)	3.42		3.68	3.68			3.94		3.44
工(昼)(2006)	3.44		3.60	3.69			3.31		3.48
工(昼)(2007)	3.46		3.58	3.62			3.55		3.48
工(昼)(2008)	3.51		3.68	3.79			3.71		3.56
工(昼)(2009)	3.61		3.84	3.79					3.65
農(2005)	3.61		3.18	3.86					3.64
農(2006)	3.63		2.92	3.94					3.66
農(2007)	3.65		3.47	3.91					3.69
農(2008)	3.84		4.49	4.25					3.96
農(2009)	3.73		4.39	4.07					3.82
大学院・理工(2005)	3.55		3.97				3.75		3.55
大学院・理工(2006)	3.72								3.72
大学院・理工(2007)	3.85		4.31						3.87
大学院・理工(2008)	3.88		3.76						3.88
大学院・理工(2009)	3.80		4.20	3.45					3.81
大学院・技術経営(2005)	3.54		3.43						3.51
大学院・技術経営(2006)	4.00		4.13						4.03
大学院・技術経営(2007)	4.29		4.19						4.28
大学院・技術経営(2008)	4.27		4.53						4.31
大学院・技術経営(2009)								4.38	4.38
大学院・医学系(2006)	4.36		4.03						4.26
大学院・医学系(2007)	4.05		4.34						4.17
大学院・医学系(2008)	4.52		4.56						4.53
大学院・医学系(2009)	4.05		2.08						3.82
大学院・経済学(2008)	4.88								4.88
大学院・経済学(2009)	4.58								4.58
大学院・教育学(2008)	4.37		4.64	4.63					4.47
大学院・教育学(2009)	4.46		4.79	4.31			4.50		4.53

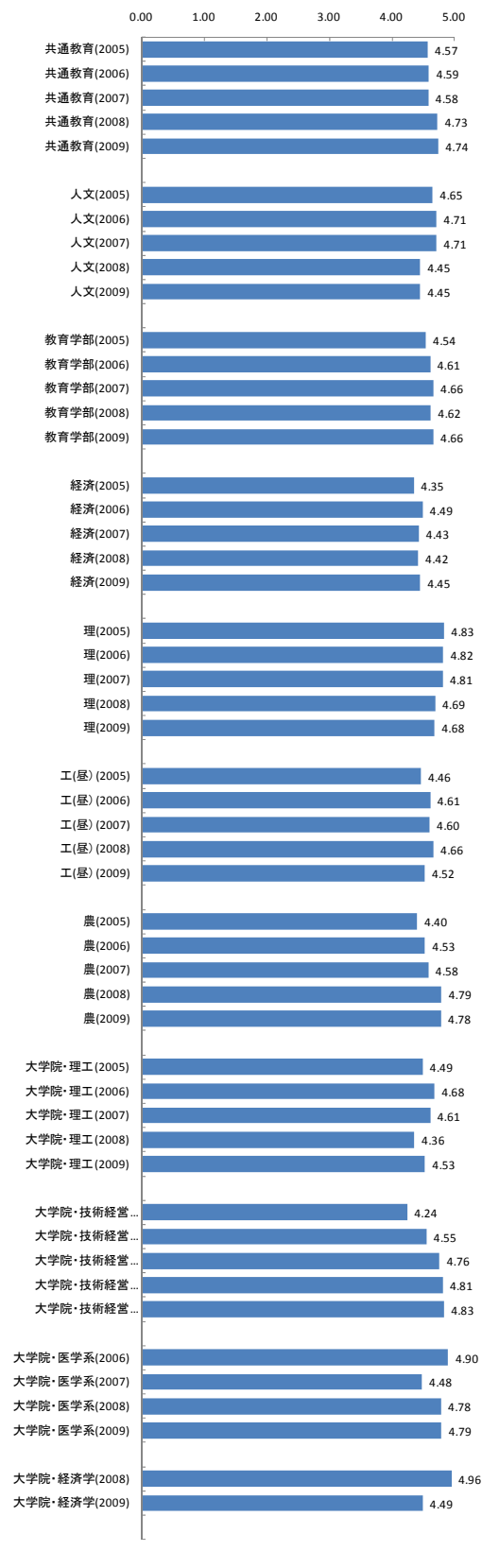
満足(全体平均) 一経年変化一



<全学共通質問項目 5 出席>

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教	語学(農学部	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	4.55		4.65	4.68			3.28		4.57
共通教育(2006)	4.58		4.65	4.63					4.59
共通教育(2007)	4.57		4.64	4.65			4.89		4.58
共通教育(2008)	4.58			4.66	4.73				4.73
共通教育(2009)	4.73			4.81	4.74				4.74
人文(2005)	4.66	4.68	4.57	4.87					4.65
人文(2006)	4.71	4.73	4.73						4.71
人文(2007)	4.70	4.72	4.72						4.71
人文(2008)	4.45	4.52	4.41						4.45
人文(2009)	4.47	4.42	4.38						4.45
教育学部(2005)	4.55	4.66	4.54	4.48			3.66		4.54
教育学部(2006)	4.60	4.68	4.58	4.69			4.48		4.61
教育学部(2007)	4.65	4.69	4.57	4.74			4.65		4.66
教育学部(2008)	4.62		4.52	4.73			4.52		4.62
教育学部(2009)	4.64		4.61	4.76			4.71		4.66
経済(2005)	4.35						5.00		4.35
経済(2006)	4.49								4.49
経済(2007)	4.43								4.43
経済(2008)	4.42								4.42
経済(2009)	4.45								4.45
理(2005)	4.81		4.87	4.94					4.83
理(2006)	4.80		4.88	4.92					4.82
理(2007)	4.81		4.84	4.91					4.81
理(2008)	4.65		4.82	4.88					4.69
理(2009)	4.65		4.78	4.91					4.68
工(昼)(2005)	4.46		4.60	4.64			4.73		4.46
工(昼)(2006)	4.59		4.65	4.75			4.88		4.61
工(昼)(2007)	4.59		4.64	4.74			4.65		4.60
工(昼)(2008)	4.64		4.68	4.77			4.75		4.66
工(昼)(2009)	4.49		4.66	4.61					4.52
農(2005)	4.52		3.49	4.29					4.40
農(2006)	4.63		3.67	4.43					4.53
農(2007)	4.64		3.78	4.61					4.58
農(2008)	4.73		4.95	4.93					4.79
農(2009)	4.74		4.90	4.95					4.78
大学院・理工(2005)	4.49		4.03				4.50		4.49
大学院・理工(2006)	4.68								4.68
大学院・理工(2007)	4.76		4.77						4.61
大学院・理工(2008)	4.36		4.39						4.36
大学院・理工(2009)	4.52		4.70	4.55					4.53
大学院・技術経営(2005)	4.28		4.10						4.24
大学院・技術経営(2006)	4.64		4.21						4.55
大学院・技術経営(2007)	4.74		4.44						4.76
大学院・技術経営(2008)	4.82		4.81						4.81
大学院・技術経営(2009)								4.83	4.83
大学院・医学系(2006)	4.87		4.97						4.90
大学院・医学系(2007)	4.54		4.41						4.48
大学院・医学系(2008)	4.77		4.80						4.78
大学院・医学系(2009)	4.79		4.83						4.79
大学院・経済学(2008)	4.96								4.96
大学院・経済学(2009)	4.49								4.49

出席(全体平均) 一経年変化一



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2009年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は90.2%、教員授業自己評価実施率は34.4%であった。前者は昨年度より2.4%、後者は9.2%減少した。後者のお大幅な低下はIYOCANデータベースの入れ替え作業の遅延により入力時期が遅くなったことが大きな原因である。来年度以降は遅延のないよう作業を進めていく必要がある。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC 準備用、実験実習用の4種類）別に科目毎の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載したので参照していただければ幸いである。また、詳しい質問項目は節末の質問紙を参照していただければ幸いである。

1. 講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。多くの分野で昨年度より若干の低下がみられるもののすべて4.5を超えており、9割に近い出席率を維持しており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高い「専門基礎教育・理系基礎」が2.73、次に高かった「初期教育・基礎セミナー」が2.69であり、その他の授業は昨年度よりは若干伸びているものの2.5以下である。これは授業外学習時間が30-50分程度の授業が大半という状況ということであり、「単位の実質化」という点から考えると授業担当教員はもっと積極的に宿題や授業外レポートを課していくことが望まれる。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての科目で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。しかし、相対的にみると「初期教育・情報処理基礎」「専門基礎教育・理系基礎」の平均値が低い。これらの科目は原因を探り、話し方の工夫・改善を行っていく必要であると考えられる。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。多くの授業で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてとQ6の板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについてはQ4と同様の計算方法で平均値を算出した。ただしこれらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるので計算には含めていない。どちらの設問も平均が3.5を超えており比較的良好である。

Q7の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては昨年度と大きく変化して

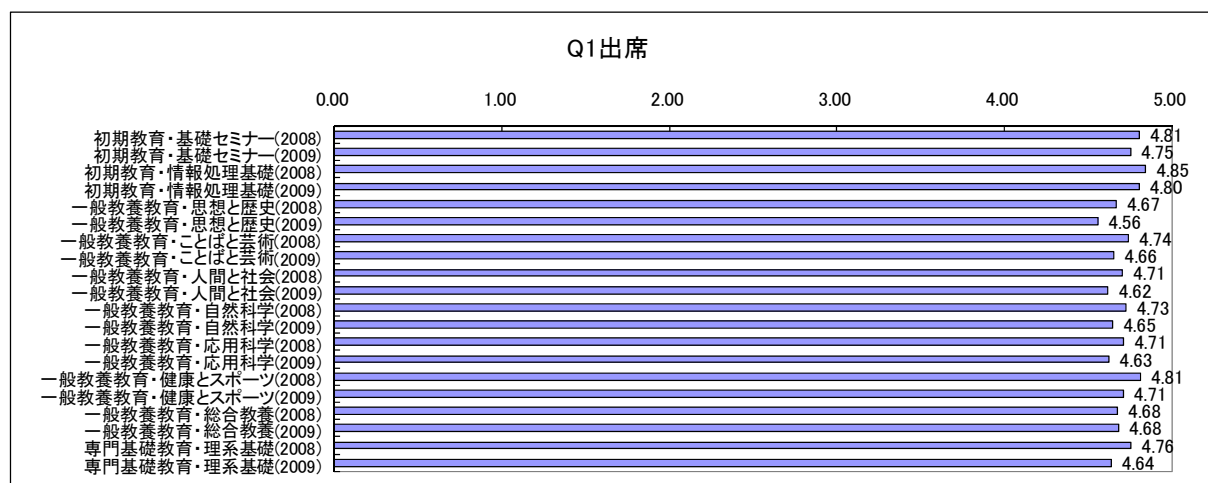
いる科目はないが、4.0を超えている科目は「初期教育・基礎セミナー」の4.06だけである。共通教育は規模の大きな授業が多いが基礎セミナーは小規模のクラスが多いため学生からの疑問や質問に回答しやすいためであると考えられる。しかし、今後は中・大規模の授業においても学生の疑問・質問に応じていく工夫が必要であろう。

Q8のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を5,4,3,2,1とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で3.5を上回っており良好である。

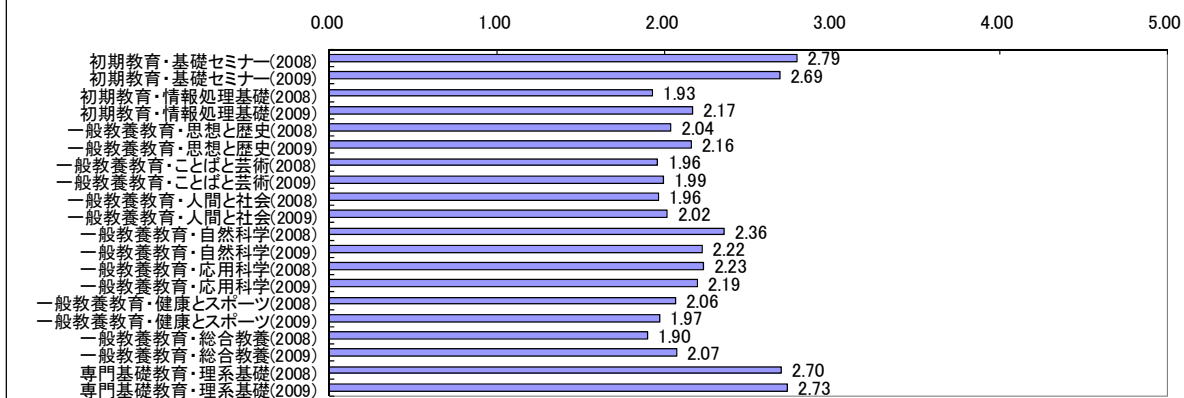
Q9のこの授業の内容を理解できたかという質問については昨年度と比較して大きな変動はなく、すべての科目で3.5を上回っている。

最後にQ10のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問についても昨年度から大きな変動はなく、すべて3.5を超えており良好である。

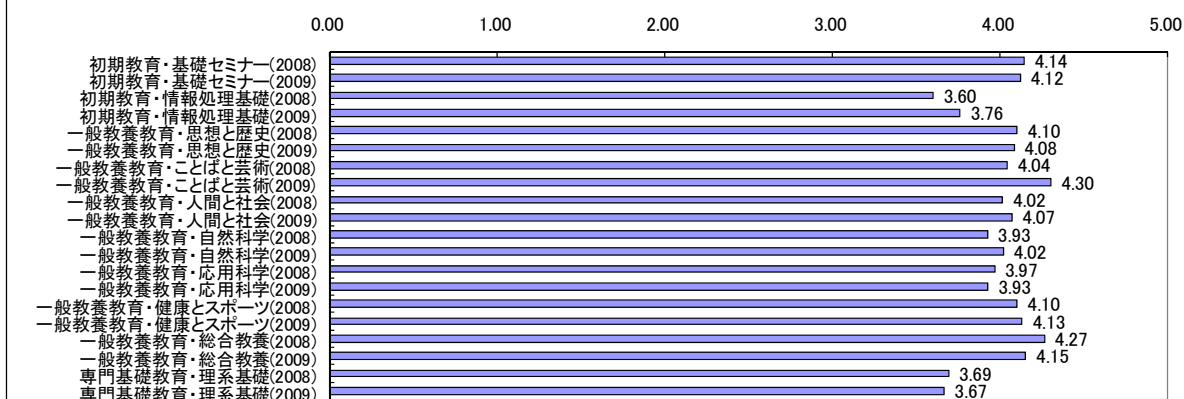
系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
初期教育	基礎セミナー(2008)	講義	4.81	2.79	4.14	4.08	4.09	3.97	4.12	4.09	3.97	4.07
初期教育	基礎セミナー(2009)	講義	4.75	2.69	4.12	4.13	4.04	3.91	4.06	3.83	4.06	4.08
初期教育	情報処理基礎(2008)	講義	4.85	1.93	3.60	3.70	3.84	4.00	3.56	3.50	3.53	3.43
初期教育	情報処理基礎(2009)	講義	4.80	2.17	3.76	3.81	3.86	4.09	3.78	3.65	3.82	3.73
一般教養教育	思想と歴史(2008)	講義	4.67	2.04	4.10	4.13	3.98	3.89	4.02	3.64	3.77	4.03
一般教養教育	思想と歴史(2009)	講義	4.56	2.16	4.08	4.12	4.04	3.86	3.99	3.66	3.80	4.01
一般教養教育	ことばと芸術(2008)	講義	4.74	1.96	4.04	4.01	3.85	4.05	3.83	3.72	3.87	4.07
一般教養教育	ことばと芸術(2009)	講義	4.66	1.99	4.30	4.28	4.05	3.96	3.93	3.84	4.07	4.28
一般教養教育	人間と社会(2008)	講義	4.71	1.96	4.02	4.07	3.94	3.93	3.89	3.60	3.76	3.91
一般教養教育	人間と社会(2009)	講義	4.62	2.02	4.07	4.09	3.94	3.93	3.95	3.66	3.81	3.94
一般教養教育	自然科学(2008)	講義	4.73	2.36	3.93	3.93	3.92	4.13	3.79	3.63	3.73	3.90
一般教養教育	自然科学(2009)	講義	4.65	2.22	4.02	4.02	3.95	4.26	3.88	3.66	3.83	3.96
一般教養教育	応用科学(2008)	講義	4.71	2.23	3.97	4.01	4.03	4.18	3.85	3.71	3.88	4.02
一般教養教育	応用科学(2009)	講義	4.63	2.19	3.93	4.04	4.04	4.19	3.92	3.72	3.90	4.01
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	講義	4.81	2.06	4.10	4.10	3.96	4.05	3.87	3.67	3.91	3.96
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	講義	4.71	1.97	4.13	4.20	4.16	4.15	3.88	3.77	3.99	4.05
一般教養教育	総合教養(2008)	講義	4.68	1.90	4.27	4.13	4.27	4.35	4.07	3.85	4.13	4.26
一般教養教育	総合教養(2009)	講義	4.68	2.07	4.15	4.07	4.16	4.23	3.99	3.79	4.01	4.07
専門基礎教育	理系基礎(2008)	講義	4.76	2.70	3.69	3.78	3.77	3.73	3.76	3.58	3.58	3.69
専門基礎教育	理系基礎(2009)	講義	4.64	2.73	3.67	3.78	3.72	3.67	3.77	3.54	3.59	3.66



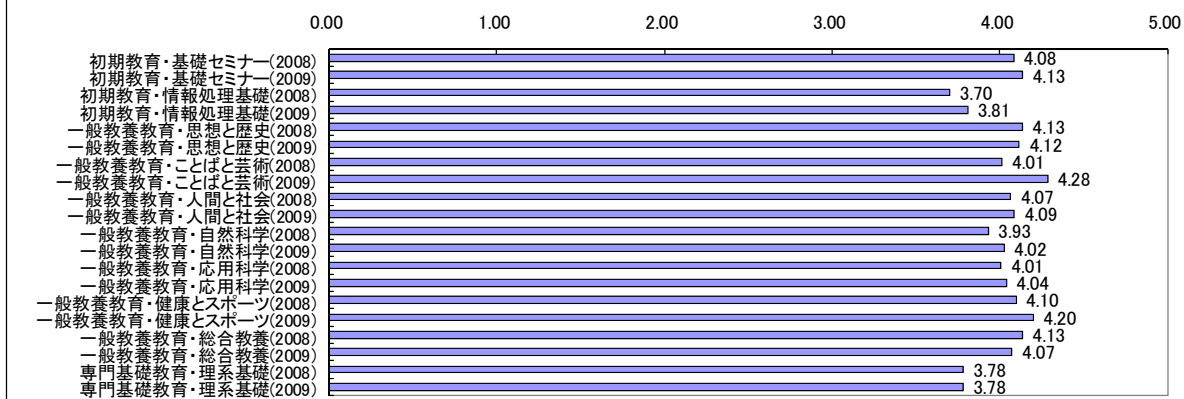
Q2授業外学習

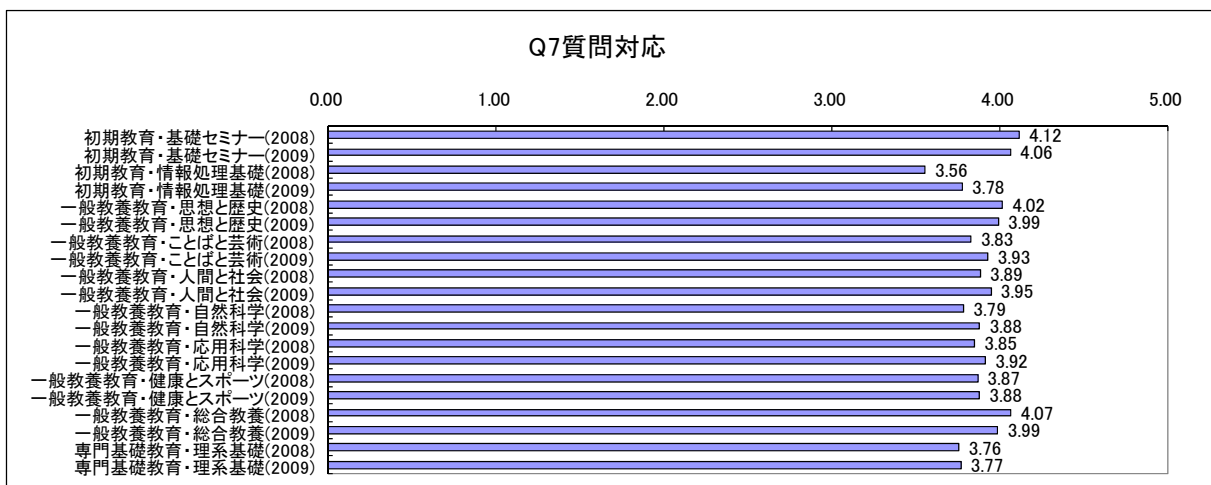
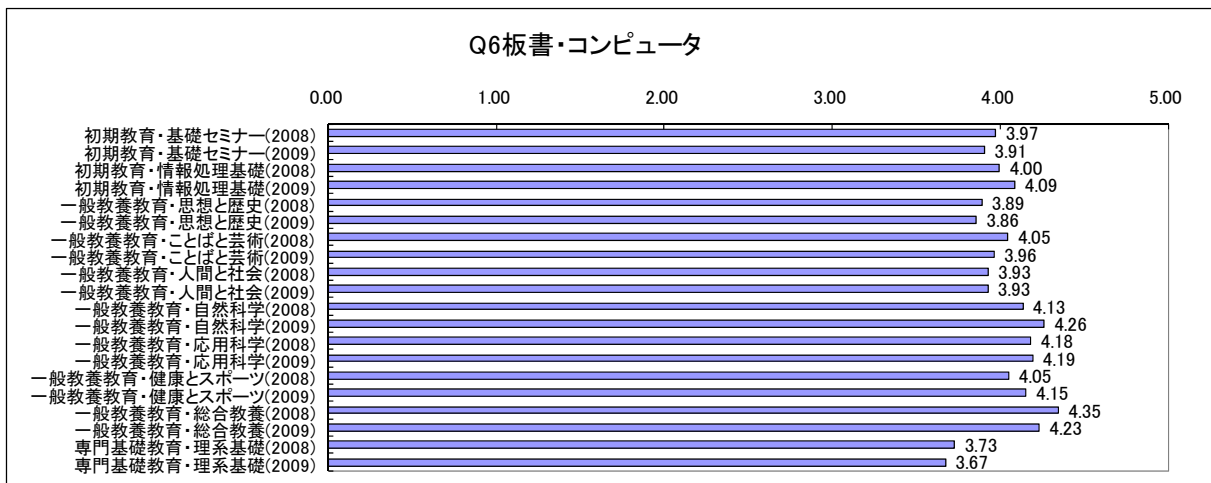
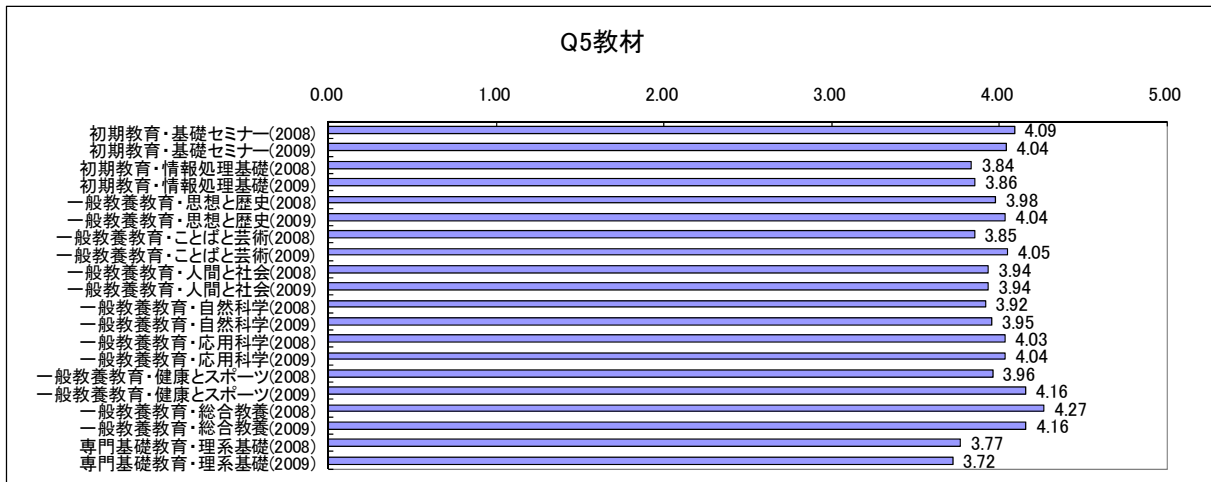


Q3話し方

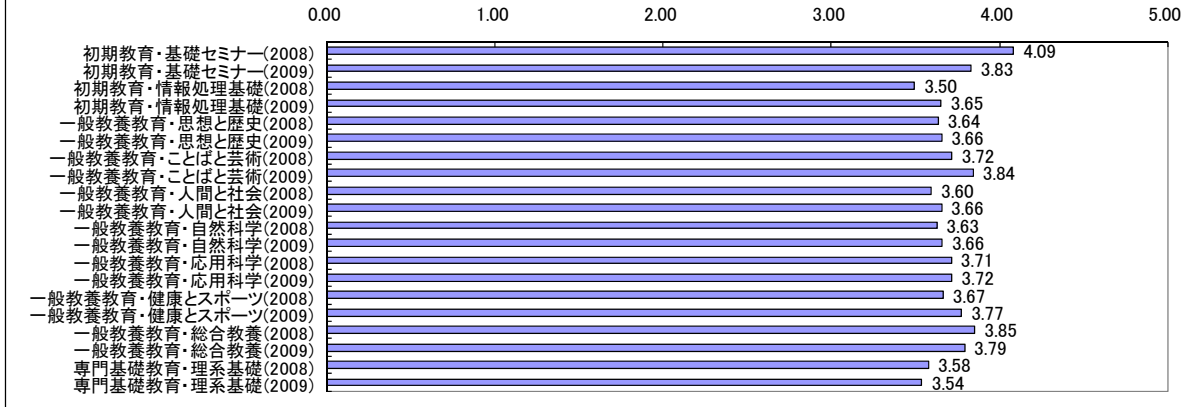


Q4説明

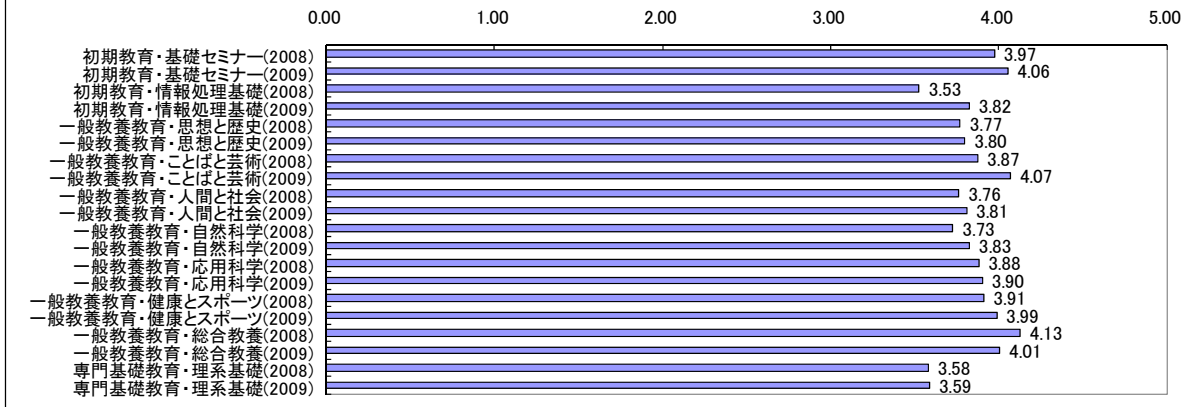




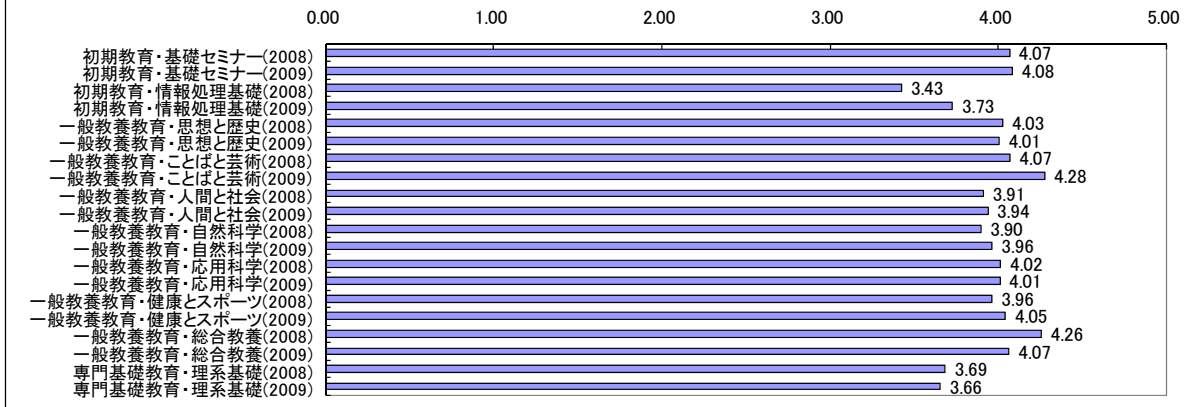
Q8学習目標達成



Q9理解



Q10満足

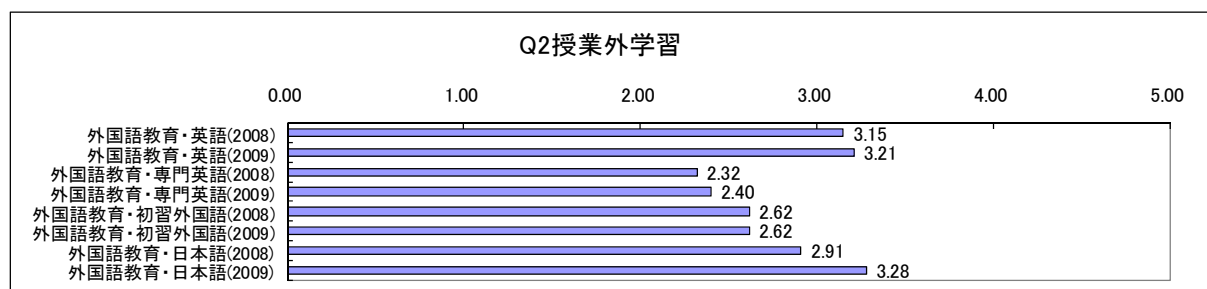
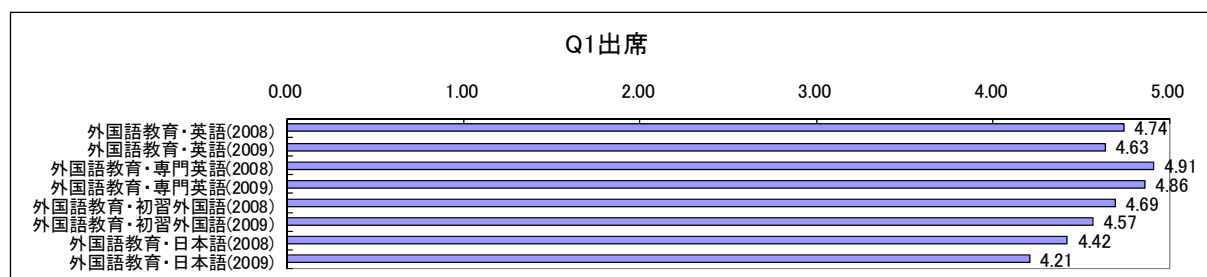


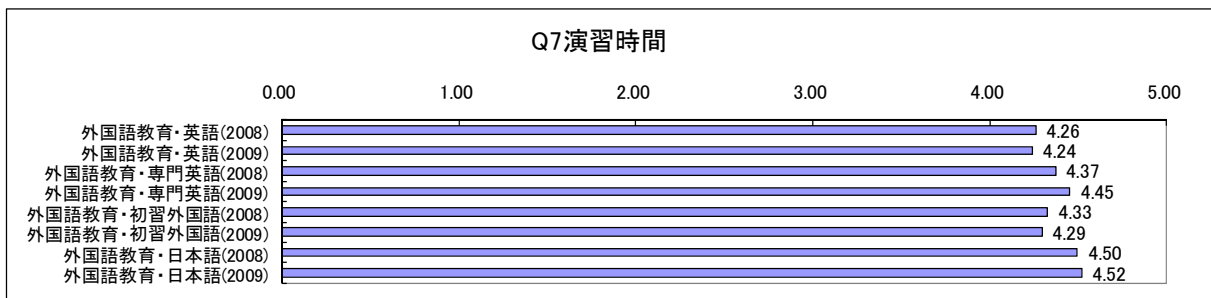
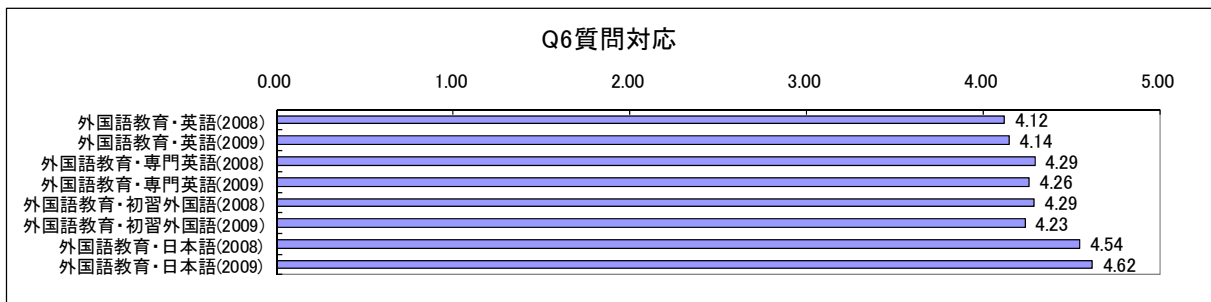
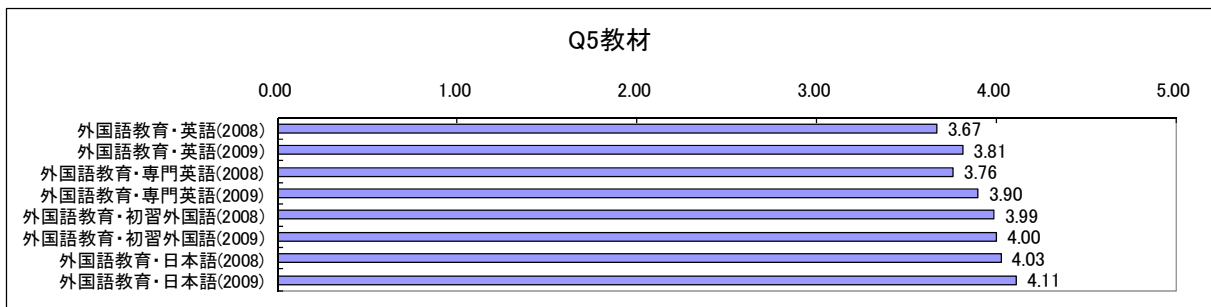
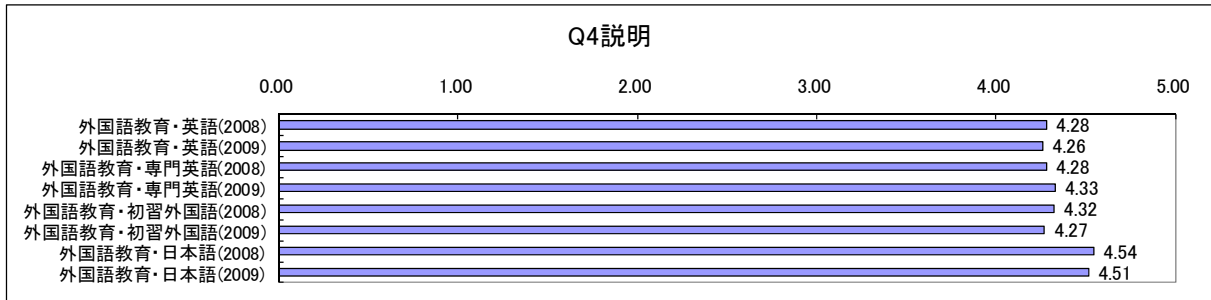
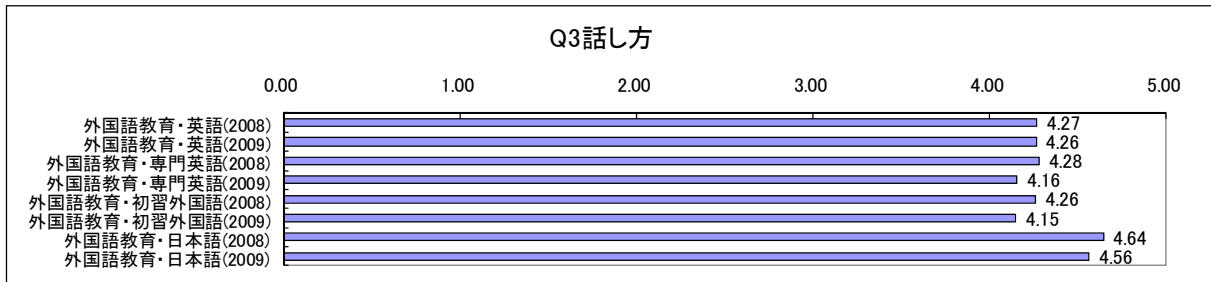
2. 外国語教育科目の結果について

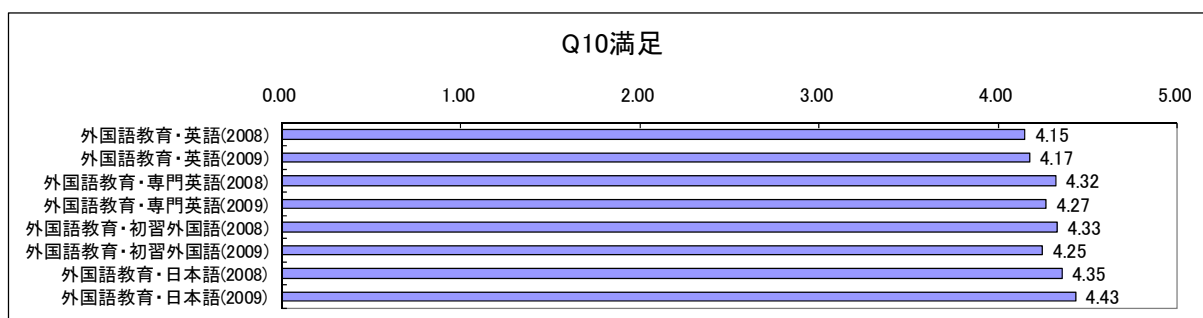
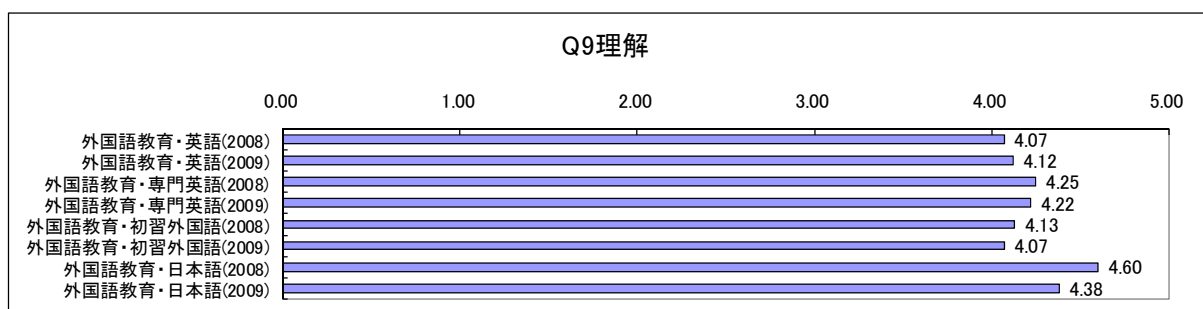
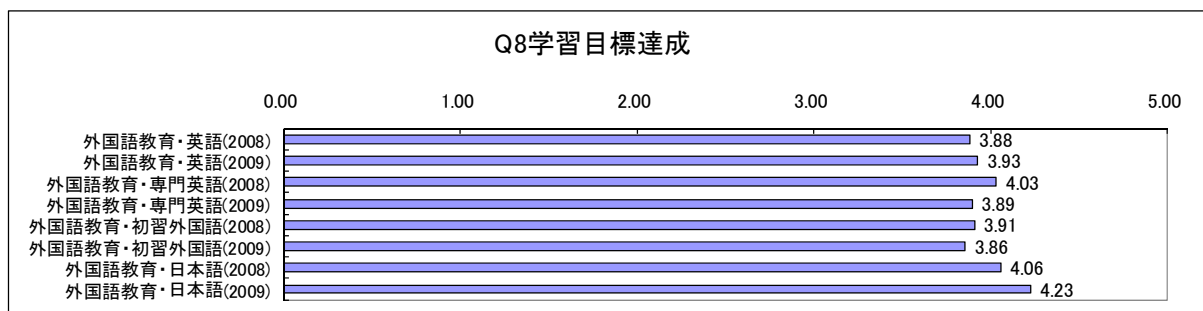
以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「外国語教育・英語」「外国語教育・専門英語」「外国語教育・初習外国語」「外国語教育・日本語」の4つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の平均値を表している。

Q1の出席はどの分野もすべて昨年度より平均値が低下しているものの、すべて4.0以上を維持しており良好である。Q2の授業外学習はすべて平均値が上昇している。Q3とQ4は昨年度と比較して大きな違いはない。Q5の教材はすべての科目で上昇した。Q6の質問対応は特に「外国語教育・日本語」が4.62と非常に高く、学生からの質問に丁寧に対応していることがわかる。Q7は教員が授業内容の説明以外に学生に演習や練習の時間を十分に与えましたか?という質問である。これもすべて4.0以上を維持しており良好である。Q8の学習目標達成は日本語を除き4.0を下回っているが、Q9の理解、Q10の満足はすべて4.0以上を維持しており良好である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2008)	語学	4.74	3.15	4.27	4.28	3.67	4.12	4.26	3.88	4.07	4.15
外国語教育	英語(2009)	語学	4.63	3.21	4.26	4.26	3.81	4.14	4.24	3.93	4.12	4.17
外国語教育	専門英語(2008)	語学	4.91	2.32	4.28	4.28	3.76	4.29	4.37	4.03	4.25	4.32
外国語教育	専門英語(2009)	語学	4.86	2.40	4.16	4.33	3.90	4.26	4.45	3.89	4.22	4.27
外国語教育	初習外国語(2008)	語学	4.69	2.62	4.26	4.32	3.99	4.29	4.33	3.91	4.13	4.33
外国語教育	初習外国語(2009)	語学	4.57	2.62	4.15	4.27	4.00	4.23	4.29	3.86	4.07	4.25
外国語教育	日本語(2008)	語学	4.42	2.91	4.64	4.54	4.03	4.54	4.50	4.06	4.60	4.35
外国語教育	日本語(2009)	語学	4.21	3.28	4.56	4.51	4.11	4.62	4.52	4.23	4.38	4.43



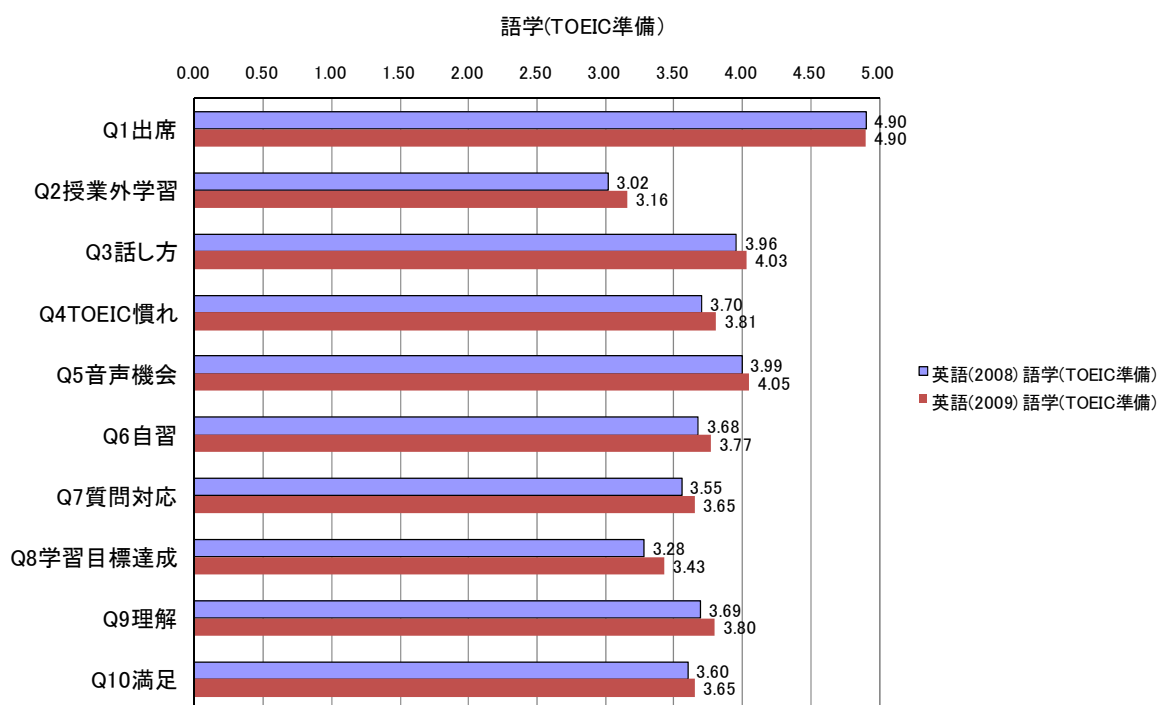




3. 外国語科目（TOEIC 準備）の結果について

以下は外国語科目（TOEIC 準備）の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。昨年度と比較すると、すべての質問で平均を上回っており非常に良好である。例えば Q2 の授業外学習時間は 3.16 で昨年より伸びており、平均で授業 1 回につき 1 時間以上の学習が行われていることが分かる。また、TOEIC 準備のアンケート用紙に特有な質問項目である Q4「この授業を通して、TOEIC テストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか?」、Q5「授業中に（CD 等で）英語の音声聞く機会はたくさん与えられましたか?」、Q6「配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか?」、Q7「学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか?」もすべて昨年度より伸びており良好である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2008)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60
外国語教育	英語(2009)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.16	4.03	3.81	4.05	3.77	3.65	3.43	3.80	3.65

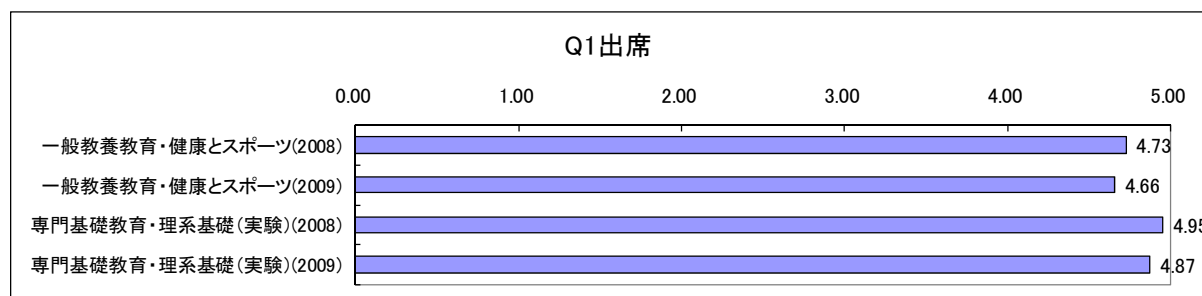


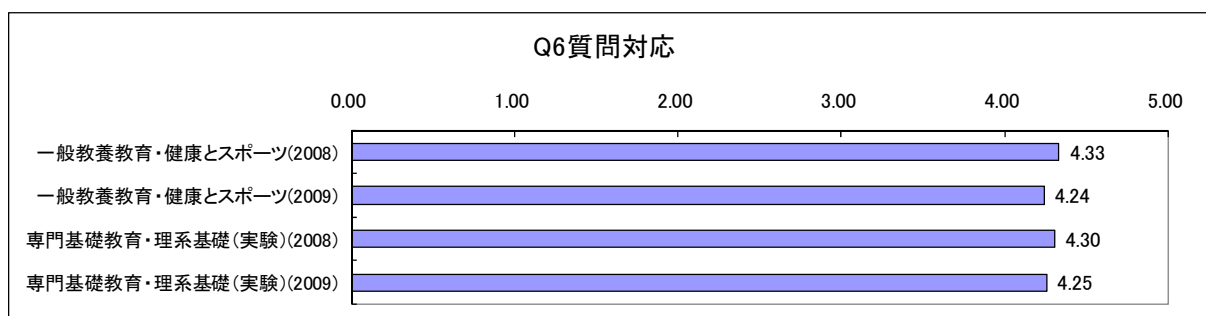
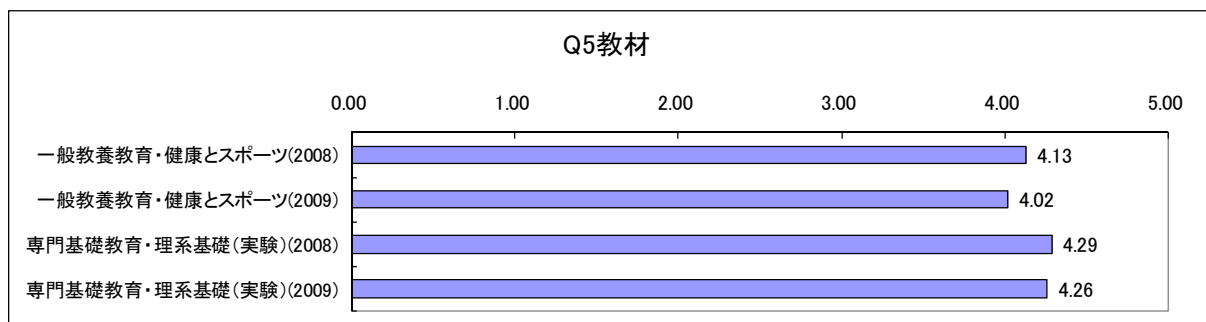
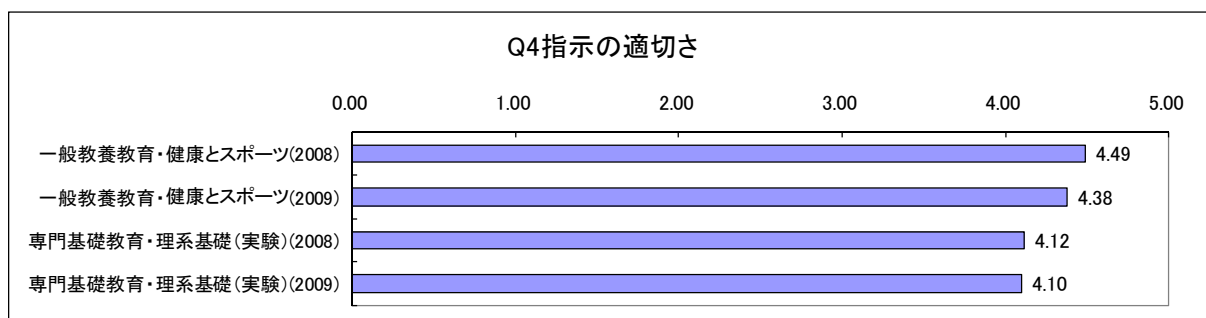
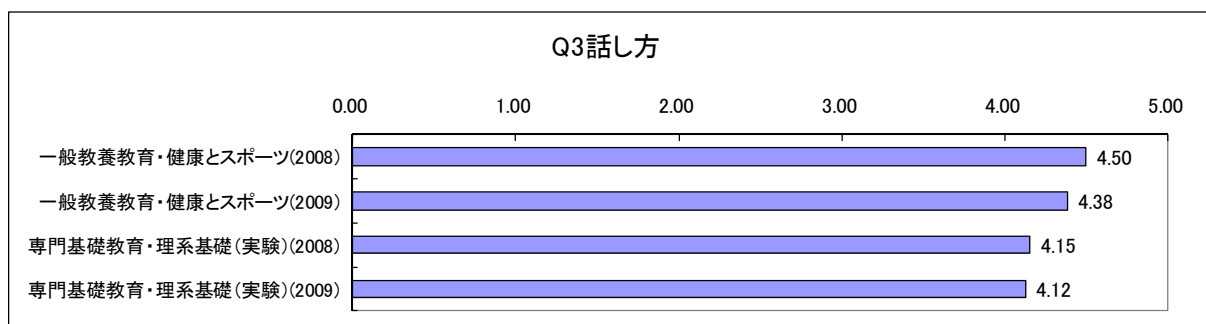
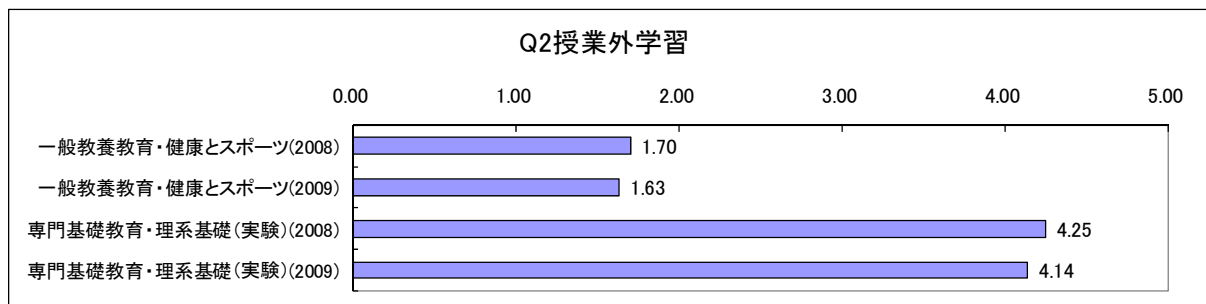
4. 演習・実験・実習系科目の結果について

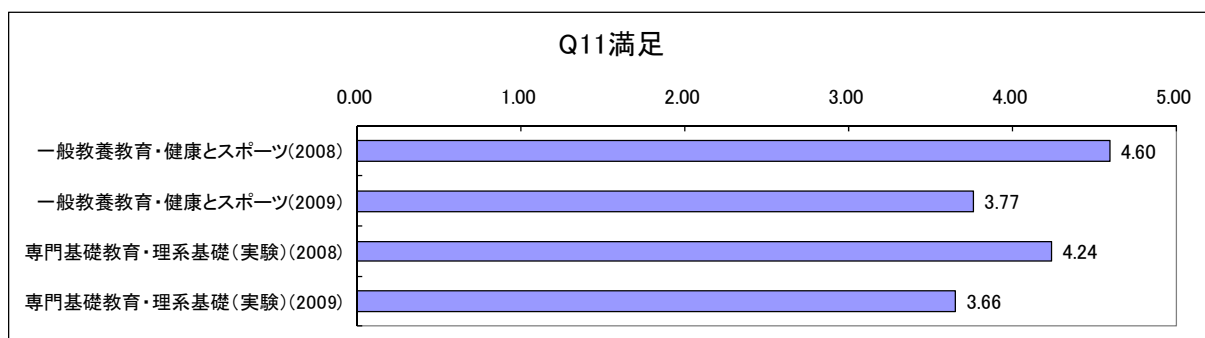
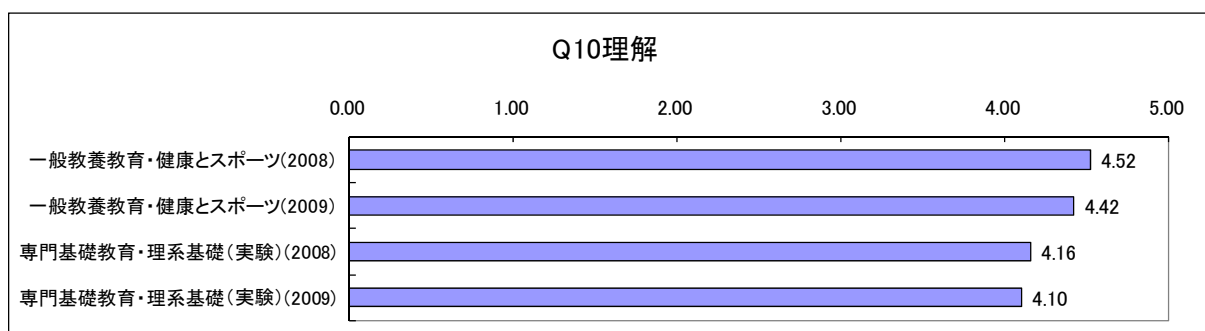
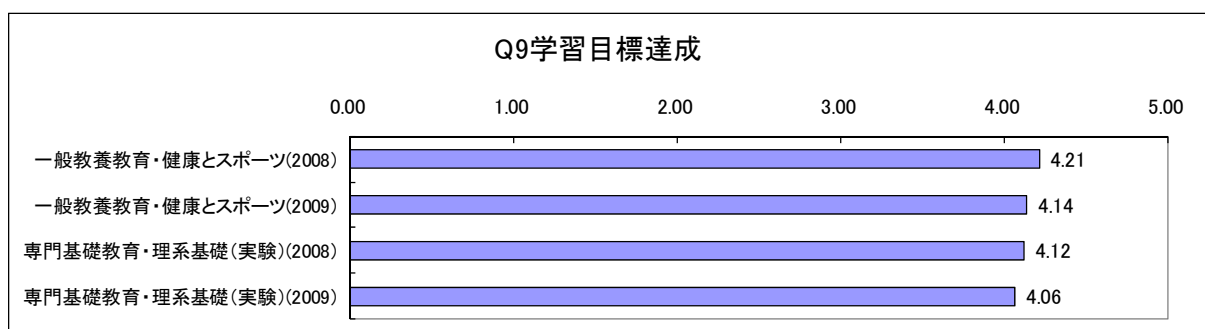
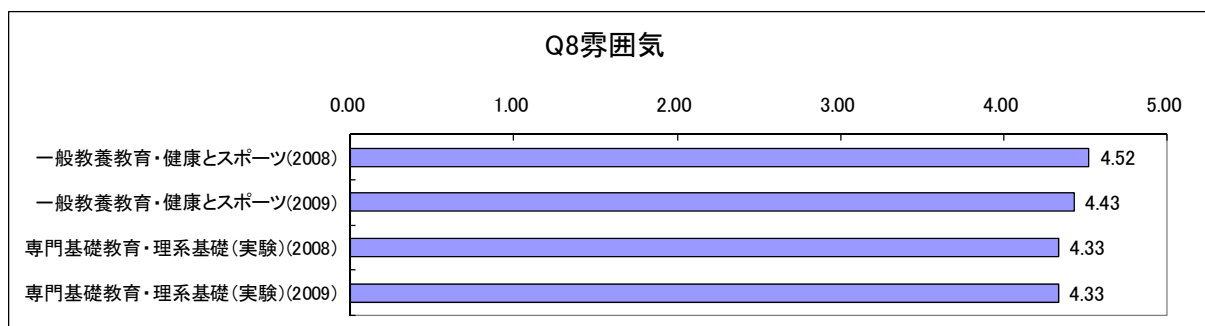
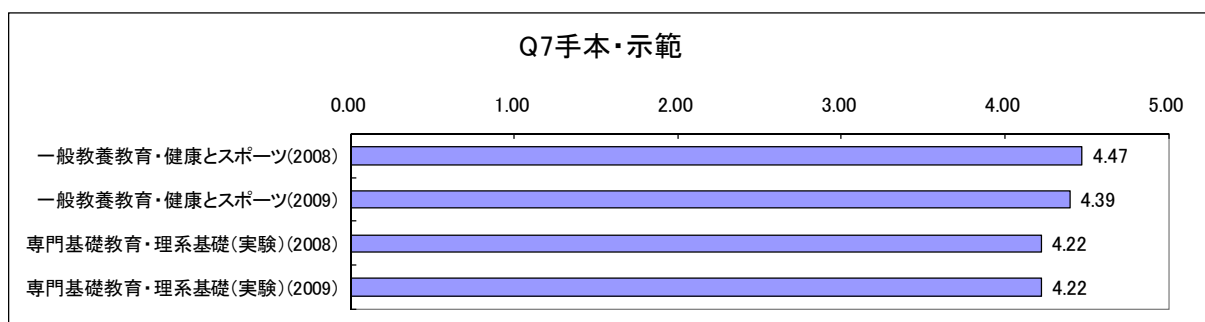
以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは「一般教養教育・健康とスポーツ」分野のスポーツ運動実習の授業、および「専門基礎教育・理系基礎(実験)」分野の実験科目である。全体的にみて平均値が高いが、Q2の授業外学習については健康とスポーツ分野は1.63、反対に理系基礎(実験)は4.14と非常に高く、分野間で大きな差がみられる。理系基礎(実験)は昨年度より若干平均値は低下しているものの、多くの学生が授業1回につき2時間以上の授業外学習を行っていることが分かり、単位の実質化という点からみて望ましい状況にあるといえる。健康とスポーツ分野は授業の性格上授業外学習を課すことが難しい面もあると思われる。しかし、何らかの取り組みを行っていくことが求められよう。

また、Q11の満足度については昨年度と比較して非常に低下している。この理由を探り、授業改善を図っていくことが求められる。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	演習・実験実習	4.66	1.63	4.38	4.38	4.02	4.24	4.39	4.43	4.14	4.42	3.77
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2008)	演習・実験実習	4.95	4.25	4.15	4.12	4.29	4.30	4.22	4.33	4.12	4.16	4.24
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2009)	演習・実験実習	4.87	4.14	4.12	4.10	4.26	4.25	4.22	4.33	4.06	4.10	3.66







附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

系列	分野	授業科目	開設科目名	
初期教育	初期教育(GP1)	フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナー	
		基礎セミナー1	基礎セミナー1 基礎セミナー(緑) 医学入門I	
	情報処理基礎(GP2)	基礎セミナー2	基礎セミナー2	
		情報リテラシー演習 情報セキュリティ・モラル	情報リテラシー演習 情報セキュリティ・モラル	
外国語教育	英語(GP3)	TOEIC準備	TOEIC準備	
		Basic English	Basic English	
		English Speaking	English Speaking	
		TOEIC認定	TOEIC認定	
		TOEIC認定400	TOEIC認定400	
		英語リーディング	英語リーディング	
		英語ライティング	英語ライティング	
		英語特別演習	英語特別演習 英語特別演習1a 英語特別演習1b	
		Comprehensive English	Comprehensive English Fundamental Comprehensive English Pre-Intermediate	
		TOEIC認定500 (TOEFL450)	TOEIC認定500 (TOEFL450)	
		TOEIC認定600 (TOEFL500)	TOEIC認定600 (TOEFL500)	
		海外英語研修	海外英語研修	
		専門英語(GP3)	医学英語1	医学英語1 a 医学英語1 b
			医学英語2	医学英語2
	医療英語		医療英語	
	基礎医療英会話		基礎医療英会話	
	医療英会話		医療英会話	
	初習外国語(GP3)	初習外国語初歩	ドイツ語初歩	ドイツ語初歩
			フランス語初歩	フランス語初歩
			中国語初歩	中国語初歩
		初習外国語入門1	ドイツ語入門1	ドイツ語入門1
			フランス語入門1	フランス語入門1
			中国語入門1	中国語入門1
		初習外国語入門2	ドイツ語入門2	ドイツ語入門2
			フランス語入門2	フランス語入門2
			中国語入門2	中国語入門2
		初習外国語初級1A	ドイツ語初級1A	ドイツ語初級1A
			フランス語初級1A	フランス語初級1A
			中国語初級1A	中国語初級1A
		初習外国語初級1B	ドイツ語初級1B	ドイツ語初級1B
			フランス語初級1B	フランス語初級1B
			中国語初級1B	中国語初級1B
		初習外国語初級2A	ドイツ語初級2A	ドイツ語初級2A
			フランス語初級2A	フランス語初級2A
			中国語初級2A	中国語初級2A
		初習外国語初級2B	ドイツ語初級2B	ドイツ語初級2B
			フランス語初級2B	フランス語初級2B
			中国語初級2B	中国語初級2B
		初習外国語会話1	ドイツ語会話1	ドイツ語会話1
			フランス語会話1	フランス語会話1
			中国語会話1	中国語会話1
	初習外国語会話2	ドイツ語会話2	ドイツ語会話2	
		フランス語会話2	フランス語会話2	
		中国語会話2	中国語会話2	
	海外初習外国語研修	海外中国語研修 海外ハングル研修		
	初習外国語認定	ロシア語 スペイン語		
	日本語(GP3)	日本語 ※外国人留学生対象科目	日本語1A	日本語1A
			日本語1B	日本語1B
			日本語2A	日本語2A
			日本語2B	日本語2B
			日本語3A	日本語3A
			日本語3B	日本語3B
			日本語4A	日本語4A
			日本語4B	日本語4B
			日本語5A	日本語5A
			日本語5B	日本語5B
			日本語6A	日本語6A
			日本語6B	日本語6B
			日本語7A	日本語7A
			日本語7B	日本語7B
			日本語8A	日本語8A
			日本語8B	日本語8B
			日本語9A	日本語9A
			日本語9B	日本語9B
			日本語10A	日本語10A
			日本語10B	日本語10B
	日本語11A	日本語11A		
	日本語11B	日本語11B		
	日本語12A	日本語12A		
	日本語12B	日本語12B		
	日本語13A	日本語13A		
	日本語13B	日本語13B		
	日本語14A	日本語14A		
	日本語14B	日本語14B		
	日本語15A	日本語15A		
	日本語15B	日本語15B		

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	思想と歴史 (GP4)	思想と倫理	哲学 倫理学 生命倫理学 宗教学	
		歴史	日本史 東洋史 西洋史	
		主題 (思想と歴史)	漱石の思想Ⅰ 漱石の思想Ⅱ 東洋の思想	
	ことばと芸術 (GP4)	文学と言語	日本文学 漢文 外国文学 (アメリカ文学) 言語学	
		芸術	芸術史(芸術史) 芸術史(日本近代美術史) 芸術概論(音楽の歴史) 芸術概論(美術) 芸術概論(音楽) 芸術実践(美術) 芸術実践(音楽) 芸術実践(工芸)	
		主題 (ことばと芸術)	美術鑑賞と作品記述	
	人間と社会 (GP4)	人間と社会	人間と社会	法学 政治学 経済学 社会学(人権・ジェンダー・人間環境論) 社会学 地理学 民俗学 文化人類学 産業倫理 社会科学概論 社会福祉学
			人間と教育	教育学
		心理学	心理学	心理学 心理学(適応と不適応) 心理学(子どものこころを科学する) 心理学(臨床心理学) 心理学(自分自身を再発見する) 心理学(心のとらえ方) 心理学(行動分析の基礎と応用) 心理学(心と社会の心理学) 心理学(道徳性心理学) 心理学(学習・記憶・認知) 発達心理学 医療心理学
			日本国憲法	日本国憲法
主題 (人間と社会)			マーケティング入門 観光と交通 経営理論と応用 リスクマネジメント入門 日本の財政を考える 中国経済入門 戦略と経済心理 アジアの交通と文化 比較教育概論 大衆と観光 大学論 日常の価値を再考する 性をめぐる今目的状況 比較文化心理学 平和と文化のつながり 法と市場経済 契約と不法行為 国際コミュニケーション論 臨床人間学 Close-up Japan—Various Aspects of Culture and Society.	
自然科学 (GP5)		自然科学の考え方	数学の考え方 物理学の考え方 地球科学の考え方	
		自然科学	数学概論 物理学概論 現代化学総説 現代生物学総説 現代地球科学総説	
		主題 (自然科学)	宇宙と人間	科学の中の動物 環境とバイオテクノロジー 人間とバイオテクノロジー 歴史の中の動物 火山と地震 地球と人間 生命を科学する 生命現象のいろいろ
			統計学	社会科学のためのやさしい統計学 理工学のための統計学 医学のための統計学
			環境科学	環境学
応用科学 (GP5)	応用科学	応用科学	科学史 技術概論 生命科学概論 生活科学 デザイン工学入門 行動科学	
		社会と医療	社会と医療(いのちと発達) 社会と医療(心と脳の障) 社会と医療(日本の医療) 社会と医療(性を考える)	
	主題 (応用科学)	命と場	命と場 香りと人間 環境と植物 環境と人間 環境と農業 現代の科学技術 暮らしの中の動物 交通と社会 知的財産の開発と権利 情報技術と社会 人間と植物	

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

	健康とスポーツ (GP6)	運動健康科学	運動健康科学
		スポーツ運動実習	スポーツ運動実習(エアロビクス) スポーツ運動実習(サッカー) スポーツ運動実習(ショートテニス) スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフ) スポーツ運動実習(バスケットボール) スポーツ運動実習(バドミントン) スポーツ運動実習(バレーボール) スポーツ運動実習(ハンドボール) スポーツ運動実習(フィットネストレーニング) スポーツ運動実習(フライングディスク) スポーツ運動実習(空手) スポーツ運動実習(硬式テニス)
		主題 (健康とスポーツ)	スポーツの医学 ライフスタイルと健康 加齢と健康 食・環境と健康
	総合教養 (GP7)	総合教養 A	アクティブ・ラーニング キャリアデザイン クローズアップ・ドイツ ベンチャービジネス論 ボランティアと自主活動 メディア情報処理 環境と地域共生 観光と経済 国際交流論 自然科学と現代社会 A 知の広場—人と学問— 言語の多様性と普遍性 山口県の地域政策 教職協働実践 I 哲学・思想入門
		総合教養 B	キャリアと就職 キャリア形成とコミュニケーション パソコン SOS 1 パソコン SOS 2 現代経営事情 自然科学と現代社会 B 時間学 I 時間学 II 生命と倫理 知的財産権論 教職協働実践 II 教職協働実践 III 医療環境論 1 医療環境論 2
専門基礎教育	理系基礎 (GP5)	数学 I 数学 II 物理学 I 物理学 II 化学 I 化学 II 生物学 I 生物学 II 地球科学 I 地球科学 II	数学 I 数学 II 物理学 I 物理学 II 化学 I 化学 II 生物学 I 生物学 II 地球科学 I 地球科学 II
	理系基礎 (実験) (GP5)	物理学実験 A 物理学実験 B 化学実験 A 化学実験 B 生物学実験 地球科学実験	物理学実験 A 物理学実験 B 化学実験 A 化学実験 B 生物学実験 地球科学実験

<参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙 (4種類)

共通教育 学生授業評価 (講義)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問 I】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) 1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
5	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) 1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	この授業を通して、TOEIC テストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない
5	授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6	配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11～30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
---	--

2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
10	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12～30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

今年度の人文学部のFD活動としては、全学的におこなっているFD活動の一環として、①大学教育機構主催のFD研修会・講演会への参加、②学生による授業評価アンケート（マークシート方式）の実施、③教員による授業自己評価のウェブ入力、以上を例年どおり推進した。また、人文学部独自のFD活動として、④教員間授業公開（ピア・レビュー）についても前年度に引きつづき実施するとともに、今回初めての試みとして、⑤学部外および学外講師による人文学部独自のFD研修会を3回にわたって実施した。

第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

今年度の人文学部における教員間授業公開（ピア・レビュー）については、1教員が授業1コマを公開する従来型のものを1回実施した。授業参観の部に引き続き、事後検討会もあわせて実施した。参観教員には参観に際して「参観コメント票」を配布し、内容に関する所感、および質問、授業技術面に関する所感、および質問、授業目標に関する所感、質問、その他、授業公開に関する意見や要望、以上を記入していただき、事後検討会における議論に活用した。

1. ヒンターエーダー・フランツ・エムデ先生授業公開

（1）授業参観の部

[概要]

日時：平成22年1月8日（金）8:40～10:10

場所：人文学部第4講義室

授業者：エムデ・フランツ教授

参加者：井上三朗、尾崎千佳、瀨瀬厚、富平美波、平野尊識、古荘真敬、宮原一成

（五十音順・敬称略）


学生出席人数：24名



[授業者による事前コメント]

授業内容と要点	ドイツ語による簡単な挨拶と自己紹介、そして1～12までのドイツ語の数を覚えてもらいます。グループ分けにした受講生によるドイツやヨーロッパの文化についての知識を収集して、ディスカッションやプレゼンテーションをしてもらいます。
工夫したところ	短期間に覚えたドイツ語でできるだけ沢山の受講生との挨拶や自己紹介を交すことによって、今まで全く交流がなかった同級生との交流をはかります。次のグループ・ワークで偶然性によって編成された班にみなの前での発表のために努力してもらいます。

見てほしいところ	学生全員のアクティブな参加を目指しています。授業は講義を消極的に聞き流すだけではなく、1人ひとりの貢献で成り立っていることを理解してもらうことと、元々受講生が関心をもつ分野でなくても、ある程度の注意や関心を発揮ができる環境づくりのところです。
今後、改良したいところ	今回は初めて基礎セミナーを担当して、専門的な内容を薄く設定しております。これからは、ドイツ関係の具体的なテーマを指定して、内容をより濃いものにすることがいいのではないかと思います。又は簡単なドイツ文化・文学のテキスト（数行～1頁）を配って、グループワークによって分析させ、その結果や解釈を発表してもらうなどの工夫が考えられます。

[当日の授業展開]

時間	概要	内容	授業のポイント
8:40-8:50	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎セミナー2の説明 ・授業者自己紹介 ・ドイツ文化と日本文化 ・今日の授業における評価のポイント 	学生の積極的な授業への参加を促す
8:50-9:00	モデル会話 一斉練習	<ul style="list-style-type: none"> ・Guten Morgen! ・Ich heie Franz. Wie heit du? ・Ich komme aus Munchen. Woher kommst du? ・Ich wohne in Miyano. We wohnst du? ・Ein gutes neues Jahn! 	板書等によらず、すべて口頭による会話練習 
9:00-9:20	モデル会話 ペアワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル会話をペアになって練習 ・男子2人女子2人の総計4人と会話練習をすること、できるだけ遠い席の人と会話することが授業者より指示される。 ・配布されたコメント用紙に適宜メモをとりながら会話練習。 	学生は座席から離れ、自由に移動しながら会話練習 
9:20-9:25	ドイツ語数字一斉学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業者のあとに続いて、ドイツ語で1～12までの数字を一斉に練習。 	
9:25-9:30	ドイツ語数字実践練習	<ul style="list-style-type: none"> ・着席順に1～5の数字をドイツ語で発声する。 	ドイツ語履修の有無によって学生の対応に差が出る

9:30-9:50	ドイツ文化 ディスカッション グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5班に分かれ、ドイツまたはヨーロッパについての知識をグループ内で披瀝しあう。 ・ 各グループから代表者1人を選出してディスカッションの結果を発表する。 ・ 学生は配布されたコメント用紙に適宜メモをとりながらテーマを模索する。 	<p>授業者はグループをまわってディスカッションの補助</p> 
9:35	板書	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループディスカッションの時間を使って、授業者は授業冒頭のモデル会話を板書。 	
9:50-10:00	ディスカッション結果の発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各班の総員が前に出て、代表者1人がディスカッション結果を発表する。 ・ 聞いている学生は発表に関する感想等をコメント用紙に適宜メモ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドイツの食文化 ・ ドイツにおける環境問題への取り組み ・ ドイツにおける成人年齢とその概念 ・ ドイツにおける地方分権 ・ グリム童話等、身近なドイツ文化
10:00-10:05	発表講評	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業者が各班の発表についてコメント 	ドイツという視点からヨーロッパ全体に視野を拡大することの必要性を喚起
10:05-10:10	コメント用紙の記入と提出	<ul style="list-style-type: none"> ・ コメント用紙に授業に対する感想を記入して提出。 	

[参観者から寄せられた感想・意見の概要]

1) ペアワーク・グループワークの効果について

- ・ ドイツ語によるコミュニケーションがうまくいくか心配していたが、時間の経過とともにスムーズに行きだしたのには驚いた。
- ・ 学生が授業内容に段々関心を示していく様子が面白かった。
- ・ アクティブな授業参加の工夫が成功していた。
- ・ なぜドイツ語を学ぶのかという動機づけがあればさらに良かったのではないかな。
- ・ パートナーを自由に変えさせるのは学生の興味が持続してとても良い。
- ・ 授業後半のディスカッションで、急にハードルが高くなった印象がある。テーマ調べなどについて、事前の課題指示があると良かったかも知れない。

2) オーラル中心の授業の進め方について

- ・ 耳だけで聴いて覚えることにスリルがあった。
- ・ 板書等がない分、学生は授業に集中していた。

- ・キーワードを頼りに、学生が会話に馴れていったようであった。
- ・既習者と未習者割合はどのくらいであったかが知りたい。
- ・今回はドイツ語の簡単な挨拶が中心だったが、内容をもう少し高度なものにする余地もあるか。

3) コメント用紙の意図や工夫について

- ・出欠確認をコメント用紙提出にかえるのは良い工夫だと思う。
- ・2回コメントシートを配布したが、特に1回目の意図がよくわからなかった。
- ・記入欄をあらかじめ作っておくなど、コメント用紙にもう少し工夫があってもいいかも知れない。

4) 成績評価について

- ・授業者が最後に発表の講評を行ったため、学生相互評価の意味合いが薄れてしまったこともあり、この授業においてはどのような成績評価が妥当か、気にかかった。

5) 後期基礎セミナーについて

- ・基礎セミナーは実に多様であり得ることを再確認できた。
- ・コースの概要を紹介するのか、授業内容の一端に触れるのがよいか、まだ共通理解がないが、ある程度どちらかに決めて実施した方がよいかも知れない。

(2) 事後検討会の部

事後意見交換会の部

[概要]

日時：平成22年1月8日（金）12:00～12:40

場所：人文学部第4演習室

司会：尾崎千佳（FD部会部員）

参加者：井上三朗、エムデ・フランツ、尾崎千佳、富平美波、平野尊識、藤川哲、古荘真敬、山本真弓、脇條靖弘（五十音敬称略）

[はじめに]

はじめに、司会から授業概要の説明を行った上で、授業参観者から寄せられた意見について、前期（1）～（5）のトピックごとに簡単に紹介した。さらに、授業者に対し、授業のねらい等についてのコメントを求めた。

授業者から、基礎セミナー2を担当するにあたって、学生の授業への積極的参加を最重視し、そのための工夫としてペアワークやグループワークを取り入れたことの説明があった。



[ペアワーク・グループワークをめぐって]

参加者から、授業参加の動機づけを促すことに成功していたとの感想が述べられた。学生がペアワークやグループワークに生き生きと取り組んでいた姿が印象的で、コミュニケーションへの潜在的な欲求のあることが感得されたという。

今回の授業のように、学生相互のコミュニケーションを重視する授業の場合、1回限りの授業ではなく、15回連続の通常の授業形態の方がより効果的ではないかとの意見もあった。

授業者から、学生相互のコミュニケーション促進やグループ作りを重視した今回の授業は、後期基礎セミナー開設の目的を、1年次後期学生に対するケアにあるととらえての実践的試みである、との説明があった。

[後期基礎セミナーの目的について]

後期基礎セミナーのあり方について、現在、

- ① 学生のコース選択の材料となるべく、自分の研究の紹介をする
- ② 1年次後期学生に顕著な引きこもり等の問題をケアすべく、授業内で友だち作りや居場所作りを促進する

のふたつの目的が設定されている。どちらをより優先すべきか意見の決着を見ないまま、昨年度から授業が行われている現状について確認した。

今回は、②の目的を重視した授業実践であったが、現今の後期基礎セミナーは、①の目的をめぐっても、コース選択の参考としてある程度貢献しているであろう、との意見があった。いっぽう、クラス意識の形成やコミュニケーションのきっかけ作りとしても、後期基礎セミナーが一定の役割を果たしつつある、との見方もあった。

①のあり方を重視した場合、コース選択時期よりあとに行われる授業をどう意味づけるかが課題である。日本語論述やコンピュータリテラシー等を主目的とする現基礎セミナー1を、後期基礎セミナーにまわし、現基礎セミナー2を前期に開講する可能性について、意見交換が行われた。

基礎セミナーのあるべき形はまだ定まっていないが、机上の空論を繰り返していたずらに負担感を募らせるよりも、授業実践と公開によって、あるべき姿を模索することが生産的であるという点、意見の総意を見た。

[参観者から寄せられた感想・意見の概要]

- ・学生の積極的な一面を見ることができた。自分の授業でもこのような面を引き出すように工夫したい。
- ・学生を積極的に授業参加させる方法が学べて良かった。
- ・基礎セミナーの目標がどこにあるのか、さらなる議論が必要である。
- ・研究紹介を前期基礎セミナーで扱う可能性をめぐっては、一昨年度来指摘のあることであり、今後も継続した検討が必要である。
- ・前期基礎セミナーについて共通性をあぶり出すようなFD研修が望ましい。



[授業者から寄せられた感想]

- ・大変緊張しましたが、絶対お勧めです。やはりピア(仲間)の思いやりも実感し、参考になることも多いので、得したような気分です。

[学生から寄せられた感想]

- ・難しかった。しかし、ドイツ語をよく聞いていると英語と似た発音がよく出てくるので、文法なども似ているのかもしれないと思った。また全体的に、ドイツやヨーロッパについては、地理的に遠いというだけでなく意識して生活していないので知らないことが多くあり、もっとよく知るべきではないかと思った。これをきっかけに調べてみたい。
- ・ドイツ語を習ったことがなかったので、いきなり話せと言われて少し戸惑ったが、知らない言語を話すのはとても楽しかった。ドイツについて自分たちがよく知らなかったことに気づけ、よい

経験になったと思う。

- ・ドイツについて詳しくなかったのが大変だった。内容の詳しい発表もあり、学ぶことが多かった。ドイツについて今後勉強してみたいと思った。私たち自身が活動する授業だったのでとても良かった。少しだがドイツについても知ることができて良かった。

第2節 人文学部独自のFD研修会

1. 第1回FD研修会

拡大教授会終了後の時間を利用した Docuworks の紹介が第1回 FD 研修会として開催された。

日程：平成21年6月17日(水) 16:00～16:50

場所：人文学部第4演習室

参加者：43名（人文学部・東アジア研究科教員43名／事務職員3名）

講師：富士ゼロックス山口株式会社松吉課長

内容：同社と山口大学のライセンス契約について、および、Docuworks 機能の概要説明。質疑応答。その後、全学FD研修会（9月11日 Docuworks 講習会 於メディア基盤センター）の案内を行って閉会。

2. 第2回FD研修会

大学生のメンタルヘルスとかかわりのヒントについて、本学学生相談所の今井先生にお話を伺った。

日程：平成21年7月31日(金) [吉田地区] 10:20～11:50

場所：人文学部 大会議室

講師：今井 佳子（学生相談所カウンセラー）

演題：「900名の学生の悩みを聴いてみえてきたこと—精神的な病気をもつ学生の現状 教職員・友人・家族との関係性の特徴」

参加者：参加者15名

内容：近年、本学の学生相談所を訪れる学生が増加している。平成15年度から平成20年度までの5年間の新規来談者は900名に達し、20年度の延べ面接回数は約1,300回、一日に7名程度から相談を受けている。相談内容は多岐にわたり、単発的な相談から継続的な面接に発展する内容まで多種多様である。単発的な相談には「編入や休学、退学」、「部活やサークル」、「訪問販売」、「日常生活全般（ゴミの出し方、公共料金の払い方など）」、「性感染症、妊娠中絶、性的暴力」、「家族や友人」などがあり、継続的な相談には「自分に関するもの」、「友人への不信感」、「家族関係や家族の精神的な病気」、「教員との折り合い」、「将来の不安、進路について、大学の意義」、「授業に出られない」、「気持ちを誰かに聞いて欲しい」などがある。相談を訪れる学生の中には、精神的な疾患を治療中の学生も含まれている。学生相談所では、これらの学生に対して積極的なかかわりを持ち、必要に応じて大学外の諸機関（消費生活センター、弁護士、病院、警察など）や学生の家族との連携にも力を入れている。

最近の大学生には「純粹で未熟」、「挨拶や返事など基本的なコミュニケーションができない」、「伝えたいことをうまく表現できない」、「感情のコントロールがうまくできない」といった学生がみられ、多くのコンプレックスを抱えていることも多い。例えば「山口大学コンプレックス」「AO入試コンプレックス」「推薦入試コンプレックス」などであり、コンプレックスを感じると同時に、勉強が理解で

きない悩みを抱えている。学生の家庭について尋ねると困難な状況にある者が多く、「親には悩みが言えない、言うことで心配させたくない」という場合が多い。さらに、発達障害が疑われる学生も少なくない。

このような学生に対して教員が与える影響は非常に大きく、各教員の適切な対応（傾聴の姿勢、日常的な会話を軽視しない）が必要である。また、教員は問題を一人で抱え込まず、守秘義務を守りつつ、関係部署（学生相談所や保健管理センター等）と連携すべきである。

■講演概要

山口大学学生相談所には、平成15年4月の設置以来、延べ900名の学生が相談に来訪している。相談内容は、単発的なものから継続性のあるものまでさまざま、部局や学外機関とも適宜連携しながら対応している。



悩みを抱える学生は、さまざまなコンプレックスを抱えている傾向があり、精神的な病気を持つ学生の場合は、抗うつ剤・抗不安薬・睡眠導入剤などを服薬しながら通学している者も多い。

家族や友人との関係性に問題を抱える場合も多いが、特に教員の助言が絶大な効果を発揮することがある。その学生のよい所を極力認めてほめるようにすれば、精神が安定し、自信に繋がるように思われる。

悩みを聴く場合には、悩みを軽く扱わないよう注意する。ただ聴いてあげるだけでよい場合も多い。発達障害

の学生に対しては、いたずらに怒っても効果がないが、その場できちんと注意を与えればしだいにコミュニケーションがとれるようになっていくものである。

学生の悩み相談に応じることは非常な感情労働であるため、教職員にあってもひとりで抱え込まず、保健管理センター・学生相談所との連携をはかることが重要である。

■質疑応答

〔質問〕学生の軽度発達障害が疑われる場合、どのように対処すればよいか？

〔回答〕すぐに学外機関（病院等）へ連絡、というのではなく、学内でまず対処する必要がある。保健管理センターの教員が相談してみるとよいだろう。学生本人は自身の問題に気がついていないので、この場合、教員がまず保健管理センターに電話し、保健師と相談した後、保健管理センターから学生に「健康相談」といった形で連絡を入れてもらう方法もある。また、保護者と面談する機会がある場合は生育歴等の話を聞くことも重要である。当人は知らず保護者のみが知っている事実もある。



〔質問〕障害のため入院した学生が退院後に休学した。この場合、どのように対処すればよいか？

〔回答〕学生に連絡する場合、定期的・継続的に行うのがよい。メールや電話に出ない学生が多いが、教員からの伝言やメッセージは必ず確認している。メッセージを残す場合は「次は2週間後に連絡します」といった言葉を残しておくのがよい。定期的に連絡を入れるなかで学生からふっと返信があることも多い。

〔質問〕指導する学生への対応に困難を感じた場合、教員はどこに相談すればよいか？

[回答] 学生相談所に相談してほしい。教員からの相談も受け付けている。

■事後アンケート

研修後に回収したアンケートは、以下の項目で質問を行った。

1. 本日の研修に関する感想をお書きください。
2. 今後のFD研修において取り上げてほしいテーマ等、ご希望がありましたら、お書きください。

1. 「大変勉強になりました」「特段の知見を得ることができず、少々期待外れでした。学生と真正面から向き合うことの大切さを、あらためて痛感しました。基本的に私たち教員は、講師の方と同様の役割を担うべきだと思っています」「勉強になりました」「今井先生の豊富な体験をおきかせ下さり、これまで漠然と感じていた学生の様子がだいぶはっきりしました。ありがとうございます。学生は年ごとに様相が変化しているようで状況を常に正確に把握していく必要を感じました。学生を育てるための特別な試みを考えたりすることも考える必要があるのかとも思いました。学生に対する思いやりと認めるということが大切であることを再認識し、今後の対応に活かしていきたいと思います」「具体的で有意義な内容でした」「学生とのコミュニケーションでストレスを感じる事が日頃から多いのですが、学生を認めること、思いやりや、育てるという意識が自分の側に欠けているのかな、と考えさせられました」「大変興味深く、役に立つお話でした」「たいへん興味深く、参考になった」「大変貴重な企画をありがとうございました。毎年といわないまでも、折々、繰り返し同様の研修会を開いていただく必要がおおいにあると思います」「有意義なお話でタメになりました」

2. 「発達障害」「本日のテーマで言えば、もう少し専門的なアプローチができる講師を選定してほしい」「発達障害、摂食障害」「発達障害に関する勉強会など、具体的な対応について」「同じテーマに関する続編を希望」「資料最終ページの鬱病についてのお話もうかがえる機会があるとよいと思います」

3. 第3回FD研修会

第3回人文学部FD研修会 初年次教育研修会

日時：平成21年11月27日（金）14:30～16:00

場所：人文学部大会議室

講師：帝塚山大学 岩井洋教授

演題：学生の日本語能力を向上させる教育手法

出席者：9名（人文学部教員8名、大学教育センター教員1名）

次第 14:35 開会 講師紹介

14:40 講演

15:40 質疑応答

16:05 閉会 アンケート記入依頼

第3回目となった11月27日（金）の人文学部FD研修会では、帝塚山大学の岩井洋先生をお招きして、「学生の日本語能力を向上させる教育手法」と題された1時間ほどの講演を拝聴した。その後、活発な質疑応答が交わされ、研修参加者各自が、本学部における「前期基礎セミナー」の課題についての理解を深め、また、有効な授業手法についての具体的知見を得ることができた。

岩井先生の講演は、近年、いずれの大学においても重要視されている「初年次教育」の現状と課題についての、新鮮な問題提起を含むものであった。岩井先生によると、「初年次教育」とは、本来、「新入生を高校教育から大学教育へと円滑に移行させ、大学生活への適応を促進する教育プログラムの総体」を意味するが、その際の重要な鍵を握っているのは、昨今の大学生にしばしば驚くほど欠けてい

る「日本語能力」の向上を図る教育手法である。なるほど、学生たちの日本語能力の低下を嘆き、その再教育のためのカリキュラムを初年次教育プログラムに織り込んだカリキュラムは、実際、すでに多くの大学において試みられてもいるところである。しかし、これが往々にして、単なる「リメディアル教育」すなわち「大学入学時に必要な学力が身につけていない学生のための補完的・補習教育」として短絡的に了解され、授業されてしまいがちであるところに、多くの初年次教育の停滞ないし失敗の原因がある、と、岩井先生は指摘された。「初年次教育」が単なる「リメディアル教育」として取り組まれてしまうと、教員の側はともかく、受講する新入生のあいだに、自分たちは「高校教育のやりなおし」をさせられているのだという意識が、どうしても生じてしまい、これが彼らのプライド（たとえそれが「根拠のない自信」に過ぎぬものであっても）をいたく傷つけてしまう。そのような授業によっては、「高校教育から大学教育への円滑な移行」という「初年次教育」本来の目的は、達成されるどころか、むしろ阻害されてしまいがちなのである。それゆえ大切なのは、学生たちに「高校のやりなおし」とは決して意識させぬ仕方（むしろ専門的学問の最先端の成果に触れているのだという「幻想」さえ抱かせながら）、一昔前であれば当然高校までに習得しておえていた「日本語能力・読解力」の育成を図るという、「頭のフェイント(head fake)」（ランディ・パウシュの表現による）に巧みな教育手法を、教員が意識的に身につけて、実践することである。

岩井先生は、以上のような趣旨の「初年次教育」論を、ご自身の豊富な実践の経験にもとづいて披瀝され、さらに、「アクティブ・ラーニング」「キーワード・ビンゴ」「ジグソー学習」「図解ワーク」「思考のモードチェンジ」「検索の鉄人」等々の授業手法についても具体的に教示してくださった。

講演後の質疑応答の場では、岩井先生の講演趣旨に呼応するかたちで、本学部教員の側から具体的な学生指導の経験談等が示された。学生の学力を見据えたシラバスのあり方、専門教育におけるサブ課題提示の有効性、卒業論文指導とキャリア教育の連関性などについて意見交換を行い、研修参加者にとって、自らの学生指導の基本を点検反省する、またとない貴重な機会が得られた。

第3節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加

平成20年度の大学教育機構主催FD研修およびFD講演会において、人文学部・人文科学研究科から参加した教員一覧は以下の通りである。

実施年月日	会場	研修内容	参加教員
平成21年8月10日	吉田	目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革	岩部浩三、富平美波、林伸一、山本真弓
平成21年8月24日	吉田	複数教員による効果的な授業実施の方法ー共通教育「心理学」における「リレー講義」の実践から	林伸一
平成21年8月31日	吉田	多人数授業における学生参画学習の工夫ー授業手法と評価ー	岩部浩三、林伸一
平成21年9月11日	吉田	DocuWorksの使い方	池園宏、富平美波
平成21年10月16日	吉田	Less is moreー効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考	田中均
平成22年3月25日	吉田	最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成方法	富平美波、林伸一

(以上名、のべ12名)

第4節 人文学部における学部学生むけアンケート

1. 概要

(1) 経緯

平成14年度以来、人文学部で実施してきた学部生むけ授業アンケートは、初年度は講義のみを対象とし、しかも記述式であった。翌15年度にマークシート方式へ変更、平成16年度後期からは、全学共通の質問項目を加えた。その後、平成17年度からは、講義のみならず、演習や講読もアンケート対象に加えて実施することとなり、現行の方式がほぼ確立した。そして平成18年度からは、それらアンケート結果を踏まえて、教員自己評価入力のうち1項目を学内ウェブ上で公開することとなった。

(2) 質問項目と実施をめぐって

人文学部の授業アンケートについては、質問Ⅰをマークシート方式、質問Ⅱを自由記述方式としている。そのうち、質問Ⅰのマークシート方式の質問項目については、講義用として全12項目、演習講読用として全11項目からなり、それぞれ5項目が全学共通のものとしている。

今年度使用した講義用質問項目は、次の通り。

1. あなたがこの講義を受講した動機のうち、該当するものを2つまで選んでください。
2. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。〈全学共通〉
3. あなたは、この講義において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか。総時間を平均し、講義1回あたりの時間に換算してお答えください。〈全学共通〉
4. この講義の時間外において、どのような活動をしましたか？いくつでもあげてください。
5. あなたは、この講義の内容を理解できましたか。〈全学共通〉
6. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか。〈全学共通〉
7. この講義を受けた結果、どのような変化がありましたか？該当するものを1つ選んでください。
8. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
9. この講義を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
10. この講義は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から促え直したりするきっかけになりましたか。
11. この講義の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか？
12. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。〈全学共通〉

今年度使用した演習講読用質問項目は、次の通り。

1. あなたがこの講義を受講した動機のうち、該当するものを2つまで選んでください。
2. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。〈全学共通〉
3. あなたは、この授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか。総時間を平均し、講義1回あたりの時間に換算してお答えください。〈全学共通〉
4. あなたは、この授業の内容を理解できましたか。〈全学共通〉
5. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか。〈全学共通〉
6. この講義を受けた結果、どのような変化がありましたか？該当するものを1つ選んでください。
7. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
8. この講義を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
9. この講義は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から促え直した

りするするきっかけになりましたか。

10. この授業の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか？

11. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。〈全学共通〉

なお、人文学部におけるアンケート実施にあたっては、集中講義、4年むけ演習や卒業論文、これらをその対象から除外することになっている。これらを除くと、今年度の開設科目数は前期が388、後期が384で、このうち実施対象とした科目数は前後期それぞれ188と184、このうち実際のアンケート実施数が前期165、後期149であったため、実施率は前期が88%、後期が81%となった。

第5節 その他のFD関連活動

山口大学内外において、全学や各学部のFD委員会が主催したものではないが、各種の研修会が開催されている。それらの参加状況については、当委員会としては掌握し切れていない。

第6節 FD実施経費報告

部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
人文学部	FD活動に資する参考資料の購入	図書	46,483	FD活動で活用する資料を購入し、今後の教育指導に資する。
	学生の日本語能力を向上させる教育手法	講師謝金・旅費	47,160	帝塚山大学の岩井洋教授を講師に迎え、学生の日本語能力を向上させる有効な授業手法についての具体的知見を得ることができた。
	その他	消耗品	6,357	
計			100,000	

* * * * *

平成21年度 山口大学人文学部FD部会

山本 真弓(座長) 井上 三朗 古荘 真敬 尾崎 千佳

第5章 教育学部のFD活動

教育学部においては、(1) FD 講演・研修会：「大学の学生教育（教員養成）におけるポートフォリオ活用方法とは」、(2) 教育改善 FD 研修会（グラディエーションポリシーとカリキュラムマップの見直しに向けて）、(3) 学生授業評価及び教員授業自己評価、を実施した。本章では、これらの活動について報告する。

第1節 教育学部FD講演・研修会報告

1. 講演概要

講師：信州大学教育学部附属教育実践総合センター・谷塚 光典 准教授

講演題目：大学の学生教育（教員養成）におけるポートフォリオ活用方法とは

内容：

- (1) ポートフォリオ評価手法の目指すものとその基本的考え方
- (2) ポートフォリオ評価手法の有効な利用のあり方（大学等における導入事例や活用のキーポイント等）
- (3) 大学教員のあり方や役割
- (4) 信州大学教育学部ポートフォリオを用いた「教職実践演習」の演習例

日時：平成22年3月10日(水)13時00分～15時00分

場所：山口大学教育学部 21 番教室

対象：教育学部教職員、ポートフォリオに興味のある方

参加者数：50名

主催：山口大学教育学部／共催：大学教育機構



2. 研修会のスケジュール

13時00分～14時00分：講演

14時00分～15時00分：質疑応答・議論、演習

3. 研修会の趣旨

中央教育審議会の答申等において、「学士力」や「高等教育における質の保証・向上」が提示され、質保証のための取組みが各大学で進められている。また、教員養成教育に関しても、「養成課程の質の確保をどのように行うべきか？」など資質能力向上方策の抜本的な改革議論がはじまろうとしている。

このような取組みや議論のなかで、学習成果の評価やキャリア支援、FD のための一手法として、学びの履歴を蓄積し、振り返りや他者との共有・協働に活用していくポート

フォリオが注目を集めている。ICT の効果的な活用が求められるなかで e ポートフォリオ（携帯電話やコンピュータを活用してポートフォリオを構築・再構成していく）の導入もいくつかの教員養成系



大学・学部で進んでいる。

本年度の教育学部 FD 研修会では「ポートフォリオ」に焦点をあてた。この分野で先進的な取り組みを実践されている信州大学の谷塚先生に、信州大学における取り組みを含めたポートフォリオに関する講演を頂いた。それに対する質疑応答・議論の後、さらに理解を深めるため、信州大学教育学部のポートフォリオを用いて、「教育実践演習」を模した演習を行った。これらの研修を通じて、山口大学の教員養成教育におけるポートフォリオの効果的な活用の可能性について議論した。

4. 実施内容報告

まず、講師より、教員養成におけるティーチング・ポートフォリオの活用方法について講演があった。

ティーチング・ポートフォリオとは、教師の授業実践に関する情報を蓄積・整理したものである（子どもたちの学習成果を含む）。近年、日本では中教審答申（「今後の教員養成・免許制度の在り方について」平成 18 年 7 月 11 日）や教職実践演習課程認定申請要領（平成 21 年度）などにおいて、教員を目指す学生の「履修履歴」の把握が求められるようになっている。その把握のためのツールとしてティーチング・ポートフォリオは非常に注目されており、導入する大学が徐々に増加している。

信州大学では 1 年次の教育臨床基礎や 3 年次の教育実習事前・事後指導におい e ポートフォリオを活用している。具体的には、アメリカの INTASC (Interstate New Teacher Assessment and Support Consortium)作成の教職スタンダードに則り、ポートフォリオを作成している。これは 1) Standard-based、2) Evidence-based の 2 つが特色である。前者は教師が有する資質能力の標準化、後者は証拠(evidence)をデジタル化するものであり、授業で学んだ内容（読んだ本、書いたノートのスキャンファイル、指導案など）を e ポートフォリオ上に蓄積するものである。近年、アメリカでも教師教育においてポートフォリオが広く用いられるようになっているようである。なお、信州大学では e ポートフォリオを学生間で相互閲覧し、評価を行っている。特に、3 年次の教育実習では、e ポートフォリオに指導案を掲載したり、教育実習リフレクションシートをアップロードして閲覧・評価させている。



以上の講演に対して、参加者からの質問とそれに対する回答は以下の通りであった

Q: 指導案のポートフォリオ上での共有は問題ないのか？

A: 現在のところは特に寄せられていない。当初、教育実習校の指導教員の先生方のなかには抵抗を感じる方もおられたので、現在は、パスワードをかけている。また、指導案の共有は後輩が丸写しすることが危惧されたが、紙媒体でも同じであるという意見もあった。

Q: 学部の先生方はどのようにポートフォリオにかかわっているのか？

A: リフレクションについては学部の先生方にもお願いしている。ただし、ポートフォリオ上に書き込んでもらうことは今のところ依頼していない。

Q: 諸外国でのティーチング・ポートフォリオの導入状況は？

A: フィンランド、デンマークでもポートフォリオを使用している。ヨーロッパでは lifelong

portfolio という考え方もある。

Q: 9年ほど継続され、導入以前と比べて学生のどのような力が変化したと思うか？

A: 1年生は単発ではなく年間を通じて附属学校に行き、ポートフォリオに記録するというを行っている。この方法を開始してからは「先生と子どものコミュニケーションをみる」などの観点をもって見学に行くようになったので、しっかりと振り返りができるようになったと感じている。

Q: Webポートフォリオは1年生と3年生の授業のみで使用されているが、教職実践演習では学部全体にこのポートフォリオを導入する予定か？

A: その予定である。ポートフォリオは全部の科目で作成する必要はないと思うが、教職実践演習は経験と省察の往還が大切なので導入する予定である。

Q: 友達同士のコメントだけでなく教員からの評価もWebに掲載されるのは当該学生にとって抵抗はないのか？

A: まだ教員からの評価をWebに掲載することは行っていない。ただ、5,6週間一緒に実習した学生が附属の先生からどう評価されたかを他の学生も読むことができるのはよいことだと考えている。

Q: 教育実習リフレクションシートに掲げられた10項目を事前に附属学校の先生方にもお読みいただいているのか？

A: 読んでいただけていない。そうすべきであると思う。

Q: 信州大学教育学部では1年次に専門科目がどれくらい入っているのか？

A: 1年生は共通教育がほとんどであり、専門は6-8単位程度である。うち4単位は臨床基礎である。臨床基礎ではポートフォリオを作成している。信州大学では1年生は松本市の本部で主に共通教育を受講し、その後長野市にある教育学部で専門教育を受講する。よって教育学部の教員による1年生の指導が難しいことが課題である。将来的にはeポートフォリオを活用して、長野市の教育学部から松本市の本部にいる1年生を指導する体制を実現させたい。

次に、学生が実際に記入したリフレクションシートを見ながら、コメントを考える演習が行われた。具体的には教育実習生（3年次）が作成した「教育実習リフレクションシート」を読んで、①学生が頑張っていること（下線）、②学生に今後頑張してほしいところ（波線）を引いて、所見を記入するというものであった。

なお、講師から、研究室・ゼミ・専攻・分野の学生にコメントするために以下のような内容を個々の教員が知っておく必要があるとの指摘があった。

- ・学生が目指す教師像や進路希望
- ・学生の授業外での活動・・・サークル、ボランティア等
- ・実習関連科目の構成・・・カリキュラムマップを作成し、カリキュラムや授業内容（他の先生の）を把握しておかないと良いコメントはできない等

最後に、以下の質問とそれに対する応答があった。

Q: リフレクションシートにはエビデンスが含まれていないが、どうしたらよいのか？リフレクシ

ョンシートには抽象的でいいことばかりが書いてあるが、もっと深まりを持たせるためにエビデンスとの照合を行わないといけないのではないか？

- A: 確かにそのとおりである。実習生は同じ実習グループ内(5,6人)でコメントをするのでコメントしやすいが、教員は確かに難しい。指導案だけではエビデンスが少ないので、ビデオなどもエビデンスとしてポートフォリオに含められたらよいと思っている。

第2節 教育改善FD研修会

1. 開催日時

平成21年11月11日(水) 13時30分～15時30分

2. 研修対象者

学務厚生部員及び各教室の教育課程作業部会部員

3. 趣旨

平成20年度には、各学部・研究科と大学教育センターが一体となって、グラデュエーション・ポリシー(以下GP)やカリキュラムマップ(以下CUM)、Webシラバスといった山口大学の教育改善の仕組みを全教員に理解していただくための研修会を開催した。本年度は大学の教育改革をさらに定着させ、組織的なFD活動を各部署で推進していくため、GP、CUM、Webシラバスの見直しや各学部・学科のカリキュラム内容について、大学教育センターと一体となって、教育改善を図っていくことを趣旨とした。従って、教育学部各教室のカリキュラム開発を担当している教員を対象とした教育改善に関わる研修を企画した。具体的には以下のような項目について確認し、意見交換を行った。今後、必要であれば、GPやCUM、シラバスの修正を組織的におこなっていくことを確認した。

確認項目

- ・ 策定してから2年以上経っているが、その間、組織改編や科目改編などに伴って、GPの見直しやCUMの修正が行われたか？
- ・ この2年間で既に閉講した科目や新規に開設した科目、内容を整理統合した科目等がCUMの中身に反映されているか？
- ・ 設置している科目間が有機的に連携された系統性のある科目編成が行われているか？
- ・ 科目間で内容の大幅な重複がないか？
- ・ GPやCUMの内容が所属する学生や院生に周知されているか？また、周知する方法を考えているか？
- ・ 履修する学生に分かりやすいように、学生の観点からシラバスが必要十分な内容が記載されているか？
- ・ 同様な系統の教育内容を取り扱っている他の教員のシラバスの内容を見て、自分のシラバスを見直したことがあるか？
- ・ カリキュラム全体やGP、CUMについて、外部からの評価を受けているか？
- ・ それぞれの学部・研究科で今後どのようなカリキュラム改善の予定があるのか？

4. 研修スケジュール

13 時 30 分～13 時 35 分 開催挨拶

教育学部学務厚生部・星野裕之教授

13 時 35 分～13 時 45 分 研修会の開催趣旨とスケジュール説明

大学教育センター長・岩部浩三教授

13 時 45 分～14 時 30 分 研修

5. 研修内容報告

(1) 改組や科目（カリキュラム）改編に伴う GP、CUM の見直し作業について。特に 4 年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育 GP を CUM に加えて再編成することについて、岩部センター長より説明があった。

(2) 現在の GP やカリキュラムマップに対するセンターからの気付きとそれに対する学部・研究科からの回答・意見交換を行った。センターからは、以下のような指摘があった。

教育学部全体について：丁寧で作られている一方で、文書フォーマットとの関係もあって、詳細な説明が読みづらいという印象を受けた。課程コースのものはカリキュラムの欄外に記述するなど、さらに見やすくなるような工夫が望まれる。大学教育センターとしてもフォーマットの変更を検討する。内部の教員向けの文書としては、詳細が望まれるのであろうが、外部向けの文書としては、全体像が分かるような書き方も必要ではないか。総合科目については、13 科目あり、多様な内容を学ぶことができる一方で、内容が個別的な印象を受ける。相互の関連性・結びつきについての記載があればなお良い。

各課程・コース・選修について：以下の点について再検討すれば、よりよいものになると考えられる。

- ・ CUM が未整備なところがあり、速やかな整備を求めたい。
- ・ マークした GP が同じか、かなり近い授業科目群がみられる。内容の似た授業科目が多いか、あるいは、GP の項目が少ないのではないかと、再検討を要する。
- ・ 到達目標の記載漏れについては、記載をお願いしたい。
- ・ 全ての GP に◎を付けている科目があるので、最も当てはまるものに◎を付す。
- ・ 到達目標と GP との関係が、分かりにくいものがある。十分説明されているか？
- ・ シラバスの到達目標と CUM の到達目標との関係が不明確なものがある。
- ・ GP が抽象的過ぎて評価が困難ではないか、外部から理解されるか？意識しておく必要がある。
- ・ どの GP にもマークしていない科目がないようお願いしたい。
- ・ 教育目的の中で人材育成に関する記述をしているところがあるが、具体像はわかるか？もう一度具体的に考えてみてはどうか。
- ・ GP が複雑すぎないか、また、評価可能なものとなっているか？
- ・ GP について、CUM と GP 表とで整合性はとれているか？
- ・ GP について、卒業時点で評価可能なものとなっているか？
- ・ 授業科目の編成と GP 内容との整合性・妥当性は良いか、検討しておく必要がある。

(3) 以上のことから、大学教育センターより、次のような要請があった。

1. カリキュラムマップのデータが古くなっているもの、授業科目等が現状に合わなくなっている部分について、更新作業をお願いしたい。
2. 教養教育 GP を CUM に取り組む一貫した学士課程への取り組みをお願いしたい。
3. 課程・コース・選修ごとに再度 GP や CUM の検討をしていただきたい。カリキュラム全体とその学習過程を把握できるフローチャートや、学生個人が学習内容と GP 達成状況を確認でき

る学習ポートフォリオの活用も検討いただきたい。

4. 各教員に対して、教員授業自己評価の入力をお願いしたい。学生授業評価の結果を閲覧し、授業について自己点検を行うことは、個人で行うFD活動の出発点である。これがなされると、授業改善のPDCAサイクルが回らない。100%の実施に協力をお願いしたい。

第3節 学生授業評価と教員授業自己評価の実施

教育学部では、学生授業評価と教員授業自己評価を実施している。基本的には全ての授業科目を対象とするが、卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習、等は対象外としている。学生授業評価及び教員授業自己評価ともに、アンケート様式は1種類のみで、全ての授業科目に対して、講義・演習・実験・実習などの区別をせず、同一のアンケート様式を用いている。アンケートの実施時期は、基本的には、授業の最終回（期末試験の前）に、授業時間の最後に行うこととしている。また、学生授業評価のアンケート回収数が5未満であった場合、教員にはそのアンケート結果を開示しないこととしているが、教員授業自己評価は入力を求めている。教員授業自己評価の実施時期は、前期開講分・後期開講分ともに年度末（2,3月以降）となった。2010年4月23日時点での実施率は、学生授業評価については、前期開講科目：84.1%、後期開講科目：84.2%、教員授業自己評価については、前期開講科目：19.9%、後期開講科目：22.2%であった。実施率について、前期と後期で差はないようであるが、学生授業評価と教員授業自己評価の間では、大きな差がある。特に教員授業自己評価の実施率向上に向けて、取り組みが必要である。以下では、それぞれの評価結果について教育学部全体の数値を示すとともに、気づきを述べる。

1. 学生授業評価の結果について

学生授業評価の質問様式は、10項目からなり、それらに対する回答を学部全体としてまとめたものが表1である。設問1及び設問2は学生の授業に取り組む態度を尋ねるものである。質問の趣旨は、学生が授業に臨む態度そのものを問題としているのではなく、学生が授業に積極的に臨むような授業づくりを教員が行っているか、すなわち授業内容や課題の設定を教員が工夫して行っているかについて、間接的に尋ねるものである。設問1の学生の出席状況については、9割以上の学生が80%以上の出席状況と回答している。設問2の時間外の学習状況については、授業1回あたり1時間程度以上の学習時間をかけているものも半数ほどいるが、一方で30分未満の回答の割合も多い。過去の学生授業評価の結果と同様に、時間外学習の時間が少ない傾向となっている。設問3と設問4は、授業の話し方に関する質問である。これらの質問項目については、約8割が肯定的な回答となっている。設問5と設問6は、教材やその提示方法について、設問7は学生への対応についての質問である。これらの質問項目についても肯定的である。設問8、設問9は授業の理解度・達成度を問う質問項目であるが、学生にとってみると、期末試験を受験する前の段階であるので、自分がよく理解しているかどうか、自分自身では判断できないという状況が回答に表れているのではないかと推察している。設問10は総合評価であり、およそ8割の回答で肯定的な結果となっている。

マークシートによるアンケート結果の中には、全ての回答に対して同じ番号を答えたもの（「全一致データ」と呼ぶこととする）が6%程度あった。表2に示したように、そのうちの殆どが、全て1を回答している。全一致データの中には、不確かなものも含まれていると考えられる。従って、回答1の数値については多少(5%程度)割り引いて捉える必要がある。また、前期・後期ともに、設問番号が進むごとに回答数が減少する傾向にある。

表1 「教育学部における学生授業評価の結果」

質問番号	質問文	前期	後期
【設問1】	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）	回答数 6,370	回答数 5,204
	【回答1】	90%以上（14回以上）	75.4% 73.7%
	【回答2】	80～90%（12回～13回）	18.7% 21.0%
	【回答3】	60～80%（9～11回）	4.7% 4.6%
	【回答4】	40～60%（6～8回）	0.7% 0.4%
	【回答5】	40%未満（6回未満）	0.5% 0.3%
【設問2】	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	回答数 6,370	回答数 5,198
	【回答1】	3時間程度または以上	11.5% 19.5%
	【回答2】	2時間程度	11.3% 13.5%
	【回答3】	1時間程度	16.7% 20.3%
	【回答4】	30分～50分程度	20.3% 18.3%
	【回答5】	30分未満	40.1% 28.3%
【設問3】	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？	回答数 6,366	回答数 5,203
	【回答1】	そう思う	47.5% 51.2%
	【回答2】	ややそう思う	31.2% 31.8%
	【回答3】	どちらとも言えない	13.7% 11.9%
	【回答4】	あまりそう思わない	5.3% 3.6%
	【回答5】	そう思わない	2.4% 1.5%
【設問4】	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？	回答数 6,370	回答数 5,206
	【回答1】	そう思う	45.3% 51.3%
	【回答2】	ややそう思う	34.5% 32.1%
	【回答3】	どちらとも言えない	13.5% 12.2%
	【回答4】	あまりそう思わない	4.5% 3.1%
	【回答5】	そう思わない	2.2% 1.2%
【設問5】	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？	回答数 6,349	回答数 5,202
	【回答1】	そう思う	44.4% 50.6%
	【回答2】	ややそう思う	30.0% 28.4%
	【回答3】	どちらとも言えない	15.5% 13.5%
	【回答4】	あまりそう思わない	4.7% 3.6%
	【回答5】	そう思わない	2.6% 1.4%
	【回答6】	この授業は該当しない	2.8% 2.6%
【設問6】	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？	回答数 6,354	回答数 5,201
	【回答1】	そう思う	40.7% 46.6%

	【回答2】	ややそう思う	27.5%	26.1%
	【回答3】	どちらとも言えない	17.7%	16.1%
	【回答4】	あまりそう思わない	6.1%	4.6%
	【回答5】	そう思わない	3.0%	1.7%
	【回答6】	この授業は該当しない	5.1%	4.9%
【設問7】	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？		回答数 6,350	回答数 5,202
	【回答1】	そう思う	41.7%	48.1%
	【回答2】	ややそう思う	29.9%	29.3%
	【回答3】	どちらとも言えない	20.9%	17.4%
	【回答4】	あまりそう思わない	5.0%	3.7%
	【回答5】	そう思わない	2.5%	1.4%
【設問8】	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？		回答数 6,345	回答数 5,194
	【回答1】	そう思う	25.7%	32.2%
	【回答2】	ややそう思う	38.0%	38.9%
	【回答3】	どちらとも言えない	27.5%	21.0%
	【回答4】	あまりそう思わない	3.9%	3.0%
	【回答5】	そう思わない	1.9%	1.4%
	【回答6】	答えられない	2.9%	3.5%
【設問9】	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？		回答数 6,343	回答数 5,188
	【回答1】	そう思う	31.1%	37.0%
	【回答2】	ややそう思う	43.9%	43.4%
	【回答3】	どちらとも言えない	17.2%	14.1%
	【回答4】	あまりそう思わない	5.3%	3.8%
	【回答5】	そう思わない	2.6%	1.7%
【設問10】	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？		回答数 6,271	回答数 5,112
	【回答1】	そう思う	43.7%	48.7%
	【回答2】	ややそう思う	33.2%	32.7%
	【回答3】	どちらとも言えない	15.5%	12.9%
	【回答4】	あまりそう思わない	4.7%	3.7%
	【回答5】	そう思わない	2.9%	1.9%
実施科目数			313	277

表2 「教育学部学生授業評価の回答における全一致データ（前期・後期を合わせたもの）」

	【回答1】	【回答2】	【回答3】	【回答4】	【回答5】	合計
件数	626件	73件	43件	1件	7件	750件
全数に対する割合 (全数:11,773件)	5.3%	0.6%	0.4%	0.0%	0.1%	6.4%

2. 教員授業自己評価について

教員授業自己評価の質問項目は、学生授業評価の質問項目に対応付けて設定している。学生から見た授業の評価と教員自身による自己評価との差が、どの項目でどの程度生じているか確認することでさらなる授業改善につなげていこうとする試みである。教員授業自己評価の実施結果は表3の通りであった。特に設問1, 2, 3, 5については、自己評価は極めて肯定的となっている。幾つかの解釈が可能であると考えられる。学部全体として今後のFD計画を立てる上で、2つの評価の差異の原因がどこにあるのか、その差異を解消する必要があるならば、そのためのFD活動として何が必要か、次年度以降のFD計画立案において検討が必要である。

表3 「教育学部における教員授業自己評価の結果（2010年6月5日時点でのデータに基づく。）」

質問番号	質問文	前期	後期	
【設問1】	聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？			
	【回答1】	そう思う	71.3%	62.9%
	【回答2】	ややそう思う	24.2%	31.7%
	【回答3】	どちらとも言えない	3.5%	4.8%
	【回答4】	あまりそう思わない	1.1%	0.5%
	【回答5】	そう思わない	0.0%	0.0%
【設問2】	専門用語や理論的な話をわかりやすく説明しましたか？			
	【回答1】	そう思う	71.3%	60.8%
	【回答2】	ややそう思う	25.3%	37.6%
	【回答3】	どちらとも言えない	2.2%	1.6%
	【回答4】	あまりそう思わない	1.1%	0.0%
	【回答5】	そう思わない	0.0%	0.0%
【設問3】	テキストやプリントなどの教材を効果的に使いましたか？			
	【回答1】	そう思う	61.2%	61.8%
	【回答2】	ややそう思う	24.7%	26.3%
	【回答3】	どちらとも言えない	6.7%	4.8%
	【回答4】	あまりそう思わない	2.2%	0.5%
	【回答5】	そう思わない	0.0%	0.5%
	【回答6】	この授業は該当しない	5.1%	5.9%
【設問4】	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどを効果的に使いましたか？			
	【回答1】	そう思う	46.6%	48.9%
	【回答2】	ややそう思う	24.7%	29.0%
	【回答3】	どちらとも言えない	14.0%	11.8%
	【回答4】	あまりそう思わない	2.8%	0.5%
	【回答5】	そう思わない	3.4%	1.6%
	【回答6】	この授業は該当しない	8.4%	8.1%
【設問5】	学生に疑問や質問の機会を十分に与えましたか、また対応は十分でしたか？			
	【回答1】	そう思う	61.2%	62.4%
	【回答2】	ややそう思う	25.8%	28.0%
	【回答3】	どちらとも言えない	10.7%	7.5%
	【回答4】	あまりそう思わない	2.2%	2.2%

	【回答5】	そう思わない	0.0%	0.0%	
【設問6】	学生は、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？				
	【回答1】	そう思う	49.4%	49.5%	
	【回答2】	ややそう思う	34.8%	38.7%	
	【回答3】	どちらとも言えない	12.9%	9.1%	
	【回答4】	あまりそう思わない	0.6%	0.5%	
	【回答5】	そう思わない	2.2%	2.2%	
【設問7】	学生は、授業の内容をよく理解できたと思いますか？				
	【回答1】	そう思う	48.9%	50.5%	
	【回答2】	ややそう思う	37.6%	37.6%	
	【回答3】	どちらとも言えない	11.2%	9.1%	
	【回答4】	あまりそう思わない	2.2%	1.6%	
	【回答5】	そう思わない	0.0%	1.1%	
【設問8】	学生は、授業の内容に満足していると思いますか？				
	【回答1】	そう思う	48.3%	47.8%	
	【回答2】	ややそう思う	36.0%	37.1%	
	【回答3】	どちらとも言えない	12.4%	10.8%	
	【回答4】	あまりそう思わない	2.8%	3.2%	
	【回答5】	そう思わない	0.6%	1.1%	
			回答数	178	186

第4節 FD実施経費報告

部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
教育学部	FD研修会	講師謝金・旅費 1名	70	大学の学生教育におけるポートフォリオの活用方法についての研修により、ポートフォリオに関する知識とその導入の意識が高まった。
	学生授業評価	封筒	6	学生授業評価を通じて、各教員が授業改善に取り組むための学生からの意見を伺うことが出来た。
教育学研究科	学生授業評価	封筒	2	学生授業評価を通じて、研究科における授業運営について改善に取り組む意識が高まった。
計			78	

第6章 経済学部のFD活動

第1節 平成21年度経済学部FD計画

平成21年度は経済学部のFD計画として、次の5点を掲げた。

- 1 ピア・レビューの実施
- 2 全学FD研修会への参加
- 3 授業評価の実施
- 4 教育改善FD研修会の実施
- 5 ゼミナール活動改善研究会

以下それぞれについて報告する。

第2節 ピア・レビュー

本年度は3授業（経済学科、国際経済学科、経済法学科）でピア・レビューを実施した。経営学科と観光政策学科には、大学院のピア・レビューをお願いした。

1. 経済学科

- 1) 科目名と担当教員名：公共政策論（2単位）仲間瑞樹先生
- 2) 開催日時：2010年12月17日（木）3・4時限目
- 3) 受講者数：13名
- 4) ピア・レビュー参加教員数：5名
- 5) 公共政策論の科目類型：各論1
(総論科目である財政学4単位を受講し、単位修得した学生だけが受講できる科目。)
- 6) ピア・レビュー参加者からのコメント

(コメント1)

- ①仲間先生は発声もよく、適度なスピードで話されるためとても聴きやすい授業でした。
- ②資料や板書も効果的に使用されていたと思います。
書き込み式のものを利用していたのもよいと思います。
- ③学生に答えさせるという双方向性をもった授業である点もよいと思います。
- ④本日のテーマは小職も関心を持っているものでした。

高福祉と経済成長の維持、勤労意欲の保持と負担の増加、バランスをとることが困難な問題ですが、解決を目指さねばならぬものであり、もっと多くの学生に聴いて考えてもらいたい事項です。各論Iのため、統計学を履修していないと受講できないというのは残念です。

(コメント2)

①講義

- ・聞き取りやすい声と速さで説明も丁寧でした。
- ・はじめに、授業の内容に関連する参考文献についての紹介とその内容の説明がありました。
- ・用語（略語）の説明がなされていました。
- ・学生が頭、手、耳、目を動かすような構成となっており、そのようなポイントとなる部分が90分の中で適度にちりばめられていました。（例えば、資料への書き込み、板書の活用、新聞の

黙読、学生の指名など)。

②配布資料

- ・レジュメ、新聞記事など様々な種類の資料を配布されていました。
- ・資料に空欄を設け、学生に記入させる仕組みがなされていました。
- ・レジュメ全体に、適度にスペースが設けてあることもメモを取るために良いと思いました。

③学生の態度

- ・レジュメの空欄部分への記入のほかにも、メモを取っている学生が多くいました。
- ・寝ている学生はいませんでした。
- ・学生がじっとして聞いているだけではなく、学生を動かす工夫が多いことで、学生も集中していたように見受けられました。

(コメント3)

- ①講義の進行が大変丁寧で、進行スピードが速すぎず適度である。
- ②学生がただ聞くだけに終わらないように、作業（黙読）の時間を設けたり、指名して答えさせたり、と展開が工夫されている。
- ③学生からの質問時間を講義時間内にとっている。
- ④教場の室温が低かったように思われる。(もしかしたら物理的に無理だったのかもしれませんが。その場合はご容赦ください。)

(コメント4)

- ①現在の公共政策について、最新の情報を交え、教員の豊富な知識と具体的でわかりやすい説明により、高度な内容でもわかりやすく聴講することができました。
- ②話し方の明瞭さ、板書の文字のみやすさとともに、豊富な最新の資料、さらに、資料に書き込みをさせるなど、随所に工夫がみられ、私の授業にも取り入れたいと感じるものが多々ありました。
- ③特に印象に残ったのは、高福祉・高負担型の社会保障政策と自由競争の原理が対立するものではないということについて、適切な資料とともに説得力のある説明がなされていたと思いました。
- ④現時点および近い将来の経済政策を分析するのに直接役立つ実践性も兼ね備えた優れた授業であったと思います。

7) 担当教員からのコメント

ピア・レビューに参加された教員の先生方からは、過大なコメントをいただき大変恐縮すると同時に、講義をよりよくするための努力をさらに続けたいと考えています。以下は担当教員によるコメントです。

- ・今回の講義では 90 分の時間内で経済財政諮問会議の概要、そこで議論されたトピックを解説し、そして現政権の政策決定メカニズムをリンクさせて講義しました。しかしトピックが幅広い内容を含むため、90 分という時間では深入りできない点が現状です。経済財政諮問会議について概観するような講義形式になったため、学生によっては退屈感を覚えてしまった人もいたかもしれません。
- ・受講学生が 3・4 年生中心であり、財政学の単位を修得している人が対象のため、経済学などの基本的な言葉に関する説明はスキップしました。今後、受講者が多くなる、あるいは様々な学年の学生が出席するならば、基本的な言葉の説明なども丁寧に行う必要があります。
- ・各論 1 の講義であるため受講生が少なく、教室内では、ある程度の緊張感が保たれているように思います。もちろん受講生が増えてくるにつれて、学生の集中力を高める他のアイデアが必要になるかもしれません。

8) 当日の配付資料

2009年12月10日 公共政策論(6)「小さな政府・構造改革の再考(2)」

1: 竹中 平蔵氏による民主党政権の評価から

経済政策を練るにあたって必要な点

- ①マクロ経済と財政の一元管理
- ②政策相互間の整合性の確保
- ③特定の省庁だけではできない政策を総理のリーダーシップの下で実現

小泉政権時では

(1) _____ が経済政策と財政を一元管理

経済財政諮問会議 → 経済財政の基本方針(骨太方針) → 省庁での予算編成

鳩山政権では

国家戦略室 → 経済政策・財政の方向性を決定

行政刷新会議 → 財政のスリム化

政務3役・省庁での

予算編成

(おそらく) 国家戦略室 → 小泉政権時の経済財政諮問会議に相当

なぜ民主党政権では「経済財政諮問会議」を廃止し、その代りに「国家戦略室」を新たに設けたのだろうか?

2: 経済財政諮問会議とは?

経済財政諮問会議とは、どのような組織であったか?

経済財政諮問会議とは?

「経済財政政策に関する重要事項について、有識者の優れた識見や知識を活用しつつ、内閣総理大臣のリーダーシップを十全に発揮することを目的として、内閣府に設置された合議制機関。」平成13年1月6日、第2次森改造内閣以降、機能している合議制機関。

特色は?

(2)

構成員は?

議長(内閣総理大臣)及び10名の議員、計11名以内に限定。

民間有識者の人数を、議員数の4割以上確保することを法定。

議案を限って、他の国務大臣を「臨時議員」として会議に参加させることができる。

注意点

議員は内閣官房長官、経済財政政策担当大臣は法定。

残りのメンバーは、

- ・各省大臣のうちから、内閣総理大臣が指定する者
- ・法律で国務大臣をもってその長に充てることとされている委員会の長及び庁の長のうちから、内閣総理大臣が指定する者
- ・上の2つに定めるもののほか、関係する国の行政機関の長のうちから、内閣総理大臣が指定する者
- ・関係機関(国の行政機関を除く)の長のうちから、内閣総理大臣が任命する者
- ・経済又は財政に関する政策について優れた識見を有する者のうちから、内閣総理大臣が任命する者

2009年8月時点での構成員(合計11名)

内閣総理大臣、内閣官房長官、経済財政政策担当大臣、総務大臣、財務大臣、

経済産業大臣、日本銀行総裁、民間有識者(4人)

任命された議員の任期は (3) _____ である。

所掌事務は？

「(1) 内閣総理大臣の諮問に応じて、経済全般の運営の基本方針、財政運営の基本、予算編成の基本方針その他の経済財政政策に関する重要事項についての調査審議」

「(2) 内閣総理大臣又は関係各大臣の諮問に応じて、国土形成計画法に規定する全国計画その他の経済財政政策に関連する重要事項について、経済全般の見地から政策の一貫性・整合性を確保するための調査審議」

「(3) 上記 (1) (2) について、内閣総理大臣に意見を述べること」

特色は？

(4)

また経済財政諮問会議の事務局の動きも、意思決定に大きく反映される。

経済財政諮問会議の事務局機能は？

「(1) 内閣府の内部部局のうち、経済財政政策に関する総合調整を担当する政策統括部門が、事務局機能を担う。」

「(2) 同部門には、行政組織の内外から人材を登用する。」

「(3) 経済財政諮問会議が有効に機能するため、内閣府と内閣官房の連携を図る。」

上記の事務局機能について考えられる問題点は何か？考えてみよう

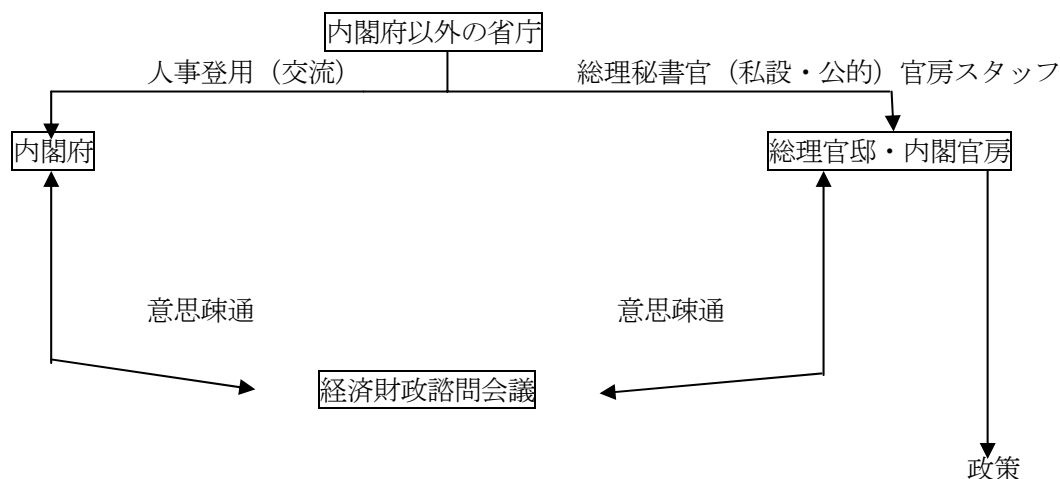


図 1：各機関同士の力学関係

3：経済財政諮問会議で取りまとめていた主な文書等（経済財政諮問会議 HP から）

・骨太の方針(経済財政改革の基本方針)

経済、財政、行政、社会などの分野における構造改革を進めるべく、構造改革の重要性とこれからの日本の進むべき道を示すものです。総理大臣から諮問、諮問会議において答申され、閣議で決定されます。(※骨太の方針 2006 までの正式名称は「経済財政運営と構造改革に関する基本方針」)

・予算の全体像

予算編成のスタートの段階から、歳出の見積もり、重点分野への予算の配分、予算の背景にある制度改革の基本設計など全体像を示したものです。諮問会議において策定されます。

- ・予算編成の基本方針

政府の予算編成作業に先立ち、骨太の方針を踏まえ、予算の基本的な考え方を明らかにするものです。

- ・進路と戦略

日本が目指すべき経済社会の姿と、それを実現するための経済財政運営の中期的な方針を示すものです。2007年1月、従来の「改革と展望」に代わるものとして、新たに策定しました（閣議決定）。今後、経済や財政の状況変化や新たな政策対応の必要性等に適切に対応するため、毎年度改定することとしています。

4：なぜ経済財政諮問会議は廃止されたのだろうか？

人的資源の観点から

(5)

民間有識者が政策に対して最終責任をもてるのか否か？

政治主導を強調するために民間有識者を排除

合議制機関という観点から

(6)

経済財政の方向性を与えるために、閣僚・民間有識者そして省庁間の調整に手間取る。

迅速かつトップダウンによる案件処理、首相との距離を近くするために、合議制機関形式の経済財政諮問会議を廃止。

2. 国際経済学科

1) 実施内容

日時：2009年12月18日（金） 5・6時限（12：50～14：20）

場所：経済学部 C-201 教室

科目：東南アジア経済論（2009年度後期）

担当者：石川耕三

2) 参加者

河野眞治教授、吉川信将准教授、仲間瑞樹准教授、梶原健佑講師

3) 参加者から寄せられた意見

下記はご参加頂いた先生方から頂戴した意見を、報告者が要約したものである。

良かった点

- ・声も通り、早口にもならず聴き取りやすい。
- ・豊富なデータ・資料が用意されている（最初に上映するビデオが良い）。
- ・1回で扱う内容が適当である。

悪かった点

- ・パワーポイントの文字が小さく画面で確認できず、配布資料でも確認できない。
- ・授業中、パソコンの画面を向いていることが多く、生徒の方を見ていない。
- ・内容が難しすぎるのではないか。
- ・後席の学生が授業に参加していない様子が見受けられた。
- ・スライド中の要点が見分けづらい。

4) 報告者による今後の改善方針

- ・できるだけ学生の方を向いて講義を行う（学生に語りかけるようにする）。また、適宜感想表などを

配布して、学生の疑問点や興味を持った点などをのちの授業において取り入れる工夫をする。

・細かくて見づらい資料（図表）はできるだけ用いない（スライド中において）。細かい場合、授業用に簡略化したものを作り直す。また、講義中の要点となる部分は、赤字などにして注目をひくようにスライドを作成しなおす。

・配布資料では、覚えてもらいたい重要なところをカッコにして、授業を聞きながら穴埋めできるように作成しなおす。

3. 経済法学科

実施日時：平成 21 年 6 月 29 日 8:40～10:10

授業科目：商法 I（総則・商行為）

担当教員：吉川信将（経済法学科准教授）

実施教室：経済学部第二大講義室

参加教員数：4 名（担当教員除く）

授業内容：「仲立」と「取次」ほか

投影・配布資料：別紙

授業の概要：商法中、「商行為法」に分類される領域から、「仲立」と「取次」という他人間の商行為を媒介等する行為及び「運送取扱い」につき、パワー・ポイントを用いて解説。パワー・ポイントはスクリーン及びディスプレイに投影するだけでなく、スライドを印刷したものを資料として配布。また、今回の授業範囲に関する事例として、証券会社を通して証券を買い付け、代金を支払ったものの、株式の引渡を受ける前に当該証券会社が倒産した事件を取り上げ、判例を用いて説明を実施。

I. 担当教員が授業の実施にあたって工夫していること。

① 受講者数が極端に多くならないようにする。

昨年度は、400 名弱の履修登録者がおり、授業中の私語等が目立ち、それを注意するため度々授業を中断することが少なくなかった。その原因の一つが出席を取り、成績に反映させるということにあるとの指摘があった。本来ならば、真面目に出席している学生に有益なはずであるが、ここでは出席していれば試験が駄目でもある程度加点してくれるに違いないという甘えを生み、真摯に授業を聞く意欲のない学生までが履修登録し、密集して着席する結果、私語を生みやすくする土壌を作るという予想外の結果となってしまった。本年度はやむを得ず、出席を取らないという方針を打ち出したところ、登録数は 70 名程減少した。その結果、試験用ナンバープレートのある席だけに着席させて、隣との間隔をあけることが可能となり、授業中の私語や携帯のメール使用が激減した。

② 授業の双方向性を確保する。

法律の授業、しかも大人数の授業では、教員が一方的に話すだけとなりがちである。そこで、授業中に歩き周り、学生に質問するよう心掛けている。大講義室ではあるが、ワイヤレスマイクが備え付けられていることと、ポインターがある程度の距離ならスクリーンまで届き、パワーポイントのスライドをめくることができるので可能となっている。

③ スライド等の活用

2 単位の授業で一定の範囲をまとめるのは難しく、特に法律の授業で板書を多用すると、教員は板書に終われ、学生は筆記するのに追われることになりがちである。そこで、予め板書に代えてパワーポイントを用意し、板書時間、学生が筆記に要する時間を省くことができるようにしている。また、文章のみでは理解が難しい事項に関してはできる限り図解するようにしている。

II. ピア・レビュー参加教員のコメント（抜粋・要約）

- ① 出席者が多いが私語がほとんどない。
- ② 機器を活用して分かりやすくすることに心掛けている。
- ③ 双方向性を確保しようとしていることが分かる。
- ④ 条文にあたる項目とそうでない項目とがあつたが、その区別が判然としない。
- ⑤ レジュメが詳しすぎ、メモを取る学生がいない。レジュメにない事項も投影するなどして、筆記作業をさせることも必要ではないか。

Ⅲ. 上記Ⅱのコメントに対する回答および反省点等

- ① 本年度は、大人数でも授業が成り立つ環境を構築することに力を注いでいる。私語がなくなったのはよいが、その結果、双方向性の確保に必要な自由な発言が生まれにくくなっているのではないかと懸念がある。本日は、2人にしか質問しなかったのもマイナス。日常的に学生に問いかける姿勢をもっと前面に出し、聞くべきところは静粛にして聞くが、発言するときは積極的に発言するという理想形にいささかでも近づけていきたい。
- ② レジュメが詳しすぎて、学生が書く作業をしないという批判はもっともである。以前、板書を交えながらやってみたが、一々スクリーンを上げ、照明をオンにしないとならず、また、字を大きく書かないと最後尾から読めないということがあり、併用は難しいのでパワーポイント中心の授業になっている。来年度から可能であれば、パソコンを2台にし、画面を切り替えながら、板書に相当するものも組み込んでいければと思う。
- ③ 今回の授業は、時間配分を誤り、内容も詰め込みすぎであった。そのため、条文を確認する事項とそうでない事項が出てきた。また、判例の解説も中途半端になってしまった。
- ④ 今回は、基礎ゼミが次のコマにない週であったので、学生からの質問に答えられたが、前回の授業では基礎ゼミが次のコマにあったため、相談に来た学生に出直してもらった。欲を言えば、他大学で実施しているところもあるようだが、休み時間を15分に拡大してもらいたい。大講義室での授業終了後は片付けと次の授業の用意のため10分では窮屈である。
- ⑤ ピア・レビューの実施日時が月曜の朝一番で、かつ雨に見舞われるという最悪の条件であった。次回は、参加者を確保しやすい日時で実施したい。
- ⑥ 学生の反応が鈍い。細かいことではあるが、受身の学生が多く、また人前で話したがらない学生が多い。これが克服されないと双方向性の実現は難しそうである。教室の暑さ・寒さ等に関するクレームさえ、必ずといっていいほど授業後、個人的に伝えてくる。本日は、蒸すことが予想されたためにエアコンを利用したがこちらは立って歩きながら講義をしているため、教室内が涼しくなりすぎていることに気がつかなかった。

第3節 全学FD研修会への参加状況

全学のFD活動の方針が全ての教官が毎年何らかのFD活動に参加すること、と変わり、必ずしも全学のFD活動にこだわらなくなったので、今年度の参加者数は1名に留まった。自主的に参加教官の数は把握していない。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成21年度の学生授業評価アンケートの経済学部実施率を「履修登録者あり」の授業科目に対する比率で見ると89.5%となっており、昨年の92.1%より低下した。また教官の自己評価は13.7%と極端に低くなっており、こちらは制度の見直しが必要となっている。

第5節 教育改善FD研修会

日時：平成21年11月4日(水) 13:30～15:30

場所：経済学部会議室

参加者：13名（内訳）：教務委員長、大学院運営委員長、評価委員長、教務委員、大学院運営委員、評価委員 合計9名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、木下真）合計4名

研修内容：

本年度7回目の教育改善研修会を経済学部の教務委員長、大学院運営委員長、評価委員長、教務委員、大学院運営委員、評価委員を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。GPやカリキュラムマップ(CUM)は作成時点から時間が経過しており、学科改編や科目(カリキュラム)改編の内容をこれらに反映させる必要がある。特に4年間一貫の学士課程教育を意識して、CUMに教養教育GPを加えて更新する作業の依頼が経済学部各学科に対して行われた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在公開している経済学部のGPやCUMを学外者として閲覧した場合の意見や疑問点が述べられた。ここでは経済学部全体としてはいずれの学科のCUMもおおむねわかりやすく記述されているが、GPやCUMの内容や表現、学科や課程の構成についてわかりにくい点があるとの指摘がなされた。これに対して、各委員からは様々な意見が述べられ、活発な議論が行われた。ここではGPと到達目標との直接的な関連性がわかりにくい(GPと到達目標の間を科目が介在するならばわかるが、両者の直接的な関係はあるのか)、GPの達成度の客観的評価は実際には可能なのか、公開しているGPとCUMの読者は誰を想定しているのか、履修順序を限定しない科目が多い場合はカリキュラムフローチャート(CUF)で示す意味がないのではないかなどの質問や意見が出された。特に経済学部では入学後(2年生時)に学生の所属学科を決めるため、現在のGPやCUMを受験生や保護者に公開するよりは、もっと単純でわかりやすい別の形で示した方が理解しやすいのではないかといった意見が出た。

第1部の研修は前述のような活発な議論がなされ、予定していた第2部のワークショップの時間を変更して議論のための時間として用いた。そのため、第2部のワークショップは本研修の時間中には実施できなかったが、GPやCUMに関する各委員の理解は十分に深まったと考えられる。研修終了後にCUMを検討するための機材を各学科の委員に手渡し、各学科でCUMを更新する際に使用してもらうことになった。

今回の研修会で様々な議論がなされたことによって、今後組織的なFD活動を推進する上で有意義であったと考えられる。



第6節 ゼミナール活動改善研究会

【担当者】鍋山祥子准教授、古賀大介准教授、野村淳一准教授

【開催日時】2010年3月11日（木）15:00～16:30（17:00まで延長実施）

【開催場所】経済学部A棟1階第3会議室

【参加者人数】11名

（河野（眞）先生、植村先生、馬田先生、兵藤先生、河村先生、有村先生、藤田（健）先生、朝水先生、+担当者3名）

【研修スケジュール】

1. 平成21年度演習に関するFD研修の趣旨・活動内容・経済学部教員に対するアンケート結果について（報告者：鍋山准教授）
2. 卒業論文の質向上に関する教務委員会での取り組み状況と今後の課題について（報告者：野村准教授）
3. 意見交換

【研修での意見交換の概略】

◎卒業生の連絡先把握状況について

アンケートの結果からも卒業時点での連絡先（メールアドレス・住所等）は比較的把握されている。携帯電話の番号を把握しておく（番号は基本的に変わらないので）連絡先把握に有効であるというアドバイスがあった。データベースを構築し、卒業生各自に更新させているゼミもある。卒業生は月に2～3名、訪ねてきているが、在籍ゼミ生と交流を持つようなことはしていない。卒業生同士での横のつながり（mixiなど）は生きているが、教員が積極的に連絡を取ることはあまりしていない。同窓会担当を決めて、定期的に全体同窓会をしているゼミもある。ゼミ指導においては、むしろ4年生と2年・3年生との関係を構築することを重視している。

◎ゼミ生の上下のつながりの構築について

連続してゼミを取ると、慣習として先輩が後輩の面倒をみる。就活の話も先輩と後輩が直でしている。ただし、そのためには2年生ゼミと3年生ゼミを45分くらいオーバーラップさせる日をつくるなど、日常的な人間関係の構築が必要である。単純に同席しているだけでは人間関係は育ち難いので、教員が紹介してあげる形を取ることも有効である。ゼミ合宿や全体での忘年会などを開催しているゼミも多い。先輩としての自覚が、おのずから自意識＝自信につながる部分も重要である。そのためには、3年生は2年生の不十分な点を指摘する役割であることを植えつける作業が必要である。今の学生は絶対に批判をしないという傾向がある。ある程度面識があり、良好な人間関係が前提にないと上手く機能しないので、やはり日常的な人間関係の構築が大切である。そのためにはゼミの規模は小さい方が望ましい。男女比のアンバランスがあるとゼミ運営が難しいケースがある。ゼミ生の上下のつながりを構築するには、やはり就職活動に関する情報を介することが有効である。

◎ゼミと就職活動の支援について

いろんなゼミがあってもいいが、就活などのスケジュール管理（タイムキーパー役）など必要最低限のことは必要である。社会人を付けることが大学運営の大きなポイントになってくるという自覚も必要である。インターンシップの重要性が近年大きくなっている。一方で経済的に余裕のない学生が増えており、交通費やホテル代などの自己負担の問題に留意しなくてはならない。インターンシップに関しては、リクナビなどで学生が直接選んでいるケースが多く、かつ有効である（インターンシップが就職に直結している場合もある）。ただし、インターンシップにも色々なものがあり、1日限りのものはあまり有効ではないものが多い。3日以上のものであることが大切である。インターンシップの応募プロセス自体が良い就職活動の訓練となっているし、インターンシップを経ることで就職意識が向上し、学生の言葉使いにも変化がある。就職した後に不適應でやめるよりは、インターンシップで経験させた方がいい。出来るだけ早めに他大学の学生と交流を持たせるということも大切である。

就職活動にノンビリしている学生もいるので、最初は危機感を高めるようにし、最後には自信を持たせるようにすることも重要である。

就職活動中、ゼミができないので、夏休みにゼミ合宿をやっている。ゼミの中で就職活動に役立つような内容を盛り込んでいるゼミもある。インターンシップの報告会をさせたり、就職体験記を話させたりすることも有効である。

◎ 卒業論文の質向上について

3年生には「卒業論文認定」を出す方針が教務委員会で議論されている。これについて、やる気がある学生にはいい制度だが、やる気がない学生への対応は別途すべきとの意見があった。就職（企業）についてゼミ授業をしているので、卒論のテーマとしては使えずに、卒論が深まらないという問題もある。他のゼミがどのような活動をしているかブラックボックス化しているので、ピアレビューや討論大会などを活性化させる必要があるのではないかと。ただ現在はゼミ連が弱体化しており、早急な対処が必要である。

卒業論文については、コピー的なものを追放することが難しい。対策として、「ゼミノート」を作って、ゼミでの議論・論点をまとめさせているが、なかなか自分で考えたものになっていない。自分で書く論文であり、動機が大事である。論文の題材を決めるのに時間がかかっている。webではなく、文献を読ませて、論文を書かせることが大切であるが、最近の学生は本を読まなくなっている（でも、本は読ませないといけない）。ゼミ報告の際、コメントを書かせてゼミ生同士で評価させることで、読む力と書く力を育てている（人間関係の構築も重要）。輪読の場合も、一人一人に読んでこさせるしかけをすべきである（用語を一人ずつ確認する）。

討論大会で、論文の書き方の実効性が高まるので活用すべきである。討論大会では、論文準備で、本を読んだり論文を書いたりという力が育つ。全国大会は、学外のゼミとの交流ともなり有効性が高い。しかし討論大会の参加に対する金額補助がないのが問題である（他大学の多くは交通費や宿泊費が全額補助されている）。

グループ作成による卒業論文には反対の意見が何名かから出された。題材は共通でも、論文を書くのは個人の方が適切である。グループ作業自体は有効かもしれないが、書き方を知らない学生の指導が重要である。懸賞論文に入賞したら卒業論文として認定するなどのインセンティブも必要ではないか？出来るだけ学生の意識を外に向けることも大切である。

①ゼミの時間、発言のない学生をちゃんとフォローする、②教育的に批判できるように指導する、③全体の時は批判して、個人的にはほめる、など卒業論文の作成に向けて丁寧に指導していくことが大切である。意欲の低い学生も見られるので、元気な学生をどうやってつくるかが課題である。卒業生はよく頑張っていることにも目をむけるべきである。

第7節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
経済学部	ピア・レビューの実施	図書	30	授業方法に関する図書を資料として活用し、授業方法に関する理解を深めた。

	ゼミナール活動研究会	通信費	16	演習に関するFD研修として、卒業生を含めた演習に所属する学生の世代を超えたつながりの構築の可能性を探るため、経済学部教員に対する演習運営についてのアンケートを実施し、その結果報告会を開き、意見交換をおこなった。
		交通費	30	
		印刷費	5	
経済学研究科	ピア・レビューの実施	図書	20	授業方法に関する図書を資料として活用し、授業方法に関する理解を深めた。
計			101	

* * * * *

平成 21 年度経済学部評価委員会委員

仲間瑞樹 渋谷綾子 澤喜司郎 吉川信將 陳禮俊 河野眞治 (委員長)

第7章 理学部のFD活動

平成21年度、理学部FD委員会においてFD計画を立案、学部全体あるいは各学科・コースで実施した。その立案に先立ち、5月8日に開催された各学部・研究科FD推進者のため研修会に理学部FD委員長が参加し、全学の計画を把握した後、5月13日に開催の理学部FD委員会において、次のような計画を策定した。

教育機構主催の講演会・アラカルト研修会・・・関係教員が個別に参加する

教育機構からの講師派遣で行う学部・学科のFD講座・・・希望学科・コースで行う

教育改善研修会（AP, GP, カリキュラムマップの点検）・・・10～11月に大学教育機構と連携して実施する

学科・分野ごとのピュアレビュー等の計画・・・例年通り学科・分野で企画実施する

学部独自の企画

- ・高大連携FD活動（高校の授業を参観；理学部の授業を高校教員にレビューしてもらう）の試みをはじめることとし、県立防府高校と連絡協議する、高校教員等による大学の授業参観は可能な学科・コースで行う
- ・第三回中国四国理系学部教育改善集会へ参加し交流を図る
- ・他大学から講師を招いて、教育改善に関する講演会を開催する
- ・生物系の野外実習指導に関するFD研修会を開催する
- ・カリキュラムの点検活動を学科毎に進める

以下、学部の取組について記述する。

第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

1. 数理科学科のピア・レビュー

（1）実施科目「数理科学基礎セミナー」

日時：平成21年11月30日（月）7・8時限

対象学生：数理科学科2年生（50名）

担当教員・レビューア、場所は下表参照

グループ	授業担当教員	レビューア	教室
A	久田見 守	木内 功	14番教室
B	菊政 勲	増本 誠	解析実験室
C	宮澤 康行	中内 伸光	代数実験室
D	廣澤 史彦	吉村 浩	国際地域交流企画室
E	幡谷 泰史	安藤 良文	幾何実験室

（2）授業の目標・概要

この授業は数理科学科の2年生に対する授業である。90分間のテストを行い、次の週に約10人ずつの6つのグループに分かれて、セミナー形式でテストの内容について担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていく。

(3) レビューシート

レビュアーには予め準備したレビューシートを渡し、それに記入してもらう形をとった。レビューシートは別記の通りである。

(4) レビューの結果

いずれのグループに対しても各レビュアーより「4」ないし「5」の評価があり、概ね効果的なセミナーが行われていたと判断できる。

レビューシートの自由記述欄には下記のような報告があった。

(優れた点)

- ・難易度に応じた時間配分を行っていた。
- ・発表者が解答を導けるように誘導的な指導を行った。
- ・理解度の把握を確認するための的確な質問を行った。
- ・板書を書き写すための時間を与えていた。
- ・指名された学生が黒板に答案を書いている間、着席している学生の間を回って様子を観察し、適切な助言を与えていた。
- ・黒板に書かれた学生の答案と本人による解説に対し、学生をあまり傷つけないよう配慮しながら、的確に問題点を指摘していた。
- ・10人ほどの学生に手際よく指示を与え90分間滞ることなく授業が進められた。
- ・プリント問題の解説だけでなく、関連する基本事項を確認し更に補足・発展問題を提示するなど、学生の興味を促す適切な指導がなされていた。
- ・90分を通して静穏な環境で進められた。学生とは時折談笑を交えたやりとりがなされるなど、質問しやすいような和やかな雰囲気づくりがなされていた。
- ・全体として、微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解習得し、様々な問題を解決できる力を養うという授業科目の趣旨に則った授業がされていた。
- ・難易度に応じた時間配分を行っていた。
- ・発表者が解答を導けるように誘導的な指導を行った。
- ・理解度の把握を確認するための的確な質問を行った。
- ・板書を書き写すための時間を与えていた。
- ・学生が主体的に授業を作っていく講義の形態を採用しており、学生には参加しやすい授業である。
- ・学生の発表中には、適宜、数学の論理的な表現に関する助言が与えられて、プレゼンテーション能力の育成に効果的であった。

(改善点)

- ・問題量がやや多すぎたように思われる。
- ・個々の学生にもう少し時間をかけてはという場面もあったが、しかしこれは時間と学生数の制約上やむを得ないと思われる。当該クラスの運営の問題ではなく、この授業科目自体の改善点である。
- ・学生が主体的に進める発表形式であるので、授業時間を有効に活用するために、学生の発表時間の配分にやや配慮が必要である。

以上のレビュー結果を担当教員およびレビュアーのみならず、数理科学科の全教員が共有し、今後の授業改善に参考にすることとした。

数理科学基礎セミナー ピアレビューシート				
実施年月日	21年11月30日	実施クラス		レビュー実施者
<p>授業の目標:微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解し、様々な概念の運用方法を習得する。それらの概念の理解をもとに、数学や理系分野における様々な問題を解決できるような力を養う。</p> <p>授業の観点:【知識・理解の観点】基礎的な知識を組み立て、新しい定義や概念を理解してそれらの正確な運用や数学的手法に習熟する。 【思考・判断の観点】論理的な思考過程を通して、問題に取り組むことができる。理解できた部分と理解できない部分が明確に識別できる。 【関心・意欲の観点】何事にも興味をもち、自ら進んで新しい概念に取り組むことができる。理解できない部分を理解できるまで考え抜く集中力と忍耐力をつける。 【態度の観点】新しい概念を知り、驚き・喜びを感じ、感動を覚えることができる。 【技能・表現の観点】自分の思考過程を正確に人に伝えることができる記述の方法を身につける。</p> <p>授業の概要:プリント演習を通じて、微分積分学、線形代数学の基礎の理解度を深めることを目的とする。 数名のグループにわかれて、指導教員による個別の指導により理解できない個所やあいまいな点をはっきりさせ、数学の理解の仕方を学ぶ授業である。次のような形式で行う。 (1) 少人数グループに分け、各グループに指導教員を割り当てる。指導教員は最初の授業時に決定する(原則として)。 (2) 微分積分学、線形代数学の基本的な問題を中心に用意されたプリントを授業時に解く。そのプリントはその授業時に提出し、採点后その週に返却される。 (3) 返却されたプリントについて、各自独力で誤りを訂正できる部分は訂正して、指導教員と決められた時間にセミナーなどで理解を深める。 (4) 最後の授業に試験を行う。</p> <p>0. 判断できない 1. ほとんどできていない 2. ややできていない 3. ふつう 4. だいたいできている 5. 十分できている (Q6においては「できた」を「効果的と思う」と考えてください)</p> <p>Q1. 『「知識・理解」の観点から、学生にとって、プリントの問題内容が適切なものになっていますか。該当すると思われる番号をそれぞれ記入してください。』</p> <p><A></p> <p>Q2. 『「思考・判断」の観点から、学生が数学的な思考や判断を養う状況が設定されていますか。該当すると思われる番号をそれぞれ記入してください。』</p> <p><A></p> <p>Q3. 『「関心・意欲」の観点から、学生が学習内容を発展・応用する意欲を持つことができる対応がなされていますか。該当すると思われる番号をそれぞれ記入してください。』</p> <p><A></p> <p>Q4. 『「技能・表現」の観点から、学生が学習内容あるいは自分の意見を適切に表現できるような導入が行われていますか。該当すると思われる番号をそれぞれ記入してください。』</p> <p><A></p> <p>Q5. 『「態度」の観点から、学生が積極的に授業に参加する環境が維持されていますか。該当すると思われる番号をそれぞれ記入してください。』</p> <p><A></p> <p>Q6. 『学生にとって、この授業の授業内容あるいは授業方法は効果的だと思いますか。』</p> <p><A></p> <p>自由記述欄:(Q1からQ6で「判断できない」とした場合、その理由を書いてください。また、全体を通して、改善点や優れた点について書いてください。また、そのほか、提案やご意見があれば書いてください。</p>				

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

【物理学コース】

(1-1) 実施科目：物理学実験Ⅱ（3年生学生実験発表会）

日時：2009年7月28日（火）5・6・7・8時限

場所：理学部第22講義室

対象学生：3年生

担当教員：藤沢健太准教授、輪島清昭助教

レビュアー：原純一郎、増山博行、朝日孝尚、芦田正巳、笠野裕修、白石清、野崎浩二、兼石（大教センター教育コーディネーター）、樋森、勝谷（山口高校）

(1-2) 授業の目標・概要

○対象学科・学年：理学部物理・情報科学科3年、授業区分：実験・実習

○概要：物理学を専攻する学生を対象に行う一連の実験の2番目に位置づけられる。実験Ⅰに続いて比較的平易な物理的概念を、実験によって学習する。

○授業の到達目標

知識・理解の観点：物理学実験の方法と、いくつかの基礎的な物理的概念の理解を目指す。

思考・判断の観点：自然現象をいかにして実験によって捉えるか考え、説明できる。

関心・意欲の観点：人間は、実験を通じて自然の理解を深めてきたことを理解し、自らその追体験を行うことを意識する。技能・表現の観点実験によって得た知見を他者に対して説明する能力を身につける。

○授業計画

最初に物理実験学の講義を2回行い、実験の心構え、実験の計画、データの取り扱いなどを講義する。2人1組で1つのテーマの実験を4～5回行い、最終的にレポートにまとめる。これを1学期間に2回行う。また最終日には実験結果の発表も行う。成績評価は出席とレポート、発表で評価する。

○実験項目

「熱伝導」真鍮の棒を加熱・冷却することにより、温度分布が発生し、時間変化することを実験によって調べる。また熱伝導方程式を解いて得られる理論的な式と実験値の比較を行う。「時定数」電気回路、熱伝導などの実験を通じて時定数という概念を理解する。「固有振動数」電気回路などにみられる様々な共鳴現象を実験で確認し、それらが固有振動数という概念として理解できることを学ぶ。「実験回路」発振回路を組み立て、発振する動作を調べる。物理学実験を行う上で、電子回路の工作は欠かせない。これを体験し、電磁気学理論を現実の装置として確かめ、理解する。「光回折」白黒写真ネガを用いてレーザー光線の回折を実験し、理論と比較する。波動現象に共通して現れる回折・干渉現象を実験して確かめ、数学的な取り扱いを学ぶ。「コンピュータによるデータの取得」現代の実験では、コンピュータによるデータ取得が欠かせない。パーソナルコンピュータとプログラミング言語「VEE」を使い、GPIBによって実験機器を制御し、データを取得する方法の基礎を学ぶ。

(1-3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

[学生の発表について]

- 思いの外よくできていました。
- 発表は上手。何をやったかもっとわかること。
- よくやっています。まだこれからですが。
- しぼった発表にするとよい。
- 今日はほめません！
- 文字数書いてあるなあ。ポイント、メリハリが大事。
- 実験結果はそうそう書いてあるようにはならないよ。

[検討会]

講義後、16:10 から 30 分程度 理学部 2 階 218 号室

兼石、樋森、藤澤、朝日、増山、原、野崎、芦田、笠野、輪島、白石

- アメリカの高校での発表（但し生物）は生徒主体で行っていた。日本でも早稲田などの私大で学生主体で行われている。ただ、手間は掛かる。一步踏み出すことが必要か。
- 学生実験における発表・・・実験Ⅲではやっている。2 回。Ⅱでは口頭発表は昨年度から、ポスター発表は今回初めて。配分は実験が 5 テーマ、レポート 1、発表 1。
- 1 年生の実験が中途半端。何をやるか考えよう。
- 2 年前期に実験がない。学生が内容を忘れる。
- 1 年前期も実験がない。分量は 20 年前の半分となっている。
- 昔に比べ発表（印刷）・器具は進化しているから、それによる時間の圧縮を活用すべし。
- 実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、の連携、教員同士の連携と見直し作業。共通・経験無し前提で、実験指導できるように。
- 大学 3 年で初めてはんだづけを経験している。
- 指導は有効と考えている。発表についても指導しましょう。プレゼンの実例（8 分）先々週示した。レポート例、ポスター例も？
- レポートを書くトレーニング。結果から何を導くかが重要。結果に真摯に向き合うこと。（学生は「理論」にこだわっている。有効数字の概念、結果に過度の予想（こうならないなあ））
- 実験指導、15 週、2 人で 30 名、実際きつい。反省そして改善。
- 高校での実験、いろいろな要員で自前化困難。SSH で課題研究など。
- 高校で実験を殆どやれない。器具はしまい込み。使い方もわからなくなっている。
- 中学では生徒（特に女子）が参加しない。入試科目としての物理の問題。
- 発表には経験が必要。
- ヒントや誘導の仕方。
- 学生の興味のため、バラエティに富んだ魅力的課題が必要。
- 課題増やす。指導をどこまで？組織的対応。

(2-1) 実施科目：力学 I

日時：2009 年 11 月 9 日(月) 講義：16:10-16:55 検討会・懇談会：17:40-18:40

場所：理学部 22 番講義室

対象学生：物理・情報科学科 1 年生（約 60 名）

担当教員：増山博行

レビュアー：高等学校教諭 8 名、高校生 2 名（西京高校）、田中和広学部長、山本隆、西井淳、
浦上直人、野崎浩二、藤沢健太、白石清、内野英治

(2-2) 授業の目標・概要

[授業の目標]

物理学の基礎である古典力学（ニュートン力学）を学ぶ。ベクトルの微分方程式で運動方程式を記述し、これを積分することで運動を解く。運動量、角運動量、仕事とエネルギーなどの概念および保存則を理解する。さらに、一般化した座標と速度で問題を記述する解析力学の方法を知る。

知識・理解の観点：

1. 質点の運動について、運動方程式をたて、これを積分し、与えられた初期条件の下での解を求めることが出来る。
2. 保存則を理解し、活用して問題が解ける。
3. 相対運動について理解する。
4. 力とポテンシャル、さらに、解析力学の方法を理解する。

思考・判断の観点：

1. 力学の問題を分析して、力と運動、エネルギーに関して正しく説明できる。

関心・意欲の観点：

1. 現代物理学の基礎となっている古典力学の重要性に関心を持ち、物理学への理解を一歩ずつ高めることが出来る。

技能・表現の観点：

1. 演習問題が解けること。

[授業の概要]

我々が手にするボールから、地球の周りを回る月の運動まで、いろいろな物体に働く力と運動を解析することを通じて、現代物理学の基礎となった力学が体系づけられた。この授業では、高校や共通教育で習った力学をベクトルの微積分を使って定式化し、具体的問題に適用する。さらに、一般化した座標を使って記述する解析力学の形式があることを知る。

(2-3) レビューーによる授業に対する意見・コメント

[高等学校教諭]

- 通常 90 分の授業を 45 分にしたためか、途中で切れてしまいましたが、次回が 1 週間後であることを考えると、思い切って式変形はレポートに課すこととして、配布されたプリントを一通り説明するという一話完結が学生にとっては望ましいと思われます。
- 等ポテンシャル面と勾配の話は、どうしても理論のみになりがちであり、避けては通れないものの授業参観時の単元として難しい個所であったろうと思います。学生のリアクションもいまひとつの単元であろうと推測されますが、クラス全体を見渡してみて、伏せて寝ている学生が意外に少なかったことがむしろ驚きでした。
- 配布されたプリントにより、学生は、この時間に何を学ぶということが明確であったと思います。
- 確認（理解）されたことを確かめられる時間があるとよい。
- 具体的に（数値を用いて）説明した方が分かりやすい（時間が十分にあるとよいですね）（mgh の説明）
- 高校生レベルに近づけて、かなり丁寧に説明されていたが、専門用語の違いにギャップを感じやすいようだった。

[授業の概要]

情報数学 II では、線形代数学（ベクトルとベクトル空間、そこでの線形写像の学問）を取り扱う。線形代数学は、極めて広い範囲で有効な数学であり、現代応用数学の中核のひとつを形成している。本授業では、ベクトルおよび行列と行列式の基礎的な解説を行う。

(1-3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

[高等学校教諭]

- 授業の最初に、この時間のねらいを（口頭で説明はされましたが）黒板に、単元名あるいは項目名を書くだけでも、学生の意識が変わると思いました。ノートを取って、後で見返し、参考図書で更に調べるときにもキーワードとなりうるからでもあります。
- （講義の内容ではありませんが）学生が持っている教科書の授業該当部分のコピーがあれば、参観者がより分かりやすかったかなと感じました。
- 声聞き取りづらい。添字をはっきりと示した方が良い。
- 記号や式に対して、抵抗感を持ちやすい気がした。
- 抽象的な説明と共に具体例があると理解しやすいようである。
- 一般形での表現を 3×3 行列の場合に適用して説明するのは分かり易かった。
- （教科書を持たなかったので）添え字がよく見えず、関係性がのみ込めなかった。
- 行列の性質についての箇条書きはわかり易かった。
- 本講義の目的とか、目標を初めに聞きたかった。

[大学教員等]

- 復習の重要性について触れることは重要。
- 学生を引き付けるコツ（たまには間違え、一緒にやってみる）
- ノートを取らない学生が多いです。教科書をパラパラとめくっているだけの学生、ボーっとしている学生等々。力学 I の授業では、プリントを配布したからかなと思ったのですが、どうもそういう問題ではないですね。
- 授業内容に関しては、参考（勉強）になりました。

(1-4) レビューのために準備したアンケート

1) 教職員用

山口大学理学部・物理情報科学科ピアレビュー・授業参観アンケート

無記名で結構ですので、下記、ご記入ください。

○印をお願いします

高等学校教諭 その他学外の方 理学部教員 本学職員

1. 本日の講義を参観され、ご意見、お気づきの点ありましたらご記入ください。（問題点・改善すべき点、改善案、参考になった点、etc）

ムを有するキメラ的特徴を保持していることを理解する。

2) 細胞内共生は、現在でも地球の至るところで繰り返されている普遍的生命現象で、細胞の進化に貢献している現象であることを理解する。

[授業の概要]

細胞は、突然変異の蓄積だけでなく、他の細胞をまるごと自分のものにする方法でも進化してきた。真核細胞のミトコンドリアや葉緑体は細胞内共生細菌に由来する構造である。細胞内共生は現在でも繰り返して行われていて、細菌だけでなく真核細胞も共生体となって、細胞構造の進化の原動力となっている。この講義では、ミトコンドリアと葉緑体の起源に関する最新の研究と、研究材料として使用されている主な細胞内共生生物と宿主細胞との相互作用の研究について解説する。

(3) レビューーによる授業に対する意見・コメント

- 1) 新鮮で興味深い授業内容であり、かつ専門性が極めて高い。
- 2) 細胞内共生について、体系的にまとめ、わかりやすい講義になるように工夫がされていた。
- 3) 模式図や写真を多く使って具体的な説明がなされていた。
- 4) 講義室が縦長で天井が低いために、パワーポイントのスライドの下の方の字が学学生の頭に隠れ、後部座席の学生からは読みにくい。スクリーンの下部は使わず、もう少し、サイズの大きい字を使ったスライドにすべきである。
- 5) スクリーンに向かって左側の液晶プロジェクターのランプが暗くて文字や字が読みにくいので、プロジェクターのランプを新しいものと交換すべきである。
- 6) 遅刻して講義室に入ってくる学生がいた。

【化学コース】

(1-1) 講義形式の科目：有機化学Ⅰ

日時：平成22年1月8日（金）9、10時限（引き続き、グループワーク形式の演習を行った）

場所：理学部22番講義室

対象学生：生物・化学科1年生（約80名）

担当教員：石黒勝也

レビューー：増山博行、川俣純、村藤俊宏、村上良子、藤井寛之

(1-2) 授業内容

配布物：プリント(8ページ)・・・前回の演習解答、講義資料の抜粋（重要部分を消してあり、講義資料を見て授業中に書き込む）、小演習、教科書からの抜粋（重要語句など）

教科書（参考書）：「ジョーンズ有機化学」上巻（東京化学同人）

ホームページ：<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~orgchem1/>

授業内容：環状化合物の構造／置換シクロヘキサンの配座とエネルギー 他（教科書第5章）

授業の進め方：

- まず初めに、前回の演習の解説、および、寄せられた質問等への返答を行う。
- 学生はPCを持参し、講義資料をスクリーンだけでなくPCからも閲覧し、重要事項をプリント

に記入する。

- 授業の最後に演習（約10分）を行い、出席確認も兼ねて、レポート支援システムにてPCから解答を提出する。
- この授業では、これまでのピア・レビューでの指摘事項や学生からの意見を参考に、以下のような授業方法の改善を図っている。
 - 生物・化学科の1年生（生物学コース・化学コースに分かれる前）を対象とした共通・必修科目であるため、生物学コースに進む学生への配慮として、授業・学習に必要な資料は全てプロジェクターにより提示し、また、各自が購入したPCに慣れることも目的として、資料をHPにて公開している。重要部分を消してあるプリントを配布し、スクリーンとPCから講義資料を見て授業中に書き込みをさせている。
 - 教科書が改訂され、前の版までは各章の章末に掲載されていた重要語句の解説がなくなった。教科書を購入しない生物学コース志望の学生への配慮もあわせ、重要語句の一覧と解説を、ホームページおよびプリント（一部穴埋め）にて閲覧・学習ができるようにした。
 - 以前のピアレビューにて「説明を聞くばかりなので、学生の集中力が続いているかが疑問」という指摘があり、19年度のFD研修で紹介されたLITE(Learning in Teaching)を試行している。これは、授業の途中で、学生を2人1組として、与えたテーマに関して1人の学生がもう1人に説明し、人に教えることで学ぶという手法である。
 - 以前は演習解答を電子メールにより送信させる方法をとっていたが、迷惑メールの増加により、送信から着信までに非常に時間がかかり、その場で確認ができないという問題が発生した。そこで一昨年より、物理・情報学科・情報コースの授業で用いられている「レポート支援システム」を使わせていただき、Webから出席と演習解答を登録させる形式とした。着信に時間がかかることがなくなり、学生はこれまでの出席状況や自分が演習にどう解答したかも閲覧することができるようになった。また、授業時間内に解答できなかった学生は出席だけを登録して後で解答を送信できる。教員側にとっても、出席確認や演習の採点が非常に効率よく行え、また、電子ファイルとして記録できるため、紙で保管する文書量を大幅に減らすことができる。
 - 演習の解答に併せて授業への質問・要望についてコメントに記入させ、次の授業の最初に公開し、質問の多かったところについては全員に改めて解説している。メールに慣れた学生には口で聞くよりも質問しやすいと思われ、毎回数十名よりコメントがあり、授業のやり方などに対する屈託ない批判も寄せられる。単に「難しい」「わからない」というコメントも多いが、どこがどうわからないかを知らなければ解説のしようがないことを繰り返し話したところ、かなり具体的な質問も増え、自分がどこが理解できていないかを見つめ直すきっかけにもなっているように思われる。
 - 分子の立体構造の理解には分子模型の使用が最も効果的であり、多くの大学では化学系の学生に分子模型を購入させている。しかし、本講義では、化学専門の学生だけが対象ではないため、必須とすることができない。そこでコンピュータグラフィックスによる「立体視」を用い、分子の三次元構造が理解できるように努めている。立体視に関するアンケートをとると、初めは約3割の学生が立体視を見ることができないが、今年度は、プリント用とPC画面用の立体視ビューワー各10個を準備し、最終的には見られるようになった学生が増えたと思われる。
 - 昨年、「講義の合間に簡単な演習を挟むと学生にとって刺激になるかもしれない」との指摘をいただいたことから、数分で解答できる小演習「short exercise」をプリントに加え、授業の途中で考えさせ、すぐに解説することとしている。
- この日の授業の後半では、冬休みレポート課題に関するグループワーク型演習を行った。今年度、化学分野では、企画室からの教育改革の取り組みの一環としてTAによる補習授業を行っ

ており、この授業でも計4回の補習を行った。しかしながら、授業時間外の補習では全員が出席するわけではなく、本当に演習が必要とされる学生はなかなか出席しないという問題があった。そこで今回は、授業時間内から、昨年5月のFD研修会「第57回中国・四国地区大学教育研究会」において紹介された広島大学理学部・有機化学演習での「協調演習」を参考に、「できる学生ができない学生を教える」ことを基本としたグループワーク型演習を試行した。

(1-3) レビュアーによる授業に対する意見・コメントなど

化学分野だけではなく、他学科からもレビューに来ていただき、貴重なご意見をいただいた。

1. 講義の内容についての指摘

- 立体を扱った内容で、多くの例を用いて説明されていた。しかし、3次元の構造を2次元で説明するのは難しい部分もあり、実際の分子模型を用いて補足があると学生の理解度が増すのではないかと。
- 化学者にとっては一般的な事項（AGとかスペースフィリングモデルの意味など）を本当に学生はわかっているのだろうか、という事が心配に思いました。
- 生物希望の学生も多く、高校までの知識が不十分であることを考えると、内容が多すぎて説明についていけない学生がいるのではないかと案じます。内容をしばって、じっくりと説明されてはいかがでしょうか。
- 非常に練られた内容で、有機化学の基礎を学ぶにはとてもいい講義です。有機化学で学生がつまづくのはだいたい立体化学で、最も理解に苦しむ所ですが、立体化学を深く理解するのにはもってこいの内容です。
- 有機はよくわかりませんが、内容は1年生には適当なのではないかと思えます（既に講義を受けていると思われますので）。自分が昔受けた有機の基礎とは随分違うなどは思いましたが、立体化学が重要なのだとも思い、理解できます。

2. 講義の進め方についての指摘

- 前回の復習、感想、当日の講義、演習と盛りだくさんで充実しているが、どうしても時間が足りないように思う。
- 解説が少し早い所があります。ついて行けない学生がいます。長時間の授業になり、集中力が切れている（私語が目立つ）学生が後半増えています。全体的には非常に良いと思います。
- グループ学習がよくわかりませんでした（途中から授業を拝見させていただいたせいでしょうか）。

3. その他改善を要する点の指摘・感想

- 前での学生との会話のやりとりが聞こえない時がしばしばあります。
- マイクがないと後ろまで声が聞こえない。
- マイクがないと後ろの方は何も聞こえません。短い説明でもマイクを使われた方がよいと思います（特に学生が発言するとき）。
- 黒板から遠いとマイクを使っても聞きとりにくいことがあります。マイクを使わないと世界が違います。前に出ている学生との会話も、できれば全員が聞きとれる方が一体感が生まれて良いと思います。
- すごい量の資料を準備されているのが、驚きとともに、そこまで必要なのかと思う面もあります。

レビュー後の改善：

最後の学生授業評価の自由記述欄または演習でのコメントにおける学生からの批判意見は以下の通りである。

- パソコンを持ってこられないときに学務で何回かパソコンを借りましたが、いつも正常に動

きませんでした。

- パソコンを持ってきても、プロジェクターを見ていたので、パソコンが邪魔だった。
- 机を大きくして欲しい。
- テスト範囲が広すぎるので、だいたいでもいいので絞ってほしかった。
- 説明が抽象的でわかりにくかった。
- (最後の演習を) 授業時間内に終える努力をしてほしい。(問題を解くことを)「強制しては
いない」と言われたけれど、途中で抜け出して理解できなかつたらと不安で帰れるわけがない。
ノート PC もわざわざ持って来る程使わないしやめてほしい。考え方を問題等で問う割に、その
考え方をあまり詳しく教えてくれないのはどうかと思う。
- 考え方の過程と時間配分を考えてください。プリントなどは答えだけだと分からないです。
レポートでは考え方や説明を問われたので、答えしか習っていないので考え方まで答えられない
のは当然だと思います。

授業評価において、この授業で試行している様々な教材や手法に関する以下の設問を追加し、学習に有効であったかを【1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない】から選択してもらったところ、以下のような結果となった。

- 授業へのノート PC の持ち込み : 1. 21.8% 2. 16.7% 3. 20.5% 4. 9.0% 5. 19.2%
- ホームページでの資料の閲覧 : 1. 48.7% 2. 16.7% 3. 10.3% 4. 2.6% 5. 7.7%
- プリントへの書き込み : 1. 20.5% 2. 25.6% 3. 20.5% 4. 10.3% 5. 9.0%
- 毎回の演習及び翌週の解説 : 1. 33.3% 2. 19.2% 3. 20.5% 4. 6.4% 5. 6.4%
- 受講生からの質問・要望の紹介と回答 : 1. 26.9% 2. 23.1% 3. 24.4% 4. 5.1% 5. 6.4%
- LITE : 1. 11.5% 2. 20.5% 3. 23.1% 4. 14.1% 5. 16.7%
- short exercise : 1. 24.4% 2. 16.7% 3. 29.5% 4. 9.0% 5. 5.1%
- 立体視 : 1. 12.8% 2. 16.7% 3. 20.5% 4. 19.2% 5. 16.7%
- 重要語句 (プリント) : 1. 29.5% 2. 24.4% 3. 21.8% 4. 6.4% 5. 3.8%
- 中間テストのプレ演習・ポスト演習 : 1. 38.5% 2. 29.5% 3. 10.3% 4. 5.1% 5. 2.6%
- 冬休みレポートのグループワーク演習 : 1. 11.5% 2. 21.8% 3. 25.6% 4. 7.7% 5. 17.9%

また、授業の総合評価において「非常に悪い」と回答した学生が3名いた。毎回、授業の最後に行う演習では、簡単に解答して退席する学生から1時間以上も考える学生までおり、そこで質疑応答や学生どおしの相談が行われたが、この授業が金曜日5コマ目で、すぐにサークル活動などのために帰らなければならない学生が今年度は特に多く、それに対する不満が何度か寄せられていた。化学分野では、大学院生が学生からの質問に答える「化学のオアシス」という場を設けているが、自主的にそこへ出向くのもハードルが高いようで、授業時間外の学習支援方法を考えていく必要があると思われる。今年度の試みとして、補習授業として行った「中間テストのプレ演習・ポスト演習」(86名の内それぞれ51名・34名が参加)は評価が高かったが、このピア・レビューの授業で行った「冬休みレポートのグループワーク演習」に関しては、冬休み明けの授業で、当日レポートを回収してからチェックし演習を開始するまでに時間がかかってしまい、また、レビューアーの先生方からのご指摘のように大講義室でのマイクの取り扱いがまずく、準備不足の面が多々あったと反省している。

この授業は、専門科目の中でも、コース分け前の必修科目という特殊事情があり、これまでピア・レビューやFD研修、また、学生からの意見などを参考に様々な手法をできる限り取り入れてきたが、時間的にも過剰な状況となってきた。今後、試行の結果を吟味し、より有効な手法を取捨選択したいと考えている。

(2-1) 実習・演習形式の科目：物理化学実験

日時：平成21年6月16日(火)5~8時限

場所：理学部 427 番実験室

対象学生：生物・化学科 化学コース 3 年生（約 40 名）

担当教員：右田 耕人、本多 謙介、谷 誠治

レビュアー：田頭昭二、村上良子、藤井寛之、安達健太、青島均、村藤俊宏、山崎鈴子

(2-2) 授業の目標・概要

[授業の目標]

- 1) 基礎的実験操作を体得する。
- 2) データの整理と解析（パソコンを使用）の仕方を修得する。
- 3) 実験を通して“物理化学”を学ぶ。
- 4) 論理的な思考能力を養う。

[授業の概要]

約 40 人の学生を 5 班に分割、A～E の実験を 5 回に分けて実施。各班は、A～E をローテーションし、すべての実験を実施。

- A. 電子スピン共鳴：装置構成の理解とフリーラジカルの ESR スペクトル測定
- B. 熱化学と分子定数：溶解度による溶解熱および凝固点降下による分子量決定
- C. 光吸収スペクトル：色素分子の吸収スペクトルによる酸解離定数(pKa)の決定
- D. 反応速度：ショ糖転化反応および酢酸エチルケン化反応の反応速度定数の測定
- E. 電気化学：可逆系および不可逆系電荷移動反応と伝導率による酸解離定数の測定

(2-3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

教員 A

- 1) 物理化学における原理を理解できるようにテーマの選択、時間配分、テキストの準備が適切に行われている。
- 2) 近年、計測や測定は PC を内蔵してブラックボックス化されているが、測定原理が理解できるように学生自身によるマニュアルの操作や手作業によるデータ処理が組み込まれており学生実験として教育効果が大きい。
- 3) 5 つのテーマが行われており各テーマ毎に 100 万円位の装置が必要だが、昨今の教室予算では消耗品の補充がやっとなりで、装置の更新と保守について予算の申請など計画的な手当が必要と思われる。

教員 B

上記 5 つのテーマにおいて、教科書、配布資料を参考に、各自まじめに実験を行っている。

特に、隣同士で実験の不明点について相談、ディスカッションしている学生もいるようで、化学実験の基礎を確立するには優れた環境である。

気になる点は、数人の学生が器具、分析機器の使い方に誤りがある点である。

実験初心者であるうちに、間違いを指摘して改善させる必要があると思われる。

実験ノートへの記入が少ない感じを受ける。

教員 C

バランスよく分野を考えて実験が行われていると思う。

予習やレポートを充実させる方法をどのようにしているのだろうか。

教員 D

学生実験は多くの学生を同時に見なければならず、大変であるが、全体を5班に分け、効率的に運営されている。

内容についても改善がなされており、より現実的なテーマ設定がなされている。

教員 E

実験の手順書がしっかりしているので、学生が操作を行うことは可能で、それなりに実験をしている。

しかしながら、予習不足のせいか、操作を追うのみで原理の理解が不足のようである。この点の指導が必要と考えられる。

TA もよく働いているが、原理を理解させ、論理的思考力を養うためにも、TA に何を指導すべきかをもっと理解させておいた方が良い。

教員 F

有機実験と異なり、実験を各班でローテーションさせながら行っていますが、有機実験でも将来的にはこのようなスタイルにしてみたいと思った。

全員が同時に同じテーマの実験を行うと、どうしても学生間で相談し合っ他人のまねをしながら考えずに作業感覚でこなしている感じがする。

あちこち動き回って情報を集めて早く実験を済ませようとする傾向があるが、物理化学実験のスタイルだと、そのような傾向を無くせるかもしれない。

見学していて特に問題はなかった。

教員 G

複数の課題が同時に進行しており、学生が自主的にやらないと進まない環境になっており、教育効果は高いと思う。

細かな操作がきちんと(正しく)行われているかチェックするためには各班に TA が必要だと思う。

以上のピア・レビュー参加者のコメントを紹介した後で、教育方法や教育内容の改善について話し合った。

手順書にしたがって実験遂行することは問題がないことは全参加者が同意であったが、予習不足への対策をどのようにしたらよいかという点について、いろいろな意見が出た。

ノートを提出させて教員が実験ノートを点検して予習していることを確認するという方法や実験結果を確認して測定データが確実に得られているかどうかを確認してから実験を終了させるという意見が出た。

実験の実施方法については、物理化学実験が採用している班分けをしていくつかのグループが異なるテーマの実験をする方式と全員が同一テーマを同時に実施する方式の長所と短所について話し合った。

物理化学実験では、全員が使用できるだけの量の器具を準備するのは困難であるために、現在の方式をとらざるを得ないということになった。

他の実験では班分け方式を採用するというのも一案であるけれども、現状の統一テーマ方式も指導がしやすいという面の長所があることが再確認された。

受講学生に原理を理解させ、論理的思考力を身につけるように指導するためには、TA への指導を徹底しておかなければならないということの確認がされた。

また、現在の物理化学実験の実施方法では教員の負担が重過ぎるので、何らかの対策が必要であるという意見が出された。

現状では物理化学実験は3人の教員と3人のTAが手分けをして指導に当たっている。これは、5

つの異なるテーマの実験を同時進行で行っているところに原因がある。分析化学実験は、2人の教員と3人のTAで実施している。有機化学実験は、3人の教員が3つの期に分けて指導に当たり、最初はTAも含めて研究室総勢で指導して、何とか有機化学実験ができるように技能の向上を図っている。

したがって、どの実験科目もTAが現状よりも多数必要であり、今後どれくらいのTAが必要であるのかを考えていく合意が得られた。

TAの枠をもっと広げられないか、あるいは講義科目と実験科目のTA割当のバランスが現状でよいのかという疑問が投げかけられ、今後検討して行くこととなった。

自分で考えながら実験を進めていくように指導することや、実験装置を的確に操作するように指導すること、データ処理の方法の指導についても今後考えていかなければならないということが理解された。

レポートの指導についての話し合いを行い、分析化学実験、物理化学実験、有機化学実験でそれぞれ要求している項目が少し異なることが明らかになり、教員間の今後の指導分担をどのようにしたらよいのかという方針が明確になった。

以上のご意見や話し合いに基づいて、今後の物理化学実験の改善に資することにした。

4. 地球圏システム科学科のピアレビュー

(1) 実施科目：地球科学実験

日時：2009年10月31日（土）終日

場所：秋吉台

対象学生：地球圏システム科学科1年生（31名）

担当教員：今岡教授・福地准教授

レビュアー：三浦、宮田、金折

(2) 授業の目標・概要

秋吉台での野外教育（講義と実習）

配付資料 シラバス・当日の内容・観察カード・学生授業アンケート

観察者には資料一式が配布され、授業・実習について気づいた点などをそれぞれ項目ごとに観察カードに記入した。また、実施にあたっては理学部FD委員会との連携をはかる。

(3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

授業研究会として、下記のように行われた。

(1) 日時 2009年11月2日（月）17:45～18:45、地球科学セミナー室

(2) 参加者 三浦・今岡・宮田・金折・福地

(3) 議題・地球科学実験について

(a) 講義・実習技術に関して（声の大きさ、話の速度など）

(b) 運営と構成に関して（難易度・過不足など）

(c) 目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

(d) 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）

(e) その他 学生の動向など

それぞれについて意見交換・情報交換を行った。それらの意見や感想は後述のようにまとめられる。とくに地球科学では絶対的に必要な観察力を養う上で、現地での講義と実習は受講者の記憶に残りやすいことが理解できた。それぞれに、参加者各自の授業や実習にとって多くの工夫と改善に活用できる。さらに、授業アンケートの集計結果と合わせて授業改善報告書作成への利用を今岡教授・福地准教授へ依頼した。

[感想]

・野外で実際に見たり触れたりするので、記憶に残った ・座学のみとは多く違うと実感した ・写真ではわからないことが理解できた ・興味がわいた ・話声がやや小さく聞き取りにくい点もあった ・見るものが多すぎてまとめることが難しいと思った ・化石等実物を見ることができてよかった ・写真と全く異なることを実感した ・秋吉台の歴史が理解できた ・時間が長くややだらけた ・交通量等、安全に配慮しないといけない ・実習を通じて他人の迷惑にならないようなマナーが必要だとわかった

[授業観察カード]

観察者 3名

以下の観点について「各自の講義にいかすために参考になった点」等を記述してください（紙面が足りない場合は裏面も使用してください）。

- (1) 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、板書・AV機器の利用など）
 - ・ハンドマイクがあればよい
 - ・説明時に資料を使う等、説目が的確であった
 - ・講義で使用したビデオが理解を助けた
 - ・講義と実習とのつながりにもう少し工夫が欲しい
- (2) 授業運営・授業構成に関して（難易度・過不足など）
 - ・地質学の時間の扱いについて、初心者にもわかりやすく説明した方がよい
 - ・内容が多岐に渡るので、どこに焦点をあわせるのかを明確にした方がよい
- (3) 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して
 - ・知識、情報など十分な内容である
 - ・体験型学習の効果は高いと感じた、恐らく学生にも有意義であった
 - ・体験を通じての学習は理解が定着しやすく効果的である
- (4) 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）
 - ・学生からの質問が少ない
 - ・博物館見学時の学生の態度が悪い
 - ・化石採集時には、学生の参加度はよかった
- (5) 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育等）
 - ・このような学習をこれからどのように専門へいかすのかについても検討する必要がある
 - ・安全の確保には十分配慮されていた
 - ・講義との関連付けについてはさらに工夫が必要

第2節 大学教育機構との共催による教育改善FD研修会

開催日時：平成21年10月21日（水）

場所：理学部12番教室

研修対象者：学部の教学委員及びFD委員と学科・コース等の教務委員・教員

研修スケジュール：

- | | |
|-------------|----------------------|
| 13:30～13:35 | 開催挨拶（理学部の教学委員及びFD委員） |
| 13:35～13:45 | 本日の研修会の開催趣旨とスケジュール説明 |

13:45～14:30 研修（その1）

(1) 学科改編や科目（カリキュラム）改編に伴うGP、カリキュラムマップの見直し作業について。特に4年間一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育GPをカリキュラムマップに加えて再編成することについて

（岩部センター長）

(2) 現在のGPやカリキュラムマップに対するセンターからの意見とそれに対する学部・研究からの回答・意見交換（兼石教育コーディネータ）

14:30～14:40 休憩

14:40～15:40 研修（その2）ワークショップ

(1) 工学部機械工学科の「履修科目計画表」の説明（大学教育センター教員）

(2) カリキュラムフローチャートの作成

- ・ 科目間の系統性や順次性を俯瞰するためのワークショップを学科・課程・コースごとに実施する。
- ・ 機械工学科の資料を参考にしながら、各学科・課程等に開設されている科目名（現行のカリキュラムマップに記載してある科目）が示してあるラベル（ポストイット）を科目間の系統性や順次性、関係性、さらにGPの達成を考慮しつつ模造紙に貼り付けて完成させる。

(3) 今後の作業について(依頼)

主旨：

昨年度(20年度)は、各学部・研究科と大学教育センターが一体になって、グラジュエーション・ポリシー(以下GP)やカリキュラムマップ(以下CUM)、Webシラバスといった山口大学の教育改善のしくみを全教員に理解していただくための同様な研修会を開催しましたが、本年度は大学の教育改善をさらに定着させ、組織的なFD活動を各部署で推進していただくために、各学部・学科・コース・課程においてカリキュラム開発を担当している教員を対象に、GP、CUM、Webシラバスの見直しや各学部・学科のカリキュラム内容について、大学教育センターと一体になって、教育改善を図っていく研修会を実施します。具体的には以下のような内容について、この研修会で意見交換を行えたらと考えています。そして必要であればGPやCUM、シラバスの修正を組織的に行なっていただきたいと思います。

内容：

- 策定してから2年以上経っているが、その間、学科改編や科目改編等に伴って、GPの見直しやCUMの修正が行なわれたか？
- この2年間ですでに閉講した科目や新規に開設した科目、内容を整理統合した科目等がCUMの身に反映されているか？
- 設置している科目間が有機的に連携された系統性のある科目編成が行なわれているか？
科目間で内容の大幅な重複がないか？
- GPやCUMの内容が所属する学生や院生に周知されているか？また、周知する方法を考えているか？
- 履修する学生に分かりやすいように、学生の視点からシラバスに必要な十分な内容が記載されているか？
- 同様な系統の教育内容を取り扱っている他の教員のシラバスの内容を見て、自分のシラバスを見直したことがあるか？
- カリキュラム全体やGP、CUMについて、外部からの評価を受けているか？
- それぞれの学部・研究科で今後どのようなカリキュラム改善の予定があるのか？

学部参加者：

村上柳太郎（教務委員長）、宮田雄一郎（同副委員長）、木内功、石黒勝也（以上、教職課程委員会委員）、宮澤康行（数理科学科教務委員）、朝日孝尚、末竹規哲（以上、物理・情報科学科教務委員）、宮川勇（生物・化学科教務委員）、福地龍郎（地球圏システム科学科教務委員）、増山博行（FD委員長）、吉川学、小宮克弘、白石清、内野英治、藤島政博、大和田正明、山崎鈴子（以上、FD委員）、山本隆（大学教育センター部会長）

カリキュラムへの反映：

GP、カリキュラムマップの見直し作業は22年度に継続することになっている。物理・情報科学科では学科にカリキュラム検討ワーキンググループをおいて年度初めより検討を重ねてきた。そして、GPに則ったカリキュラムの内実化のため、各専門科目の内容と相互の間の調整作業を進めてきた。一部は22年度のシラバスに反映される。さらに、数学力のアップのため、平成22年度入学生から次のような科目の追加、学科共通科目の強化を行うこととなった。

選択必修科目の新設 情報数学Ⅲ 2単位

選択必修から必修へ 物理数学Ⅱ 3単位

コース科目から学科共通科目へ 物理数学Ⅲ 2単位

第3節 大学教育機構主催全学FD研修会への参加状況

日時	場所	名称	理学部参加教員
4月2日 午後	SCS 講義室	TA 研修会	広澤史彦、中内伸光、福地龍郎、三浦保範、渡辺雅夫
5月30,31日	共通教育棟	第57回中国・四国地区大学教育研究会	朝日孝尚、山本隆、宮川勇、小宮克弘、増山博行、今岡照喜、藤島政博、金折裕司、石黒勝也、野崎浩二、宮沢康行、堀学、原田由美子、村上柳太郎、山中明
8月10日午後	SCS 教室	目的達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革	金折裕司、増山博行、田頭昭二
8月31日午後	共通教育棟	多人数授業における学生参画学習の工夫ー授業手法と評価ー	右田耕人、輪島清昭
9月8日午後	共通教育棟	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	原田由美子
9月11日午後	メディア基盤センター	DocuWorks の使い方	繁岡透
9月25日午後	理学部	理系共通教育科目「地球科学 2」の授業展開ー参加と思考をうながす授業づくりの方法ー	大和田正明

10月16日午後	共通教育棟	Less is more - 効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考	内野英治、田中和広、藤島政博、宮田雄一郎、末竹規哲、谷誠治、輪島清昭
3月18日午後	共通教育棟	最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成方法	原純一郎

第4節 学生授業評価

大学教育センターの資料によると、平成21年度の理学部の学生授業評価実施状況は、対象科目数175、実施科目数164で実施率は93.7%であった。これは昨年の実施率94.2%と同じであった。

第5節 その他のFD活動

各学科においてピア・レビュー以外に、授業改善、教材開発、学生のケア、学習相談室による学習支援、など教育改善を含めたFD活動が行われた。

また、学部・研究科主催のアカデミックハラスメント防止のための研修会、大学教育機構と共催のFD研修会、「第57回中国・四国地区大学研究会」への参加などもなされた。

1. 学部FD講演会

「広島大学における学生授業評価の教訓と学士課程教育の改善の取組について」

広島大学前理学部長清水洋教授を講師に迎え、広島大学における教育指導内容について講演を受け、指導方法の改善・充実について知見を得た。

日時 10月5日 13:00~14:30

場所 人文・理学部会議室

参加者

数理科学科 小宮克弘、木内功、菊政勲

物理・情報科学科 増山博行、繁岡透、朝日孝尚、白石清、芦田正巳、浦上直人

生物・化学科 渡辺雅夫、山崎鈴子、青島均、川俣純、村上良子、谷誠治、安達健太

地球圏システム科学科 田中和広、今岡照喜、大和田正明、三浦保範

総務・予算係 篠田和也

講演内容

平成12年から大学評価機構による教育評価の試行が始まった。広島大学をはじめとする6国立大学がこれを受け、その概要は機構のHPに掲載されている。広大理学部では13年1月（全学では14年度前期分）から年2回、学生による授業評価アンケートを行い、学科毎に集計してHPで公開するとともに、各授業科目毎の集計結果を学内限定で出している。理学部では学科毎のデータを小冊子に纏め、講評している。

昨年までは学生が記名した用紙に定期試験の日に回答し、履修登録者の75%、試験を受けた者の90%の回答率であった。今年の夏よりWeb入力になったが回答率は50%に下がった。

15～19年での傾向を見ると、授業内容の難易度については2.8→3.0に、総合的に判断した満足度は3.0→3.2に向上している。ここで、学生は1：全くそうは思わない、2：そうは思わない、3：そう思う、4：強くそう思う、の4段階で評価している。

この評価結果をもとにカリキュラムの改善を図っているわけではない。授業評価の年2解実施は定点観測として、変動の有無のチェックには一定の役割を果たしている。新しい授業のあり方には模索や工夫が必要である。カリキュラム改善には別の調査が必要である。

理学部教育シンポジウムや教育セミナーを開催し、卒業生から見た理学部、広大出身の高校教員から見た広大理学部、などを卒業生・OBアンケートで調べている。

学長・担当副学長ともに理学部OBという中で2006年より文科省の教育改革プログラムが採択された。19～21年度は特色GP「強調演習による理学的知力の育成支援」、21～24年度は理数学生支援プログラム「Open-endな学生によるHi-サイエンティスト養成プログラム」(答えのない課題に対応する取組)、大学院では17～18年度「数理生命科学ディレクター養成プログラム」、19～21年度「世界レベルのジオエキスパートの養成」、「数理生命科学融合教育コンソーシアムの形成」、15～19年度「ナノテクノロジー・IT融合教育プログラム」。

卒業・修了時に行っている「成果・効果に関する調査」では教養教育は評価が低く、卒論が一番高い。他大学と比べて、広大の先生の面倒見は大変よい。授業評価アンケートに関しての学生との懇談会は6,7年前から学部全体と学科別のものを行っている。最近は年1回の開催である、学生からはカリキュラムに関しての要望は少なく、食堂の味とか、事務職員の態度とか意見が多い。

「見える・つながる・使える」教育の質的向上作戦を展開し、PDCAサイクルを回している。学部には教務委員会・評価委員会・各プログラム教育会がそれを担っている。授業評価は授業方法の改善につながるだろう。カリキュラムの改善にはカリキュラム全体についての評価が必要である。目標はどうか、本来、教育とはどうあるべきかを考えて。

質疑

6名の本学部教員から延べ10項目の質問があった。回答を含め、省略。

講演会に引き続き、清水教授に授業参観・学部見学をお願いし、その後、講評を受けた。

参観授業

授業参観、学部見学

1 化学数学および演習	12 番教室	本多謙介
2 地球惑星物質学Ⅱ	11 番教室	阿部利弥
3 物理学実験Ⅲ	物理学生実験室	藤原哲也
4 物理数学Ⅱ	22 番教室	朝日孝尚
5 鉱物標本室	410 室	
6 イラオ山火山灰地層及び火山弾	北棟 2 階オープンスペースおよび玄関前	

講評 (第1小会議室；本学部側参加者 田中、増山、大和田)

清水先生のコメント

- ・化学では身近な電気化学の例を元に、化学を学ぶことが社会でどのようなことと関係するのか、学生の関心を高める工夫があった。
- ・物理数学では学生に質問し、答えを引き出しながら、キャッチボール式で授業を進めていた。授業評価アンケートの進捗・難易度のチェックに対応している。

- ・パワーポイントはややもすると進度が速すぎる。それを補って、本日の授業はパワーポイントと黒板を併用していた。

質疑は省略

2. 第3回中国四国地区理学系学部教育改善研修会への参加

中国・四国地区国立大学法人理学部長会議で提案された中四国6大学理学系連携事業の一環として、第3回中四国理学系教育フォーラムが12月12-13日に広島大学理学部において開催された。第1回及び第2回と同様に6大学における実践事例や取組状況を報告し、討論を行った。参加した愛媛大学、岡山大学、島根大学、高知大学、広島大学、山口大学の理学部教員により、教育改善・改革に関する情報交換が行われた。山口大学からは西井・宮田の2名が参加した。

プログラム

12月12日(土)

研究フォーラム： 13:30~17:00

テーマ：「教育改善・改革に関連しての自由なテーマ」

事例報告と討論

内藤准教授(島根大学)「講義における創意工夫」

柴田教授(岡山大学)「岡山大学理学部の早期卒業制と履修単位上限制」

西井准教授(山口大学)「学部教育における基礎学力向上の取組」

浅田教授(愛媛大学)「入り口から出口まで—学生の意識調査—」

鈴木教授(高知大学)「理学部学士力確認テスト」

坂本教授(広島大学)「数理生命科学教育：異分野融合領域の教育実践について」

懇親会： 18:30~(2時間程度)

12月13日(日)

研究フォーラム： 9:30~12:00

テーマ：「各大学の特色ある教育の取組について」

6大学の実践事例や取組状況の報告と討論

圓山教授(広島大学)「理数学生応援プロジェクト—Open-endな学びによるHi-サイエンティスト養成プログラム—への取組」

佐藤准教授(愛媛大学)「eラーニングを活用した理学教育の推進」

宮田教授(山口大学)「野外実習の現状と問題点」

高柳准教授(岡山大学)「化学系の教育—学部教育と大学院教育」

廣光教授(島根大学)「物理系の学生を対象とした初年次教育」

各大学からの合計11件の報告は、次の4通りに大別することができる。

- (1) 学生の学力差に如何に対処し、特に学力の低い学生へのケアをどう行うか。
- (2) 学力の高い学生の能力をさらに伸ばすにはどうすればよいか。
- (3) 学士力を如何に判定し、如何に育てるか。
- (4) 学生の抱える問題点を如何に把握するか。

(1)に関しては、eラーニングの活用事例(愛媛大学)や、学力によるクラス分け演習や学生メンターの採用による相談窓口の設置等の事例(島根大学、山口大学)、学科カリキュラムの改革事例(岡山大学)の紹介があった。(2)に関しては早期卒業に関する制度の検討例(岡山大学)や、学部において優秀な学生の能力をさらに伸ばすための教育制度の紹介や、大学院における分野融合型実習の取組の実例と成果(広島大学)の紹介があった。(3)に関しては、学士力確認テストの開発についての紹介(高知大学)や、野外実習を通じたグループワークの紹介(山口大学)の紹介があった。(4)に関しては、意味のある

学生アンケートとは何かに関する議論およびその開発・施行例についての紹介(愛媛大学)があり、多くの大学で共通のアンケートを用意することで、大学による問題と個別の問題の整理が可能になり、それにより問題点の共有が可能になるのではとの提案があった。

今回は各報告に時間の多くをとられ、十分な討論と意見交換は行えなかったが、多くの大学の理学部が共通した問題点を抱えており、このような情報交換の場を継続的に設けることは有益であろうという点で参加者の意見は一致した。

3. 高大連携授業参観

近年、大学の授業になじめない学生の存在が問題視されている。一般的な学力低下や学習意欲の問題、ノートの取り方をはじめとするリテラシー、あるいは入試制度の問題もあろうが、高校までの授業の進め方と大学における授業の格差の有無を高校の現場に学ぶべきことは少なくないと考えられる。そこで、6月、父兄や中・高校教員が高校参観を行う、県立防府高校の公開授業に参加する形で、高大連携FDの試みを行った。また、逆に高校教員に大学の初年時の専門授業を見てもらい、コメントを得ることも意義がある。これは、物理・情報科学科のピア・レビューに際して高校教員等を招くことで試みられた。

防府高校公開授業日程

日時 平成21年6月15日

時間 3時限(10:45~11:30)、4時限(11:40~12:35)

対象 1, 2, 3年生、各1~8組

理学部参加者

田中、増山、増本、浦上、宮川、村上、宮田、大和田

公開授業参観後、高校教員との意見交換が行われ、後日、以下の参加記録を高校側に送付した。

1. 参観したクラスと授業科目名

1年 数学I

2. 授業内容の概略

2次関数の最大・最小

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

・2次関数のグラフの特徴を復習することから始まる。今日の授業内容に深く関わる事項であり、適切かつ自然な導入である。

・定義域を閉区間に限った場合、2次関数の最大・最小を求める問題を、例題を通して考察する。放物線の軸と閉区間との位置関係が重要であることを認識させるために、具体的な2次関数を固定し、様々な閉区間上での最大・最小を求める。中学で扱った1次関数の最大・最小を求める問題との違いを強調。発展として、开区間上の最大・最小の問題も考察した。教材をよく研究していることが分かる。時間の制約もあり、下に凸である2次関数しか扱えなかったのが残念である。

・最後に、練習として、教科書の間を解かせる。

2) 授業進行について

・復習→本題→問題練習といった標準的な流れの授業である。本題の扱い方も、一般論を述べるのではなく、具体的な例を通して理解させることを目指している。適切な扱い方であると言えよう。

・内容をすべて頭にたたき込んで授業をしており、教師が教科書を見たのは、授業の最後に練習問題をさせるときだけである。望ましい形である。

・黒板に何を書き、消す際にも、どれを残すか、という点にも注意が払われている。例えば、授業冒

頭の復習の部分は、最後まで黒板上に残されていた。黒板も十分な広さがあり（山口大学にはこれより狭い黒板しか備え付けられていない講義室がある）、それを有効に活用していた。座席の位置によっては光って見えづらい端の部分には板書しない、といった配慮もしている。色チョークも上手に使っていた。青チョークで座標軸を描いたのには心底驚いた。青チョークは見づらいので使わないようにしていたからである。だが、あの程度の広さの教室ならば、最後部の席からでも十分に見え、グラフがくっきり浮かび上がるので、うまいなあ、と感心した。

・次々に生徒を指名して質問に答えさせており、小気味よいテンポで授業が進んだ。同時に、教室に適度な緊張感が生まれていた。生徒もいい案配に（？）誤った答えを返してくるので、ある意味授業のやりやすかったのではないかと思われる（実際、教師も一度それを口にしている）。

・この授業で扱った問題は、グラフを見て答を導く型であり、生徒に口頭で次々に答えさせる授業方法になじむ。黒板に書かれた教師による答案も、グラフの下に、いきなり答が書かれている。一定の論証を経て解答にたどり着く型の問題をこの先生はどう扱うか、興味が持たれる。

3) クラス運営について

・上述のように、生徒に次々と発問する授業を展開した。生徒の名前はすべて記憶している。素晴らしいことである。質問に対し答えない生徒はいなかった。個々の生徒の学力を掴んだ上で適切な問を発していると思われるが、この授業だけからは断言できない。

・生徒に練習問題を解かせている間、教師は前の方だけにどまり、後部の座席には回ってこなかった。時間がなかったためかもしれないし、教室の後部に空きがないためかもしれないが、残念であった。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

・黒板とチョークだけできちんとした授業ができることを再確認し、励まされた。

5. その他の気づき(裏面も可)

・よく準備されたよい授業だったと思う。これだけの授業を展開しても、相当数の生徒はまだ2次関数の最大・最小を求める問題を解けるようにはならなかった。実際、先生もしかりに数日後の試験のことに言及して生徒の尻を叩いていたが、これは懸念の裏返しであると感じた。家庭学習を通してできるようになる生徒も多数いるのだろうが、クラスの試験の成績が悪かったら、生徒が理解できなかったという理由で教師は低い評価しか与えられないことになりかねない。教育面で教員を評価する難しさを改めて感じた。

1. 参観したクラスと授業科目名

2年 数学II

2. 授業内容の概略

三角関数の合成について、例題をもとに解説。最後は演習問題を生徒に説かせ、丁寧に解説していた。

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

前回の授業で三角関数の合成の式の意味を説明していたのかも知れないが、練習問題に対する解説を主に行っていた。説明に対しては、ひとつひとつの事項に対し、具体例を示す工夫をさせていた。学生に演習問題の解かせる際も、ある程度解き方を教えてから解答させていた。

2) 授業進行について

他の授業もそうであるが、非常にゆっくりとしたペースで授業を行っていた。

3) クラス運営について

中にはボーッとした学生もいたが、ほとんどの学生は真面目に授業を聞いているようだった。最初は理系クラスだと思い、授業を聞いていたが、途中で文系クラスだと知り、真面目に聞いている学生が多いと思った。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

大学の授業は内容が多く、多くの学生が消化不良となっている。授業のポイントだけを理解し、その後、家に帰って教科書を読み、理解することが理想だが、その作業に学生が慣れていない。

5. その他の気付き(裏面も可)

私が学生時代からそうであるが、高校の授業は概念的なことよりもむしろ、問題の解き方に力を入れている。また学生も問題が解けることで、理解したと思う傾向が強い。

1. 参観したクラスと授業科目名

2年 物理学Ⅱ

2. 授業内容の概略

物体の重心に関する授業。大円から小円をくりぬいた特別な例をもとに解説していた。

その他、剛体のつり合いに関する例題を解説していた。(最後の方は聞いていないので不明)

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

重心を求める問題は、式で書くと簡単だが、実際に特別な場合で求める場合、式をどう適応すれば良いのか、詳しく説明されており、実際に模型を使い釣り合うことを生徒の前で確認していた。非常に分かりやすい授業だったと思う。しかし、適応例が難しかったのか、生徒が本当に理解していたかどうかは不明。

2) 授業進行について

生徒に十分考えさせる時間をとり、非常にゆっくりと説明を行っていた。進学校の学生といえども、あの程度の速度でないと、ほとんどの学生が理解できないのだろう。

3) クラス運営について

真面目に聞いている学生とぼんやりしている学生が半々と言ったところだが、物理の授業と言うことを考えると、良くやっているのではないかと思った。授業内容も剛体であり、生徒にとっては、かなり難しかったのだと思う。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

重心の求める式だけ見れば、それほど難しくないのだが、今回の授業の例で取り扱った問題となるとその式をどう適応すれば良いのかという、発想を養う訓練が不十分なのかもしれない。

1. 参観したクラスと授業科目名

3時限 3年 生物Ⅱ

2. 授業内容の概略

尿の生成のしくみについての授業であった。科目は生物Ⅱであったが、腎臓のはたらきについては生物Ⅰの内容であると思われる。授業では、腎小体で血液がろ過されて原尿が生成されることの説明があり、続いて水、無機塩類、グルコースの再吸収により尿が生成されることが説明された。授業後半では、配布プリントを使って問題を解き、教員による解説が行われた。

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

今回の授業では、教科書よりもむしろ、教員がまとめたプリントを使った説明が中心であった。プリントには演習問題があり、授業で学習した内容の理解を、演習問題により確認するという方法は効果的であると感じた。

2) 授業進行について

教員による板書は丁寧であり、授業進行の速さも適切であると感じた。要所では、教員が生徒に質問を向けて理解度を確認されたことも効果的であると思います。

3) クラス運営について

特に気が付いた点はありませんでした。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

丁寧で、板書もしっかりまとめられている高校の授業に慣れている学生には、大学の授業は相当速く感じられるのではないかと改めて感じた。大学の授業においては、学期中に教えた内容が多いため、先に進みがちになるが、ややスピードを落としても学生の理解度を確認しながら進行することが必要なのではないかと感想をもった。

1. 参観したクラスと授業科目名

1年(3時限目) 理科総合

2. 授業内容の概略

標準気体の体積とモルの概念、化学反応式の係数の決定法から質量保存の法則

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

1モルの標準気体の体積が22.4リットルと考えてもどのくらいの大きさか実感がわからないが、模型で見たのはじめてだった。意外と小さいのでびっくりした。

反応式の記述と係数の決定は、実際にやってみてはじめて身につくので、黒板で5名に書かせたのは重要だと思う。

教師の板書は非常に分かりやすく、ちゃんとノートをとれば、その時に理解できなくても後から見ても理解することが可能だろうと思った。

2) 授業進行について

組み立ては復習が10分くらい、宿題として渡したプリントが20分くらい、新たにその日に渡したプリントについて10分くらいであった。宿題も含めて教える項目としては大きく3つくらいあったように思うが、決して一回の授業では身に付かないということを前提として、最初の授業で教えて、宿題を出し(やってきていないのもかなり承知している)、次の時間にもう一度教える(あるいはもう一回先の授業でも教える)というパターンをとっている。決して意欲的とは言えない生徒が多いように見受けられたので、教師はそういう生徒への教育方法として繰り返し教えているのだと感じた。

ただし、生徒はプリント2枚と教科書を行ったり来たりして、ノートをとるゆとりがないように見えた。プリントの必要性はわかるが、失いやすいプリントに書き込んでノートをとらないのは危険なような気がした。

3) クラス運営について

生徒のほとんどは教師の顔も見ない、黒板もあまり見ないという状況の中で、先生が声を振り絞っていた。無反応ではあるが私語もなく非常におとなしく授業を受けていた。生徒への働きかけ方については、生徒の気持ちとギャップがあるようにもみえたが、ベテランの教師でもあり、それも一つのやり方かとも思う。非常にまづいというものではない。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

なし

1. 参観したクラスと授業科目名

3年 化学Ⅱ

2. 授業内容の概略

反応速度・反応次元の求め方、活性化エネルギーと触媒について

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

非常に高度なテーマを取り上げている。計算までさせているので、難関大学を狙う学生にはありがたい授業であると思う。しかし、多くの生徒が理解できずに終わっていた。

2) 授業進行について

活性化エネルギーを含めた反応速度について合わせて 45 分で教えるのであるから、決してゆっくりではなかったと思う。ノートをとる学生が数人いたが、その学生にとっては非常に速かったと思う。

3) クラス運営について

3 年の理系クラスということで、興味を持って授業を受けているだろうと期待していたが、興味なく先生の声も右から左の耳を通過しているような生徒が何人もいたのにびっくりした。理系とはいえ生物 1 科目を決めていたり化学 I のみの範囲でよい生徒などには、授業が問題集の解答説明という形で進行されているため、全く意味のないものとなっているのかもしれない。しかし、化学 II という科目は受験対策用の授業になるのはやむを得ないと思う。従って、生徒の注意をひくために指名することも不可能だろう。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

なし

5. その他の気付き(裏面も可)

化学 II で取り上げているテーマは非常に広範囲にわたっており、高校によって取り上げる量が違っているという話を聞いているが、防府高校の場合はなるべくたくさん扱う方針であると思われた。一方、たとえば山口大学理学部化学分野の学生は、反応速度だけを半期 15 回をかけて教わっている。このようなテーマを高校生に理解させることはもともと想定していないのではないか。従って、問題集の中の一つの問題の解き方として教えるしかない。そのような授業では化学を受験科目にする生徒以外はついていけないという事実は教師が一番よくご存知だと思う。

今回の宮田先生の授業のように大学の授業を高校生にも聞かせるという機会があれば、高校では教える時間のないテーマについて授業することも可能である。また、大学人としては入試問題で取り上げることのできる項目が多くなるので広く浅くという傾向は助かる面もある。

1. 参観したクラスと授業科目名

1 年 オーラルコミュニケーション

2. 授業内容の概略

生徒数 20 名。外人教師と日本人教師とが連携をしてオーラルコミュニケーションに関する実践的な授業をおこなっている。①さいころを振って各自に時間を設定させてそこで何をやっているか英語で答えさせる。②2 人 1 組でアクションを起こす立場と受け取る立場とに分かれて様々なケースを設定させて会話を実践する。順番を変えることにより、いろんなケースを体験させる。

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

良く準備された授業でした。実践的な英語会話能力の開発には効果的であったと思います。①については、同じような回答の繰り返しが見受けられました。もう少し工夫できるといいと思います。一般的に英語を日本人がしゃべるのは恥ずかしいとか自信がないといったところが見受けられ、どうしても声が小さくなりがち傾向があります。間違っても良いから大きな声でしゃべらせるようにすると良いのではと感じました。また、時間が短いので大変かと思いますが、理解度のチェックも大切だと思います。

外人教師はアメリカ?の文化を感じさせるようで、かっこよかったと思います。これは大事なことだと思います。日本人教師も発音がすばらしく、学生ももっと真似をすればよいのではないかと思います。発音などに関しても、指導されればと感じました。

2) 授業進行について

てきぱきと進められておりよかったと思います。日本語で時々解説をされていたように思います。わかっているかどうかを確認する作業の中で必要かもしれません。

3) クラス運営について

私語もなく、またサボるような生徒も折らず、スムーズは運営だったと思います。聞き逃さないよ

うに集中していたためと思われる。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

高校でオーラルコミュニケーションの指導をされていることはすばらしいと思います。大学でも、思ったことを英語で大きな声でしゃべることができるように指導する必要がある、英語による授業も今後求められると思います。うまくしゃべるのではなく相手に伝えるにはどうしたらよいかを考えることが重要と思いました。時間が短いこともありますが、きちんと理解しているかどうかを確認しながら授業を進めることが大切と改めて感じました。

5. その他の気付き(裏面も可)

板書が少ないのに驚きました。中には自分で気づいたことを自主的にメモしている子供もいましたが、そのあたりは現在の大学生と似たようなものです。何を理解したらよいかを事前に教えておくことは重要と思いました。シラバスはその意味で重要だと思います。

1. 参観したクラスと授業科目名

化学 II

2. 授業内容の概略

- ・ 化学反応の速度
- ・ 同 演習問題
- ・ 触媒反応のしくみ

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

- ・ ゆっくりとわかりやすい解説、見やすい板書、および、問題集の問題を解きながら生徒に考えさせていた点。これらは優れた点として見習いたい。
- ・ 宿題を出されている様子はなかった。

2) 授業進行について

- ・ 授業開始時点ではざわついていたが、しばらくすると静かになった。その時、特に注意されていたわけではない。
- ・ 解説が丁寧であった反面、最後はやや時間不足となった。
- ・ 宿題を利用することで、時間節約できないだろうか。

3) クラス運営について

- ・ 3限目の特別講義と高校の学習の接点や意義について触れられていた。
- ・ ノートを取らない生徒、内職(英語らしい)する生徒も見受けられたが、とくに注意されなかった。
- ・ 化学の仕組みを理解し、考えようとする生徒にとってはいい授業と思う。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

- ・ 上記「演習問題を解きながら生徒に考えさせていた点」は導入を考えたい。
- ・ 大学生に 90 分集中させることは、一方的な講義だけでは無理がある(自分にはできそうにない)。

5. その他の気付き(裏面も可)

- ・ ノートをとる必要性和ノートの取り方を、どこかで身につけさせる必要性を感じた。
- ・ 理科では実験が大切だが、実施が難しい。映像教材が整うといいのではないだろうか。

1. 参観したクラスと授業科目名

理科総合 A

2. 授業内容の概略

- ・ 化学反応式の係数
- ・ [mol]の概念

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

- ・ 簡単な道具を使ってモル体積の大きさを復習。モルの概念がどんな役に立つかの説明。
- ・ 宿題として配付したプリントに沿っての解説。
- ・ 新たに配付したプリントに沿っての解説(本日の内容)。
化学反応式の係数の算出方法を繰り返し説明。

最後にモル、モル質量、質量（分子量）の関連を説明。

2) 授業進行について

- ・「概念の復習から入って、宿題の説明そして本日の内容を解説した後、まとめる」この流れは理解を助ける。
- ・45分間のうち、25分間は宿題の解説、残り15分で本日の内容と言った配分。
- ・時間が足りないのではと心配した。特に最後のまとめは駆け足気味に感じた。
- ・時間不足からか、次回へ向けての予告（宿題の配付）がなかった。

3) クラス運営について

- ・なるべく多くの生徒に質問している。
- ・反応がない場合も、かなり丁寧に質問を繰り返し、生徒に考えさせるようにしむけている。
- ・概して生徒はおとなしく素直に聞いている。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

- ・導入部で概念を説明するのに簡単な道具を工夫して使用していること。
- ・また、モルの概念から日常生活レベルで役立つことを説明したこと。ただし、生徒がどこまで理解しているかは不明。
- ・できるだけ生徒に発言させるよう、しむけている。（教師はかなり忍耐強く質問しているにもかかわらず、反応が鈍い。見ていてもストレスがたまる。）
- ・上記は大変参考になるが、私は同じことをしようと思わない。なぜなら、何であれ自分にこれ以上のストレスが掛かると、血圧が上がり、寿命を縮めることが明白であるから。

5. その他の気付き

- ・授業時間が45分というのは、かなり短い感じがする。私自身は進行が早くて生徒が理解できないのではないかと心配した。
- ・授業の組み立ては参考になったが、今何をやっているのか、節目に生徒が自覚できるよう工夫があっても良いと思う。
- ・授業の始めに本日の目標は何かを説明するとよりわかりやすくなるのではないか。

1. 参観したクラスと授業科目名

理科総合 A

2. 授業内容の概略

- ・化学反応式の係数 ・[mol]の概念
- ・上記は演習問題を解きながら説明してた。

3. 授業に関するコメント

1) 授業内容について

- ・問題集「理科総合 Excel」に掲載された問題を授業前の休み時間から生徒が黒板に答えを書く。
- ・授業時間が始まって生徒が書いている間は特に何も無し。黒板に書いている生徒以外は、先生に質問する生徒もいるが、多くは話をしたり、別なことをやっていたりと様々。
- ・黒板に問題の答を書き終えた後、あいさつして授業を始める。（授業時間開始7-8分後）
- ・モル、モル質量、質量（分子量）の関連と化学反応式の係数の算出に関する問題の解説。
- ・時間が足りず、最後は口頭で説明。

2) 授業進行について

- ・上記のとおり、演習問題の解説をしながら進行。
- ・時間が足りず、最後は駆け足状態。

3) クラス運営について

- ・生徒の理解を確認しながらというよりは、一方的な説明に終始していた。
- ・後半以降（25分過ぎ）机に突っ伏す生徒が目立つようになる。

4. 大学の授業に参考となると思われる事項

- ・45分という時間から効率を考慮すると、問題演習に頼らざるを得ない。逆に言うと、90分で行なう大学の講義では、さらに学生の理解度を確認しながら演習を交えることができると感じた。

5. その他の気付き(裏面も可)

・化学反応やモルを理解することで、どのようなことがわかるようになるのかを示すとよいのではないか。

4. 数理科学科

数理科学科には2年次に発達障害の男子学生が在籍している。彼の入学以来、修学上のケアについて学科としては大学教育機構とも連携し、協議を進めてきたところである。かねてより懸案であった彼の障害を同級生へカミングアウト（公表，告白）することについての協議がまとまり、彼の両親の同意も得て、次のように実施した。

- ・日時：平成21年9月28日（月）7・8時限の「数理科学基礎セミナー」の冒頭
- ・場所：理学部14番教室
- ・出席者：授業の受講生（ほとんどは数理科学科の2年生，50～60名）
大学教育機構および理学部学務係の関係者数名
数理科学科の全教員および事務補佐員
- ・彼自身が教室の前に出て、発達障害である旨をカミングアウトした。
- ・彼のこの勇気に対して一部の学生からは拍手が起こった。

その後、教員等は別室に移動し、彼のケアについての勉強会をFDの一環として行った。

- ・日時：平成21年9月28日（月）14：45～15：30
- ・場所：数理科学・国際地域交流企画室
- ・出席者：数理科学科の全教員および事務補佐員
（専門家の立場から）保健管理センター所長・平田
大学教育センター教授・小川

5. 物理・情報科学科

（1）e-Learning 教材作成講習会

3月5日に約2時間にわたって、オープンソースソフト Moodle による e-Learning 教材作成の講習会を学科の希望教員およびTA対象に開いた。参加人数は情報科学分野教員2名、TA4名で、講師は平成20年度から e-Learning 教材の作成に携わってきた学生4名が務めた。Moodle の概要の説明を受けた後、基本的ないくつかの形式の問題作成を行った。

（2）公開授業

共通教育科目「物理学実験 A」を公開した。

1. 対象事業科目 共通教育科目「物理学実験 A（後期木曜日 5・6・7・8時限）」
2. 授業対象学生 理学部・農学部1年生
3. 授業実施場所 共通教育物理学実験室
4. 授業担当者 野崎浩二（理工学研究科准教授）、輪島清昭（理工学研究科助教）
5. 公開期間 平成21年11月5日～12月21日の毎週木曜日 12:50～16:00
6. 公開対象 高等学校理科教諭および高等学校生徒

(3) カリキュラムの見直しと充実のための検討

平成 18 年度から実施している「総合学習の新学習指導要領で育った学生」対応のきめ細かいカリキュラムの見直しと充実のための検討作業を行った。その結果、

- ①物理学 I と力学 I、II、および物理学 II と電磁気学 I、II については、授業担当者と学科内 FD 担当で内容を再検討し整理した。
- ②物性物理学 I、II の内容を現担当者間で調整した。
- ③プレゼンテーション能力の育成を目指し、1 年次から 3 年次の実験科目の内容にプレゼンテーション技術の学習項目を増やした。
- ④初年次にキャリア教育を目的とした特別講義を定常的に実施することになった。

(4) 学生の学習到達度を学科全体で調査し、共有するシステムの構築

学務係の協力により学期毎にすべての学生の成績を整理し、学習到達度を全教員で共有する体制を構築した。

(5) 学生の授業に対する評価および満足度調査

すべての学生に対し、学科の授業に対する評価、満足度を調査する総合アンケートを学科独自で実施した。

6. 生物・化学科

生物学分野では分野独自の FD 研修企画として、野外生物観察の専門家を講師として招き、山口市周辺の特徴的な自然環境に生息する動物・植物について学ぶ野外生物観察研修を 2 回に分けて実施した。

<FD 研修の概要と目的>

山口市とその周辺は豊かな自然に囲まれており、中でも日本最大のカルスト台地である秋吉台には秋芳洞をはじめとする日本を代表する大規模な地下洞窟が複数存在し、この地域の地下水系がラムサール条約に登録されるなど、学術的にも大きな価値がある。カルスト台地や洞窟には特有の動植物が生息しており、この地域ならではのすぐれた生物学教育材料にも恵まれている。この研修の目的は秋吉台とその周辺の自然環境および生息する生物に関する実践的な知識と技能を身に付け、大学における実習などの授業に活かすことである。

研修は 2 度にわたって実施され、第 1 回目は秋吉台と秋芳洞周辺の動植物を観察対象とし、第 2 回目は 21 世紀の森の菌類を主な観察対象として実施された。講師への謝金、研修参加者の交通費などの諸経費には、大学教育センターから各学部に分けられた FD 研修予算の一部が用いられた。

<第1回目研修 秋吉台および周辺水系の生物を観察する野外研修>

日時：平成21年10月11日

場所：秋吉台および秋芳洞

講師（午前の部）：鶴谷 保 先生（萩高等学校）

講師（午後の部）：石田 麻里 先生（秋吉台科学博物館）

参加者：11名（理学部生物学分野、地球科学分野、数理科学分野）

研修スケジュール

- ・ 10:00 秋吉台博物館に現地集合
- ・ 10:00-10:30 午前の部（植物観察）の説明（博物館講堂）
その後、長者が森の駐車場に移動
- ・ 10:30-12:30 長者が森～地獄谷周辺の植物観察（鶴谷講師）
- ・ 12:30-13:15 昼食休憩
- ・ 13:15-13:30 午後の部（秋芳洞の生物観察）の説明（博物館講堂）
- ・ 13:30-13:45 秋芳洞エレベーター口へ移動
- ・ 13:45-15:15 秋芳洞エレベーター口から入洞、洞内観察（石田講師）
- ・ 15:15-15:30 秋芳洞入口からエレベーター口へ洞内移動、出洞
- ・ 15:30-15:45 秋芳洞エレベーター口から市営駐車場（コウモリ穴）へ移動
- ・ 15:45-16:15 コウモリ穴観察（0.5h）
- ・ 16:30 市営駐車場から移動、解散

午前の研修では、鶴谷講師の指導によって、烏帽子岳の頂上付近まで観察範囲を広げながら、秋吉台に特徴的な草原の植物、森林の植物、さらにカルスト台地に多い石灰岩植物の観察を行った。植物を専門とする教員が生物学分野にいないこともあり、どの教員も植物の名前や見分けかた、生息環境などについて活発な質疑がかわされた。当日は好天にも恵まれて、緑と石灰岩が織り成す秋吉台の見事な景観を堪能しつつ、数十種類を超える多種多様な植物を観察することができた。

昼食をはさみ、午後には石田講師の指導によって、秋芳洞に入洞し、シコクヨコエビ、ホラアナゴマオカチグサ、キクガシラコウモリなど洞窟に特有の動物の観察を行った。これまで観光目的で何度も訪れた場所であるが、生物の観察は今回が初めて、という参加者が多く、初めて目にする洞窟の生物の姿に強い興味を示しながら講師の解説に聞き入っていた。その後、ヘルメット、ヘッドライトを着用し、通常の観光では目にする事のない、近くにあるコウモリ穴に入洞して、まったく光の届かない暗黒の中に生息する生物、コウモリなどの観察を行った。





<第2回目研修 21世紀の森の菌類と植物を観察する野外研修>

日時：平成21年11月23日

場所：山口県21世紀の森

講師：柴田 靖 先生（日本特用林産振興会認定 「きのこアドバイザー」）

参加者：11名（理学部生物学分野、時間学研究所）

研修スケジュール

- ・ 10:00 山口県21世紀の森 森林学習展示館前に集合
- ・ 10:00-12:00 21世紀の森の菌類と植物に関する講義（学習館研修室）
- ・ 12:00-13:00 昼食・休憩（キノコ汁とマツタケご飯の調理）
- ・ 13:00-13:30 野外観察の概要の解説・説明（学習館研修室）
- ・ 13:30-16:00 周辺の森で菌類と植物の観察
- ・ 16:00-17:00 観察できた菌類・植物の解説
- ・ 17:00 解散

午前中に柴田講師によるキノコ観察に関する講義が行われ、食用か否か、また、毒キノコの危険性などについて活発な質疑がかわされた。その後の昼食では、参加者および柴田講師が持参したマツタケや各種の食用キノコで、マツタケご飯とキノコ汁が調理され、参加者にふるまわれた。午後のキノコ観察では、この時期にしてはキノコの種類と数が非常に少なかったものの、大半の参加者にとって、キノコの本格的な観察指導を受けるのは初めてであり、森のさまざまな場所に、いろいろなキノコが生息していることを学び、あらためてこの地域の自然の豊かさに感じ入った。参加者が採取したキノコは講師によって鑑定され、種類の見分け方などの解説がなされた。



<今回のFD研修によって得られた成果>

このような専門家の指導による野外観察の研修は、生物学分野として初めての試みであり、参加教員にも非常に好評なものだった。山口大学は豊かな自然に囲まれているものの、それを大学の授業に生かすことは、教員の専門性という問題もあり、一部の実習や卒業研究を除いて十分とは言えない状況だった。今回の研修によって、多くの教員が、山口の自然の豊かさを、生物学的な面から認識することができ、さらに、今後の実習などへ生かすための素地とすることができた。このような専門家の指導による実践的なFD研修の意義は大きく、今後もさまざまな企画を考えていきたい。

7. 地球圏システム科学科

地球圏システム課学科及び理工学研究科地球科学専攻（合わせて地球科学教室とする）においては、恒常的に教育改善検討WGが組織されており、ピア・レビューの実施にあたりとともに、教育改善の取り組みを行っている。本年度は、FD活動の重点項目として(1)ピア・レビューの実施をあげており、また例年と同様、(2)FD研修会への参加並びに教室独自のFD研修会の開催、(3)学生院生授業評価の実施とその活用、などを行っている。

○ピア・レビューの実施

当学科においては、各教員の授業改善のための参考とするため、毎年度学生授業評価をもとに最も学生からの評価の高かった教員がピア・レビューを実施している。

○全学FD研修会への参加

全学的に実施されたFD研修会への参加状況は、以下のとおりである。

○第57回中国・四国地区大学教育研究会（今岡照喜、金折裕司）

○学生及び大学院生による授業評価、その他

例年にならって、学部及び修士課程のほぼ全講義についての授業評価を実施した。評価項目等は理学部及び理工学研究科に同じである。また評価結果により今年度のベストティーチャー賞に今岡照喜教授と福地龍郎准教授を選出し、ピア・レビューを行った。また毎年、毎週水曜日15～17時に「学習のテラス」を開設し、修士院生を相談員として、学部学生の学習支援や諸事相談にあっている。

8. その他

各学科・コースでのFD参考資料として次の図書を購入し、各学科・コースで閲覧した。

物理学コース

アドバンス物理 (オグボーン、ホワイトハウス編、シュプリンガー・ジャパン)

アドバンス物理 A2 (オグボーン、ホワイトハウス編、シュプリンガー・ジャパン)
--

ラーニング・ポートフォリオ (土持ゲーリー法一、東信堂)
ティーチング・ポートフォリオ (土持ゲーリー法一、東信堂)
アカデミック・ポートフォリオ (ピーターセルディン他、玉川大学出版部)
大学授業を活性化する方法 (杉江修 他、玉川大学出版部)
見て体験して物理がわかる実験ガイドー演示実験・生徒実験集 - DVD 付 (兵頭俊夫監修、学術図書出版)

情報科学コース 高等学校で採用している教科書

数学Ⅰ (東書)	数学Ⅲ (東書)	数学B (東書)	情報A (実教)
数学Ⅰ (啓林館)	数学Ⅲ (啓林館)	数学B (啓林館)	情報A (第一)
数学Ⅰ (数研)	数学Ⅲ (数研)	数学B (数研)	情報B (実教)
数学Ⅱ (東書)	数学A (東書)	数学C (東書)	情報B (第一)
数学Ⅱ (啓林館)	数学A (啓林館)	数学C (啓林館)	情報C (一橋)
数学Ⅱ (数研)	数学A (数研)	数学C (数研)	情報C (第一)

生物科学コース

「日本のきのこ (山溪カラー名鑑)」 (今関六也、本郷次雄大谷吉雄著、山と溪谷社)

地球圏システム科学科

日本地方地質誌 6. 中国地方 (西村祐二郎編、朝倉書店)
日本の大学改革 (米沢彰純他 OECD report 翻訳)
職業としての大学教授 (潮木守一、中公叢書)
大学教育を科学する一学生の教育評価の国際比較 (山田礼子、東信堂)
ラーニング・ポートフォリオ (土持ゲーリー法一、東信堂)
ティーチング・ポートフォリオ (土持ゲーリー法一、東信堂)
アカデミック・ポートフォリオ (ピーターセルディン他、玉川大学出版部)
大学授業を活性化する方法 (杉江 修 他、玉川大学出版部)
大学のカリキュラム改革 (有本 章、玉川大学出版部)

第6節 FD実施経費報告

平成21年度 各学部・研究科FD実施経費報告票 (FD経費—大学教育機構)

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
理学部	理学部 FD 講演会	講師謝金・旅費 1名	36	広島大学前理学部長を講師に迎え、広島大学における教育指導内容について講演を受け、指導方法の改善・充実について知見を得た。

ピア・レビュー実施 (物理学実験Ⅱ)	謝金・旅費 (学外教 員) 1名	19	高等学校の理科教員を招き、 ピア・レビュー後、実験指導 方法に関する意見交換を行 い、指導方法の改善・充実 について知見を得た。
ピア・レビュー実施 (力学Ⅰ, 情報数学Ⅱ)	謝金・旅費 (学外教 員) 5名	46	高等学校の理科教員を招き、 ピア・レビュー後、授業方法 に関する意見交換を行い、指 導方法の改善・充実について 知見を得た。
野外実習指導(秋吉台)の 実施	講師謝金・ 旅費2名 旅費(教員) 11名	62	高等学校の理科教員及び学芸 員を講師に迎え、動植物観察 における野外実習の指導方法 の改善・充実について知見を 得た。
野外実習指導(21世紀の 森)の実施	旅費11名	21	きのこアドバイザーを講師に 迎え、菌類と植物の観察にお ける野外実習の指導方法の改 善・充実について知見を得た。
FD活動に資する参考資料 の購入	図書	21	FD活動で活用する資料を購 入し、今後の教育指導に資す る。
計		205	

平成21年度 各学部・研究科FD実施経費報告票 (FD経費-学部長裁量経費)

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
理学部	理学系大学教育に関する 研究フォーラム (広島大学主催)	旅費(教員) 2名	58	中国四国地区国立大学理学部 における教育に関する実践事 例や取組状況の報告及び討論 を行い、指導方法の改善・充 実について知見を得た。
	野外実習指導(21世紀の 森)の実施	講師謝金・ 旅費1名	65	きのこアドバイザーをを講師 に招き、菌類と植物の観察に おける野外実習の指導方法の 改善・充実について知見を得 た。

	FD活動に資する参考資料の購入	図書	77	FD活動で活用する資料を購入し、今後の教育指導に資する。
計			200	

平成 21 年度理学部 FD 委員会委員

増山博行 (委員長)、村上柳太郎、吉川学 (以上、教学委員会委員)、小宮克弘 (数理科学科)、内野英治、白石清 (物理・情報科学科)、藤島政博、山崎鈴子 (以上、生物・化学科)、大和田正明 (地球圏システム科学科)

第8章 医学部のFD活動

各学部のFD活動報告は、本来、学部単位で取りまとめるべきであるが、医学科と保健学科では、医療人を養成するという教育目的は一致するものの、職種の違いに起因してカリキュラムと授業形態が根本的に異なり、必然的に教員に要求される教育技能も異なっている。さらに、FD活動に関する歴史的経緯も異なることから、活動は医学科と保健学科で、それぞれ独立して行われている。

そのため、本報告においても、それぞれの活動を別個に記述する。

第1節 医学科

1. 活動概要

医学科では、社会からの医学教育への強い期待に応え、また全国的に急ピッチで進行する医学教育改革の動きの中で主導的な役割を果たすため、全学規模でのFD活動が本格的に開始される以前の平成9(1997)年度から、年1,2回の1泊2日のワークショップを中心として独自のFD活動を展開してきた。

継続的に展開してきたFD活動は、平成13(2001)年度以降、毎年、着実かつ具体的な教育改善に結実してきた(例:コース・ユニット制へのカリキュラムの根本的改変、展開医学系テュートリアルの実施、多肢選択型客観問題による統一試験の実施等)。

他方で、平成15年度以降は、ワークショップの必要回数が増大する一方、予算的制約もあり、1泊2日型から1日で完結するワークショップに活動の中心が移行しつつある。

平成20年度も、基本的にはこの流れの延長線上に、教育改善上の具体的な個別テーマに基づいた1日完結型のワークショップおよび数時間の講習会を中心に活動を展開した。

2. 具体的活動

(1) ワークショップ

a. 「テュートリアル・ワークショップ」

2010年1月23日(土) 場所:医学部第1講義室&テュートリアル室

※年間6ユニットにわたって実施される「展開医学系テュートリアル」のあり方に関するディスカッションと、実際に各ユニットで使用するシナリオの概要の決定。

※なお、実際に、実施するまでには、各ユニットから提出された原稿を約10名のWG委員が集まって検討し、さらにメーリングリストを通じてやり取りすることで推敲を続けてから使用に供した。

b. 「新入生指導法ワークショップ」

2009年9月25・26日(金・土) 場所:山口県セミナーパーク

※1泊2日のフレッシュマンセミナーに合わせて、1年生の指導法についてワークショップ形式で研修を行った。

c. 「多肢選択型客観問題作成ワークショップ」

2009年5月9日(金) 場所:霜仁会館3階

- ※ 全国の共用試験 CBT 他、統一試験（基盤系統一試験&卒業試験）で使用される、多肢選択型客観問題の作成技法を習得するためのワークショップ。
- ※ 参加者が事前に作成した問題を持ち寄り、ブラッシュアップを主体に実施した。

（２）講習会・講演会

a. 「チューター講習会」（計 2 回）（3 回とも同一内容）

2009 年 4 月 6 日（月） 場所：第 1 講義室

2009 年 4 月 10 日（金） 場所：第 1 講義室

b. 「シラバス講習会」

2009 年 12 月 15 日（火） 場所：第 2 講義室

- ※ 医学科独自のコース・ユニット制カリキュラムおよびそれと一体化した eYUME のコンテンツ更新方法に関する講習会。

c. 「コース・ユニット新任責任者 FD 研修会」

2009 年 12 月 15 日（火） 場所：第 2 講義室

- ※ 新たにコース・ユニットの責任者になった教員を対象に、成績評価法統についてスモール・グループ・ディスカッション形式でディスカッションを行い、共通理解を深めた。

（３）教育評価活動

平成 13（2001）年度から実施している「振り返り評価」（ユニット終了後、マークシートで実施）と平成 13（2002）年度から実施している「進行評価」（1 回 1 回の講義終了後、オンラインで実施）を 21 年度も引き続き実施した。

なお、「振り返り評価」に関しては、全学の統一様式との摺り合わせの問題が浮上し、大学教育センターとの協議の結果、19 年度から全学フォーマットに合わせたデータを提供することで合意に達した。

第 2 節 保健学科

1. 概要

本学に大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程が設置され、平成 21 年度末には最初の博士号の授与が行われた。大学院教育と並行して、基礎教育となる医学部保健学科にも、一層高い質の教育・研究が求められるようになった。卒業生に対するアンケート調査では、保健学科の教育・指導内容への満足度は毎年高く評価されているが、本年度はさらなる向上を目指して保健学科独自の F D 研修会として以下の内容を企画した。

- 1) Challenge it! 英語発音法講演会—新しい英語発音法パラダイム—
- 2) 軽度発達障害学生への支援
- 3) 教育改善研修会
- 4) Less is more—効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考
- 5) 授業展開の方法（ピア・レビュー）

6) 教職員のメンタルヘルスケア

このうち、新型インフルエンザの流行により5) 授業展開の方法（ピア・レビュー）は中止となったため、5回のFD研修会を実施した。以下に、今年度実施した各研修会の実績について述べる。

2. 実施内容

1) 新しい英会話発音法パラダイム

日時 平成21年4月7日(火) 16:00～17:30

場所 共通教育棟3階32番教室

講師 上川一秋、ジーナ・ジョージ（「英語喉50のメソッド」著者）

新しい英語学習パラダイム「英語喉」発見のきっかけとしての「疑問」と「観察」を中心に、英語ネイティブと日本人の発音法の違いからネイティブに近づく発音法について知ることを目的とした研修である。講師は、「英語喉50のメソッド」（三修社）の著者である上川一秋・ジーナ・ジョージ Jeana George 夫妻である。ネイティブ・スピーカーと日本人の英語の発音は違うということは経験的にわかっているが、具体的にどのような点が異なるのかは認識できていなかった。この講座では、日本での生活を体験したジーナさんが、高校英語教師体験のある上川さんに「日本人は英語を喉に響かせないで口の中だけで話している」と指摘されたエピソードが紹介され、日本人が喉を使ってネイティブ・スピーカーと同じように英語を楽に話せるようになる方法について演習を交えた講義が行われた。

参加者は保健学科教員34名（60.7%）で、アンケートに回答した34名中30名（88.2%）が有意義であったと評価していた。

2) 軽度発達障害学生への支援

日時 平成21年7月23日(木) 15:00～16:30

場所 共通教育棟3階32番教室

講師 林 隆（山口県立大学教授・山口県LD研究会会長）

「軽度発達障害児は既存の障害と異なり、外見上障害があるようには見えず、物の感じ方や学習の仕方が標準的な基準から隔たっているため、現実生活（特に学校などの集団生活）で支障を来してくる子どもたちである。発達特性にあわない環境設定を行うと、適応困難から情動面の不安定さをまねき、二次障害（問題行動、反抗挑戦的行動）や三次障害（行為障害、精神障害）を来すことになる。

（中略）軽度発達障害児の発達特性を十分理解し、特性にあった環境調整を行うことが大切である。」

以上は講師である林隆氏の論文の引用である（林隆：「発達障害」「軽度発達障害」の考え方と「発達障害者支援法」の展望，外来小児科，9(3)，286-297，2006）。教育の場で軽度発達障害を有する学生に接する可能性がある私たち教員にとって、軽度発達障害の特性および具体的な対応について知ることは、障害特性に合った環境調整を行うために重要であると考えてこの研修を企画した。講演では、障害の特徴、種類と頻度、支援方法などについてわかりやすい解説が行われた。

参加者は保健学科教員18名（32.1%）で、アンケートに回答した16名中全員が有意義であったと評価していた。教育上参考になる講演であったが、看護学実習の期間中であり、看護学専攻教員の参加が少なかったのが残念であった。

3) 教育改善研修会

日時 平成21年8月24日(月) 13:30～15:40

場所 保健学科研究棟1階大会議室・小会議室1・小会議室2

大学教育センターから岩部センター長、小川教授、兼石教育コーディネータの3名、保健学科から両専攻長および教学委員、教務委員、FD委員が出席し、教育改善のための研修会を実施した。

第一部として、岩部センター長から学科改編やカリキュラム改編に伴う GP・カリキュラムマップの見直し作業について、とくに4年一貫の学士課程教育を考慮し、教養教育 GP をカリキュラムマップに加えて再編成する意義についての説明が行われた。続いて、兼石教育コーディネータを中心に、現在の GP やカリキュラムマップについての意見交換が行われた。

第二部では、科目間の系統性や順次性を俯瞰するためのワークショップとして、看護学専攻と検査技術科学専攻に分かれ、カリキュラムフローチャートの作成を行った。この作業では、機械工学科の資料を参考にしながら、各学科・課程等に開設されている科目名（現行のカリキュラムマップに記載してある科目）が示してあるラベルを科目間の系統性や順序性、関係性、さらに GP の達成を考慮しつつ模造紙に貼り付けた。

その後の作業として、看護学専攻および検査技術科学専攻それぞれに FD 委員と教務委員が協働して GP・カリキュラムマップの見直し案とカリキュラムフローチャートを作成し、21 年末に大学教育センターに提出した。

4) Less is more—効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考—

日時 平成 21 年 10 月 28 日(金) 15:00~16:30

場所 総合研究棟 S4 教室

講師 MARC LOHR (経済学部教授、大学教育センター主事)

現在、講義や学会発表のプレゼンテーションには、ほとんどの場合パワーポイントが使用されている。パワーポイントで作成されたスライドの中には、アニメーション機能が用いられていたり音声などのマルチメディアデータが挿入されていたりして、凝った仕様となっているものがある。また、大量の情報を提示しているものや、枚数が多く説明時間がほとんどないままに次のスライドへと移行するものもある。しかし、このようなプレゼンテーションは、作成に時間がかかる上に聴衆を疲労させ、却って内容の理解を妨げてしまう。

本来、プレゼンテーションは、送信者が伝達したいメッセージを効果的に受信者に伝達するためのコミュニケーション手段である。しかし、「効果的なプレゼンテーションを行うためのポイント」については意外に考慮されていない。そこで、効果的なプレゼンテーションを行うためのパワーポイントの利用方法についての研修を企画した。同じプログラムが吉田地区でも実施されたが、小串地区からの出席が困難であるため、改めて小串地区で実施されたものである。講演では、効果的なプレゼンテーションを行うために押さえるべき重要なポイント(「1スライド、1メッセージ」、「可読性への配慮」、「プレゼンテーションの構成方法」など)に関する解説が行われた。

参加者は 31 名で、保健学科教員 28 名 (50%)、医学科教員 1 名、医学生 2 名であった。研修後に回収したアンケートでは、「非常に良かった」「良かった」の合計がアンケート回答者 30 名のうち 29 名 (96.6%) を占めた。参加者からは、「プレゼンテーションのより良い方法を教えてもらえ、参考になった」、「単なる発表テクニックではなく、プレゼンテーションの基本的理念・理論が理解できてよかった」、「講義や発表時に役立ちそうだった。実践してみたいと思う」等の感想が得られた。

5) 教職員のメンタルヘルスケア

日時 平成 22 年 2 月 4 日(木) 15:30~17:00

場所 総合研究棟 S4 教室

講師 吉武八重子 (メンタルヘルス対策支援センター相談員)

過度のストレスにより鬱病や適応障害の罹患率が高まるなか、メンタルヘルスを維持することは教

職員にとって健康状態を保って仕事を進める上で重要である。この講座では、ストレスとメンタルヘルスの関係やストレスの種類、ストレス反応、メンタルヘルスを維持するための個人および職場のあり方などについての解説の後、①自分のストレスおよび対処行動に気づくための演習、②エゴグラムによって自分のこころの働きに気づく演習が行われた。

参加者は保健学科教員 35 名 (62.5%) で、25 名 (44.6%) が有意義であったと回答した。意見として「もう少し専門的な内容の講演を望む」「実施時間を早くしてほしかった」などがあげられていた。保健学科では、ストレスについての基本的な知識を有している教員が多く、一般市民に対するよりも専門性の高い内容が期待されていたと考えられる。また、当日は、臨時教授会の開催により実施時間が 30 分繰り下げとなったことが実施時間帯についての意見に反映したと思われるが、臨時教授会の開催は予測できず、また外部講師を依頼していたため、30 分繰り下げて実施する以外の対処ができなかったのが実状である。

3. 今後の課題

1) 学部教育の充実について

平成 21 年度における保健学科 FD 委員会の主要な活動の一つに、大学教育センターおよび教務委員会との協働による教育改善への取り組みがあげられる。

平成 20 年度に、各学部・研究科と大学教育センターが一体になって、グラジュエーション・ポリシーやカリキュラムマップ、Web シラバスといった山口大学の教育改善のしくみを全教員が理解するための研修会が開催されたことを受けて、平成 21 年度においては、大学の教育改善をさらに定着させ、組織的な FD 活動を推進するための研修会が各部局で実施された。保健学科では 8 月 24 日に教育改善研修会が開催された。その内容は、前述したとおりである。

この研修会において科目間の系統性や順次性を俯瞰するためのワークショップとしてカリキュラムフローチャートの作成にとりかかり、研修会終了後にも引き続き完成に向けての作業を行った。また、グラジュエーション・ポリシーやカリキュラムマップの見直しも併せて実施した。しかし完成には至らず、また、大学教育センターとしてもカリキュラムマップのフォーマットを再考するという方向性もあるということで、この作業は平成 22 年度以降も続行することになった。

2) 平成 22 年度の学科内 FD 研修会の内容検討について

平成 21 年度の保健学科における FD 活動については、ピア・レビューの回数の増加や、実践に役立つ授業方法の講習会の開催が望まれていた（平成 20 年度報告書より）。しかしながら、この方向性に沿って計画していたピア・レビューが新型インフルエンザの流行によって中止となったことは、大変残念であった。

ピア・レビューや実践に役立つ授業方法に関する研修は課題(1)とも関連するため、平成 22 年度においてはピア・レビューをはじめとする教育改善のための研修会の開催が必須であると考えられる。保健学科教員の FD 研修会に対する関心は高く、今後ますます教員の研究活動や教育活動の発展に貢献できる FD 研修会の題材の検討が必要であろう。

また、医学系研究科では大学院医学系研究科共通教育基礎科目など、医学科では特別専門講義、重点統合科目、自己開発コース、修学論文や臨床チュートリアル科目などの学生の班別報告会や組織的な教育指導のほか、実習や演習などで講座単位での教育改善活動が行われており、これら FD 活動の現状を調査して、実質的かつ日常的な教員の FD 活動を評価することにより、FD の効果を高める必要がある。

第3節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
医学部保健学科・ 医学系研究科共催	軽度発達障害学生への支援	旅費・謝金 1名	30	軽度発達障害の特徴や支援方法について教育に生かせる知識を得た。
医学部保健学科	教職員のメンタルヘルスケア	旅費・謝金 1名	30	ストレスマネジメントに有用な知識を得た。
計			60	

第9章 工学部のFD活動

第1節 はじめに

工学部ではFD活動として以下のものに継続的に取り組んでおり、本年度も見直しを含め引き続き継続的な活動を行った。

1. 公開授業
 2. 授業評価表彰
 3. 全学FD研修会への参加
- 以下、本年度の活動をまとめる。

第2節 公開授業

工学部ではこれまで毎年度前期と後期に各学科2～4科目を選び、それを公開授業として一般教員の授業参観を進めてきた。本年度も前期は従来通り実施したが、後期は参加率の向上を期待して、一定期間を決め、全開講科目を対象として、一般教員に参加してもらった。なお、機械工学科においては前期から全開講科目を公開授業としている。

本年度公開した授業について以下の表にまとめた。

平成21年度(前期)公開授業一覧

前期公開授業実施期間 6月11日(木)～7月22日(水)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
機械工学科	全開講科目			6月11日～ 7月22日	実験等実施されない日もあります。
社会建設工学	土質力学Ⅰ	教授	兵動 正幸	金曜日	
社会建設工学	土質力学Ⅰ	教授	中田 幸男	金曜日	
社会建設工学	鋼構造工学Ⅰ	教授	麻生 稔彦	水曜日	
社会建設工学	衛生工学Ⅰ	教授	関根 雅彦	火曜日	
応用化学科	機器分析	教授	中山 則昭	金曜日	いつでも可
応用化学科	生物化学Ⅰ	准教授	星田 尚司	火曜日	6月30日を除く
応用化学科	配位化学	准教授	中山 雅晴	火曜日	いつでも可
応用化学科	物理化学Ⅱ	准教授	江頭 港	火曜日	6月25日を除く
電気電子工学科	電気機器学	教授	田中 俊彦	6月19日	
電気電子工学科	電気機器学	教授	田中 俊彦	6月26日	
電気電子工学科	半導体工学Ⅰ	准教授	山田 陽一	6月30日	

電気電子工学科	半導体工学 I	准教授	山田 陽一	7月7日	
電気電子工学科	電気電子材料	准教授	浅田 裕法	7月1日	
電気電子工学科	電気電子材料	准教授	浅田 裕法	7月8日	
電気電子工学科	情報処理および演習	准教授	若佐 裕治	6月22日	
電気電子工学科	情報処理および演習	准教授	若佐 裕治	6月29日	
知能情報工学科	情報と職業	教授	多田村 克己	6月22日	
知能情報工学科	情報と職業	教授	多田村 克己	7月13日	
知能情報工学科	応用線形代数	准教授	平林 晃	火曜日	
知能情報工学科	データベース	准教授	河村 圭	6月29日	
知能情報工学科	データベース	准教授	河村 圭	7月2日	
知能情報工学科	データベース	准教授	河村 圭	7月6日	
知能情報工学科	論理設計	助教	松元 隆博	火曜日	
感性デザイン工学科	空間デザイン論	教授	内田 文雄	7月2日	
感性デザイン工学科	構造力学 I	教授	藤田 正則	7月10日	
感性デザイン工学科	安全環境論(特別講義)	准教授	村上 ひとみ	6月17日	
感性デザイン工学科	安全環境論(特別講義)	准教授	村上 ひとみ	6月24日	
感性デザイン工学科	安全環境論(特別講義)	准教授	村上 ひとみ	7月8日	
感性デザイン工学科	人間計測学	講師	松田 憲	6月16日	
循環環境工学科	環境情報学 II 及び演習	教授	今井 剛	6月29日	
循環環境工学科	環境情報学 II 及び演習	教授	今井 剛	7月6日	
循環環境工学科	環境適合型材料	教授	喜多 英敏	6月29日	
循環環境工学科	環境適合型材料	教授	喜多 英敏	7月6日	
循環環境工学科	地球環境論	准教授	樋口 隆哉	6月17日	
循環環境工学科	地球環境論	准教授	樋口 隆哉	6月24日	
循環環境工学科	地球環境論	准教授	樋口 隆哉	7月1日	
循環環境工学科	地球環境論	准教授	樋口 隆哉	7月8日	
循環環境工学科	有機化学	准教授	山本 豪紀	6月17日	
循環環境工学科	有機化学	准教授	山本 豪紀	6月24日	
工学基礎教育	応用解析 I	准教授	岡田 真理	6月15日	機械2年
工学基礎教育	応用解析 I	准教授	岡田 真理	6月22日	機械2年
工学基礎教育	応用解析 I	准教授	岡田 真理	6月29日	機械2年
工学基礎教育	応用解析 I	准教授	岡田 真理	7月6日	機械2年
工学基礎教育	応用解析 I	准教授	岡田 真理	7月13日	機械2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	6月18日	感性2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	6月22日	機械2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	6月25日	感性2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	6月29日	機械2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	7月6日	機械2年
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	柳 研二郎	7月16日	感性2年

平成21年度(後期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月1日(火)～12月24日(水)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時 月 日	備考
		職	氏名		
全学科	全開講科目			12月1日～ 12月24日	非常勤講師担当の科目は除く。

上記の公開授業を実施したところ、参加者は前期 14 名、後期 28 名、合計 42 名の参加があった。この人数は工学部の教員数の 25%に当たり、4 人にひとりの教員が授業参観に参加したことになる。しかし、工学部教員には年 1 度の授業参観を目標に掲げているが、この数値はいささか目標達成までには程遠い。今回教員が参加し易くするために、全開講科目を対象とし、さらに公開授業に参観した教員から提出してもらうレポートの形式も簡素化した。確かに前期に比べ、後期は倍増したが、全体数が少ない。今後、多忙な教員のニーズに合わせた工夫がさらに必要と考えられる。

授業参観した教員から提出された感想や指摘などを、原文通り以下に列記する。

前期公開授業感想まとめ

●優れていると思われる点

説 明

- ・授業の最初に、前回の復習を適切な分量で行っていること。
- ・特に、グラフの説明を例になぞらえて説明されていたのは、とても良く分かった。
- ・手法を説明する際に、事例が適切かつ豊富で、よく理解できた点。
- ・分析をする際に、ダメな例や、誤解を生じる例も多く紹介されており、私にとってもためになった。
- ・学生の目線に立って分かり易く話をされている。難しい現象を学生が関心をもつような比喻を用いて説明しておられ、学生が熱心に聞いていた。
- ・ITを駆使してわかりやすい授業を行っている。
- ・プログラムを書く・実行する前に、プログラムの内容や構文の使用方法を丁寧に説明している。
- ・難易度の高い地理情報システムを平易に、分かりやすく、かつ、丁寧に説明がなされていた。
- ・一つの事項について時間をかけて何度も(4～5回位話している箇所もあった)説明していた。また板書をゆっくり丁寧に書いており、ノートも取り易いように感じた。
- ・試験での出題を暗示しながら授業の重要点を明確に提示している。
- ・講義の際にPowerPointを提示しながらの講義であったが、スライドの説明内容、動画や図、フローなどが大変わかりやすく作成されていた。

板 書

- ・図などを豊富に使い、また具体的な説明を多く含めて受講者の理解を促していた点。(板書の図が素晴らしい出来栄で感動した。)
- ・板書だけではなく、要所でスライドを利用されていることは、メリハリを付けるという観点から効果的に感じられた。
- ・ホワイトボードへ書いた文字、式の配置がコンパクトで、すっきりしている。
- ・わかりやすい講義であり、板書も丁寧であった。

- ・板書も見易く、学生がノートを取りやすいと思われる。内容も理路整然としており、後でノートを見直せば理解できるレベルのノートに仕上がっている。

資 料

- ・講義に使用する **Power Point** のコピーを事前に印刷配布することで、図表や数式といったノート記載の補助としている。
- ・**Power Point** を中心に利用した講義であるが、その補助的にホワイトボードを活用され、受講学生は配付資料にポイントを書き込むなどして、要点を学びやすくしている。
- ・解説資料も充実している。

進め方と工夫

- ・受講学生の顔と氏名を覚えられており、最後尾列に座った学生や注意力が怠慢になった学生に対して、唐突に指名して質問することで、受講生全体に緊張感を与えている。
- ・学生全員に質問して、答えさせていた。
- ・課題を出し、授業が終る前に 10 分程度で原案を作成させた。
- ・まず、前回の復習を行う点。
- ・課題の解答を丁寧に行う点。
- ・説明後、演習問題を取り入れている点。
- ・授業アンケートを毎回行っており、授業の最初で、質問に対する回答や誤解しやすい点の指摘等を行っていたこと。
- ・授業は、パワーポイントで行われていたが、学生がノートをとる時間を考慮し、適切な時間配分がなされていたこと。
- ・学生がノートを取る時間など、受講する側のペースを配慮して進行していた点。
- ・学生に問いかけ、質問するなど、学生とのコミュニケーションを心がけられており、学生が集中力を失わずに講義に参加することに注意が払われている。
- ・教室が広いので、後方の学生にもわかりやすいように、画面フォントやポインタの大きさを調節している。
- ・授業を聞いて、その場で理解できるように工夫された授業であると思う。
- ・授業の冒頭に実施される小テストは、前週の復習になり、かつ、出席管理にも利用できる。
- ・授業の進行状況に応じて、その都度、演習を実施されていることは、学生自身に考えさせる工夫として有用である。
- ・全体を通して感じたことは、単に聞いてノートを取るだけの授業ではなく、学生に考えさせる時間を多く与えるように工夫されている。
- ・情報分野において、基本情報技術者試験を有しているか否かは、就職活動時において採用・不採用を決定する重要な要素の1つであると考えられる。学生にとっては、本科目を受講することにより、基本情報技術者試験を受験するための基礎知識を習得することができることから、非常に重要な講義であると考えられる。また、担当教員も上述したことを十分に考慮した上で講義を進めており、試験において出題頻度が高く重要な項目には十分に時間を割り当てながら進めていた。
- ・講義ではスライドを使用し、文字の大きさや配色にも気を配っており、非常に分かり易い講義であった。スライドを使用した場合にはメモをとらない学生が多いことが欠点として知られているが、教員がメモをとるための時間を十分に確保しており、学生もメモをとりながら講義に集中していた。
- ・特に、図とキーワードに加え、特に重要な点に関してはきちんとした文章が書いてあり、後で学生がノートを見直したときにわかりやすくなるようにしてあり、参考となった。
- ・学生を講義に集中させるための工夫としてスライド内容を書き写す作業を伴うようにしており、参考になった。

その他

- ・成績トップの学生のレベルを100とすると、70～20のレベルの学生に適した講義で、80%以上の学生にとって講義に対する不満は無いと思われる。
- ・データベースの基礎を分かり易く丁寧に扱った講義であった。本講義では、独立行政法人 情報処理推進機構が実施している基本情報技術者試験の内容が十分に考慮されていた。
- ・少人数で指導が行き届いていた。
- ・以前の授業内容から変更になったようだが、数段有意義な授業内容になったと思う。
- ・明瞭な声でもあり、聞き取りやすく、分かり易い説明であった。
- ・学生はノートを取るのに必死であり、眠っている学生は少ない。

●改善を検討すべきと思われる点とその理由

説明

- ・パワーポイントの文字で、黒文字と青文字は、席の後ろからでは判断し辛いかもしれない。
- ・せっかく良いグラフや見易い数式を用いておられるので、レーザーポインタやワイヤレスマウス系のポインタを使われると、より説明し易いかもしれない。

資料

- ・Power Point を写すスクリーン上の照明がついているので、背景が白色の数式などの一部で若干見えにくい箇所が見受けられた。

進め方等

- ・パワーポイントを使用した講義の際に、学生がノートをとっていなかった。
- ・限られた時間の参観であったので、的はずれかもしれないが、学生の方向を向いて、解説・説明する時間を増加させた方がよいと思う。学生に背を向けている時間が多いように感じた。
- ・上記のように進行に配慮はあったものの、もう少し双方向的であればさらによいかと感じた。
(例えば単元の説明終了後に質問を促すなど)
- ・スライドの提示スピードのと学生の書き取り(ノートや PC などでの)の速さの調整が難しいのではと感じた。

その他

- ・教科書を使用されているようだが、学生は購入あるいは持参していないのか、講義中に開いている者が少ないように感じた。
- ・さらに勉強したい学生のために、その授業の参考文献を紹介されてはいかがだろうか?
- ・教室後方から見ると、字などが若干見づらいような気がする。
- ・教員が改善すべき点ではないが、演習授業であり、プログラムの理解や記述にはかなりの個人差があると思われるので、クラス分けあるいはTAの増員が必要ではないかと思う。
- ・説明を真剣に聞いている学生に混じって若干、ネットブラウザなどをして居る学生が居る。これもTA増員とTAの巡回等で改善できるのではないではないか?
- ・講義事項の数は進めるペースと関連があり、ゆっくり丁寧に進めると当然講義事項数は減る。講義内容を理解できるので学生本人達はそう思わないだろうが、特に100～70レベルの学生にとっては講義事項数が少ないかもしれない。(もっとも授業参観を意識して普段以上に丁寧に講義しただけかもしれないが)
- ・学生との対話があってもいい。理解度のチェックにもなる。ただ、80人のクラスでは難しい面もあるが。

●その他

- ・学生数が少ない(4人)のが残念である。
- ・講義室には小さいホワイトボードが2つしかないため、仕方がないと思われるが板書の字が小さめであった。学生は前の方に座ってはいたが、後方の学生には添え字などが見にくかったように

思えた。

- ・ユーモアがあり、とても分かりやすい授業だった。
- ・学生も授業に集中し易い授業環境だったと思う。
- ・プログラミングの基礎を学んでいるのではあるが、興味のある学生と余り興味のない学生が混在しているようだ。昨今の学生学力低下からすればしょうがないのだが、理解不足の学生へ如何に勉強意欲を持たせるかが重要に感じられる。自分が何をしたいのかを早く考えさせることが必要なのだろう。
- ・TAをもう少し多く配置した方が、学生への対応がよりスムーズになるのではないか。
- ・教員によって考え方が異なると思うが、大学の講義は聴いてその場で理解できる事項は6割、ノート等で復習すれば理解できる事項4割が適当かと思っている。学生の持つ潜在力を高めるためには、余裕がありすぎでは高められないからである。
- ・受講中の学生の態度も真剣であるとともに、講義の進め方や内容についても十分であり、他の教員の手本となるものであった。
- ・短時間の参観で失礼しました。
- ・丁寧に行なわれているために、教授内容をかなり精査されていないと時間不足になるのではと感じた。
- ・ノートのチェックを時々しても良いかも。(適当な紙に書いている学生もいる)
- ・昔、夜間生の学生でしたが、拡散速度は何故濃度勾配に比例するのかと質問してきた学生がいた。例えば1.5乗に比例しないで何故正比例なのか。
- ・最近の学生は質問がない。

後期公開授業感想まとめ

●優れていると思われる点

説 明

- ・パワーポイントに沿って授業が行われた。学生にはプリントアウトしたものが配布された。内容は多いが良く整理されており、分かり易く解説された。図も多く、パワーポイントで説明するのが最適だと思われる。
- ・超電導に関連するテレビ番組の一部を見せたり、講義内容説明はPowerPointで綺麗に整理して示していた。視聴覚機器を最大限活用している。使用したスライドは印刷して配布している。講義内容が実際にある物品の説明が主であるため、視聴覚機器は有効であると思われる。編集が良くなされているテレビ番組を利用するのは、短時間で要点が聞き手に残るよいやり方かと思う。
- ・前週に出題した演習問題について、ていねいに解説が成され、学生にとってはより理解が深まる。
- ・テーマの説明→例題の説明→小テストというサイクルで、説明を聞いて分かったつもりになっても自分で考えてみると分からなかったということを授業時間内に気づいてきちんと理解できるようにしている点。
- ・具体的事例の提示。
- ・これまでの講義内容との関係の説明。
- ・教員やTAの説明も短くて要領を得ている。

板 書

- ・板書をしないと学生が手をほとんど動かさないことになるが、レポート課題を出題しており、こちらで手を使うことにしている。
- ・ホワイトボードへの板書が大きな文字のため、後部の席からも明瞭である。学生はおおむね静かに講義に集中していた。
- ・板書の字が大きく、学生が書き取りやすい。

- ・スライドのハンドアウトを用意した上で、重要な点は板書をしながら説明することにより、ノートを取るだけで内容を理解できないということを回避しておられる点。
- ・ホワイトボードを使って、学生に分かりやすく実験の理論やグラフの書き方などのレポート作成における基本的な作法を指導されている点が優れていると思われる。
- ・黒板を有効に利用しており、文字の大きさなども適切で、教室の最後尾の学生へも配慮していた。

進め方と工夫

- ・データ処理を実験終了後に実施させている。
- ・原理の説明から応用、さらに研究紹介までうまく流れており、退屈させない。時間が経つのが早く感じた。
- ・質問をする機会が数回与えられた。
- ・授業の後半で演習問題が取り入れられているが、単に問題を回答させるだけでなく、その問題が実際のプラントでどのような役割を果たしているのかについても解説がされている。学生に興味を持たせ、講義にあきが来ない。
- ・学生に質問をすることにより、学生の注意を惹きつけている。
- ・授業の最後に演習問題を課しているのも、学生の注意力が持続する。
- ・ロボットアームの設計および製作、制御プログラムの作成という、これまで学んだ機械工学の全てを用いて行う実習になっており、学生にとって非常に有益な講義になっている。
- ・グループで作業を行っているが役割分担が明確であり、コミュニケーション能力を身に着けるのに非常に優れている。
- ・グループ単位でディスカッションをし、ロボットの製作を行っている点。
- ・学生が自由な発想で製作を行っている点。
- ・適宜、学生に質問をするなど講義が双方向になるよう努めているところ。
- ・講義の最初に前回の復習から入るのは良いと思った。
- ・講義内の演習では、テキスト内の参照先や、ヒントなどを、適切なタイミングで提示し、解答が進んでいない学生へ十分に配慮していた。また、一度にすべての演習内容を提示するのではなく、段階ごとに、演習問題を提示し、学生の集中力が途切れないように工夫がなされていた。
- ・演習問題のポイントを、何度も繰り返し説明しており、学生の理解を促している。
- ・丁寧に話されている。時折、前に座っている学生に問いかけて、どこまで分かっているかを確認されている。

その他

- ・インドネシアのウダヤナ大学と工学部E21教室を結んだ遠隔授業を初めて行った。通信速度は、必ずしも十分ではなかったが、双方の学生に自己紹介させるなど、工夫された授業だった。
- ・バリ島からの模擬遠隔講義を実施され、面白い試みなので参観した。遠隔、かつ英語という難しい状況にもかかわらず、対話をとりながら、わかりやすく、丁寧に講義をされていた。
- ・外国人相手に分かりやすいスライドを準備・制作していたと思う。また、現地の学生とのコミュニケーションを多く含めた進め方も良かったと思う。
- ・実験室・実験台がよく整理されている。
- ・X線を使った分析技術、X線光電子分光法、を取り上げた。低学年で学んだ物理化学、無機化学の集大成と位置づけられる。また、卒論・修論研究で実際に機器を使った場合はこの授業のことを思い出せばよい。2つの意味でこの時期(3年後期)に開講するのは非常に良いことだと思う。
- ・声がよく通るので、後ろの席からでもよく聞こえる。
- ・学生の私語などがなく静粛な環境で講義が行われている。
- ・論理の展開。
- ・授業科目名に即して、実験内容はガラス細工や電池の作製など応用的かつ実用的なことを行っているが、実験課題を通じて物理化学での必要不可欠な基礎的知識を習得できる工夫がなされてい

る点が非常に優れていると思われる。

- ・期末試験に先立ち、これまでの要点をA4判1枚にまとめ配布している点。これまでの授業の中で重要な項目を確認でき、受講生にとって非常に有意義であると思う。
- ・授業に遅れて来る学生が1名もいなかった。日頃の指導が良いのだと思いました。
- ・教室の選定がとても良い。教室のサイズが絶妙にピッタリで、どの学生からもホワイトボードが見やすい。
- ・学生の私語が少なく実験に熱心に取り組んでいる。
- ・白衣・安全眼鏡等安全に留意している。
- ・3人組のグループが交代でプレゼンをする講義内容であった。このような場合、3人と教官のやりとりだけになって、他の学生は聞かない、退屈そうにしている、となることが多いが、本講義は教室内に緊張感があった。また学生からの質問もあり、3人組をプレゼンだけさせるのではない状況はうまくできていたと思う。
- ・学生にノート記入を強制されているようで、学生が熱心にノートをとっていた。この頃、教員の話も聞かず、なおかつノートも取らない学生が増えているので、参考にすべきだと思った。
- ・具体例を多く挙げて、平易な説明で学生の理解を促していた。
- ・私語等がほとんどなく、指導が行き届いているように感じられる。
- ・前回(前週)の実験結果をふまえて、今回の実験条件が決まるような実験実施計画(制度設計)になっており、実験データの解析や復習が必須となっている点。このことにより、教育効果の向上が効率的に行えていると考えられる。
- ・留学生の助けをうまく借りてグループ活動させることで、日本人学生の英語会話に対する障壁を除去するようにつとめている点。
- ・比較的、少人数グループで実施しているので、実験操作等を注意・監督することができる。またテキストが詳しく書かれているので学生が自主的に実験できていた。

●改善を検討すべきと思われる点とその理由

説明

- ・全て視聴覚機器だけで説明して板書が無いと、学生が寝てしまう可能性がある。
- ・詳細な内容を口頭のみで説明される場合があるので、学生にうまく伝わっていないかもしれない。

進め方等

- ・ロボットの製作を講義室で行っており、加工機器の使用が制限されている。

その他

- ・インドネシア側の停電のため授業は途中で中断、中止となってしまった。技術面だけではなく、運用上のノウハウの蓄積も必要である。
- ・すべての時間を参観したわけではないが、教員が話す間は比較的音声安定しているが、学生と会話する際には会話が聞き取りにくい状況があった。通信環境は以前に比べるとかなりよくなっているが、遠隔講義の難しさを感じた。
- ・バリ島にある先方の大学の情報機器の管理がかなり良くないと感じた。あれでは、担当教員が可哀そうに思った。IPネットワークではなく、予算がかかっても衛星中継にすれば良いと思う。
- ・英語での授業というのは、相当に難しいという感じが大変伝わって来た。
- ・多少スペースが狭いのかもしれない。
- ・TA以外に教職員が常時5名参加しており負担が大きいのではないかと。
- ・講義の初めに出席を取られた方が良いと考える。演習問題の提出が出席の代わりかと思うが、授業に遅れて出席する学生への警告の意味も含めている。

- ・木材などを用いた本格的な作業を行うには、教室が不適當であり、ものづくりセンター以外にこういう作業ができる部屋を用意する必要があると思われる。
- ・加工機器の運搬や騒音に注意しなければならず、講義室で行うことが適切であるとは思わない。
- ・学生の人数からすると実験およびデータ整理をするスペースが狭く感じられた。
- ・エアコンを入れて欲しかった。
- ・試験の持ち込み範囲は、口頭ではなく、文書で明確にすれるべきではないかと思った。
- ・出欠確認を兼ねたと思われるマークシートを一斉に配布されたが、1名が2枚以上取ることがあるので、1名に1枚、確実に配布するべきだと思った。
- ・パワーポイントの字がやや小さいのではないか。
- ・全学生を同一実験場所で行うスペースがとれないために、建屋の異なる実験施設において学生実験を遂行している。このことは教員の学生指導の負担増に繋がるだけでなく、実験の安全面からも十分に目が行き届かない可能性もあり、上記の点は改善すべきと考える。
- ・話題を変えるときには、学生の質問を促すなど break を入れた方が分かりやすいように感じられた。
- ・留学生の個性に頼る部分が多く、内容にムラができてしまう点。
- ・薬品を扱う実験では学生は保護メガネを着用していたが、TAが掛けていない場合があった。
- ・スペース、テーマ、設備等により制約があるが、本館西423, 425と総合研究棟3階に別れて実験しているので、不便かも知れない。

●その他

- ・英語での授業ということで、参考にできると期待していたのだが、機材の不具合で音声も画像も良くないし、停電で途中までで終わってしまったのが大変残念だった。
- ・学生実験の見学・参観はもっと実施してもよいと感じた。
- ・定量的な話を少し出して良いかもしれない。
- ・原理はボーア模型を使って示された。次に、例を示す際には分子軌道法によるエネルギーダイアグラムが使われた。このシフトについていけなかった学生が居たかもしれない。
- ・この授業に限らず、教員が質問をしても返答がない学生の元気のなさには、大学教員は空しさを感じるだろう。
- ・今回は、微分方程式の解法についての講義だったが、単なる数式にとどまらないうで、差分法を使って解いている実世界の具体的な例が示せるともっと興味がわくのかかもしれないと思った(単なる思いつきで根拠はありません)。
- ・D棟は飲食禁止にも関わらず、机の上に飲み物やパンを置いている学生がおり、途中から、見えないように(後ろにいた私には見えたが)それらを食べていた。話をする学生を注意することはされていたが、全体に目を配られたらいいと思った。
- ・本授業は、バリ島から模擬遠隔講義として E21 において 17:00-18:30 の間実施された。しかし、40分過ぎに先方の停電により中断し、その後復旧しなかったのは残念であった。
- ・理解しようとする学生がいる一方、隠れてレポートを書く、携帯を使ってメールする、平気で抜け出して電話する学生が目についた。これは、本授業だけでなく、たぶん、多くの授業において言えることだと思う。
東京高等専門学校から、きちんと学生を見るのであれば、授業は40名が限度であり、それ以上は無理があると言われた。それで、クラスは40名程であるが、毎年、2割ほど落第が出るということだった(授業の質はほとんど落としていないとのこと)。
高校までに習う基本的な数学(分数計算、因数分解、複素数等)さえ、きちんと理解できていない、単に、丸暗記しかしてこなかった学生において、現行の授業内容やカリキュラム、そして、

学生の勉学に対する態度では、理論的な議論や数式が意味する物理的事象等を明確に理解できるとは思えない。高校の数学を理解していない学生が、大学一年生で習う数学の基本的な部分さえもきちんと把握できるはずがない。

たぶん、教員のほとんどが学生の勉学意欲も含めて全体のレベルが低下していると感じている中で、80%近くの合格率を要求することや、学生による授業評価アンケートを重要視されているのを見ると、高校や塾のように丸暗記できるような授業にせよ、と言っていられるようにしか受け取れない。確かに、授業評価アンケートは、授業の改善に役立つことも確かですが、現状を見てみると、楽に単位が取れば良いと思っている学生に対し、迎合するように奨められているようにしか感じられない。そのような学生が少なければ何ら問題はないが。

各教員の教育に関する考えには大きな開きがあると思う。ぜひ、大学側から全教員に、具体的かつ明確に授業・教育方針を打ち出していきたいと思う。そうすれば、どのような方針が出されようと、迷うことなく、対応できるよう努力できるかと思う。

- ・学生に対するエンカレッジの仕方は他の授業でも見習えるところは見習うべき。

第3節 授業評価表彰

工学部で行われているすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そこで、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業を表彰を行って来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更した。

評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰する。表彰されるのは、その科目を担当した全教員、及び全職員である。また、各学科の最高得点獲得授業を「最優秀授業」として表彰する。ただし、原則として受講生10名以上の授業を対象とする。

本年度優秀授業表彰を受けた科目とその担当教職員を以下の表にまとめた。

平成20年度優秀授業表彰一覧表

番号	開設科目名	担当教員名	学科	学年	表彰種別
1	材料力学Ⅰ	木下勝之	機械	2	最優秀授業
2	プログラミング言語	佐伯壮一	機械	3	優秀授業
3	流体力学Ⅰ	望月信介	機械	1	優秀授業
4	ものづくり創成実習Ⅰ	望月信介, 三上真一	機械	2	優秀授業
5	材料力学Ⅰ	木下勝之	機械	1	優秀授業
6	流体力学Ⅰ	望月信介	機械	2	優秀授業
7	機械基礎製図Ⅱ	大木順司	機械	2	優秀授業

8	材料力学Ⅱ	木下勝之	機械	2	優秀授業
9	ものづくり創成実習Ⅰ	森 浩二	機械	2	優秀授業
10	機械工学演習B	齋藤 俊・木下勝之	機械	3	優秀授業
11	ものづくり創成実習Ⅰ	江 鐘偉, 森田 実	機械	2	優秀授業
12	機械加工学	南 和幸	機械	3	優秀授業
13	工業英語	朝位孝二, 榊原弘之, 清水則一, 進士正人, 関根雅彦, 高海克彦, 田村洋一, 中田幸男, 兵動正幸, 古川浩平, 吉武 勇, 今井 剛, 樋口隆哉	社建	4	最優秀授業
14	構造力学演習Ⅰ	清水則一	社建	2	優秀授業
15	マトリックス構造解析学	麻生稔彦	社建	3	優秀授業
16	社会建設基礎工学	清水則一, 兵動正幸, 関根雅彦, 松田 博, 進士正人, 麻生稔彦, 中田幸男, 田村洋一, 高海克彦, 榊原弘之, 朝位孝二, 吉武 勇, モハト レジヤウル カリム,	社建	1	優秀授業
17	構造力学演習Ⅱ	清水則一	社建	2	優秀授業
18	応用化学工学演習Ⅰ	酒多喜久, 鬼村謙二郎, 庄井博子, 藤井幸江,	応化	1	最優秀授業
19	物理化学Ⅰ	森田昌行・酒多喜久	応化	1	優秀授業
20	遺伝子工学	赤田倫治	応化	3	優秀授業
21	無機化学	中山雅晴	応化	2	優秀授業
22	半導体工学Ⅰ	山田陽一	電電	3	最優秀授業
23	電気回路Ⅱ	山田陽一	電電	2	優秀授業
24	情報通信工学Ⅱ	堀田昌志	電電	3	優秀授業
25	コンピュータハードウェア	西藤聖二	電電	3	優秀授業
26	デジタルデザイン演習	長 篤志	知能	4	最優秀授業
27	CAD・CGオペレーションⅠ	長 篤志	知能	2	優秀授業
28	情報技術概論	中村秀明	知能	1	優秀授業
29	オペレーティングシステム	山口真悟	知能	3	優秀授業
30	情報デザイン実習Ⅱ	木下武志	感性	2	最優秀授業
31	基礎デザイン論・演習	木下武志	感性	1	優秀授業
32	空間設計演習Ⅱ	内田文雄, 鷗心治, 真木利江	感性	3	優秀授業
33	都市計画学	鷗心治	感性	3	優秀授業
34	空間デザイン史Ⅰ	真木利江	感性	2	優秀授業
35	東アジア文化論	今井 剛	循環	1	最優秀授業
36	ものづくり創成実験	佐伯 隆	循環	1	優秀授業
37	環境概論	福永公壽・中倉英雄・ 小淵茂寿・佐伯 隆	循環	1	優秀授業
38	応用物理学Ⅰ	真田篤志	工学基礎	2	最優秀授業
39	量子力学Ⅱ	嶋村修二	工学基礎	3	優秀授業
40	確率統計	栗山 憲	工学基礎	3	優秀授業

第4節 全学FD研修会への参加

平成21年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。本年度工学部、理工学研究科工学系、及び医学系研究科工学系のFD参加教職員を以下の表に示す。

平成21年度FD研修会 参加者名簿

「新規採用教育職員研修会」

日時：平成21年7月30日(木)14:30～17:00

場所：吉田地区,常盤地区

	所属部局	職名	氏名
1	大学院理工学研究科(工学)	教授	藤田 正則
2	大学院理工学研究科(工学)	助教	西村 悠樹

「各学部・研究科FD推進者のための研修会」

日時：平成21年5月8日(金)17:00～18:00

場所：テレビ会議

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	教務委員長	田中 俊彦教授
2	工学部	FD委員	羽野 光夫教授

「教育改善FD研修会」

日時：平成21年8月10日(月)13:30～16:00

場所：(吉田地区)メディア講義室(旧SCS講義室)

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	准教授	木下 武志
2	工学部	教授	上村 明男

「工学部教育改善FD研修会」

日時：平成21年8月21日(金)13:30～15:40

場所：(常盤地区)工学部D23教室

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	教務委員長	田中 俊彦教授
2	工学部	学生委員長	内藤 裕志教授
3	工学部	教務委員	森 浩二准教授
4	工学部	教務委員	麻生 稔彦教授
5	工学部	教務委員	江頭 港准教授
6	工学部	教務委員	久保 洋教授
7	工学部	教務委員	浅田 裕法准教授
8	工学部	教務委員	多田村 克己教授
9	工学部	教務委員	伊藤 暁准教授
10	工学部	教務委員	藤田 正則教授

11	工学部	教務委員	小淵 茂寿准教授
12	工学部	FD委員	羽野 光夫教授
13	工学部	入試委員長	江 鐘偉教授
14	医学系研究科	点検評価委員	南 和幸教授

「多人数授業における学生参画学習の工夫－授業手法と評価－」

日 時：平成 21 年 8 月 31 日(月)13:30～15:30

場 所：(吉田地区) 共通教育棟 2階会議室

	所属部局	職 名	氏 名
1	工学部	准教授	木下 武志

「工学教育研究講演会」

日 時：平成 21 年 12 月 16 日(金)13:30～17:00

場 所：(常盤地区) D講義棟 D11 講義室

	所属部局	職 名	氏 名
1	機械工学科	准教授	森 浩二
2	機械工学科	教授	小河原 加久治
3	機械工学科	准教授	大木 順司
4	機械工学科	教授	加藤 泰生
5	機械工学科	教授	三上 真人
6	社会建設工学科	助教	種浦 圭輔
7	社会建設工学科	准教授	山本 浩一
8	応用化学科	教授	森田 昌行
9	応用化学科	准教授	江頭 港
10	応用化学科	准教授	吉本 信子
11	応用化学科	准教授	鬼村 謙二郎
12	応用化学科	助教	山吹 一大
13	応用化学科	助教	吉本 則子
14	応用化学科	教授	中山 則昭
15	応用化学科	助手	岩井 志帆
16	電気電子工学科	教授	只友 一行
17	電気電子工学科	准教授	山田 陽一
18	電気電子工学科	助教	倉井 聡
19	電気電子工学科	教授	羽野 光夫
20	電気電子工学科	教授	小柳 剛
21	電気電子工学科	准教授	浅田 裕法
22	知能情報工学科	教授	中村 秀明
23	知能情報工学科	教授	浜本 義彦
24	知能情報工学科	教授	三池 秀敏
25	知能情報工学科	准教授	山口 真悟
26	知能情報工学科	教授	石川 昌明
27	知能情報工学科	助教	河村 圭
28	知能情報工学科	助教	内村 俊二

29	知能情報工学科	准教授	松藤 信哉
30	感性デザイン	教授	内田 文雄
31	感性デザイン	准教授	村上 ひとみ
32	感性デザイン	准教授	李 柱国
33	感性デザイン	助教	山本 正幸
34	感性デザイン	教授	比嘉 充
35	感性デザイン	准教授	佐伯 隆
36	感性デザイン	教授	今井 剛
37	工学基礎	教授	柳 研二郎
38	工学基礎	准教授	西山 高弘
39	循環環境工学科	助教	隅本 倫徳
40	循環環境工学科	教授	新苗 正和
41	工学部	事務長	中川 和美
42	工学部	副事務長	林 章司
43	工学部	総務係長	穂枝 澄
44	工学部	総務係長	塩手 康之
45	工学部		藤井 大輔
46	工学部		安本 千恵子
47	工学部		山本 みずほ
48	工学部	留学生係	片山 恵子
49	工学部	工学情報係長	守永 盛志
50	工学部	工学情報係	宮田 順子

「学習意欲を高める問題解決型の授業展開—その方法と展開—」

日 時：平成 22 年 3 月 19 日(金) 13:30～15:30

場 所：(常盤地区) 工学部 D23 教室

	所属部局	職 名	氏 名
1	理工学研究科	准教授	樋口 隆哉
2	理工学研究科	助教	呉本 堯
3	工学部	助教	吉本 則子
4	理工学研究科	准教授	高海 克彦

「最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成方法」

日 時：平成 22 年 3 月 25 日(木)13:30～15:30

場 所：(吉田地区) 共通教育棟 2階会議室

	所属部局	職 名	氏 名
1	工学部	准教授	木下 武志

「情報セキュリティ・情報モラルの教え方」

日 時：平成 22 年 3 月 30 日(火) 14:30～16:30

場 所：(常盤地区) 工学部 D23教室

	所属部局	職 名	氏 名
1	理工学研究科	助教	瀬尾 健彦

2	理工学研究科	助教	西村 悠樹
3	大学評価室	准教授	鈴木 素之
4	理工学研究科	教授	小河原 加久治

「eラーニング研究会」(大学情報機構共催)

日 時: 平成 21 年 9 月 25 日(金) 13:00~17:00

場 所: (吉田地区)メディア教育棟演習室

(常盤地区)工学部 D 棟 4 階演習室

吉田

	所属部局	職 名	氏 名
1	メディア基盤センター	センター長	小河原 加久治

常盤

	所属部局	職 名	氏 名
1	理工学研究科	教授	多田村 克己
2	メディア基盤センター	准教授	佐伯 徹郎
3	医学系研究科	教授	浜本 義彦

「英語教育 FD 研修会」

日 時: 平成 22 年 3 月 17 日(水)~19日(金)

場 所: (常盤地区) 工学部第一セミナー室

	所属部局	職 名	氏 名
1	機械工学科	准教授	藤井 文武
2	応用化学科	助教	吉本 則子
3	知能情報工学科	准教授	長 篤志
4	知能情報工学科	准教授	水上 嘉樹
5	社会建設工学科		山田 知沙

第 5 節 F D 実施経費報告

部 局	F D 研修・F D 活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	F D 活動の効果
工学部	工学部における初期教育の改善	講師謝金・旅費 1 名	30	工学部基礎教育の改善報告及びコミュニケーション教育の講演で知見を得た。
理工学研究科 (工学系)	英語で授業を行うための教員向け研修会	講師謝金・旅費 2 名	691	ダブルディグリー等で、留学生が増加するため英語で授業が開講出来るよう改善を行っている。
計			721	

第10章 農学部のFD活動

第1節 はじめに

1. 平成21年度FD計画

(1) セミナー（農学部公開講演会）の実施

実施学科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科

内容：農学部の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図る。

(2)ピアレビューの実施

実施学科：生物資源環境科学科

内容：授業担当教員の授業を評価担当教員により評価し、評価レポートを作成する。評価担当教員は評価を通じて教授法や視聴覚機器の使用等を自身の授業への参考とする。

(3)学部・学科等のFD活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する

研修会への参加

実施学科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科

内容：農学部拡大教授会前に実施される標記研修会に参加する。

(4)大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科

(農学系)との教育改善FD研修会への参加

実施学科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Web シラバスの改善を目的とした標記研修会に、学務関連の教員が参加する。

(5)全学FD研修会への参加

実施学科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科

内容：全学で実施される研修会に参加する。

(6)学生による授業評価と教員による授業自己評価の実施

実施学科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科

内容：講義，実験，実習，演習等の各授業について全受講学生に対して授業評価アンケートを実施し、教員がより良い授業を作るために参考となる統計資料の作成に供する。

2. 活動および報告内容について

平成 21 年度の農学部の FD 活動は、上記の計画に基づき、「セミナー」、「ピア・レビュー」、「学部で実施する FD 研修会」、「全学 FD 研修会」および「授業評価」について平成 20 年度と同様の取組みが実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、学生授業評価の集計結果を分析する。

第 2 節 セミナー（農学部公開講演会）

1. 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	学科
1	4月8日	消化管運動の炎症性腸疾患による変化	佐藤晃一	獣医学科
2	5月28日	ユニークな配位構造を用いて機能するヘムタンパク質に関する研究	小崎紳一	生物機能科学科
3	6月26日	脂質修飾タンパク質の網羅的解析系の確立	内海俊彦	生物機能科学科
4	7月30日	クオラムセンシングをターゲットとしたバイオフィルム阻害剤の開発	阿座上弘行	生物機能科学科
5	9月1日	犬リンパ系腫瘍細胞株における癌抑制遺伝子 FHIT の変異	平岡博子	獣医学科
6	10月23日	応用生理学的に考える神経筋の加齢変化抑制方法	宮田浩文	生物機能科学科
7	11月13日	タンパク質脱リン酸化酵素 Type 2A Ser/Thr Phosphatase が制御する生体機能と疾患	大浜 剛	獣医学科
8	11月27日	耐熱性酢酸菌と高温発酵系の開発	松下一信	生物機能科学科
9	12月18日	植物の酸化ストレスメディエーターとしての活性アルデヒド	右田たい子	生物機能科学科
10	2月4日	発癌機構の分子生物学的解析	奥田優	獣医学科
11	2月4日	ウイルス受容体の効率のよい同定法	下島昌幸	獣医学科
12	2月4日	野生動物寄生虫調査の今後の研究展望	佐藤宏	獣医学科
13	3月9日	動物医療における安全な麻酔を目指して	板本和仁	獣医学科
14	3月9日	Field endocrinology?野生動物のホルモン動態をモニタリングする?	藤田志保	獣医学科

2. セミナーの総括

農学部のセミナーでは、各学科の教員が農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図っている。平成 21 年度は 14 回実施され、平成 18 年度 11 回、平成 19 年度 7 回と減少して

きた傾向が平成 20 年度は 10 回へと増加に転じた傾向が継続しさらに開催回数が増大した。生物機能科学科は毎年 6 回程度、コンスタントにセミナーを開催しておりその傾向は本年も続いている。21 年度は特に獣医学科の教員が 8 回セミナーを実施しており特徴的であった。各セミナーには多数の教員と院生・学生が参加しており、実施の回数もさることながらその内容も活発な質疑などが行われ質の高いものと評価される。平成 22 年度以降も平成 21 年度と同程度に実施されることが好ましいと考えられる。

第 3 節 ピアレビュー

1. 実施授業一覧

実施日	授業科目	教員	学科	評価担当
7 月 14 日	環境物理学	鈴木賢士	生物資源環境科学科	小林 淳
7 月 16 日	農場実習	荒木英樹	生物資源環境科学科	荊木康臣
11 月 10 日	生物資源環境科学 総論	高橋 肇	生物資源環境科学科	山本晴彦
11 月 11 日	植物病理学	伊藤真一	生物資源環境科学科	高橋 肇

2. ピアレビューの総括

農学部のパイレビューは、平成 21 年度は 4 回実施された。平成 19 年度に 7 回、平成 20 年度に 5 回実施されており、ここ数年は常に一定数の活動がみられるようである。評価担当教員のレポートによると、年度により異なる担当授業から授業方法や視聴覚機器の使用法などに関して指摘を受けることで今後の参考になる点が多くあったようである。生物資源環境科学科に関しては、今後もこのパイレビューへの高い関心が維持され、授業改善に役立つものと期待される。一方、それ以外の学科では授業のパイレビューが全く行われなかった。教員が直接に授業に参加してその改善について意見することは、FD 活動として最も効果的な方法の一つと考えられることから、他学科でもパイレビューに積極的に取り組む姿勢が期待される。

第 4 節 学部・学科等の F D 活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会への参加

1. 実施報告

「大学生のメンタルヘルスとかかわりのヒント」

日程 平成 21 年 7 月 15 日(水) [吉田地区] 14:30~15:00
 場所 農学部 会議室
 講師 今井 佳子 (学生相談所カウンセラー)
 参加者 申込み 61 名、参加実績 46 名(欠席 15 名、追加 0 名)



内容 大学生のメンタルヘルスの現状と学生相談室の役割、学生との関わり方について。

新規に学生相談所を訪れる学生数は徐々に増加する傾向にある。相談の内容は多岐に渡り、単発的な相談には「編入や休学、退学」、「部活やサークル」、「訪問販売」、「日常生活全般（ゴミの出し方、公共料金の払い方など）」、「性感染症、妊娠中絶、性的暴力」、「家族や友人」などがあり、継続的な相談には「自分に関するもの」、「友人への不信感」、「家族関係や家族の精神的な病気」、「教員との折り合い」、「将来の不安、進路について、大学の意義」、「授業に出られない」、「気持ちを誰かに聞いて欲しい」などがある。相談を訪れる学生の中には、精神的な疾患を治療中の学生も含まれている。学生相談所では、これらの学生に対して積極的なかわりをもち、必要に応じて大学外の諸機関（消費生活センター、弁護士、病院、警察など）や学生の家族との連携にも力を入れている。

最近の大学生には「純粹で未熟」、「挨拶や返事など基本的なコミュニケーションができない」、「伝えたいことをうまく表現できない」、「感情のコントロールがうまくできない」といった学生がみられ、発達障害が疑われる学生も少なくない。このような学生に対して教員が与える影響は非常に大きく、各教員の適切な対応（傾聴の姿勢、日常的な会話を軽視しない、学生相談所との連携など）が必要である。

研修後に回収したアンケートには、「普段気付くことのない大学・大学生の一面を知った。

今後の学生指導に活かしたい」、「発達障害の話をもっと詳しく知りたい」、「対処法も聞きたかった」、「問題学生の心情・立場がよく理解できた」、「学生相談所について理解が深まった」、「学生の相談レベルの低さに驚いた」などの感想が寄せられ、学生のメンタルヘルスへの関心の高さが伺われた。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「実際に身近な問題に対する FD 研修（今回のような）」、「若者気質、現代山大学生の行動規範（行動原理が理解できないので）」、「新興宗教への対応」、「とじこもりへの対応」、「学生との関わりやコミュニケーションについて」などがあげられた。このことから、今回のような学生のメンタルヘルスに関する FD 研修会のニーズが高いと考えられる。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	2.2%
どちらとも言えない	2	4.3%
良かった	25	54.3%
非常に良かった	12	26.1%
無回答	6	13.0%
合計	46	100.0%

第5節 大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医学研究科・医学系研究科（農学系）との教育改善FD研修会への参加

1. 実施報告

平成21年度 教育改善研修会（農学部）

日時：平成21年10月21日(水) 13:30～15:30

場所：農学部会議室

参加者：17名（内訳）：学部長、副学部長、学務委員長、学科長、学務委員（教学委員を含む）など合計12名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、木下真、岡田耕一）合計5名

研修内容：

本年度6回目の教育改善研修会を農学部の教学委員、FD委員長、FD委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。GPやカリキュラムマップは作成時点から時間が経過しており、学科改編や科目（カリキュラム）改編内容をこれらに反映させる必要がある。特に4年間一貫の学士課程教育を意識してカリキュラムマップに教養教育GPを加えて更新する作業の依頼が農学部各学科に対して行われた。

次に、兼石教育コーディネーターより、現在公開している農学部のGPやカリキュラムマップに対して学外者からみた意見や疑問点が指摘された。これに対して回答および活発な意見交換が行われた。兼石コーディネーターからは、全体的にいずれの学科のCUMもおおむねわかりやすく記述されているが、学科によってGPの数やCUMへの丸付けの数に差があることなどの指摘とともに、GPはその達成度の評価が可能であるように記述されているか再確認すべきであるとの指摘がなされた。これに対して、各学科からは様々な意見が述べられた。獣医学科からは、全ての科目は一貫してライセンス取得を目指した構成になっている故の説明がなされた。生物機能科学科からは、この学科の研究分野は非常に細かく専門分化しており、それぞれの分野の最先端を深く掘り下げる学問分野としての特徴があるとの説明がなされた。生物資源環境科学科からは、生物機能科学科と比較すると各専門分野とその周辺の関連する分野の裾野が広い特徴があるとの説明がなされた。これらの説明を聞いた各委員からは、GPの達成度をチェックする上ではGPの設定（数や各項目の表現）はある程度そろえる必要があるのではないかという意見が出される一方で、前述のように各学科のもつ専門分野の特徴の違いがあって、更には互いに他の学科との関連性が希薄であるから、各学科によってGPの設定やCUMへの丸付けに違い（ある程度の数や丸の偏在性）が生じるのは当然であるとの意見が出た。また、GPやCUMに対するそもそも論として、◎や○、△といったあまりにも細かなレベル分けは実際にはほとんど意味がないのではないかといった意見も出た。第1部の研修は前述のような各委員からの意見を中心にして、非常に活発な議論がなされ、予定していた第2部のワークショップの時間を変更して議論のための時間として用いた。そのため、第2部のワークショップは本研修時間中には行われなかったが、GPやCUMやそれらの問題点に関する各委員の理解は十分に深まったと考えられる。研修後にCUMを検討するための機材を各学科の委員に手渡し、今後各学科でCUMを更新する際に役立ててもらおうことになった。

今回の研修会で様々な議論がなされたことによって、今後組織的なFD活動を推進する上で有意義であったと考えられる。

第6節 全学FD研修会

1. 参加教員一覧

開催日	研修会種別	農学部教員の参加人数
5月8日	各学部・研究科FD推進者のための研修会	1名
5月30-31日	第57回中国・四国地区大学教育研究会	1名
8月10日	「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」	1名
9月11日	「DocuWorksの使い方」	2名
9月25日	「理系共通教育科目「地球科学2」の授業展開-参加と思考をうながす授業づくりの方法-」	1名

2. 全学FD研修会の総括

農学部教員の全学FD研修会への参加人数は、平成21年度は6名であった。平成20年度は17名であったことと比較すると参加者が大きく減少している。これは、全学FD研修会への参加が「ノルマ化」されなくなったことが影響していると考えられる。今後、農学部教員の参加動機を高めるような研修会が企画・実施されることを望みたい。

第7節 学生授業評価と教員授業自己評価

1. 共通項目の集計結果比較

(1) 講義

質問1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）

回答：1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回）
4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	81.8	15.3	2.6	0.2	0.2	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	79.4	17.3	2.7	0.4	0.2	-

質問2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度
5. 30分未満

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	10.3	11.8	21.5	22.1	34.2	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	16.5	12.4	20.9	18.9	31.4	-

質問3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	34.8	34.0	20.5	7.8	3.0	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	47.0	32.9	14.2	4.4	1.4	-

質問4

学生：専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	36.3	34.0	20.5	7.8	3.0	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	48.1	35.9	12.1	3.5	0.4	-

質問5

学生：テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	40.9	35.8	16.9	4.9	1.3	0.2

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	48.9	32.9	13.4	3.1	1.0	0.9

質問6

学生：板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	38.4	34.5	19.1	5.5	1.8	0.7

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	51.4	31.2	12.3	3.9	1.0	0.2

質問7

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	33.9	32.9	27.3	4.4	1.5	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	43.9	31.1	20.8	3.6	0.6	-

質問8

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. 答えられない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	19.5	39.5	31.2	4.9	2.1	3.1

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	28.4	38.1	25.1	4.7	0.9	2.9

質問9

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	22.2	44.9	22.6	7.4	3.0	-

後期

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	30.5	42.4	19.3	6.3	1.4	-	3.7

質問10

学生：この授業は、あなたにとって満足のものでしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	32.0	39.4	20.6	5.4	2.6	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	40.2	39.1	15.6	3.9	1.1	-

(2) 演習・実験・実習

質問1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）

回答：1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回）
4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	96.8	3.2	-	-	-	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	94.6	4.2	0.8	0.3	-	-

質問2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度
5. 30分未満

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	20.5	17.1	20.9	15.8	25.7	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	27.8	16.4	19.8	11.6	24.4	-

質問3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	52.7	32.0	12.2	2.9	0.2	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	52.0	30.8	13.6	2.5	1.1	-

質問4

学生：演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	55.5	30.2	11.3	2.7	0.4	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	53.7	33.3	7.3	4.5	1.1	-

質問5

学生：教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	61.6	28.5	7.9	0.9	0.4	0.7

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	60.5	30.2	7.6	0.8	0.6	0.3

質問6

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

教員：学生に疑問や質問の機会を十分に与えましたか、また対応は十分でしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	60.4	29.1	9.0	1.4	-	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	58.6	29.7	9.9	1.1	0.6	-

質問7

学生：教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	65.2	25.1	7.5	1.4	0.4	0.2

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	59.8	27.8	9.3	1.4	0.6	1.1

質問8

学生：授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	57.5	30.7	9.0	1.8	0.9	0.2

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	57.8	31.2	9.1	1.1	0.8	-

質問9

学生：動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	38.0	15.1	8.5	0.4	0.9	37.1

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	45.4	16.9	7.7	0.3	0.9	28.9

質問10

学生：動物を扱う実験・実習は、動物愛護精神をもって行われましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. この授業は該当しない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	29.8	14.8	11.3	1.8	1.3	41.0

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	41.7	14.9	8.2	1.2	1.2	32.9

質問11

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない 6. 答えられない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	28.5	46.3	18.6	1.3	0.7	4.6

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	41.2	38.8	14.8	0.9	0.9	3.5

質問12

学生：知識や技能のレベルは向上しましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	41.5	47.5	8.4	1.5	1.1	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	48.2	41.2	9.1	0.3	0.6	-

質問13

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	32.3	53.0	10.3	3.3	1.1	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	42.1	44.4	11.4	0.6	1.5	-

質問14

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答：1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない
5. そう思わない

前期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	53.7	34.3	9.0	2.1	1.0	-

後期

	回答選択率 (%)					
	1	2	3	4	5	6
学生	53.8	34.3	8.8	2.1	0.9	-

2. 学生授業評価と教員授業自己評価の総括

農学部の学生授業評価の実施率は84%で、平成18年度の90%、平成20年度の93%、平成21年度の93%と比較すると低い実施率となった。来年度は昨年度までの高い実施率にもどすよう努力が必要である。教員各位に協力を要請したい。

教員授業自己評価については、平成22年5月20日（入力締め切りは5月末日）の時点で、入力率が35%と、低い値を示したが、これは入力可能になってからの期間が短かったこと等が影響しているものと考えられる。入力締め切りも延長され、教員への入力依頼も繰り返し行っている事から、最終的な入力率は改善されるものと推定される。

平成21年度の学生授業評価のうち講義用の10項目の質問ならびに実験・実習用の14項目の質問に関する集計結果を示した。質問項目中の「学習目標の達成度」、「授業内容の理解度」、「授業に対する満足度」に関する集計結果はいずれも良好であり、学生がそれぞれの授業を概ね良好と評価したこ

とを示していた。

上記のように、平成 21 年度は、平成 20 年度と比べ学生授業評価アンケートの実施率と教員の授業自己評価の入力率ともに低い値となり、改善すべきと考えられた。しかし、評価結果の内容については概ね良好であり、これまでの学生授業評価、教員授業自己評価の結果が、教員の授業内容に反映され、授業の改善が進んでいる様子が伺われた。今後も継続して授業評価の実施率、自己評価の入力率の上昇をめざし、授業改善に向けた努力を学部全体で推進すべく努力したい。

第 8 節 まとめ

平成 21 年度の農学部 FD 活動は、上記のように 20 年度の FD 活動を継続する計画に基づいて実施された。その結果、20 年度と比較して、学部独自の取り組みであるセミナー（農学部公開講座）の実施回数は増加したものの、ピアレビュー実施授業数は減少した。全学 FD 研修参加教員数は、「ノルマ」の考え方から解放されたため減少した。また学生授業評価実施、教員授業自己評価の入力率は平成 20 年度と比較して低下した。実施項目によっては多少の問題が見られたものの、全体としては着実に FD 活動が実施されたと評価できる。

以上の 21 年度 FD 活動の総括結果をふまえ、22 年度の FD 活動も、基本的に 21 年度の活動を継承・維持することを目標に実施し、学部の教育研究レベルの維持を図るべきであろう。

第 9 節 F D 実施経費報告

部 局	F D 研修・F D 活動の内容	経費の用途	執行額 (千円)	F D 活動の効果
農学部と農学研究科、医学系研究科（農学系）が合同で実施するもの	セミナー（農学部公開講演会）の実施 実施学科、研究科：生物資源環境科学科，生物機能科学科，獣医学科，農学研究科，医学系研究科（農学） 内容：農学部の各教員が，農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図る。	ビジュアル プレゼンター （実物投影機，エルモ L-N）	92	農学部の 3 学科、農学研究科、医学系研究科（農学）の教員により各教育研究分野の研究内容の紹介がなされ、活発な討論が行われ、研究の活性化と分野間の相互理解の促進が図られた。
		計	92	

平成 21 年度（2009） 農学部 FD 担当教員

生物資源環境科学科 山本晴彦

生物機能科学科 右田たい子、内海俊彦（FD 担当教学委員、全学 FD 委員）

獣医学科 中尾敏彦

第 1 1 章 人文科学研究科の F D 活動

今年度の大学院人文科学研究科の F D 活動としては、当研究科の所属教員が人文学部のそれと重なることから、人文科学研究科の F D 研修会、大学教育機構主催の F D 研修会・講演会への参加、教員間授業公開（ピア・レビュー）については、人文学部のそれと合同の実施となる。ただし、学生による授業評価アンケートについては、人文学部で実施しているようなマークシート方式のものを採用せず、研究科独自の記述方式のものによって実施した。教員自己評価入力については、全学的に実施している方式に準拠して実施した。

第 1 節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

人文学部との合同によって実施した。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 1 節「教員間授業公開（ピア・レビュー）」を参照。

第 2 節 人文科学研究科独自の F D 研修会

人文学部教員の参加者と一致する。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 2 節「人文学部独自の F D 研修会」を参照。

第 3 節 大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加

人文学部教員の参加者と一致する。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 3 節「大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加」を参照。

第 4 節 人文科学研究科における自由記述式アンケート

人文科学研究科における授業アンケートについては、従来、自由記述式のものを実施している。各授業における人文科学研究科の大学院生の受講者が極めて少数であるため、アンケート回答者の匿名性を確保することが難しく、個々の授業ごとにマークシート方式のアンケートを実施できないからである。仮に実施したとしても、ほとんどの授業における回答シート数は、教員が閲覧できる規定枚数を下回るため、教員が閲覧できず、アンケートを実施する実質的な意味がない。大学院生むけのアンケートとしては、自由記述式のほうが適切という観点からも、当研究科のアンケートは自由記述式とし、しかも授業別ではなく、研究科全体の範囲で回収する方式をとっている。

平成 21 年 7 月中旬、指導教員に依頼し、A4 サイズのアンケート用紙を 1 枚ずつ大学院生に配布した。学務第一係に投函口を設け、大学院生各自の手で回答を直接投函してもらおうという回収方法を行った。このアンケートの質問項目は、つぎの 3 点である。

- 「(1)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、教えてください。
- (2)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、教えてください。

(3)その他、ご意見ご要望ご感想があれば、教えてください。」

なお、アンケート対象学生数は17名、うち回収された回答用紙は6枚であった(回収率35.3%)。以下、この回答結果を原文のまま示す。

※アンケートにご協力いただいた方々からのご回答

■Aさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→教授との距離が近く、質の高い講義ができていると思うので、このまま継続してもらいたいです。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→特になし。

(3)その他

→特になし。

■Bさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→少人数だったので、学部生の演習以上に先生と多くの意見交換ができ、わからない個所を細かく訊くことができた。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→特になし。

(3)その他

→特になし。

■Cさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→学部生と一緒に講義に参加するのは楽しかったです。違う学年の方の考えや意見などが聞くことができよかったですと思います。演習の授業では主に発表の形式で他の受講生と一緒に論文などの資料を検討したり、意見も交換したりするのは、修論にすごく役立つと思います。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→よければ、演習の授業で受講者の論文だけ検討するんじゃなく、先行文献など他の良い論文も一緒に検討して学びたいです。

(3)その他

→演習の授業は中国の大学と違うので、新鮮だと感じました。楽しい授業でした。

■Dさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→演習では個別に指導していただけて、よかったですと思います。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→講義は、学部の特設講義と同じものだからか、専攻の分野の講義の内容は既に知っている基礎的なものでした。授業によるとは思いますが、発展的な講義も受講できたらいいなと思います。

(3)その他

→授業の内容には関係ないが、ウェブ上の時間割やシラバスに不備があったため、履修登録時に手間取った。後期以降は改善してほしい。

■Eさん

- (1)人文科学研究科の授業について、良いところ
→演習が自分の研究テーマに関連した内容で行われた点。
- (2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点
→特になし。
- (3)その他
→ [空欄]
-

■ Fさん

- (1)人文科学研究科の授業について、良いところ
→だいたいの授業が少人数で行われ、教員との質疑等によって授業内容が深まることもあり、非常に有意義なものになっていると思います。今後も、今の形態が継続することを期待します。
- (2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点
→特になし。
- (3)その他
→特になし。
-

* * * * *

平成 20 年度 山口大学大学院人文科学研究科 FD 部会
山本 真弓 (座長)、井上 三朗、古荘 真敬、尾崎 千佳

第12章 教育学研究科のFD活動

教育学研究科においては、FD活動として、学生授業評価及び教員授業自己評価を実施した。学生授業評価は7つの質問項目からなる。設問1と設問2は、授業で扱う専門分野において、教員から適切な情報提供がなされたかを問うものである。設問3は、学生への対応について、設問4と設問5は受講学生の専門とする分野にとって有意義な情報が得られたかを問うものである。設問6はゼミナール形式の授業の運営に関する質問であり、大学院ではゼミナール形式の授業が多いことからこのような設問を設定している。設問7は全体的な満足度を問うものである。さらに、それぞれの質問項目に対応するように、教員授業自己評価の設問を設定している。これらの評価結果を表1及び表2に示した。

学生授業評価の結果については、ほぼ9割以上で肯定的な回答を得ている。多くが少人数授業であり、学生と教員とのコミュニケーションを取りやすいため、肯定的な結果となることは予想していた。その一方で、全ての項目で、極めて少数であるが、極めて否定的な回答も得ている。注意しておく必要がある。

教員授業自己評価の結果についても、肯定的な回答を得ている。その一方で、設問4と設問5のように、学生の専門分野にとって授業が有意義なものとなったかについては、教員の悩みも伺い知ることができる。教育学研究科のような多様な分野からなる大学院においては、これら2つの項目は、難しい質問かもしれない。教育学研究科の授業評価は平成20年から始めており、ある程度のデータが蓄積された後には、質問項目の見直しを検討することが必要となるかもしれない。また、アンケート回収数が5未満の場合は、教員に学生授業評価の結果を開示していない。教育学研究科の場合、結果を開示できたのは約1/4のみで、残りの3/4は開示できなかった。このような状況となることは予想していたものの、やはり学生からの意見を聞くより良い方法も合わせて検討課題である。

表1 「教育学研究科における学生授業評価の結果」

質問番号	質問文	前期	後期	
【設問1】	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？	回答数 294	回答数 209	
	【回答1】	そう思う	77.2%	84.2%
	【回答2】	ややそう思う	15.3%	13.9%
	【回答3】	どちらとも言えない	4.1%	1.4%
	【回答4】	あまりそう思わない	1.4%	0.0%
	【回答5】	そう思わない	2.0%	0.5%
【設問2】	参考資料や文献の提示・紹介は適切に行われましたか？	回答数 294	回答数 208	
	【回答1】	そう思う	71.1%	80.3%
	【回答2】	ややそう思う	20.4%	14.4%
	【回答3】	どちらとも言えない	5.1%	2.9%
	【回答4】	あまりそう思わない	1.7%	1.9%
	【回答5】	そう思わない	1.7%	0.5%
【設問3】	学生の疑問・質問への対応や議論は、十分でしたか？	回答数 294	回答数 210	
	【回答1】	そう思う	75.2%	82.4%
	【回答2】	ややそう思う	15.6%	11.4%

	【回答3】	どちらとも言えない	3.1%	3.8%
	【回答4】	あまりそう思わない	4.4%	1.9%
	【回答5】	そう思わない	1.7%	0.5%
【設問4】	あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか？		回答数 293	回答数 209
	【回答1】	そう思う	58.4%	69.9%
	【回答2】	ややそう思う	33.1%	18.2%
	【回答3】	どちらとも言えない	5.8%	8.1%
	【回答4】	あまりそう思わない	2.0%	3.3%
	【回答5】	そう思わない	0.7%	0.5%
【設問5】	この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか？		回答数 293	回答数 210
	【回答1】	そう思う	68.3%	75.2%
	【回答2】	ややそう思う	21.8%	18.6%
	【回答3】	どちらとも言えない	5.5%	4.8%
	【回答4】	あまりそう思わない	3.4%	0.5%
	【回答5】	そう思わない	0.7%	1.0%
【設問6】	ゼミナールの運営は適切でしたか？		回答数 293	回答数 209
	【回答1】	そう思う	61.1%	80.4%
	【回答2】	ややそう思う	14.7%	10.0%
	【回答3】	どちらとも言えない	6.5%	5.3%
	【回答4】	あまりそう思わない	1.4%	0.0%
	【回答5】	そう思わない	1.4%	0.0%
	【回答6】	この授業は該当しない	15.0%	4.3%
【設問7】	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？		回答数 289	回答数 204
	【回答1】	そう思う	72.3%	80.9%
	【回答2】	ややそう思う	17.6%	14.2%
	【回答3】	どちらとも言えない	5.2%	3.4%
	【回答4】	あまりそう思わない	4.2%	1.0%
	【回答5】	そう思わない	0.7%	0.5%

表2 「教育学研究科における教員授業自己評価の結果（2010年6月5日時点でのデータに基づく。）」

質問番号	質問文	前期	後期
【設問1】	専門用語や理論的な話をわかりやすく説明しましたか？		
	【回答1】	81.3%	83.8%
	【回答2】	12.5%	16.2%
	【回答3】	6.3%	0.0%
	【回答4】	0.0%	0.0%
	【回答5】	0.0%	0.0%
【設問2】	参考資料や文献の提示・紹介を適切に行いましたか？		
	【回答1】	75.0%	70.3%

	【回答 2】	ややそう思う	18.8%	29.7%
	【回答 3】	どちらとも言えない	3.1%	0.0%
	【回答 4】	あまりそう思わない	0.0%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	3.1%	0.0%
【設問 3】	学生の疑問・質問への対応や議論は、十分であったと思いますか？			
	【回答 1】	そう思う	81.3%	86.5%
	【回答 2】	ややそう思う	12.5%	13.5%
	【回答 3】	どちらとも言えない	6.3%	0.0%
	【回答 4】	あまりそう思わない	0.0%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	0.0%	0.0%
【設問 4】	受講者の研究テーマにとって、参考となる知識を与えたと思いますか？			
	【回答 1】	そう思う	65.6%	75.7%
	【回答 2】	ややそう思う	25.0%	24.3%
	【回答 3】	どちらとも言えない	6.3%	0.0%
	【回答 4】	あまりそう思わない	3.1%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	0.0%	0.0%
【設問 5】	受講生の期待した内容を含んでいたと思いますか？			
	【回答 1】	そう思う	68.8%	56.8%
	【回答 2】	ややそう思う	21.9%	37.8%
	【回答 3】	どちらとも言えない	6.3%	5.4%
	【回答 4】	あまりそう思わない	0.0%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	3.1%	0.0%
【設問 6】	ゼミナールの運営は適切であったと思いますか？			
	【回答 1】	そう思う	78.1%	67.6%
	【回答 2】	ややそう思う	15.6%	32.4%
	【回答 3】	どちらとも言えない	3.1%	0.0%
	【回答 4】	あまりそう思わない	0.0%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	3.1%	0.0%
【設問 7】	この授業は、受講生にとって満足のいくものであったと思いますか？			
	【回答 1】	そう思う	75.0%	59.5%
	【回答 2】	ややそう思う	21.9%	37.8%
	【回答 3】	どちらとも言えない	0.0%	2.7%
	【回答 4】	あまりそう思わない	0.0%	0.0%
	【回答 5】	そう思わない	3.1%	0.0%
回答数			32	37

第 13 章 経済学研究科の F D 活動

第 1 節 平成 21 年度経済学研究科 F D 計画

平成 21 年度の F D 計画として、

- 1 ピア・レビューの実施
- 2 全学 F D 研修会への参加
- 3 授業評価の実施
- 4 教育改善 F D 研修会の実施

の 4 点を決めた。2 項、4 項については経済学部で述べたので、他の 2 項について個々では報告する。

第 2 節 ピア・レビュー

今までは大学院の授業の事例報告会を行ってきたが、今年度はピア・レビューという形で行うこととした。経済学専攻と企業経営専攻より 2 件の授業について実施した。

1. 経済学専攻

実施日：12 月 8 日

場 所：D104 教室

担当者：陳 禮俊

参加者：観光政策学科袁先生、朝水先生

内 容：修士課程修了論文指導

まず、修士課程修了者より、パワーポイントを用いて、論文についての説明があった。プレゼンは要領よくまとめられ、発表に際して前もって十分な準備をしたことをうかがわせるものであった。その後、約 30 分間、指導要領について、担当者と参加者の意見交換が行われた。主として次のことがまとめられた。

1. オリジナルな修論を目指して指導をされることに感心しております。
2. 他人の発表について、質問、コメントが出てなかったことは少し残念だと思っております。
3. 日本では、観光政策領域の学術研究はまだ少ないので、今後ともこの分野の研究指導をさらに力を入れなければならない。

2. 企業経営専攻

テーマ：修士論文指導

講師：古川澄明先生

日時：平成 21 年 6 月 1 日第 9・10 時限（16 時 10 分～17 時 40 分）

場所：経済学部 B203 教室

参加者：（教員）石田成則先生、柏木芳美先生、河野眞治先生、齋藤英智先生、中田範夫先生、長谷川光圀先生、藤田健先生、油納健一先生、吉川信将先生、渋谷綾子 以上 10 名、（大学院生）7 名

(1) 講義内容

1) 修論審査の基準について

経済学研究科企業経営専攻修士論文は

①形式要件、② 論理的整合性、③ 問題領域への十分な知識、④体系性、⑤独創性、⑥発展性の6つの基準で審査される。

2) 修士論文執筆の計画性について

- ・進捗状況の目安、修士課程2年次の夏休みまでに個々のレベルで書きあがっていること。
- ・2年次後期は指導教員の指導で書き直す作業にあてる。
- ・11月末までに書き直しを完了させ、あとは締切日までに清書する。
- ・2年次後期は「仕上げの時期」と認識しておく。
- ・日本人でも日本語に注意する。
- ・早め早めに進めることが指導教員の負担を軽減する。

3) 修士論文の内容について

- ・一生懸命だけでは論文は書けない。(以下の重要な点をよく認識しておくこと)
- ・他人の書いたものの内容やアイデアをコピーしてはいけない。
- ・色々な本を読んでまとめただけなのは意味がない。
- ・サーベイ論文というのはまた別 → サーベイ論文なのかオリジナル論文か？
- ・オリジナリティは重要。

①形式要件 —論文を書くための礼儀を守る—

- ・参考著書・論文を改行毎に適切に明記し、頁を書いているか。
- ・引用図書・論文の出处を明記しているか。
- ・転載した図表等の出处を明記しているか。
- ・先行研究の論点を整理しているか。
- ・先行研究と自論文の課題や論点の違いを明確に記述しているか。
- ・他人の書いたものを利用するときのマナーを熟知しておくこと。
- ・インターネットからのコピー&ペーストの1行でも2行でも“剽窃”となる。
- ・引用に関してはインターネットも本も同様。
- ・自分でインタビューしたり写真を撮ったものを使うときも筆者〇〇(撮影など)というように明示すること。
- ・図や写真にも著作権がある。
- ・他人のものを利用してはいけないということだけでなく、ちゃんと引用ということを明らかにすること。
また、先行研究と自分の論文の課題や論点の違いを明らかにするような書き方をこころがけることで、他人の書いたものとオリジナルな部分の違いが自分にも読み手にも明確になる。さらに、先行研究をよく調べることで、無意識の剽窃を避けることができる。そのためにも先行研究をよく調べること。

結論：形式要件を満たすことはオリジナリティと関係が深い。

②論理的整合性

- ・どのような方法で自分の課題を解明するのか？

- ・論文で解明する課題は何か？
- ・課題解明のためにどのような方法をとるのかを明示すること
- ・論述の順番は論理的な関係に沿っているか？

③問題領域への十分な知識

- ・中国と日本では異なるところ → 2年間で埋めなくてはならない。
- 経営学・会計学・経済学の専門用語など
- 十分な知識がないと、最終試験で質問されて答えられない（でも、論文には書かれている？）

④体系性

- ・論文全体が論理的体系を形成しているか？
- ・各論点（章、節、項）が論文全体のなかで論理的に整合性をもつか。
- ・論文は体系的に書かれていなければならない。
- ・論理的整合性があれば、自然に体系性も整う。
- ・体系性を十分にするためには、何度も書き直して形をつくる。
- ・各章・各節が重要な役割を果たしている → ムダなところは削ること。
- ・ただ書けば良いというのではない。
- ・「ムダがない」と「論理性」の条件を満たしていれば、読んでおもしろいものになる。
また、読んでおもしろいものでなければ論文として不十分なものである。

⑤独創性

- ・自論が先行研究と違うところは何か。
- ・自論はすでに研究されていないか。
- ・自論の学術的な意義は何か。
- ・先行研究をしっかりとて、自分のアイディアで自分の修士論文を組み立てる。
- ・研究には2通りの方法がある。
○耕された畑があるところで
○野に鍬を入れる。誰もやっていないところを耕す。
以上のことを意識し、自分の研究がどちらに属するかを認識しておくこと。
それぞれのタイプの研究における「独創性」を追及する。

⑥発展性

- ・自論はさらに時間を費やして研究すれば、どのような研究成果を期待できるか。
- ・発展的な研究はどのような学術的意義を期待できるのか。
- ・研究は発見の喜びである。

（2）質疑応答

大学院生からの質問に対して講義者と参加の先生方から回答やアドバイスが与えられた。

質問：先行研究で使用されている概念の定義があいまい。読んでもわからない。

回答：ない概念は「作る」ということもありうる。

その言葉のまわりの2~3行だけを読んでいてはだめ。概念は全体を読んで理解すること。

留学生の先行研究調査

- 語学の障害があるので読める文献の量が知れている
- 中国語の文献は指導者にとっても難しい

○指導教員は中国語が読めない

質問：アンケートをとったが、よくわからなくなった

回答：仮説を立て直す

仮説をいく通りも考えているか？

アンケートによって検証可能なものかどうかを再検討する

アンケートや実態調査の方法論を勉強する

修士課程の学生に独創性や発展性の要求は難しい。

アンケートはオリジナリティのためには有効。

修論の書き方や研究テーマの見つけ方等について検討するべき

質問：モデル作成時の条件付けについて躊躇を感じる

回答：物理実験のような環境を整えた状態が社会科学で現実的かどうか疑問が残るが、モデル分析のためには避けられない面もある。

(3) 講義後の話し合いにて

修士論文の書き方等における標準的な参考文献を用意できないか？

書き方と形式要件をまとめた本

できれば、分野ごとに（特に法律関係は異なるため）

修論の書き方山口大学経済学部版の作成は有効

方法論の一覧表を作成できないか？

教員が個人的にホームページに公開している場合もある

第3節 学生授業評価・教員授業自己評価

大学院での学生授業評価の実施率は52.3%で、昨年の38.5%より改善している。しかし殆どが少人数教育で学生アンケートに適していないために、積極的には実施されていない。教員の自己評価も16.5%に留まった。

第 1 4 章 医学系研究科の F D 活動

第 1 節 概要

平成 21 年度に関して、医学部と医学系研究科の合同 FD 委員会において、「学部と研究科の FD 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。

この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）の FD 活動に参加する形で FD 活動を行った。

具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第 8 章）の FD 活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第 7 章）・工学部（第 9 章）ないしは理工学系研究科（第 15 章）の FD 活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第 10 章）ないしは農学系研究科（第 16 章）の FD 活動に参加した。

具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

なお、こうした学部と相乗りの FD 企画とは別に、初めての医学系研究科独自の企画として、メディア基盤センターならびに e ラーニング研究会と共催で以下の講習会を実施した。

「e ラーニングの活用と注意点」

2009 年 7 月 14 日（火）17：30～19：00

医学部 霜仁会館

今後も、学部と共催できる部分は学部と共催し、必要に応じて独自の企画を行う形で FD を企画実施していく予定である。

第15章 理工学研究科のFD活動

第1節 理学系

平成21年度の理工学研究科理学系の主なFD活動は次の3点である。

- (1) 全学FD研修会への参加
- (2) ピア・レビューの実施
- (3) 授業評価の実施

(1)の全学FD研修会への参加については、理学部のFD活動の部分と重複するので、そちらを参照して頂きたい。ここでは、それ以外の活動内容について記す。なお、年度当初に課題として検討していた、学部・大学院一体となったカリキュラム編成の見直し作業については、進展はなかった。

1. 物理・情報科学専攻のピア・レビュー

物理科学分野では特別研究の中間発表会として毎週開催される「物理学研究会」のなかで、数回、教員が研究発表を担当することで、大学院生に研究発表の手本を示すとともに、同僚からピア・レビューを受ける活動を数年前より行っている。21年度の教員担当の研究発表は次の通りであった。

- ・前期第5回 6月8日 10:20~11:50 12番教室
 - 1) 講演者 朝日孝尚
 - 2) 演題「薄膜または表面からのX線回折」
 - 3) 発表にあたって工夫したこと
 - ・2009年2月に設置された新しいタイプのX線回折実験装置を使う上で、知っておくべき要点に絞って説明した。
 - ・実験装置、実験方法、代表的な測定例については、写真や図を多用してわかりやすい説明を心掛けた。
 - ・重要な関係式や量(X線の吸収, 屈折率, 全反射臨界角など)は、天下りで与えずに式を使って基本原理から導いた。
 - 4) 教訓としたいこと
 - ・もっと話題を整理して丁寧に説明するほうがよかった。
 - ・理解が不十分であったために、曖昧にした部分があった。
 - ・学部で学んだことを十分理解できていて、いつでも使えると思っはいけない。思い出すための導入が必要である。

- ・後期第5回 11月10日 10:20~11:50 12番教室
 - 1) 講演者 原純一郎
 - 2) 演題「液体ヘリウム3の熱力学量と輸送係数：フェルミ流体論の立場からの概観」
 - 3) 発表にあたって工夫したこと
 - ・実験事実をもとにヘリウム3の理論がどれだけ支持されているかを専門外の者にも理解できるように努めた。
 - 4) 教訓としたいこと
 - 特になし

2. 地球科学専攻のピア・レビュー

例年「地球科学セミナーI, II」に関して、教員・大学院生全員参加のもと「教室談話会」を設け、毎月1回、水曜日に2~3時間にわたって、研究発表と討論を行っている。毎回M1 大学院生から2~3件、教員から1件の演題を提供し、相互に討論を行っている。教員は、個別の研究紹介ではなく、自分の専門分野の全般的レビューを行うよう努めている。

今年度実施した演題は下記のとおりである。(下線の担当者が教員)

○第1回：2009年5月27日

大川侑里 (M1)：岩国断層帯の活動を想定した土砂災害に関する研究

酒井北斗 (M1)：田辺層群中の炭酸塩チムニーからみる流体噴出イベント

杉山直也 (M1)：海底扇状地堆積物—とくに梅ヶ瀬層と大田代層について—

大和田正明 (教員)：第50次南極観測隊 (JARE-50) セール・ロンダーネ山地地学調査報告

○第2回：2009年6月24日

鈴木孝明 (M1)：足尾帯における付加体境界断層の研究

中嶋健介 (M1)：佐賀平野北部の活断層の認定

東田優記 (M1)：中央構造線沿いにおけるNaCl型地下水の研究

阿部利弥 (教員)：アノーサイト(CaAl₂SiO₈)の単結晶育成を目指して

○第3回：2009年7月29日

平田壮一郎 (M1)：西日本における疑似岩塊流の形成過程についての検討

渡辺征稔 (M1)：新潟県の広域地下水流動とテクトニクス

金折裕司 (教員)：西南日本のテクトニクスと地質断層の再活動性

○第4回：2009年10月28日

相山光太郎 (M1)：大原小断層系の長期的地震マイグレーション

荻原佳代子 (M1)：The characteristics of OSL signal from quartz grains extracted from modern marine sediments in Japan

福地龍郎 (教員)：地震発生帯のESR熱年代学

○第5回：2009年12月2日

堀川義之 (D2)：両子火山群の古地磁気学的研究による噴出年代の制約

上塘 斎 (D3)：飛騨帯熊野川地域に分布する斑れい岩複合岩体の地質学的・地球化学的特徴

加納 隆 (教員)：飛騨変成帯の地質学、何が最も問題だったのか—飛騨片麻岩の原岩と構造、神岡鉱床に関する問題—

3. 環境共生系専攻（環境共生化学分野）のピア・レビュー

(1) 環境共生化学・生物科学ゼミナール I

日時：平成21年10月23日(金) 17:00~19:00

場所：理学部22番講義室

対象学生：2研究室合同のゼミナール(約20名)

担当教員：田頭昭二、山崎鈴子

レビュアー：村上良子、安達健太、藤原 勇

(2) 授業の目標・概要

[授業の目標]

プレゼンターとしての役割を果たす中で、研究内容のより一層の理解、新規な問題点への興味の喚起および文献調査・プレゼンテーション能力を高めることを目的とする。

また、聞き手として参加している院生・学生には、積極的に質問し議論に参加することを求めており、そうすることで、研究分野の異なる発表をその場で理解し、質問する能力を養うことも目的とする。

[授業の概要]

「環境共生化学・生物科学ゼミナール I」(修士1年・通年)、「環境共生化学・生物科学ゼミナール II」(修士2年・通年)、及び「文献講読」(学部4年生・通年)の合同授業。通常、研究室毎で個別に行われる上記授業であるが、月1回程度、2研究室合同で開催。プレゼンターに選出された院生・学生は、修士論文研究あるいは卒業論文研究に関連するテーマについて、英語で書かれた専門書や原著論文を自分で見つけ出し、事前に読んで理解しておく。発表当日は、レジメを使いながらその内容を紹介し、その後、出席者とのディスカッションを行う。

(3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

授業終了後の検討会にて本授業を参観した教員から以下のようなコメントがあった。

1) 講義&演習の内容・進め方について

- ・ 分析化学の社会人 M1 の Cr(IV)の液膜による分離法、および物質構造化学 M1 のチタン光触媒による有機物分解の紹介があった。両論文とも環境中の有害物質の除去法として現在注目されている分野の研究であり、レポーターである学生はその主旨を理解し、英文をほぼ正確に読み取りよく準備されたプレゼンテーションをおこなった。また、教員学生を含めた後の討議において、実験の精査、結論の妥当性の評価をおこないレポーターおよび参加学生の理解を深めることができた。
- ・ 文献購読の内容についての説明が丁寧にされた。図表は POWER POINT を使って説明がなされ、理解が深まった。しかし、説明が最初から最後まで一本調子で行われたためすこし聞きづらかった。
- ・ POWER POINT を使った論文説明は、非常に判り易く、良い試みだと感じた。

2) その他 (改善を要すること等)

- ・ 説明にメリハリをつけると聞き取りやすかった。図・表については POWER POINT を使って説明がされていたが、小さくて見にくかった。一つの画面に1つの図または表について表示し説明されるともっとわかりやすかった。
- ・ 最近の公費の削減により図書が減少しているが、ゼミナールや文献講読の充実(大学院における教育・研究指導)には雑誌(国際的主要雑誌)を含めた参考論文の充実が必要である。
- ・ 国際論文誌を各自で和訳し、論文骨子を抽出し簡潔に説明できることが本講義の本質であると思われる。今回の授業では、「国際論文誌の和訳」の点では、満足いくものと感じたが、「論

文骨子の抽出」という点でやや不十分である点を感じた。(論文中における筆者の重要な考察等に関して、的を得た文章表現・回答を得ることができなかったため。)学部学生、修士学生には、上記項目の重要性を十分に理解させ、最終的に自分自身の卒業論文・修士論文の執筆の際に本授業の経験をフィードバックできるような環境を整える必要がある。

4. 学生による授業評価

授業評価アンケートの実施状況は以下の通り。

対象授業科目数 41 アンケート実施授業科目数 35 実施率 85.4%。

実施率は医学系研究科理学系の 11/14=79%よりやや高く、理学部の 164/175=93.7%よりはやや低かった。

平成21年度理工学研究科(理学系)FD委員

増山博行(委員長)、村上柳太郎、吉川学(以上、教学委員会委員)、小宮克弘(数理科学専攻)、内野英治、白石清(以上、物理・情報科学専攻)、大和田正明(地球科学専攻)、藤島政博、山崎鈴子(以上、環境共生系専攻)

第2節 工学系

平成21年度の理工学研究科工学系の主なFD活動は、次の2点である。

1. 公開授業
2. 授業評価表彰
3. 全学FD研修会への参加

なお、全学FD研修会への参加については、工学部のFD活動の部分と重複するので、第9章を参照して頂きたい。

以下に、理工学研究科工学系、医学系研究科工学系の公開授業一覧を示す。

平成21年度(前期)公開授業一覧

前期公開授業実施期間 6月11日(木)~7月22日(水)

専攻	授業科目名	授業実施者		実施日	備考
		職	氏名	月日又は曜日	
機械工学	全開講科目			6月11日~ 7月22日	
社会建設工学	流域圏水環境工学特論	准教授	山本 浩一	金曜日	6/19-7/10 の期間

物質化学	材料分析学特論	准教授	中塚 晃彦	6月19日	
物質化学	材料分析学特論	准教授	中塚 晃彦	6月26日	
電子デバイス工学	超伝導工学特論	教授	諸橋 信一	6月23日	
電子デバイス工学	超伝導工学特論	教授	諸橋 信一	6月30日	
電子情報システム工学	ソフトウェア工学特論Ⅱ	准教授	田村 慶信	6月12日	
電子情報システム工学	ソフトウェア工学特論Ⅱ	准教授	田村 慶信	6月19日	
電子情報システム工学	ソフトウェア工学特論Ⅱ	准教授	田村 慶信	6月26日	
感性デザイン工学	空間都市計画演習	教授	鵜 心治	7月16日	
環境共生系	リサイクル工学特論	教授	今井 剛	6月16日	
環境共生系	リサイクル工学特論	教授	今井 剛	6月23日	
環境共生系	リサイクル工学特論	教授	今井 剛	6月30日	

平成21年度(後期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月1日(火)～12月24日(木)

専攻	授業科目名	授業実施者		実施日	備考
		職	氏名	月日又は曜日	
全専攻	全開講科目			12月1日～ 12月24日	非常勤講師担当の科目は除く。

後期に関しては、学部同様に期間を区切って、全科目を対象とした。詳細に関しては、第9章を参照されたい。

次に、理工学研究科工学系、医学系研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

平成20年度優秀授業表彰一覧表

理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)

番号	開設科目名	担当教員名	専攻名	表彰種別
1	機械音響工学特論	小嶋直哉	機械工学専攻	最優秀授業
2	流体機械特論	望月信介	機械工学専攻	優秀授業
3	システム計算工学特論	小河原加久治	機械工学専攻	優秀授業

4	粘性流体力学特論	亀田孝嗣	機械工学専攻	優秀授業
5	熱機関工学特論	三上真人	機械工学専攻	優秀授業
6	材料力学特論	木下勝之	機械工学専攻	優秀授業
7	構造材料学特論	吉武勇	社会建設工学専攻	最優秀授業
8	施設設計工学特論	高海克彦	社会建設工学専攻	優秀授業
9	構造力学特論	麻生稔彦	社会建設工学専攻	優秀授業
10	公共政策論	榊原弘之	社会建設工学専攻	優秀授業
11	反応制御化学特論	中山雅晴	物質化学専攻	最優秀授業
12	固体触媒特論	今村速夫	物質化学専攻	優秀授業
13	高分子設計特論	鬼村謙二郎	物質化学専攻	優秀授業
14	半導体光物性特論	山田陽一	電子デバイス工学専攻	最優秀授業
15	固体物性論特論	嶋村修二	電子デバイス工学専攻	優秀授業
16	光電子デバイス工学特論	只友 一行	電子デバイス工学専攻	優秀授業
17	電子材料工学特論	甲斐綾子	電子デバイス工学専攻	優秀授業
18	電磁波工学特論	久保洋	電子情報システム工学専攻	最優秀授業
19	電気システム制御特論	若佐裕治	電子情報システム工学専攻	優秀授業
20	空間造形学特論 I	内田文雄	感性デザイン工学専攻	最優秀授業
21	基礎デザイン特論	木下武志	感性デザイン工学専攻	優秀授業
22	感性心理学特論	松田 憲	感性デザイン工学専攻	優秀授業
23	空間・都市計画学演習	中園真人・鶴 心治	感性デザイン工学専攻	優秀授業
24	リサイクル工学特論	今井剛	環境共生系専攻	最優秀授業
25	精密分離プロセス工学特論	中倉英雄	環境共生系専攻	優秀授業
26	環境共生学原論 I	中田幸男, 小淵茂寿 中倉英雄, 佐伯隆 福永公寿, 今井剛 宮本文穂, 兵動正幸 田中一宏, 三浦房紀 中村秀明, 村上ひとみ 関根雅彦, 奥田昌之 有働公一	環境共生系専攻	優秀授業
27	持続的防災システム特論	村上ひとみ	環境共生系専攻	優秀授業
28	生体触媒化学特論	福永公壽	環境共生系専攻	優秀授業
29	都市環境工学特論	今井剛	環境共生系専攻	優秀授業
30	バイオプロセス工学演習	山本修一 吉本則子	応用分子生命科学系専攻	最優秀授業

表彰の方法は第 9 章の工学部と同じであるが、対象が全開講科目の上位 20%となっている。

第16章 農学研究科・医学系研究科（農学）のFD活動

第1節 はじめに

1. 平成21年度 農学研究科・医学系研究科（農学）FD計画

（1）セミナー（農学部公開講演会）の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図る。

（2）教員による授業自己評価の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の授業を担当する教員に対して、実施した講義、実験等についての自己評価アンケートを実施し、教員が良い授業を実施するための自己啓発に役立てる。

（3）学生による授業評価の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の授業を受講した学生に対して、年度末に講義、実験等についての評価アンケートを自由記述形式にて実施する。集計結果は、授業全般に対する学生の意見・要望として、今後の授業改善の参考とする。

（4）学部・学科等のFD活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会への参加

内容：農学部拡大教授会前に実施される標記研修会に参加する。

（5）大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科（農学系）との教育改善FD研修会への参加

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Web シラバスの改善を目的とした標記研修会に、学務関連の教員が参加する。

（6）全学FD研修会への参加

内容：全学で実施される研修会に参加する。

2. 活動および報告内容について

平成 21 年度の農学研究科・医学系研究科（農学）の FD 活動は、上記のような計画に基づき、「セミナー」、「授業評価」、「学部で実施する FD 研修会」、「全学 FD 研修会」について平成 20 年度と同様の取組みが実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、今後の問題点を指摘する。

第 2 節 セミナー（農学部公開講演会と共催）

1. 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	学科
1	5 月 28 日	ユニークな配位構造を用いて機能するヘムタンパク質に関する研究	小崎紳一	生物機能科学科
2	6 月 26 日	脂質修飾タンパク質の網羅的解析系の確立	内海俊彦	生物機能科学科
3	7 月 30 日	クオラムセンシングをターゲットとしたバイオフィルム阻害剤の開発	阿座上弘行	生物機能科学科
4	10 月 23 日	応用生理学的に考える神経筋の加齢変化抑制方法	宮田浩文	生物機能科学科
5	11 月 27 日	耐熱性酢酸菌と高温発酵系の開発	松下一信	生物機能科学科
6	12 月 18 日	植物の酸化ストレスメディエーターとしての活性アルデヒド	右田たい子	生物機能科学科

2. セミナー内容要旨

（1）ユニークな配位構造を用いて機能するヘムタンパク質に関する研究

ヘムタンパク質は生命活動を維持する上で重要な役割を果たしているタンパク質の一つです。古くから研究されているヘモグロビン（酸素分子の運搬を行うタンパク）のみならず、呼吸、ホルモン合成、薬物代謝などに関わるタンパク質の中にもヘムを補欠分子として持つものが少なくありません。こうしたヘムタンパクは、ヘムの種類（heme a, b, c, o など）とヘム近傍に存在するアミノ酸残基の配置を巧みに使い分けて、自らが望む機能を発現していると考えられます。

今回は、こうしたヘムタンパク質の中から、heme b を補欠分子として持つ 6 配位型のものに焦点をあてます。具体的には、ヘム鉄の配位子が、Cys と His のもの（cystathionine β -synthase¹）と Tyr と His のもの（heme acquisition system A²）について紹介し、両者の共通点と違いについて考えます。

1 セリンとホモシステインから縮合反応によりシスタチオンを合成する反応を触媒する酵素。ヒ

ト由来の酵素では、触媒サイクルに直接関わる pyridoxal phosphate (PLP) のみならず、ヘムを補欠分子として持つ。

2 グラム陰性菌が菌外から鉄源として必要なヘムを奪い取る際に用いられるタンパク。

(2) 脂質修飾タンパク質の網羅的解析系の確立

ゲノム解読後の課題としてタンパク質の機能解析に注目が集まるなか、タンパク質翻訳後修飾の解析の重要性が高まっています。タンパク質の脂質修飾は、脂肪酸、イソプレノイド、リン脂質といった脂質によるタンパク質の修飾反応であり、Ras タンパク質や、Src ファミリーチロシンキナーゼに代表されるように、脂質修飾タンパク質の多くは細胞のシグナル伝達機構において極めて重要な役割を担っています。

リン酸化やグリコシル化といった主要な翻訳後修飾の解析に関しては、近年、二次元電気泳動と質量分析を組み合わせた解析手法のめざましい進歩に伴い、これらの手法を用いた網羅的解析が進行しています。これに対して、タンパク質の脂質修飾に関しては、その生理的な重要性にもかかわらず、修飾自体の検出法や機能解析の手法が一般化されておらず、一部の研究者によってのみ解析が行われているのが現状であり、脂質修飾が検出されたタンパク質は、全脂質修飾タンパク質のうちのごく一部に限られています。

私たちは、ゲノム情報に基づいた脂質修飾タンパク質の網羅的な解析系の確立をめざして研究を行っています。即ち、cDNA (=ゲノム情報) を出発物質とし、タンパク質脂質修飾の有無を「推定」し、これを実験的に「確認」し、その「機能解析」を行う一連の解析システムの確立を行い、この手法を用いて、生理的に重要な新規な脂質修飾タンパク質の網羅的な探索を試みています。

本セミナーでは、主要な脂質修飾として知られる、N-ミリスチル化、プレニル化について、最近私たちが確立した、無細胞タンパク質合成系と遺伝子導入細胞における代謝標識法を用いた、新規な脂質修飾タンパク質の網羅的同定法について紹介します。また、新たに見出した脂質修飾タンパク質の生理機能、特に細胞のアポトーシス機構への関与についても紹介します。

(3) クオラムセンシングをターゲットとしたバイオフィーム阻害剤の開発

口腔内には 500 種以上の細菌が生息しており、歯や口腔組織の表面にバイオフィームを形成する。多くの細菌は、環境中に放出するオートインデューサー (AI) によって菌密度を感知し、これによって集団で遺伝子発現の制御を行うメカニズム (クオラムセンシング) を有している。デンタルプラークなどの多種の細菌が複雑に絡み合った複合バイオフィームでは、異種細菌間でもクオラムセンシングにより相互にコミュニケーションしていると考えられている。そこで、歯周病の新たな予防・治療法の開発として、クオラムセンシング阻害剤の探索研究が注目されている。

近年、マクロライド系の抗生物質が緑膿菌に対して殺菌活性を示さずにバイオフィーム形成を抑制することが示され、それがクオラムセンシングの阻害によるものであることが報告された。また、エピガロカテキンガレート (EGCg) などのポリフェノール化合物がクオラムセンシングを阻害することも報告されている。最近、我々は歯周病細菌の一つに対しても、EGCg やその類似化合物が殺菌活性は示さずにバイオフィーム形成を抑制することを示した。このようなクオラムセンシングを阻害する

様々な物質が同定、研究されており、バイオフィルム抑制剤としての候補となりえる。

また、クオラムセンシングを阻害する別の試みに、オートインデューサーのホモログを用いる方法があるが、これらの阻害剤のほとんどが AI-1(AHL)をシグナル物質とするクオラムセンシングに対するアンタゴニストである。しかし、口腔細菌の多くは AI-2 をシグナルとするクオラムセンシング機構を有しており、口腔内における複合バイオフィルムの形成には AI-2 を介したクオラムセンシングが強く関与すると考えられている。近年、ある種のハロゲン化フラノンが、AI-2 を介したクオラムセンシングを阻害するアンタゴニストとして報告されている。また、我々もある種の AHL ホモログが口腔細菌のバイオフィルム形成を抑制することを示した。現在、個々の歯周病菌がもつクオラムセンシング機構が遺伝子レベルで解明されつつある。今後、新たな歯周病予防や治療法の一つとして、クオラムセンシングをターゲットとしたバイオフィルム阻害剤の開発が期待される。

(4) 応用生理学的に考える神経筋の加齢変化抑制方法

農学部にて在籍した13年間は、「骨格筋と支配神経細胞の可塑性に関する生理・生化学的研究」をメインワークとしてきた。一方、ヒトあるいは動物を対象としたフィールド実験を行い、細胞レベルの知見を実際のトレーニングの現場に応用するための研究も継続してきた。前回(2006.12.08)は「農学部でやるスポーツサイエンス」と題して話をさせていただいたので、今回は動物実験で確認された加齢変化とその防止策に関する応用生理学・バイオメカニクス的话题を提供したい。

運動を最終的に制御するのは脊髄内運動ニューロンと骨格筋細胞である。前半は、この2つの細胞本体とその接点であるシナプスの加齢変化について、われわれの研究室で確認した知見を中心に概説する。キーワードはFast運動単位の脱神経と萎縮である。後半は、ラット、ウマ、ヒトを対象とした運動生理学およびバイオメカニカルな実験結果を説明したい。キーワードは抗重力筋、エキセントリック収縮である。

応用生理学分野の使命の1つは、基礎的知見をもとに、加齢変化を抑制する方策を科学的に検討することだと考えている。微力ながら貢献したい。

(5) 耐熱性酢酸菌と高温発酵系の開発

今回のセミナーでは、本セミナーでは始めてになりますが、いわゆる「個人研究」ではなく、「プロジェクト研究」に基づく研究成果を紹介します。

これまで長年にわたって続けられてきたタイとの共同研究(JSPS-NRCT Core University Program)で多くの耐熱性酢酸菌が蓄積され、その有効利用の観点から①「耐熱性微生物」の適応進化の原理の理解と②「耐熱性微生物」を利用した高温発酵系の開発を目指した学内の共同研究(生研センタープロジェクト)を企画し展開してきた。予想通り、その適応進化原理の理解では苦戦しているが、その高温発酵系の開発では予想以上の成果が得られている。

耐熱性原理の理解のために、耐熱性酢酸菌の温度感受性トランスポゾン変異株を分離し、そこから耐熱性に関与すると思われる30遺伝子を分離・同定した。しかし、これらの遺伝子機能は多岐にわたり、それらの生理学的解析を続けているところであるが、総合的に「耐熱性」獲得の機構を明らかにするにはまだまだ時間が必要である。

一方で、耐熱性酢酸菌による高温発酵系の開発では、より高温発酵に適した菌株を適応育種する戦略を取った。これは酢酸菌のゲノム解析等の結果より適応変異能力が高いことがわかっていたからである。その結果、ソルボース発酵株や酢酸発酵株で高温適応株が得られ、それらを用いた①高温発酵系の開発に加え、②高温発酵に関与する生理学的特性の解明、③高温発酵への適応育種に関与する遺

伝子情報などの成果が得られている。

本セミナーでは、これらの成果もしくはまだ成果になっていない結果も含め、いくつかについて紹介したい。

（6）植物の酸化ストレスメディエーターとしての活性アルデヒド

植物の葉緑体やミトコンドリアでは、電子伝達反応に伴い活性酸素が常に生成している。乾燥や低温、重金属などの環境ストレス条件では、細胞内の活性酸素定常濃度が増大し、タンパク質や核酸が酸化されることで、組織に傷害が現れたり生育が阻害されたりすると考えられている。これを酸化的ストレスという。活性酸素を消去したり生体分子の酸化傷害を防いだりする抗酸化防御は、周囲の環境条件変化につねにさらされている植物の生存にとって不可欠の能力であり、植物は大量の抗酸化物質や多種類の抗酸化酵素による何重もの抗酸化防御機構を備えている。

私たちはこれまでに、シロイヌナズナから見つかった新規抗酸化因子の生理機能解析を行い、この因子が、過酸化脂質から生じる毒物 α 、 β -不飽和アルデヒド（活性アルデヒド）の α 、 β -不飽和結合を特異的に還元する新規酵素アルケナルレダクターゼ（AER）であることを発見した。AERを過剰発現させたタバコは、活性酸素、強光、紫外線、オゾン、アルミニウムに耐性を示すことが明らかになった。これらの結果から、さまざまな環境ストレスによって植物体内で活性アルデヒドが生成し、細胞の機能を障害していることが強く示唆された。

動物細胞の酸化的ストレスで生成する主な活性アルデヒドは4-ヒドロキシノネナルであるとされている。植物組織のアルデヒド分析を行うと、アクロレイン、2-ペンテナル、4-ヒドロキシヘキセナルなど多種類の活性アルデヒドが検出され、植物へのストレス処理によりこれらが増大した。また、ストレス耐性を示すAER過剰発現タバコでは、これら活性アルデヒドの増大が抑えられていた。このように、植物の環境ストレスにおいて、活性アルデヒドが活性酸素の下流で生成し細胞傷害をもたらす重要な酸化ストレスメディエーターであることを立証した。

現在、活性アルデヒドがどのようにして細胞内で生じ、どのようなタンパク質を標的とするかを解析している。その最新結果もお伝えしたい。

3. セミナーの総括

農学研究科のセミナーは、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科の大学院生を対象に行われてきた農学部公開講演会のうち、農学研究科教員および医学系研究科教員が担当するものを、新たに研究レビューとして認定したものである。

平成21年度は上記のように6回実施され、多数の教員と院生・学生が参加し、活発な質疑が行われた。来年度以降も本年度と同程度の回数で実施されることにより、各教員および研究科全体の研究活動の活性化につながると期待される。

第3節 教員授業自己評価

1. 教員授業自己評価の総括

農学研究科の教員授業自己評価については、平成22年5月20日（入力締め切りは5月末日）の時点での入力率が29%と、山口大学大学院の全研究科のなかで最も高かった。入力率が例年と比較し低い、これは入力可能になってからの期間が短かったこと等が影響しているものと考えられる。入力締め切りも延長され、教員への入力依頼も繰り返し行っていることから、最終的な入力率は改善される

ものと推定される。

第4節 学生授業評価

1. 農学研究科の学生授業評価

農学研究科では、授業実施後に自由記述式の授業評価アンケートを実施した。アンケートでは、「このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする資料の作成を目的に行います。それ以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して本年度受講した講義（非常勤講師による授業は除く）に関する感想や要望等を率直に記述してください。」の説明とともに、「授業科目名」「授業教員名」とあわせて学生の「感想・要望」を自由に記述させた。実施率は昨年度が29%であったのに対し21年度は55%と、実施率が顕著に増加した。大学院の講義・実験は、少人数で実施されることが多いため、このような形態の質問になったが、これらの評価は授業実施教員にとって授業改善に大いに役立つものとなったはずである。

医学系研究科（農学）の学生授業評価については、全学共通のアンケートの様式を用いて実施された。農学部で教育・研究を行っている医学系研究科の教員が少ないため、授業評価の対象となる講義数も少なく、統計的に有意な集計結果が得られないことから評価結果の取りまとめは行わなかったが、アンケート結果は学部学生の学生授業評価の場合と同様、概ね良好であった。

第5節 全学FD研修会

1. 参加教員一覧

開催日	研修会種別	農学部教員の参加人数
5月8日	各学部・研究科FD推進者のための研修会	1名
5月30-31日	第57回中国・四国地区大学教育研究会	1名
8月10日	「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」	1名
9月11日	「DocuWorksの使い方」	2名
9月25日	「理系共通教育科目「地球科学2」の授業展開-参加と思考をうながす授業づくりの方法-」	1名

第6節 まとめ

平成21年度の農学研究科および医学系研究科（農学）のFD活動は、平成20年度と同様、授業自

己評価以外は、全て学部と重複した項目であり、大学院独自の取り組みはほとんどない。大学院教育に対する外部評価が強化される傾向にあることから、今後、両研究科独自の FD 活動の充実が求められるものと予想される。農学研究科独自の学生による授業評価アンケート（自由記述のみ）については、平成 20 年度と比較し実施率が顕著に増加した。少人数で実施する授業に対しては学部で実施されるような授業評価アンケートを実施することは難しいと考えられるが、農学研究科独自の学生による授業評価が、実効性のあるものであるか否かについては今後検討を加える必要があると考えられる。

本年度の大学院 FD 活動は平成 19 年度、平成 20 年度に続き 3 回目の FD 活動であり、今後も農学研究科および医学系研究科（農学）FD 活動が継続的に改善され続けてゆくことが期待される。

平成 21 年度（2009）農学研究科・医学系研究科（農学）FD 担当教員

生物資源環境科学分野 山本晴彦

生物機能科学分野 右田たい子

医学系研究科（農学） 内海俊彦（FD 担当教学委員、全学 FD 委員）

第17章 東アジア研究科のFD活動

第1節 平成21年度東アジア研究科FD計画

東アジア研究科FD委員会は、大学院設置基準の一部改正によって大学院におけるFD研修が義務化されたことをうけ、平成19年度より発足したものである。東アジア研究科は、博士課程のみの独立した大学院であり、主たる教育活動は学生に対する研究指導となっている。こういった現状を鑑み、FD委員会としては昨年度に引き続き「研究指導演法についての検討会」を企画するに至った。

東アジア研究科の教員組織は、「比較文化講座」「社会動態講座」「社会システム分析講座」の3講座に分かれており、FD研修会もこの講座単位で行うこととした。但し、事前の開催告知は研究科に所属する全教員に対して行い、また、いずれのFD研修会に参加することも可能とした。平成21年度の東アジア研究科FD研修会として計画したのは以下の3回となる。

- 1) 「第1回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導演法の検討～」
日時：平成21年10月16日（金）学位準備論文報告会（経済・経営・法律）終了後
- 2) 「第2回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導演法の検討～」
日時：平成21年10月19日（月）学位準備論文報告会（比較文化）終了後
- 3) 「第3回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導演法の検討～」
日時：平成21年10月23日（金）学位準備論文報告会（教育開発）終了後

第2節 東アジア研究科FD研修会

平成21年度の東アジア研究科FD研修会は、計画に則って3回実施した。いずれも、東アジア研究科が毎年10月に行っている「博士学位準備論文報告会」を参加契機として利用し、当該の報告会終了後に開催することとした。この研修会は、博士学位準備論文報告会で発表を予定している学生の主指導教員に、研究指導演法についての実践報告をしてもらうという形式をとっている。

事前の準備として、主指導教員には「FD研修会資料」をFD委員会に提出してもらった。FD委員会は、その「FD研修会資料」を東アジア研究科全教員に対して開示。研修会当日、参加者は「FD研修会資料」を念頭に置きつつ、学生の博士学位準備論文報告を聴くことになる。そして、博士学位準備論文報告会の終了後、FD研修会を開催。主指導教員があらためて「FD研修会資料」について補足説明を施し、博士学位準備論文報告会での学生の報告を実践事例として参照しつつ、意見交換を行なうこととした。

なお、「FD研修会資料」については以下のような観点を想定している。

1. 学生指導の経過

学生の研究課題遂行に対して主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのようなサポート体制を敷いてきたかを報告する。報告内容は、「ロードマップ」「研究課題に対するカウンセリングの履歴」「研究遂行のための指導状況」「調査研究の実施状況」「学会活動状況」「論文作成の指導状況」「研究成果の公表状況」などである。

2. 指導上の留意点

学生の研究課題遂行のために主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような環境の整備を心が

けてきたかを報告する。報告内容は、「整備したハード、及びソフト」、「調査のための海外渡航の機会をどのように与えたか」、「東アジアプロジェクト研究への参加をどのように促したか」などである。

3. 指導上の感想

学生の研究課題遂行に向けて主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような困難を感じてきたかを報告する。報告内容は、「本学生は、□□□□であり、△△△△という点で、より細かい指導が必要である」「××××に関して、より良い方法がないか、検討中である」「○○○○については、現在までのところ、問題なく経過している」などである。

1. 第1回東アジア研究科FD研修会

第1回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第1回東アジア研究科FD研修会～社会動態講座・研究指導法の検討～」

日時：平成21年10月16日（金）東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文
報告会終了後

場所：経済学部第1会議室

参加者：福田隆眞、塚田広人、植村高久、成富敬、横田伸子、野村淳一、石田成則、森野正弘（以上8名）

（1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ① 既存研究涉猟が確実に行われているか？
- ② 既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③ その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

（2）提起された問題とその解決法について

研修会では2名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。

【一人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇〇」である。
 - ・研究を遂行するために、「〇〇〇」の分析手法とその対応策を指導する。
 - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
8月…「〇〇〇」に関するアンケート調査
- 2年次
- ・調査結果のとりまとめをする。
 - ・学会報告（12月）
 - ・学会誌への論文投稿（1月）
 - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
 - ・12月に〇〇〇学会九州部会での報告、翌年1月に学会誌「〇〇〇学」への投稿予定
- 3年次
- ・追加調査を実施する。
 - ・第2回準備論文報告会
 - ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

①研究環境の整備

- ・研究に必要な文献、データ分析に必要な統計ソフトを用意する。
- ・アンケート調査のために東京出張。

②東アジアプロジェクト研究への参加：なし

③関連学会への入会：〇〇〇学会

3. 指導上の感想

- ①本学生は、「A」であるが、「B」の傾向がある。
- ②「〇〇〇分析」の手法を十分習得しておらず、その習得を手助けする必要がある。

【二人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇〇に関する研究」である。
 - ・研究を遂行するために、「〇〇〇分析方法」を指導する。
 - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
5月…〇〇〇に関するアンケート調査。
 - ・学会報告（11月）
 - *〇〇〇学会全国大会（2008年11月 長野県長野大学）にて「〇〇〇の考察」を発表
 - *△△△学会（2008年11月 山口大学）にて「〇〇〇の応用に関する研究」を発表
- 2年次
- ・調査結果のとりまとめをする。
 - ・学会誌への論文掲載（9月）
 - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
 - ・学会報告、学会誌への投稿予定（11月）
 - *〇〇〇学会全国大会にて「〇〇〇についての考察」を発表予定
 - *『〇〇〇研究』(2010),〇〇〇学会 に投稿論文作成
 - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
11月…〇〇〇に関するアンケート調査、及び、〇〇〇に対するインターネット調査。
- 3年次
- ・追加調査を実施する。
 - ・第2回準備論文報告会

・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

①研究環境の整備

経済学部教員による研究グループと共同して調査を実施しており、特に問題なし。

②関連学会への入会：1年次に〇〇〇学会と△△△学会に入会

3. 指導上の感想

①本学生は、□□□について十分な分析経験がなく、関連する分析結果の解釈という点で、より細かい指導が必要である。

②論文作成以外の勉強に関して、十分指導する良い方法がないか、検討中である。

③その他の論文作成については、現在までのところ、問題なく経過している。

【一人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・指導の参考になりました。
- ・挑戦しがいのあるテーマで、健闘を祈っています。
- ・報告の日本語がこなれていてよい。日本語の問題は外国人留学生が必ずぶつかる壁なので、どのよう
に日本語を習得されたのか関心がある。
- ・資料づくりの方法等にもう少し指導する余地がある。
- ・論文のキーワードに対する指摘、指導が適切である。また、結論に導くアイデアも豊富である。
- ・計画的に指導を行っている。

【二人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・問題意識が明確であり、分析手法の習得も順調のようである。
- ・実態的なアンケート分析にかえて、もう少し幅広く先行研究のサーベイをすることが望ましい。
- ・〇〇〇や△△△を体系的に学習し、博士論文作成に活かしてほしい。
- ・〇〇〇学の教科書の一節や一章になるような成果が出ることを祈っています。
- ・問題意識がはっきりしていて、研究目的がわかりやすかった。
- ・「〇〇〇との関連性は？」「△△△との関連性は？」今後の考察として必要になるだろう。
- ・先行研究への言及がもう少しほしい。
- ・研究方法の指導が適切である。
- ・計画的な指導を行っている。

2. 第2回東アジア研究科FD研修会

第2回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第2回東アジア研究科FD研修会～比較文化講座・研究指導法の検討～」

日時：平成21年10月19日（月）東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：人文学部第5講義室

参加者：湯川洋司、坪郷英彦、小谷典子、額額厚、根ヶ山徹、高木智見、田中誠二、辻正二、浜島清史、朝水宗彦（以上10名）

（1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ①既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

（２）提起された問題とその解決法について

研修会では3名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。

【一人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇〇」である。
 - ・研究を遂行するために、〇〇〇に関する先行研究やアンケート調査の調査項目の作成方法を指導する。
 - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
- 8月…「〇〇〇」に関するアンケート調査（A県B市）
10月…「〇〇〇」に関するアンケート調査（X県Y市）
- 2年次
- ・調査結果のとりまとめをする。
 - ・〇〇〇学会報告（7月）
 - ・学会誌への論文投稿（12月）
 - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
 - ・〇〇〇学会報告、学会誌への投稿予定
- 3年次
- ・〇〇〇学会報告（5月）
 - ・追加調査を実施する。
 - ・第2回準備論文報告会
 - ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

- ①研究環境の整備
 - ・研究に必要な文献、データ分析に必要な統計ソフトを用意する。
 - ・資料の紹介、探索方法などを指導する。
- ②東アジアプロジェクト研究への参加：なし
- ③関連学会への入会：〇〇〇学会、△△△学会

3. 指導上の感想

- ①本学生は、「A」であり、研究課題に関しては「B」の視点を習得する必要があるため、より細かい指導が必要である。
- ②〇〇〇学的発想を身につけることに関して、より良い方法がないか、検討中である。
- ③先行研究の検討、調査の実施については、現在までのところ、問題なく経過している。

【二人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

本学生は、在学途中で指導教員の変更があった事例である。引き継いだのは5年目であるが、2年次に提出するはずの博士論文作成計画書も提出されていなかった。

- ・博士論文作成計画書提出
- ・博士論文のための調査の実施
- ・第1回目の準備論文報告会（10月）
- ・学会報告準備（11月予定）
- ・学会誌への論文投稿（11月予定）

今後、追加調査を実施する予定である。

- ・第2回準備論文報告会
- ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

① 研究環境の整備

アンケート調査のための指導、統計ソフトの活用の指導

② 関連学会への入会

3. 指導上の感想

- ①本学生は、もともと〇〇学の学部を卒業し、卒業論文では山口大学〇〇学部の〇〇教員の指導を受けている。その後、聴講生として、△△学部△△教員の授業を聴講していた。
- ②修士論文は、変更後のテーマに基づいたものであったことから、研究テーマや問題設定の処理は初めての経験となるので、学部の調査実習の授業を受けてもらった。
- ③長期履修の5年目を迎えており、最終年度の22年度に論文提出にこぎつけられればよいと思う。
- ④コースの変更はできないかもしれないが、〇〇学の教員の指導のもとに論文作成をめざして欲しい。

【三人目の実践事例報告】

①研究成果の発表について

慎重に構えている分、学会での発表や論文投稿の機会を逸してしまう傾向がある。

②研究指導について

論文執筆のアドバイスをする他に、毎週一回の割合で先行研究論文や文献と一緒に精読する時間をとっている。また、専門領域外の問題についても取り上げ、関心の拡がりを促すようにしている。

③研究調査について

国内外の学会には必ず帯同させて資料集や人脈形成などの機会を提供している。

④研究環境について

指導している学生は海外からの留学生であり、修了後の研究拠点を出身国に置くか、それとも

日本で研究を続けていくかという問題が待ち受けている。

【一人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・〇〇〇学的発想を補う指導法については、速効性のある対策はむしろかきいと思う。自分の場合も同じような悩みを感じている。
- ・名著や名論文と評価されているものを精読させるという指導法を採用してはどうか。
- ・修士課程までは異なる専門分野を学んできた学生を指導する場合の難しさを感じた。

【二人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・全体にテンポが遅れた学生に対して、何とか指導して軌道に乗せてきたことが分った。
- ・〇〇〇側の意識の分析が必要だと思う。
- ・マクロ的視点が不可欠な領域であり、そこを指導するべきだと思う。
- ・〇〇〇という思いが先行していて、研究の客観性が保たれていないと感じた。
- ・分析だけに終始しているので、もう少し学問的考察を深め、論に奥行きを与えるべきである。
- ・データが少ないので、もう少し広げてみたらというアドバイスはよいと思う。
- ・小さな部門（ローカル）の研究に特化しているようなので、どのような学問的課題のもとにこの研究が行われているかの自覚を促す必要がある。
- ・〇〇〇だけのデータでは少なすぎるという批判があったが、まずローカルな領域から始めて、後で広げるということもできるのではないか。

【三人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・学生の状況や問題点についてはよく分ったが、具体的にどのような指導法が試みられ、どのような結果が得られたのか、もう少し聞きたいところであった。
- ・資料の扱いが曖昧で、聞いていてどこまでが事実で、どこまでが自分の考えかわからない。そのこの弁別を指導するべきである。
- ・資料の読み込みに対する指導が大変であることを認識した。
- ・客観性・独自性の欠如が感じられるので、そこを指導するべきである。
- ・〇〇〇学研究であれば、その研究領域に応じた分析のスタイルを、まずは身につけさせるべきである。
- ・発想がやや硬直化していると感じたが、学問的考察に比重を置いたものとなっていて、一定の評価はできる。
- ・概念的なものが先行している。資料の分析から論を構築していくような方法をとるべきだと思う。
- ・理論的に十分詰めておらず、文献研究と自分の考えがうまく結びついていない。
- ・基本的なフレームワークはある程度整っている。

3. 第3回東アジア研究科FD研修会

第3回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第3回東アジア研究科FD研修会～社会システム分析講座・研究指導法の検討～」

日時：平成21年10月23日（金）東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：教育学部47番教室

参加者：名島潤慈、福田隆眞、西村正登、葛崎偉、藤原マリ子、石井由理、有元光彦、森下徹（以上8名）

(1) 研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ①既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

(2) 提起された問題とその解決法について

研修会では5名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。

【一人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇〇」である。
 - ・学会報告、または学会誌への投稿
- 8月…〇〇〇学会
- ①研究論文「〇〇〇」を公表した。
- 2年次
- ・学会報告、または学会誌への投稿
- 8月…〇〇〇学会
- ①研究発表「〇〇〇」を行った。
 - ②研究発表「〇〇〇」を行った。
- ・学会誌への論文投稿（9月、3月）
- ①研究論文「〇〇〇」を公表した。
 - ②研究論文「〇〇〇」を公表した。
- 3年次
- ・学会報告、または学会誌への投稿
- 8月…〇〇〇学会
- ①研究発表「〇〇〇」を行った。
 - ②研究発表「〇〇〇」を行った。
- 12月…〇〇〇学会
- ③研究論文「〇〇〇」を投稿準備中。
 - ④研究論文「〇〇〇」を投稿準備中。
- ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

①研究環境の整備

- ・ネットワークを利用した指導環境の整備をすることが重要。

②東アジアプロジェクト研究への参加：なし

③関連学会への入会：〇〇〇学会、△△△学会

3. 指導上の感想

①本学生は、「A」であり、対面指導の回数を頻繁に設けることが難しいため、定期的にネットワークを利用した指導が必要である。

②今後は、いかに研究を深化し、成果をまとめ、論文として投稿するか、本人との間で綿密な研究計画を練る必要がある。

【二人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

1年次 ・研究課題は「〇〇〇」である。

- ・研究を遂行するために、従来の〇〇〇研究における「△△△」の位置づけと意義について指導する。

2年次 ・研究課題に則した調査研究（9月）

- ・第1回目の準備論文報告会（10月）
- ・学会報告ならびに学会誌への投稿予定あり。

3年次 ・追加調査を実施する。

- ・第2回準備論文報告会
- ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

①研究環境の整備

- ・研究に必要な文献を用意する。
- ・調査のための場を用意する。

②東アジアプロジェクト研究への参加：なし

③関連学会への入会：〇〇〇学会、△△△学会

3. 指導上の感想

①本学生は、直感的思考に頼る傾向があるため、論理的思考面の指導に比重を置いている。

②「△△△」に関して、また、これまでに得られたデータの整理法に関してよりよい方法がないか、検討中である。

③従来の「〇〇〇」研究における「△△△」の位置づけと意義については、現在までのところ、順調に吟味が進んでいる。

【三人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

1年次 ・研究課題：「〇〇〇」

- ・学会報告：〇〇〇学会（8月）
- ・学会誌への論文投稿：「〇〇〇」（3月）

2年次 ・研究課題：「△△△」

- ・第1回目の準備論文報告会（10月）

- 3年次 ・第2回準備論文報告会（5月予定）
・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

- ①研究環境の整備：関連文献の充実
- ②東アジアプロジェクト研究への参加：RAとして参加
- ③関連学会、研究会へ参加している。

3. 指導上の感想

- ①本学生は、〇〇〇に関しては全く問題がないが、外部からの刺激が不足している。
- ②研究内容の新規性・独創性をどう強調するかについて検討中である。

【四人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次 ・研究課題は「〇〇〇」である。順調に始まった。
・研究を遂行するために、資料の確認、先行研究の調査を指導する。
・9月に全国規模の学会誌へ論文を投稿するべく、夏休みを利用して集中的に指導を行った。
・10月…「〇〇〇」に投稿のため、集中的に論文指導。
- 2年次 ・テーマに基づいて継続的に研究。
・全国規模の学会誌に論文を投稿するため、集中的に論文指導。
・学会誌への論文投稿（9月）
・第1回目の準備論文報告会（10月）
- 3年次 ・追加調査を実施する。
・第2回準備論文報告会
・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

- ①研究環境の整備
・定期的な論文指導によって学位論文を俯瞰する。
- ②東アジアプロジェクト研究への参加：あり

3. 指導上の感想

- ①本学生は、「A」であり、論文作成も早い。
- ②文章面に対しての指導は常に行うようにしている。

【五人目の実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次 ・研究課題は「〇〇〇」である。
・学会誌への投稿論文：「〇〇〇」を執筆し、掲載された。
- 2年次 ・第1回目の準備論文報告会（10月）：「△△△」を発表する予定。

2. 指導上の留意点と感想

- ①本学生は、「A」であり、「B」が不足しているため、論文執筆の際に細かい指導が必要である。
- ②現在、「〇〇〇」に論文を投稿する予定であり、査読付き論文を作成することに精力を傾けてい

る。

③関連学会へ入会していないので、現在学会へ入会の手続きをしている。

【一人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・指導教員の変更により、新たに論文指導を行っているので、時間的に大変と推察する。
- ・論文の章立を入れて、もっと博士論文に焦点を当てるべきかと思う。
- ・研究の焦点がもう一つはっきりしない。強調点を明確に。
- ・大変ホットな研究テーマなので、もう少し研究の独自性がでてくるとよい。
- ・テーマを絞らせるのが難しそうである。本人の努力が求められる。
- ・途中からの指導、現職教員、遠方在住と、論文の内容指導以前にクリアすべき問題が多く、大変だと思いました。
- ・全体の構成がわかりづらかった（個々の分析それぞれの連関）。

【二人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・新しい分野のテーマで指導をされている。
- ・検証方法についてもっと力を入れたらどうかと思う。
- ・研究をやりはじめたばかりのような感じで、まだまだ一面的。
- ・地道にデータを集めていくことが大切である。
- ・アンケート調査を研究の意義と結びつける分析にかなり難渋しそうで、その点のご指導が大変だと思われる。
- ・大きな課題に挑戦する学生に対する精神的サポートの大切さがわかりました。
- ・“〇〇〇”という研究課題に、△△△でおこなった調査結果がどう関係するのか、もう少し説明がほしかった。

【三人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・論文全体を見通して指導している。
- ・範囲を定めて論議したほうがよいかもかもしれない。
- ・論理の進め方があまり納得できない。
- ・テーマがはっきりしており、専門性も高い点が評価できる。さらに緻密な学術論文の作成が期待される。
- ・学生の進行に従って指導教員の方から新しい課題に取り組みさせる、というリードの仕方が参考になりました。研究仲間作りの重要性についても参考にしたいと思います。
- ・問題点の明確化が必要である。
- ・研究は順調に進んでいると思った。

【四人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・「〇〇〇」の影響に関する検証をどうすればよいか、今後の課題のように思う。
- ・論理の進め方が一面的な感じがする。
- ・よくまとまっており、研究も進んでいる。
- ・評論にならずに独自性を打ち出した学術論文になることを心がけることが、課題といえば課題である。
- ・投稿論文指導を通して長い研究期間に刺激を与えることができるのだということを知りました。
- ・先行研究がたくさんあるように思われるが、何がオリジナルな点であるのか。先行研究に関して気になる。
- ・〇〇〇の考察について、やや静態的な分析との印象をうけた。
- ・研究史との連関がどうなっているのかが知りたい。

【五人目の実践事例報告に対するコメント】

- ・テーマの変更に対して、どのような指導で臨んでいるのかが知りたい。
- ・日本語の指導も時間を要しているだろうと感じた。
- ・〇〇〇における△△△の研究手法をいかに取り入れるかについて検討した方がよいかもしれない。
- ・「〇〇〇」という言葉の意味があまりはっきりしない。「△△△」という言葉の意味もあまりはっきりしない。使用する言葉の定義を明確に。
- ・大きなテーマなのでテーマを絞ることが必要だが、その点の指導について知りたい。
- ・抽象的な概念の定義の難しさは認識しているが、外国語でそれを行うことはさらに難しいことだと感じた。
- ・日本語能力（論文執筆上の）をどのように高めていくのか、その方法を聞きたい。

4. 参考資料

(1) 第1回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成21年度 第1回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会動態講座

お名前 _____

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (指導教員名)

コメント

②報告者名 _____ (指導教員名)

コメント

(2) 第2回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成21年度 第2回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

比較文化講座

お名前 _____

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

②報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

③報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

(3) 第3回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成21年度 第3回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会システム分析講座

お名前 _____

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

②報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

③報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

④報告者名 _____ (主指導教員名)

コメント

第3節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
東アジア 研究科	第1～3回東アジア研究 科FD研修会	書籍及び 消耗品	120	博士課程の学生を研究指導する うえでのプログラムとメソ ッドについて知見を得た。
計			120	

* * * * *

平成21年度 山口大学大学院東アジア研究科FD委員会

森野 正弘

朝水 宗彦

藤原 マリ子

第18章 技術経営研究科のFD活動

はじめに

技術経営研究科ではFD活動として以下に示す活動に継続的に取り組んでいる。

- (1) 授業記録によるセルフレビュー
- (2) 全学FD研修会
- (3) 教育改善を目的とした評価活動
- (4) その他のFD活動

以下、平成21年度におけるFD活動を報告する。

第1節 セルフレビュー

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。そして、宇部・北九州・広島の3教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、北九州教室ならびに広島教室の3カ所のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。そのため、授業が開講される週末は全教員が授業を担当しているため、公開授業等によるピアレビューを行うことが非常に難しい。そこで、公開授業に代わって、授業を録画した動画映像を自ら閲覧して振り返りを行うセルフレビューを行った。以下に、セルフレビューにおけるチェック項目を挙げる。

また、授業の録画を受講者が閲覧できるようにもアクセス権を設定することにより、授業の復習など自宅学習の効率化に寄与できた。

◆ 優れていると感じた点についてメモを作らしましょう。

【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 大学院生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 大学院生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生の理解する（呑み込む）ペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド1枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。

- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習による討議がバランス良く取り入れられていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 個々に授業の工夫を取り入れていますか。
(事例 授業の最後の 10 分間を利用して、「その授業における振り返り」の時間を設定する。)
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行と、グループワークによる討議が結びついていますか。
- ・ 学生の発言は適度に行われていますか。
- ・ 特定の学生の回数が多いなどの偏りはありませんか。

- ◆ 改善を要すると感じた点についてメモを作りましょう。

【事例】

- ・ 授業時間内で説明時間が足りない。
(対策例 eラーニングなどを利用して一部を事前学習に割り当てるなどの対策が有効です。)
- ・ テキストだけのパワーポイントスライド
(対策例 写真などを活用する)
- ・ 教材資料が多い
(対策例 授業における講義内容に合わせて、資料を調整してください。)

第2節 全学FD研修会

本研究科の教職員が参加した平成 21 年度の山口 FD 研修会の一覧を示す。

研修会名	開催日時	会場
「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」	平成 21 年 8 月 10 日(月) 13:30~16:00	(吉田地区)事務局棟 2 号館 4 階会議室
DocuWorks の使い方	平成 21 年 9 月 11 日(金)	メディア基盤センター2 階 情報処理演習室2
多人数授業における学生参画学習の工夫ー授業手法と評価ー	平成 21 年 8 月 31 日(月)	共通教育棟2階会議室
学習意欲を高める問題解決型の授業展開ーその方法と展開ー	平成 22 年 3 月 19 日(金)	工学部D23教室
MOT 教育国際ワークショップ(※)	平成 22 年 3 月 11 日(木)	全日空ホテル宇部 国際会議場

(※) MOT 教育国際ワークショップの開催は技術経営研究科の独自の FD 活動として位置づけた取り組みであり、全教員が参加した。

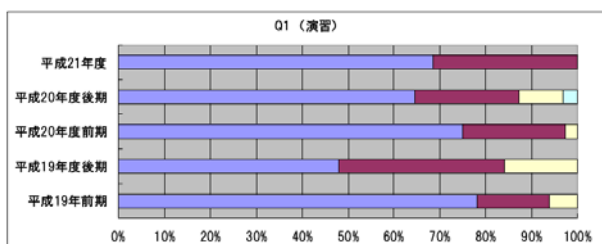
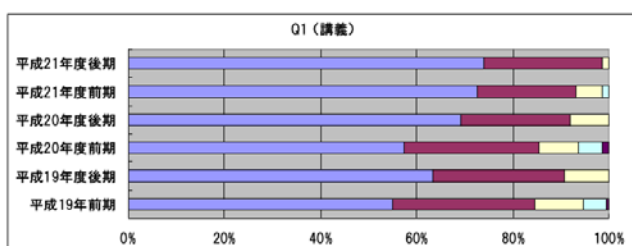
第3節 教育改善を目的とした評価活動

1. 学生授業評価

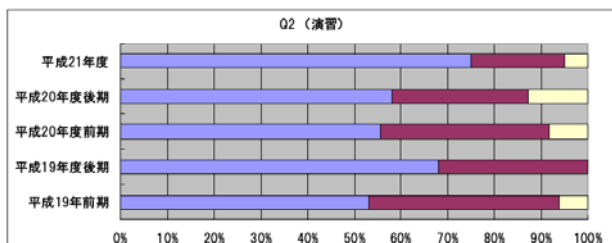
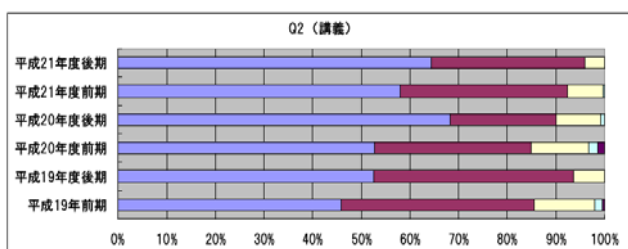
[学習指導法に対する学生授業評価]

学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「そう思う」から「どちらとも言えない」までを含めた肯定的な意見が、6項目とも80～90%を締めている。同時に、年度ごとに指標が良くなっていることが見出せる。

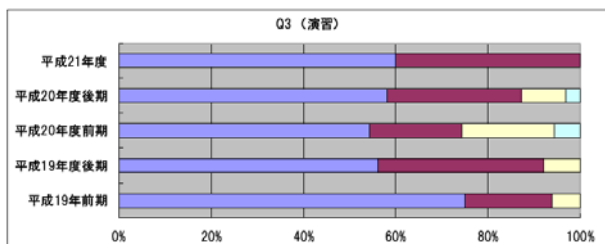
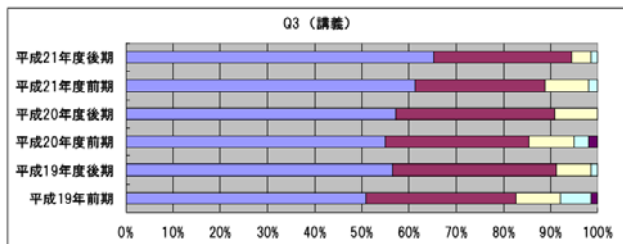
質問 (Q1) : 教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？



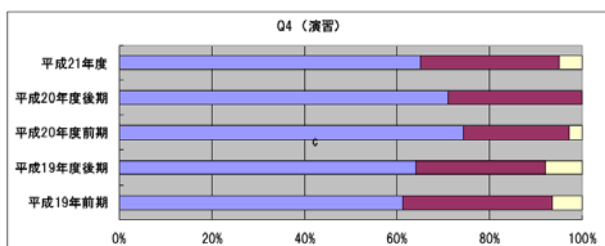
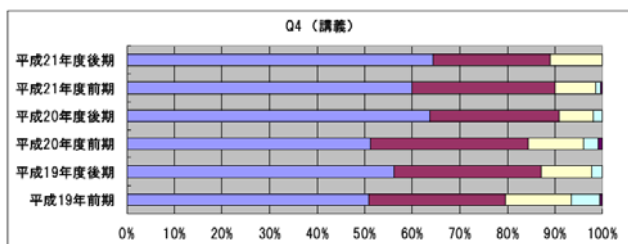
質問 (Q2) : 理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？



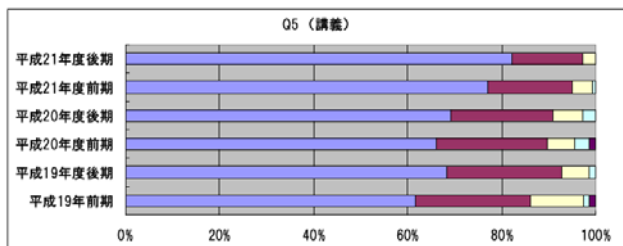
質問（Q3）：教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？

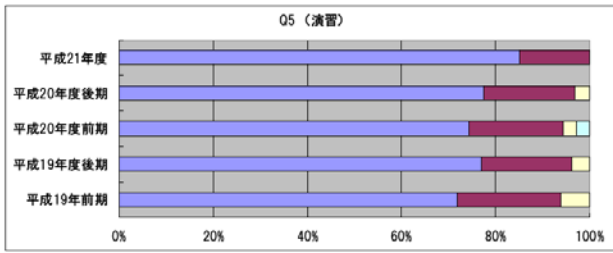


質問（Q4）：練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？

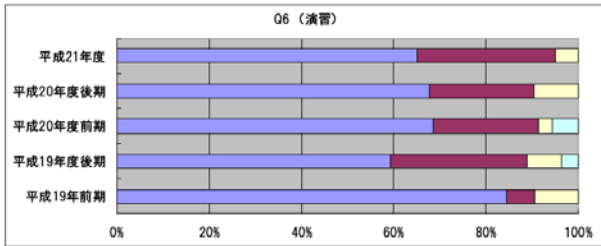
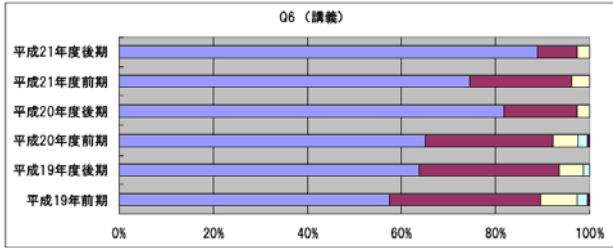


質問（Q5）：学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？





質問 (Q6) : 担当教員の熱意を感じましたか?

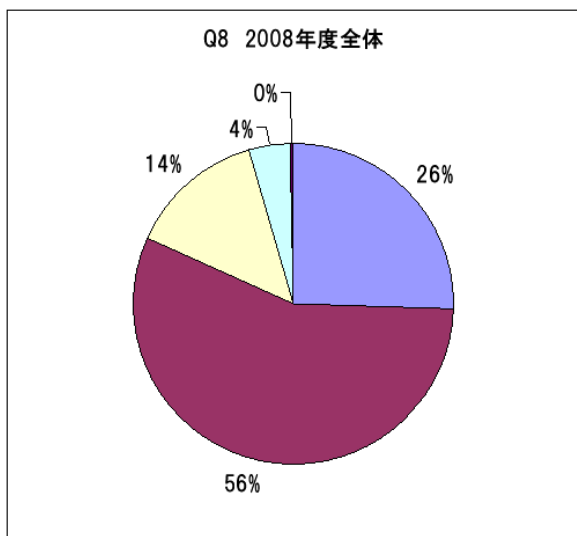


回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

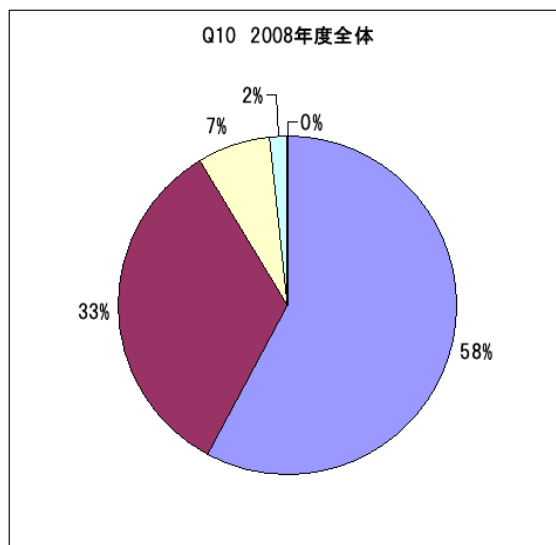
[授業の成果に対する学生授業評価]

授業の成果に対する 5 段階による選択式の学生による授業評価の結果では、「そう思う」から「ややそう思う」の肯定的な意見の占める割合は、質問（Q 8）学習目標の達成については 96%、質問（Q 9）授業の理解については 98%、質問（Q10）授業に対する満足度は 98%であり、これら 3 項目とも 90%台の高い評価であった。

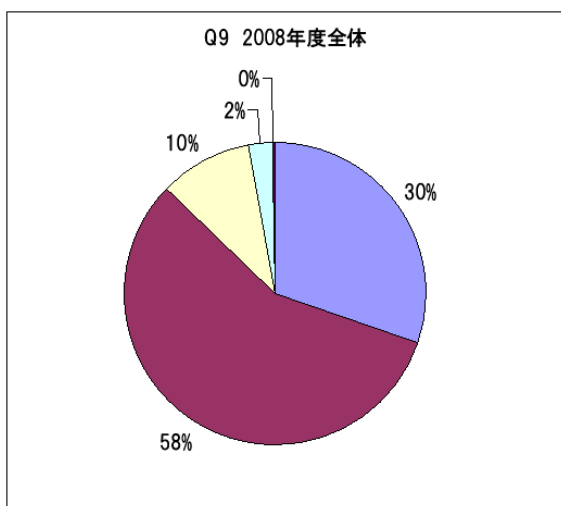
質問（Q 8）：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？



質問（Q10）：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？



質問（Q 9）：あなたは、授業の内容を理解できましたか？



回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

2. 教員授業自己評価

教員による授業の自己評価では、(1) から (9) までの 9 項目（話し方の工夫、考え方の説明の工夫、教材と補助機器の工夫、授業外学習、質問の機会、授業に対する熱意、学習目標の達成、学習の理解および授業満足度）のすべてについて 4 以上（平均 4.4）のスコアとなり、高い評価であった。また、授業外学習については、1 科目 1 週間当たりの平均時間数が 1.5 時間であった。

項目	平均
(1)聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか?	4.3
(2)理論や考え方, 専門用語などをわかりやすく説明しましたか?	4.5
(3)テキスト・プリント等の教材、黒板や OHP、ビデオ、プロジェクターなどの授業の理解を促す工夫をしましたか?	4.5
(4)練習問題や演習、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫をしましたか?	4.5
(5)学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか?	4.5
(6)熱意を持って授業を行いましたか?	4.3
(7)学生は、シラバス(授業案内)に記載された学習目標を達成したと思いますか?	4.5
(8)学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか?	4.2
(9)授業の内容に学生は満足していると思いますか?	4.5
(10)授業外学習について (学習時間)(※)	3.0

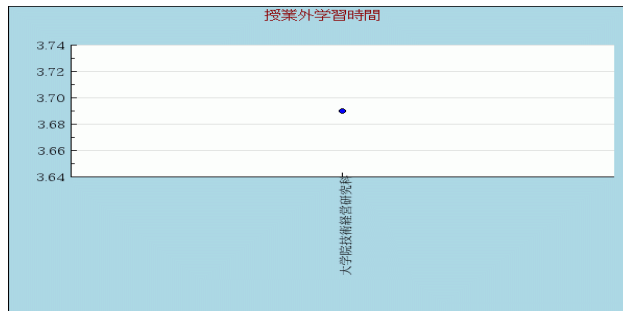
1) そうは思わない, 2) 余りそうは思わない, 3) どちらとも言えない, 4) ややそう思う, 5) そう思う

(※) 期待した授業外の学習時間 (授業 1 回あたり) :

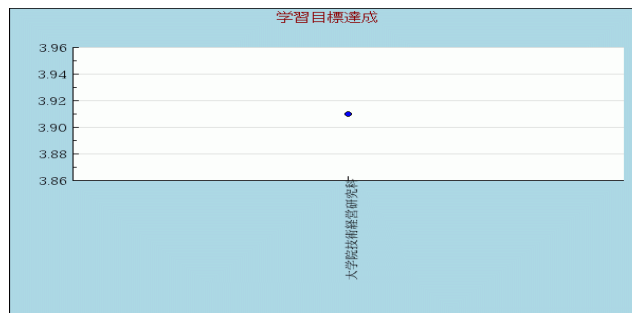
1 : 0.5 時間未満, 2 : 0.5~1 時間, 3 : 1~1.5 時間, 4 : 1.5~2 時間, 5 : 2 時間以上

学生_授業外学習時間等集計データ

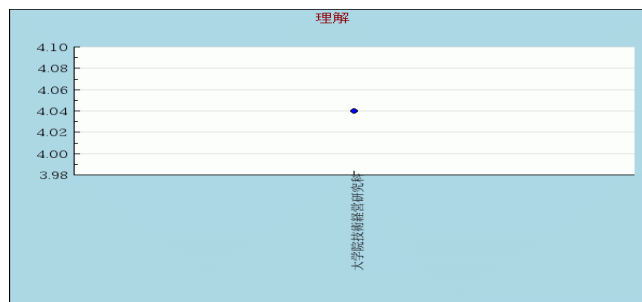
学生_授業外学習時間 3.69



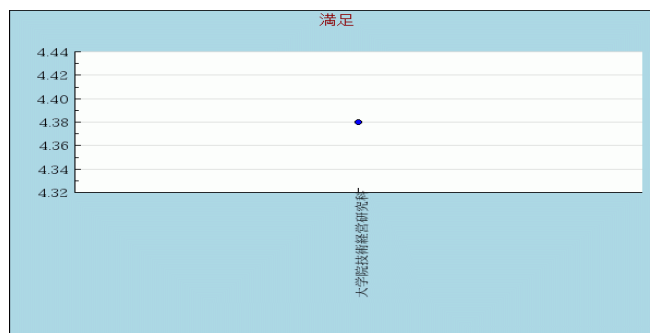
学生_学習目標達成 3.91



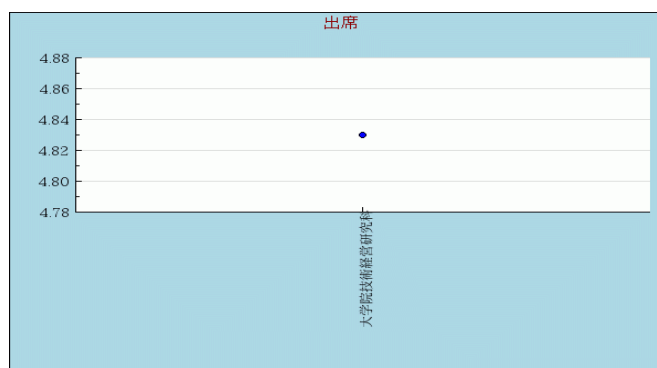
学生_理解 4.04



学生_満足 4.38



学生_出席 4.83



第4節 その他のFD活動

1. MOT シンポジウム 2009 の開催（添付資料1）

MOT シンポジウム 2009 「MOT 教育のエッセンスを探る」
—文部科学省「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム事業—

主催：技術経営系専門職大学院協議会（MOT 協議会）

後援：経済産業省

日時：2009年11月6日（金） 14：00～17：30

場所：品川プリンスホテル メインタワー宴会場 26階 日光

定員：150名

入場：無料

開催趣旨

本シンポジウムは、MOT 専門職大学院で学んだ人材に企業が期待する役割、そのための基盤として身につけておくべき知識・スキルとはどのようなものかを考えようという趣旨で開催します。これは文部科学省「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」に採択された事業で、山口大学が中心となって技術経営系専門職大学院を有する全国の10大学で構成する「技術経営系専門職大学院協議会」（MOT 協議会）が取り組んでいる MOT 教育コア・カリキュラム開発の一環として開催されるものです。

株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役社長の小林喜光氏をお招きし、MOT 教育を巡る世界の情勢を踏まえた MOT 教育のエッセンスについて産官学の立場から議論いたします。

プログラム

- 13：30～ 受付
- 14：00～14：10 開会挨拶 上西 研：技術経営系専門職大学院協議会長
- 14：10～15：00 基調講演「MOT への期待」（仮題）
小林喜光氏：三菱化学株式会社代表取締役社長
- 15：00～15：20 休憩
- 15：20～15：40 「専門職大学院における教育の質保証」

浅野敦行：文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室長
コア・カリキュラムを始めとした、専門職大学院における教育の質保証に関する状況について説明する。

15：40～16：00 「産学連携と MOT」

谷 明人：経済産業省産業技術環境局大学連携推進課課長
我が国の産業競争力強化に向けての MOT 教育への期待について産学連携の視点から述べる。

16：00～16：30 「MOT 教育コア・カリキュラムの確立を目指して」

久保元伸：MOT 教育コア・カリキュラム開発委員会委員長
(山口大学大学院技術経営研究科教授)

MOT 協議会で議論してきた MOT 教育コア・カリキュラム (案) について説明する。

16：30～17：20 ディスカッション

モデレータ 向山尚志：山口大学大学院技術経営研究科教授

17：20～17：30 閉会挨拶

2. MOT 教育国際ワークショップの開催 (添付資料 2)

我が国において技術経営の専門職大学院を運営する 10 大学で構成する「技術経営系専門職大学院協議会 (MOT 協議会)」では、2008 年度以来、文部科学省の支援を受けて技術経営 (MOT) 教育において、共通に習得すべき学習内容を検討してきて、このほど「MOT 教育コア・カリキュラム」として取りまとめました。

今回アジア地域を中心とした海外諸国と連携し、技術者・研究者を中心とする社会人のための大学院教育を行っている諸大学の参加を得てこの成果について情報・意見交換を行い、相互の理解と協力関係を深めるためワークショップを開催します。

| 日時：2010 年 3 月 11 日 (木) 14:00～17:30 (懇親会:18:00～)

| 場所：宇部全日空ホテル

| 山口県宇部市相生町 8-1

| 主催：技術経営系専門職大学院協議会 (MOT 協議会)

| 参加費：無料 (懇親会は有料、5,000 円)

| 対象者：技術経営を中心とする社会人のための専門職大学院教育に関心をお持ちの方

| 参加予定大学：

| 1.(中国) Wuhan University of Technology, PRC

| 2.(韓国) University of Seoul

| 3.(タイ) Asian Institute of Technology (AIT)

| 4.(ベトナム) Polytechnic University of Ho Chi Minh City

| 5.(日本) 山口大学大学院技術経営研究科

■プログラム

| 1. 開会挨拶:

| 上西研：MOT 協議会会長、文部科学省、経済産業省

| 2. 我が国における社会人教育の現状と課題 (仮題)

| 浅野敦行氏：文部科学省高等教育局専門教育課 専門職大学院室長

| 3. 我が国の専門職大学院における MOT 教育コアカリキュラムについて

| 向山尚志：MOT 協議会幹事・山口大学大学院技術経営研究科教授

| 4. アジア諸国における技術経営を中心とした社会人教育の状況

| 各国の参加大学からの報告
| 5. 意見交換

3. MOT教育におけるコア・カリキュラムの作成

平成 20, 21 年度文部科学省

「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」事業
MOT 教育コア・カリキュラム開発

本事業は、文部科学省の「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」の 1 つとして採択され、平成 20 年度から 21 年度において技術経営系専門職大学院協議会 (MOT 協議会) を構成する全国の 10 大学で MOT 教育のコアとなる内容を定めることを目的としたものであり、MOT 協議会・会長校である山口大学大学院擬宇術経営研究科が中心となって取りまとめを行った。

作成したコア・カリキュラムの作成を添付資料 3 として添付する。

MOTシンポジウム2009

「MOT教育のエッセンスを探る」

—文部科学省専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム事業—

本シンポジウムは、MOT専門職大学院で学んだ人材に企業が期待する役割、そのための基盤として身につけておくべき知識・スキルとはどのようなものかを考えようという趣旨で開催します。これは文部科学省「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」に採択された事業で、山口大学が中心となって技術経営系専門職大学院を有する全国の10大学で構成する「技術経営系専門職大学院協議会」(MOT協議会)が取り組んでいるMOT教育コア・カリキュラム開発の一環として開催されるものです。

株式会社三菱ケミカルホールディングス 取締役社長の 小林喜光氏 をお招きし、MOT教育を巡る世界の情勢を踏まえたMOT教育のエッセンスについて産官学の立場から議論いたします。

主 催：技術経営系専門職大学院協議会(MOT協議会)

後 援：経済産業省

日 時：2009年11月6日(金) 14:00～17:30

場 所：品川プリンスホテル メインタワー宴会場26階 日光
(メインタワー2階 宴会専用エレベーターをご利用下さい)

● 事前申込制 / お問い合わせ 山口大学大学院技術経営研究科

基調講演 「MOTへの期待」(仮題)

小林 喜光氏:株式会社三菱ケミカルホールディングス 取締役社長



MOTシンポジウム2009

「MOT教育のエッセンスを探る」

—文部科学省専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム事業—

■プログラム

- 13:30～ 受付
- 14:00～14:10 開会挨拶 上西 研:技術経営系専門職大学院協議会会長
- 14:10～15:00 基調講演「MOTへの期待」(仮題)
小林 喜光 氏:株式会社三菱ケミカルホールディングス 取締役社長
- 15:00～15:20 休憩
- 15:20～15:40 「専門職大学院における教育の質保証」
浅野 敦行:文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室長
コア・カリキュラムを始めとした、専門職大学院における教育の質保証に関する状況について説明する。
- 15:40～16:00 「産学連携とMOT」
谷 明人:経済産業省産業技術環境局大学連携推進課 課長
我が国の産業競争力強化に向けてのMOT教育への期待について産学連携の視点から述べる。
- 16:00～16:30 「MOT教育コア・カリキュラムの確立を目指して」
久保 元伸:MOT教育コア・カリキュラム開発委員会 委員長
(山口大学大学院技術経営研究科教授)
MOT協議会で議論してきたMOT教育コア・カリキュラム(案)について説明する。
- 16:30～17:20 ディスカッション
モデレータ 向山 尚志:山口大学大学院技術経営研究科教授
- 17:20～17:30 閉会挨拶

■お申し込み方法 <http://core.mot.yamaguchi-u.ac.jp/symposium.html>

10月30日(金)までに下記のホームページからお申し込みください。

<http://mot.yamaguchi-u.ac.jp/>

■お問い合わせ

山口大学大学院技術経営研究科

〒755-8611 宇部市常盤台2丁目16-1

TEL 0836-85-9876 FAX 0836-85-9877 e-mail mot@yamaguchi-u.ac.jp



専門職大学院における質の保証

平成21年11月6日
文部科学省高等教育局
専門職大学院室長
浅野 敦行

1



専門職大学院制度創設の背景

- 各般の分野で国際社会に直面する新たな課題解決と国際的なルール作りや合意形成に参画できる人材の育成が求められている。
- 国際的に職業資格の相互認証が課題になりつつあり、大学院での養成カリキュラム等の質と内容の相互共通性が次なる課題となりつつある。
- ボローニャプロセス等により域内の高等教育の質保証の枠組み、共通性の創出の動きが急ピッチで進められつつあり、その核となるのが大学院修士課程と位置づけられつつある。

2

分野別設置状況(平成21年度)

分野	15	16	17	18	19	20	21	合計
ビジネス・MOT	6	7	7	8	1	3	—	32(2,166)
会計	1	—	9	4	2	—	1	17(965)
公共政策	1	3	2	1	1	—	—	8(365)
公衆衛生	2	—	—	—	1	—	—	3(80)
知的財産	—	—	2	—	—	—	—	2(110)
臨床心理	—	—	1	—	3	—	1	5(115)
法科大学院	—	68	6	—	—	—	—	74(5,765)
教職大学院	—	—	—	—	—	19	5	24(826)
その他	—	5	2	5	1	3	1	17(785)
合計	10	83	29	18	9	25	8	182(11,177)

※括弧書きは入学定員³

専門職大学院の主な特徴

	修士課程	専門職学位課程 (専門職大学院) (平成15年度～)	法科大学院 (平成16年度～)	教職大学院 (平成20年度～)
修業年限	2年	2年	3年	2年
修了要件	30単位以上 <u>修士論文の作成</u> (<u>研究指導</u>)	30単位以上	93単位以上	45単位以上 (うち10単位以上は学校等での実習)
実務家教員	—	3割以上	2割以上	4割以上
具体的な授業方法	—	①事例研究、現地調査、 双方向・多方向に行われる 討論・質疑応答	①同左 ②少人数教育を基本 (法律基本科目は50人が標準)	①同左 ②学校実習及び共通科目を必修
学位	修士(〇〇)	〇〇修士(専門職)	法務博士(専門職)	教職修士(専門職)

専門職大学院の質保証について

重要性

- ・我が国が成長力を高め、国際競争力を維持・向上していくためには、**競争力の基盤となる優れた人材**や社会において**指導的役割を果たす人材を育成**することが必要
- ・このため、専門職大学院では、**当該分野の社会ニーズを踏まえた到達目標を設定**し、それを踏まえた**厳格な成績評価・修了認定**を行うとともに、認証評価では、その取組が適切に行われているかなどの「**教育の質**」を評価することにより、人材育成機能の高度化を図ることが必要

現状・課題

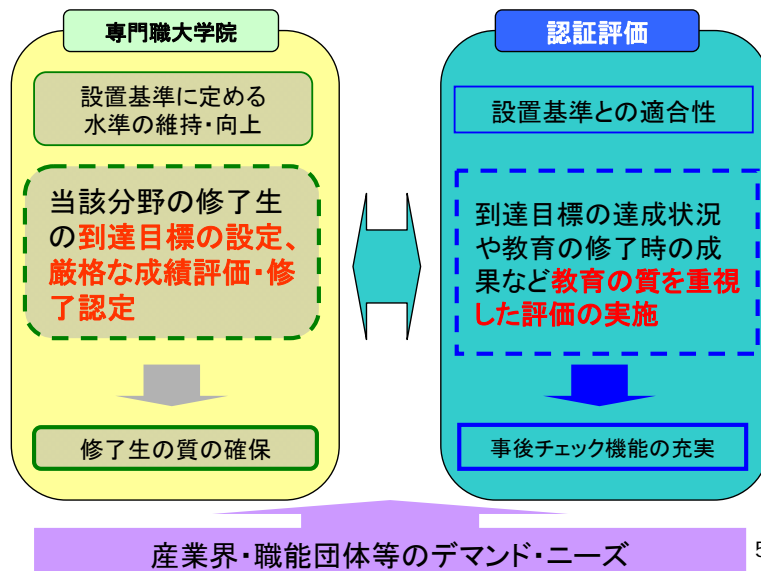
(専門職大学院)

当該分野の専門職大学院の学生が修了時まで
に到達すべき到達目標を設定し、**修了生の一定以上の質を確保**することが必要

(認証評価)

認証評価が設置基準等との適合性などを中心に行われている傾向があることから、当該分野の**教育の質を一層高めるための質的評価の充実**が必要

教育の質の保証システムの構築



5

認証評価制度の概要

【目的】

- ・評価結果が公表されることにより、**大学等が社会的評価を受ける**
- ・評価結果を踏まえて**大学等が自ら改善を図る**

【制度の概要】

① 大学等の総合的な状況の評価

大学等の教育研究、組織運営及び施設設備の総合的な状況について評価(7年以内ごと)

② 専門職大学院の評価

専門職大学院の教育課程、教員組織その他教育研究活動の状況について評価(5年以内ごと)

- ・各評価機関が定める評価基準に従って実施
- ・大学等は複数の認証評価機関の中から評価を受ける機関を選択

6

専門職大学院の評価団体

分野	評価機関	認証日
法科大学院	財団法人 日弁連法務研究財団	平成16年 8月31日
	独立行政法人 大学評価・学位授与機構	平成17年 1月14日
	財団法人 大学基準協会	平成19年 2月16日
経営 (経営管理、技術経営、ファイナンス、経営情報)	特定非営利活動法人 ABEST21 (THE ALLIANCE ON BUSINESS EDUCATION AND SCHOLARSHIP FOR TOMORROW, a 21stcentury organization)	平成19年10月12日
会計	特定非営利活動法人 国際会計教育協会	平成19年10月12日
経営 (経営管理、会計、技術経営、ファイナンス)	財団法人 大学基準協会	平成20年 4月 8日
助産	特定非営利活動法人 日本助産評価機構	平成20年 4月 8日
臨床心理	財団法人 日本臨床心理士資格認定協会	平成21年 9月 4日

7

共通的な到達目標とは。

- 高度専門職業人の養成に当たって、当該分野の教育課程において、修了生が共通的に身に付けているべき知識・能力等を到達目標として掲げたガイドライン。
- 授業内容でなく、学生が授業と自学において到達するもの。
- コア・カリキュラムとの違い: 教育方法・評価については規定されない。(科目ではない。)
- すでに、平成13年に医学分野と歯学分野において策定。(全国共用試験(CBT/OSCE)の実施)
- MOT, 法科大学院、会計大学院で来年3月末までに策定。

8



MOT共通の到達目標(コアカリ)の必要性

- MOT修了生の質の保証
- MOTの社会的理解の向上
- 国際的な標準づくりへの先鞭
- 産業界とのパートナーシップの構築
- 職業資格と結びつかない分野ではじめての
試み

International Workshop on MOT Education 2010 in Yamaguchi

MOT Association Japan

Workshop Agenda

14:00-14:10	Greetings Prof. Ken Kaminishi President of MOT Association Japan, Dean, Graduate School of Innovation & Tech. Management, Yamaguchi University	
14:10-14:30	Quality Assurance for MOT Schools Atsuyuki Asano Director for Professional Graduate Schools Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology	YM-01
14:30-15:00	Establishment of Core- Curriculum for MOT Education Prof. Takashi Mukoyama Coordinator of MOT Association Japan, Graduate School of Innovation & Tech. Management, Yamaguchi University	YM-02
15:00	Coffee Break	
15:20-15:40	MOT Courses Outline in Asian Institute of Technology Prof. Barbara Igel, Dean Prof. Do Ba Khang, Program Coordinator IEMBA -Vietnam School of Management, Asian Institute of Technology The Kingdom of Thailand	YM-03
15:40-16:00	MOT Education for working people from Asian Perspectives Prof. Dr. Cao Hao Thi, Prof. Dr. Duong Nhu Hung School of Industrial Management Ho Chi Minh City University of Technology Socialist Republic of Vietnam	YM-04
16:00-16:20	MBA/EMBA Courses in Wuhan University of Technology Prof. Cheng Guoping Deputy Dean, School of Management, Wuhan University of Technology People's Republic of China	YM-05
16:20-16:40	Global MOT Leadership Prof. Sungho Lee, University of Seoul Prof. Jeong Eun "John" Park, Ewha Womans University Republic of Korea	YM-06
16:40	Break	
16:50-17:20	Discussion	
17:20	Closing	
18:00	Dinner Party	15F Comfort

Quality Assurance for MOT Schools

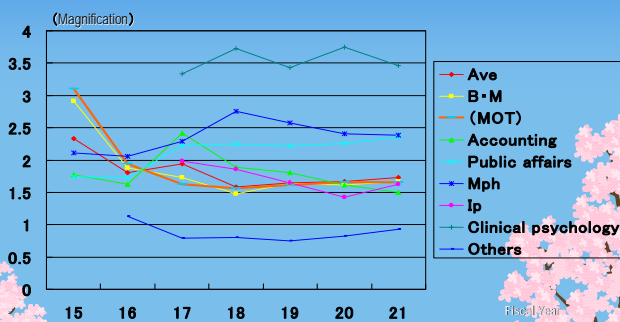
ATSUYUKI ASANO
Director For Professional Graduate Schools
MEXT

Postgraduate Professional Schools(2009)

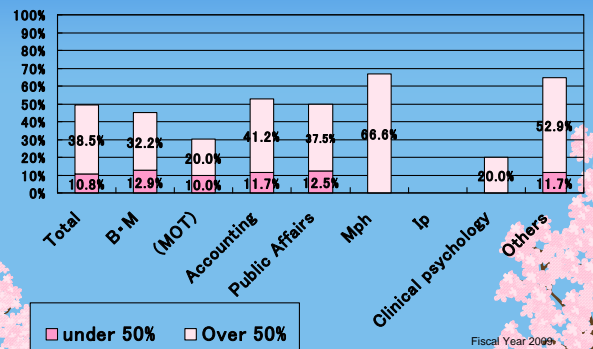
CATEGORY	15	16	17	18	19	20	21	Total
MBA/MOT	6	7	7	8	1	3	—	32(2,166)
(MOT)	2	1	4	2	1	—	—	10(468)
ACCOUNTING	1	—	9	4	2	—	1	17(965)
PUBLIC AFFAIRS	1	3	2	1	1	—	—	8(365)
MPH	2	—	—	—	1	—	—	3(80)
IP	—	—	2	—	—	—	—	2(110)
CLINICAL PSYCHOLOGY	—	—	1	—	3	—	1	5(115)
LAW	—	68	6	—	—	—	—	74(5,765)
EDUCATION	—	—	—	—	—	19	5	24(826)
OTHERS	—	5	2	5	1	3	1	17(785)
TOTAL								182(11, 177)

※() is entrance to school capacity a parenthesis

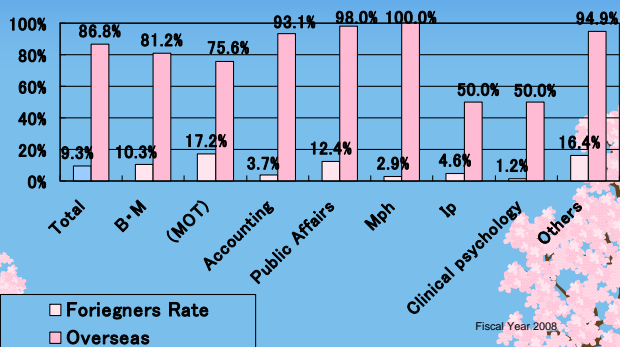
◆Applicant Rate



◆Vacancy

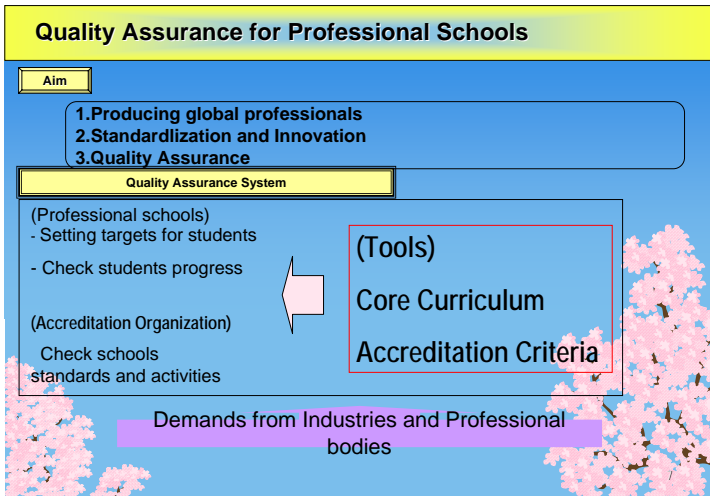


◆Foreigners



Accreditation Organization

field	Certified Evaluation and Accreditation Organization	The certification day
LAW	財団法人 日弁連法務研究財団	平成16年 8月31日
	独立行政法人 大学評価・学位授与機構	平成17年 1月14日
	財団法人 大学基準協会	平成19年 2月16日
MBA	特定非営利活動法人 ABEST21 (THE ALLIANCE ON BUSINESS EDUCATION AND SCHOLARSHIP FOR TOMORROW, a 21st century organization)	平成19年10月12日
ACCOUNTING	特定非営利活動法人 国際会計教育協会	平成19年10月12日
MBA/MOT/ACCOUNTING	財団法人 大学基準協会 (Japan University Accreditation Association)	平成20年 4月 8日
MIDWIFE	特定非営利活動法人 日本助産評価機構	平成20年 4月 8日
CLINICAL PSYCHOLOGY	財団法人 日本臨床心理士資格認定協会	平成21年 9月 4日



- ### Quality Assurance Procedures
- ❖ Core Curriculum 2010(MOT)
 - ❖ Core Curriculum 2010 (Accounting)
 - ❖ Core Curriculum 2010 and Faculty Development with Law schools and Bar Associations (Law)
 - ❖ Forum MBA and Top corporations, International projects by ABEST 21(MBA)
 - ❖ Core Objective Examination Systems 2010(Clinical Psychology)

- ### Core Curriculum
- ❖ Guidelines for Minimum Standards for MOT school students
 - ❖ Achievement Targets for Students thorough class work and self study
 - ❖ Ex; Guidelines for Minimum Standards for Medical school students(2001) →4th year test by **CBT/OSCE**
- Currently in progress: Accounting, Law schools

- ### Anticipated Results of developing Core Curriculum
1. Quality Assurance for MOT Students
 2. Introducing new concepts
 3. Establishment of Effective link with MOT practice
- Producing Excellent Global MOT

- ### Central Council for Education
- ❖ Evaluating graduate schools mechanisms
 - ❖ Debating future policy
 - ❖ --- Deadline End of March 2010
- (Main Agendas)
1. Aims and Functions
 2. Size
 3. Quality Assurance System
- Doctorate programmes
Relationship with National Examination Boards

❖ Thank you for your attention !

MOT 教育・コアカリキュラム

平成 22 年 3 月

MOT 教育コア・カリキュラム開発委員会

目次

目次	1
MOT 教育コア・カリキュラム ～作成の背景および考え方～	4
知識項目	5
総合領域	6
A 基礎知識項目	7
1. 技術経営の基礎	7
「MOT の概念的理解に関連する事項」	7
(1) MOT とは	
(2) MOT の経緯	
(3) MOT の扱う領域	
「技術と社会」	7
(4) 技術者倫理	
(5) 科学・技術と社会	
(6) 技術とリスク	
(7) 技術と標準化	
「企業戦略」	8
(8) 経営理念 (ミッション)	
(9) ドメイン	
(10) 外部環境分析	
(11) 内部環境分析	
(12) 戦略の立案	
「組織・人材、企業倫理」	9
(13) 企業倫理	
(14) 組織マネジメント	
(15) モチベーション	
(16) リーダーシップ	
(17) コンプライアンス	
(18) 企業の社会的責任 (CSR)	
(19) リスク・マネジメント	
「ビジネスエコノミクス」	9
(20) 消費者の行動	
(21) 企業の行動	
(22) 市場のメカニズム	

(23) 統計	
「マーケティング」	10
(24) 市場機会の発見	
(25) セグメンテーションとターゲティング	
(26) ポジショニング	
(27) マーケティング・ミックス	
(28) ブランド	
(29) 顧客満足 (CS)	
(30) 生産財マーケティング	
「会計・財務」	11
(31) 複式簿記	
(32) 財務諸表	
(33) 原価計算	
(34) 直接原価計算と全部原価計算 (管理会計の考え方)	
(35) CVP (Cost/Volume/Profit) 分析と損益分岐点	
(36) 企業価値評価	
(37) 投資採算分析	
(38) 資金調達と資本コスト	
(39) 税務上の利益	
B 中核知識大項目	12
1. イノベーション・マネジメント	12
(1) イノベーションとは	
(2) 企業経営とイノベーション	
(3) イノベーションの機会	
(4) オープン・イノベーション	
(5) アーキテクチャについて	
2. 知的財産マネジメント	14
(1) 知的財産権とは	
(2) 権利化	
(3) 外部連携におけるマネジメント	
(4) 知的財産ポートフォリオ	
(5) 標準化と知的財産権	
(6) 知的財産の価値評価	
3. 技術戦略と研究・開発 (R&D) マネジメント	15
(1) 技術	
(2) 企業戦略、事業戦略との関係	

MOT 教育コア・カリキュラム ～作成の背景および考え方～

技術経営 (Management of Technology 以下、MOT と表記) とは技術を効果的に活用して経営を行うことである。近年においては科学・技術の進歩によりそれが企業・組織の経営や社会に対して広範囲に大きな影響を及ぼすようになってきている。すなわち、新技術に基づく製品開発や生産方法の革新のみならず、例えば情報・通信技術 (IT) の発展は企業活動における付加価値連鎖全体に影響を及ぼしている。このような状況下において企業・組織の創造的経営を推進し社会に寄与するためには、革新的な技術を生み出すための研究・開発に加えて、技術の役割を理解し活用することの重要性が著しく増している。つまり、企業・組織においては技術の最先端に関する追究だけでなく、技術の役割を理解し活用するためのマネジメント力が不可欠となっているのであり、MOT 教育はこのようなマネジメント力の習得を目指して行うものとして位置付けられる。

高度な専門的職業人の養成に特化した大学院である専門職大学院について、MOT 分野における社会的要請の高まりを受けて平成 15 年度を皮切りに 10 大学院が設置され、今日に至っている。

MOT 専門職大学院において目指すのは、技術と経営の複眼的な視点から社会や企業・組織における様々な問題に対して創造的な成果創出を目指して取り組む力を有する人材である。このような人材は企業や組織において、個別の細分化された課題を専門的知識やスキルによって解決することのみが求められるのではなく、国際的視野や社会性の点も含めた全体性 (技術と経営の複眼的視点から全局面を俯瞰する)、先見性、論理性、実効性を有した総合的な施策を企画、立案、実行するとともに、経営的あるいは指導的立場に就いて企業や組織を牽引していくことが期待されるのである。産業の持続的発展や国際競争力の向上のためにはこのような人材の育成が不可欠である。

一方では、MOT は扱う対象の広さに応じて、教育の内容も広範囲に渡っている。現状では上記の専門職大学院以外の教育機関においても、特定の専門分野に特化したものやマネジメントの要素が含まれない従来の範疇で技術を扱う内容のものが MOT 教育の名称のもとで行われるなどの事態もいくつか認められる状況となっている。この状況のまま放置すると MOT 教育に対する産業界をはじめとする社会の期待と実態が乖離し、MOT 教育およびこれを行う専門職大学院の適正な評価の面で混乱が生じる恐れがある。従って、MOT 教育の質向上を図り社会の負託に応えるためには、MOT 専門職大学院において共通に授けられるべき教育内容を整備し、これを社会に発信することが必要と考えられる。

これらを背景として、MOT 専門職大学院として行うべき教育を検討し、「MOT 教育コア・カリキュラム (以下、コア・カリキュラム)」を定めた。コア・カリキュラムは日本における MOT 教育展開の基盤として作成したものであり、各大学が編成するカリキュラムの参考となるよう、MOT 専門職大学院において学ぶ全ての学生が習得すべきと考えられる内容が示されている。このコア・カリキュラムは技術経営系専門職大学院協議会 (MOT 協議会) 加盟の 10 大学の意見を反映させ、産業界からの意見も取り入れて作成されたものであり、今後広く活用されることが望まれる。今後、さらに MOT 教育の質の向上を図り社会の負託に応えていくためには「MOT 専門職大学院修了生の到達度の保証」を目指すことが求められる。これを実現するためには教育内容の整備に止まらず、到達度の基準と客観的な評価法の確立など多くの課題に取り組むことが必要となる。今回作成したコア・カリキュラムは「MOT 専門職大学院修了生の到達度の保証」を目指した今後の取組みの基盤として位置付けられるものである。

コア・カリキュラムは全ての学生が習得すべきと考えられる『知識項目』と習得した知識やスキルを

MOT 教育コア・カリキュラム ～作成の背景および考え方～

MOT 教育コア・カリキュラム ～作成の背景および考え方～

活用して創造的な問題解決に取り組む『総合領域』から成っている。『知識項目』は学生がミニマム・リクワイアメントとして習得すべき項目とその項目について到達すべき状況を示したものである。『総合領域』は取組みの内容およびその成果の質的要件について示されている。

社会的要請を反映した MOT 教育の内容は多様であり、専門職大学院ごとに独自の内容を持ちそれに基づく教育をおこなうことは MOT 教育全体の発展にとって重要である。従って、各専門職大学院で修了までに行われる教育においては、独自に行う部分の方がコア・カリキュラムに記載された内容と比較して多くなることは何ら問題がない。つまり、コア・カリキュラムによって教育の目標を定めることが各専門職大学院の独自性、多様性を阻害するものであってはならない。

MOT 教育に係る内容はその対象範囲が広いことに加えて、質的にも学術としてその地位が確立された体系化されたものから現時点では体系化の途上にあるものまで多様である。今後、社会からの要請、科学・技術の進歩などを勘案しながら継続的に充実させていくことが必要である。コア・カリキュラムの継続的な充実に基づく MOT 教育の質向上のために MOT 専門職大学院においては既往の知見に依拠した教育をおこなうだけでなく、MOT に関連する種々の領域で学術としての体系化を目指した取組みを推進するとともにその成果を教育に反映していくことが使命として求められる。

知識項目

知識項目は「基礎知識項目」と「中核知識大項目」からなる。いずれもさらに詳細な内容の中項目群で構成されている。「基礎知識項目」はそれを構成する内容から「技術経営の基礎」と表示され、技術経営の理解に必要な基礎事項が示されており、MOT 人材の素養に関わる内容である。ここでは MOT における技術に関する項目から会計・財務やマーケティングなど企業や組織の経営に関わる項目まで技術と経営の複合的視点から課題解決に取り組む上で必要となる基礎知識が示されている。「中核知識大項目」は文字通り MOT 専門職教育の中核的内容を構成する要素となっているものである。

MOT 専門職大学院修了生は実社会において技術経営の複合的視点から創造的問題解決に取り組むことが期待されるが、実務において実効性のある問題解決を行うためには、企業や組織において関係する様々な部門や人々と連携して取り組むことが求められ、そうした取組みを円滑に推進していくための共通認識ないしは共通の基盤として、技術と経営に関わる基礎的知識が必要となる。このような観点から、MOT 教育におけるミニマム・リクワイアメントとしての知識項目を提示している。前記したように MOT に係る内容についてはその体系化の状況が多様であることから、知識項目についての記述の仕方でも現状では完全には統一されておらず、項目によってはさらに詳細な内容を具体的に例示することでその内容の把握の一助としているものがある。

現在の MOT 専門職大学院における教育は国家試験等による資格取得を想定したものでないのに、コア・カリキュラムの知識項目の到達度を示すものとして「説明できる」と表示されている項目における「説明」は試験の設問に対する解答と同等の状況である必要は無く、課題解決の手段として知識が活用されることが重要であるとの観点から、説明実施の態様としては実践の場で必要な資料を参照、提示しながら行うなど、柔軟性をもって考える必要がある。

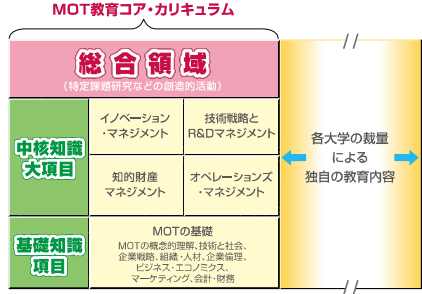
ここで提示した大項目や中項目の名称は教育によって修得すべき内容の表示と理解を容易にするた

めのものであって、大・中項目の名称が開講する科目名などと一致している必要は無く、一つの大・中項目が複数の科目による教育で達成されてもよく、大・中項目の表示の順序は教育を実施すべき順序を示すものではない。実施の形態も知識伝授型の講義に限定される必要は無く、演習、輪読、セミナー、実習など種々の形態が適用されて良い。MOT 専門職大学院に入学する学生はその経歴が多様であり、コア・カリキュラムに示した知識項目によっては既に入学期に習得している学生が存在することも考えられる。コア・カリキュラムの知識項目は前記したように学生が到達すべき状況を表現したものであるから、既に到達していると判断される学生に対しては必修科目のような形式で履修を強いる必要は無く、学生の状況に応じて柔軟に対応すべきである。

総合領域

専門職大学院における MOT 教育は単なる知識の獲得ではなく、実社会において創造的問題解決に取り組む力の習得を目指したものである。創造的問題解決には習得した知識やスキルを複合的に活用することが求められ、学生は教育の一環としてそのような取組みを経験することが重要であり、この内容を総合領域として提示している。これに該当する取組みとして各大学において特定課題研究などの種々の名称で呼ばれるものがある。総合領域の対象となる課題は多様であることからコア・カリキュラムにおいてはその取組みの内容と質的要件で規定され、詳細が示されている。

コア・カリキュラムの構成を下図に示す。



A 基礎知識項目

大項目

1. 技術経営の基礎

技術経営の基礎として知っておくべき内容を「MOTの概念的理解に関連する事項」、「技術と社会」、「企業戦略」、「組織・人材、企業倫理」、「ビジネスエコノミクス」、「マーケティング」「会計・財務」の領域に区分してそれぞれを構成する中項目を示す。

以下の中項目の説明において示した*印の部分はその中項目の教育に際しての留意点を補足したものである。

全体目標

「技術経営」の視点から、技術、企業経営及び業務に必要な理論やその枠組みに関する知識を体系的に理解し、主要事項を説明できる。

「MOTの概念的理解に関連する事項」

中項目

(1) MOTとは

MOTとは何か、その定義と目的、なぜ必要か、技術とは、経営とは、などについて説明できる。

(2) MOTの経緯

MOTの発祥、歴史、世界および日本の現状と動向について説明できる。

(3) MOTの扱う領域

MOTの扱う領域としては企業経営、科学技術政策、大学などにおける研究対象などがあるが、それぞれの領域と対応したMOTの特徴とする内容、共通点について説明できる。

*ここでは例えば、MOTとMBAおよびPSM (Professional Science Master)の違い、「中核知識大項目」や「基礎知識項目」で扱う内容の相互関係、技術経済学や技術計量学などの名称で表される分野とMOTの違いなどを扱うことも可能である。

「技術と社会」

技術経営は技術を基礎とする組織体における経営が対象であり、技術経営の専門職は単なる経済計算には還元されない技術固有の諸問題と経営との関係を洞察し、これを経営に応用する力が必要であり、これに関連する知識を示す。そのような技術固有の問題領域として、技術者倫理、科学技術と社会、技術とリスク、技術と標準化の中項目を「技術と社会」として表示した。

7

FD報告書 添付資料(3)

なお、「技術と社会」においては、説明文中の()内にあげた項目は例示的なものであり、例示された事項のすべてを包含すべきと解釈されてはならない。全体として、中項目の内容に相当する事項がカバーされていればよいのであって、例示は具体像の把握と共有化の一助のために示したものである。

中項目

(4) 技術者倫理

技術の社会及び自然に及ぼす影響・効果と技術者の社会に対する責任について説明できる。

(5) 科学・技術と社会

科学・技術と社会の諸関係について理解し、これをイノベーションに応用する際に必要となる事項(例えば、科学・技術の社会的受容、科学・技術と環境、科学・技術と公共政策、科学・技術と国際関係など)について説明できる。

(6) 技術とリスク

技術に起因するリスクの分析、評価と、これを管理し、イノベーションに応用する際に必要となる事項(例えば、リスク分析、リスク評価、リスク・マネジメント、品質管理など)について説明できる。

(7) 技術と標準化

技術と標準化に関する基礎的事項(例えば、標準化の意義、標準化のステークホルダー、標準化のプロセスなど)について説明できる。

「企業戦略」

中項目

(8) 経営理念(ミッション)

企業の戦略に影響を与える経営理念(ミッション)についてその役割と重要性を理解し、説明できる。

(9) ドメイン

事業領域の選択に関わるドメインの意義を説明できる。

(10) 外部環境分析

企業の外部条件としての機会と脅威を分析するフレームワークを説明できる。

(11) 内部環境分析

企業の内部条件としての強みと弱みを分析するフレームワークを説明できる。

8

(12) 戦略の立案

戦略論のフレームワークを用いた戦略策定について説明できる。

「組織・人材、企業倫理」

中項目

(13) 企業倫理

企業や組織の一員として業務を遂行していく上で前提となる倫理観について説明できる。

(14) 組織マネジメント

組織の効率性と創造性を適切にバランスさせるためのマネジメント手法を説明できる。

(15) モチベーション

組織メンバーが組織目標の実現に向け活動するための、人事制度を含むモチベーションのマネジメントの枠組みを説明できる。

(16) リーダーシップ

組織目標を実現するためのリーダーシップの役割とその効果的な実践方法について説明できる。

(17) コンプライアンス

自社の活動に関連する主要法令及び行動規範について意義を説明し、遵守徹底に向けての個人的・組織的な取り組みを提案できる。

(18) 企業の社会的責任(CSR)

CSRの概念を理解し、事業活動を遂行するに当たっての位置づけと重要性を説明できる。

(19) リスク・マネジメント

自社を取り巻く主要なリスク項目とそのインパクトを列挙し、それらリスク項目を組織的に管理するプロセスについて説明できる。

「ビジネスエコノミクス」

中項目

(20) 消費者の行動

ミクロ経済学の観点から、価格や所得の変化がどう消費需要量に及ぼすかに関する基礎的な事項を説明できる。

9

(21) 企業の行動

ミクロ経済学の観点から、企業が利潤極大化のため、市場の構造に対して、生産活動をどう行うべきかに関する基礎的な事項について説明できる。

(22) 市場のメカニズム

ミクロ経済学の観点から、企業の目標は利潤極大化、家計の目標は効用極大化で、両者の相互作用が、需要、供給、価格となって現れることを説明できる。

(23) 統計

データ分析とデータを用いた仮説検証・推定の統計的な意義を説明できる。

「マーケティング」

マーケティング戦略の立案と実践に必要な主要事項について説明できる。

中項目

(24) 市場機会の発見

顧客のニーズ、企業のシーズ、ビジネスを取り巻く環境変化に着目し、市場機会の探索方法について説明できる。

(25) セグメンテーションとターゲティング

マーケティング・リサーチ方法の過程、市場セグメンテーションの方法、ターゲット市場の選定方法について説明できる。

(26) ポジショニング

自社製品の独自性(競合製品との差別化)と製品ポジションの設定方法について説明できる。

(27) マーケティング・ミックス

製品、価格、流通チャネル、プロモーションのそれぞれの戦略について概要を説明できる。

(28) ブランド

ブランドの重要性と状況に応じたブランド構築について説明できる。

(29) 顧客満足(CS)

顧客満足の特徴と顧客満足を高める方策について説明できる。

(30) 生産財マーケティング

購買行動の特徴等、消費財マーケティングとの相違に留意しながら、生産財市場におけるマーケティングについて説明できる。

10

「会計・財務」

<会計・財務の狙い>

- ・財務諸表の意味と仕組みを理解する
- ・財務分析による他社比較ができる
- ・企業価値評価の方法を理解する
- ・投資採算性の評価方法を理解する

中項目

(31) 複式簿記

企業会計においてあらゆる経済活動を2面的に記録することの意味を理解し、簡単な仕訳ができる。

(32) 財務諸表

損益計算書、貸借対照表、キャッシュフロー計算書の意味と作成方法を理解し、相互の関係を説明できる。

(33) 原価計算

原価計算の基本的な仕組みと役割を説明できる。

(34) 直接原価計算と全部原価計算（管理会計の考え方）

原価を変動費と固定費に分け、固定費を在庫に配賦しなければ原価が異なることを理解している。

(35) CVP (Cost/Volume/Profit) 分析と損益分岐点

変動費と固定費の内訳から、損益分岐点売上高を計算する方法を説明できる。

(36) 企業価値評価

企業価値の概念と主要な評価方法を説明できる。

(37) 投資採算分析

投資プロジェクトの採算性について各種の評価方法を説明できる。

(38) 資金調達と資本コスト

資本調達源泉の基本が理解できるとともに、負債コストと株主資本コストによる資本コストの概念を理解し、適切な資金調達方法を説明できる。

(39) 税務上の利益

企業経営において課せられる税金の種類と、会計上の利益と課税所得の違いを説明できる。

11

FD報告書 添付資料(3)

B 中核知識大項目

大項目

1. イノベーション・マネジメント

全体目標

イノベーションという概念を整理し、イノベーションを高い確率で実現するための理論的基盤に関する知識を修得する。すなわち、イノベーションの実現を考える際に必要となる基本概念を習得する。

<教育に際しての留意点>

より実際の手法や考え方は業種や時代、地域、政治などの外部環境や企業規模、企業文化などの内部環境に依存するために一般化、共通化することは容易ではない。それゆえ、実際の手法や考え方は受講生のニーズ等に基づいて習得を図ることが望ましい。

中項目

(1) イノベーションとは

シュムペーターの「新結合」を含め「イノベーション」ということばが表す概念について説明ができる。

*説明は以下の理解に基づいてなされることが望ましい。すなわち「イノベーション」は経済的価値の創出を伴う概念であり、技術の変革は必須要件ではないこと、事後的な概念であり事前に実現を確実に制御できるものではなく、実現の確率を高めることがマネジメントの要点であるとして扱うべきものであること。

(2) 企業経営とイノベーション

現在、日本企業になぜイノベーションによる発展が必要とされるのか、パラダイム・シフトの必要性（なぜ、改良、改善など従来の延長線上の予測が及ぶ範囲でのインクリメンタルな進化では不十分なのか）などについて議論することができる。

*イノベーションの必要性について、現代社会において利益の源泉は差異性であること、差異性に持続性は無いこと、差異性の創出はイノベーションによるものであることなどの理解に基づいて議論できることが望ましい。

(3) イノベーションの機会

上記1、2の内容と関連の深いイノベーションの事例を示すことができる。

*例えば、シュムペーターが挙げた鉄道、あるいはドラッカーの7つの機会+1などを用いて説明する場合には、ICTの進歩がもたらす影響を考慮するのが望ましい。

(4) オープン・イノベーション

ビジネス・モデルの意味、オープン・イノベーションの概念について説明できる。

12

*利益を生み出す差異性に対するオープン・イノベーションの意味について学ぶことにより、研究・開発、製品企画、マーケティング、などへの発展的理解に繋げることを狙いとする。

(5) アーキテクチャについて

製品、工程のアーキテクチャの概念、イノベーションにおけるアーキテクチャの意義について説明できる。

13

大項目

2. 知的財産マネジメント

全体目標

知的財産に関する基礎的な知識を有し、事業推進に必要な特許等の取得および活用を知的財産部門と連携して的確に行えるマネジメント能力を獲得する。

中項目

(1) 知的財産とは

知的財産全般について、日本国および諸外国の制度の概略を理解している。

(2) 権利化

研究、開発の成果を的確に知的財産権として確保する上で重要な実務上の手続きや法律について理解している。

(3) 外部連携におけるマネジメント

社内外の知的財産権の譲渡や実施許諾、共同研究から生じる知的財産権の配分など、外部との連携における知的財産権のマネジメントを的確に行う上で重要な実務上の手続きや法律を理解している。

(4) 知的財産ポートフォリオ

事業化に必要な知的財産群の把握と戦略的な取得を行い、的確な参入障壁を築く上で重要な分析手法を理解している。

(5) 標準化と知的財産権

知的財産権と標準化のバランスを取りつつ、的確な権利行使が可能な技術戦略を構築するための制度や法律を理解している。

(6) 知的財産の価値評価

知的財産の価値評価の意義と手法を理解している。

14

大項目

3. 技術戦略と研究・開発 (R&D) マネジメント

全体目標

企業戦略、事業戦略と連動、統合した技術戦略の立案に必要な主要事項を説明できる。
技術戦略における実行施策である研究・開発 (R&D) のマネジメントに必要な主要事項について説明できる。

中項目

- (1) 技術
(2) 企業戦略、事業戦略との関係
(3) 技術動向分析
(4) 保有技術 (内部資源) 分析
(5) 技術ナレッジ・マネジメント
(6) 技術評価
(7) 技術獲得
(8) 技術ロードマッピング、技術ロードマップ

技術戦略、研究開発マネジメントにおける技術ロードマッピングの位置づけ、役割についてその概略を説明することができる。

先端技術を例にとり、技術ロードマップを構成する要素について説明することができる。

- (9) 研究・開発の役割 (機能)
(10) 研究・開発 (R&D) マネジメント

大項目

4. オペレーションズ・マネジメント

全体目標

企業活動のオペレーション全般について製品開発、生産計画、資材調達、作業管理、物流管理およびプロジェクトマネジメントの観点から説明できる。

【中項目】

- (1) 製品開発とプロセス
(2) 生産性の管理
(3) IE (Industrial Engineering)
(4) 納期と工程管理
(5) 資材調達
(6) 原価管理
(7) 品質管理
(8) サプライチェーンマネジメント
(9) プロジェクトマネジメント

C 総合領域

総合領域の狙いと定義

技術経営 (MOT) 専門職大学院における教育の目標は、技術と経営の複眼的な視点から社会や企業、組織における様々な問題に対して、解決を目指して取り組む力を学生が修得することにある。このためには個別の専門的知識やスキルの習得に止まらず、自ら課題を探索し、かつその課題の創造的解決に向けて、知識やスキルを解決すべき問題の性質に照らし合わせて選択的かつ複合的に活用する経験が必要であるので、コア・カリキュラムには知識やスキルを複合的に活用するための総合領域を設定する。総合領域は、それに取り組むことによって学生が将来に直面する可能性のある様々な実務課題に対する創造的な解決策を導くためのアプローチ方法を体得するに至ったことを、成果物によって担保することを意図している。

このような観点から、コア・カリキュラムとしての総合領域を以下のように定義する。すなわち、技術と経営に関わる領域において自ら設定した課題に対し、講義、演習、事例を用いた討議などを通じて習得した知識、スキルなどを総合して技術と経営の複眼的視点から解決を目指した創造的な取り組みを教員の指導の下に行なうものであり、その成果は下記の質的要件を具備し、報告書の形で提示される。

総合領域の満たすべき要件とその狙い

成果内容の充足すべき要件は以下の通りである。

教育の成果が認められる、つまり専門職大学院において習得した知識やスキルが活用されていること。

適切、妥当な論理の展開であること。すなわち検討、考察の対象となるデータは妥当な方法で収集されたもので信頼性が確保されていること。分析の手法は適切なものが選択されて妥当な適用がなされていること。主張や提言には創意工夫がみられ、既に知られていることを単に繰り返して述べているだけではないこと。

次のうちの少なくとも二つを具備していること。

有用性: 単なる個人の感想や調査結果の羅列ではなく、社会、産業、企業、組織などへの貢献が見込まれること。

実現可能性: 主張や提言は実現可能性を示す内容になっていること。

学術的価値: 客観性、厳密性、普遍性、新規性、独創性などの点で学術的な価値を有した内容であること。

専門職大学院の性質上、個々の学生のバックグラウンドや関心によって総合領域にかかる活動は多様性を持つため、コア・カリキュラム構成要素としての総合領域の内容は上記のように、質的要件で規定される。

質的要件が意図するところは、自ら設定した課題に対して学生が適切な調査・分析を実施し、創造的な問題解決に取り組んだ経験の担保である。この経験を通じて体得した解決策を導くためのアプローチ方

法を基に、学生は専門職大学院を修了した後の実務において直面する可能性のある課題に関し、技術と経営の複眼的な視点に立脚した創造的問題解決力を発揮することが期待される。このため、総合領域における質的要件の達成には、課題の解決に対して最適な知識やスキルを探索・選択することと必要に応じて新たに習得することが求められる。

総合領域と知識項目との関係

実務において技術と経営の複眼的視点から創造的問題解決に取り組んで得られる成果の評価はその学術的価値とは必ずしも一致しない。自立的に行なわれる学術研究活動とは異なり、実務においては解決すべき課題が常に自らの設定によるとは限らず、経営上、業務上、職務上などからの要請によって規定される場合も多く発生することが考えられる。したがって、求められる創造的問題解決力は限定的な領域にかかるとすべきではなく、また総合領域において取組む特定の課題にかかる先端的知識やスキルのみを MOT 専門職大学院において習得させるだけでは不十分である。

実務において実効性のある問題解決を行うためには、企業や組織において関係する様々な部門や人々と連携して取り組むことが求められ、そうした取組みを円滑に推進していくための共通認識ないしは共通の基盤として、技術と経営に関わる基礎的知識が必要となる。すなわち基礎的知識の習得なしには、総合領域において体得した解決策を導くためのアプローチ方法を実務につなげる可能性を高めることは困難である。したがって、実務において技術と経営の複眼的視点に立脚した創造的問題解決を継続的に実施するためには MOT 教育コア・カリキュラムにおいて知識項目として示した程度の内容の教育は必要不可欠であり、総合領域はその基礎の上に積み重ねられることによって意義を持つものである。

MOT 専門職大学院において、習得した知識やスキルを活用する機会とは知識項目の習得から総合領域に至るまでの過程で、またはこれらと平行して特定の技術や市場の動向に関する調査や現役の企業経営者による問題提起に対する解決策の検討が教育として行われるなど、個別の課題に対する実践的な取組みが適宜行なわれて知識やスキルの活用に習熟する機会がより多く設定されているなどのように、各大学の特色に合わせた多彩な内容を選択的なカリキュラムとして作成されるのが望ましい。

パブリック・コメント

以上に記した『MOT 教育コア・カリキュラム』は MOT 協議会のホームページで公開し web 上、および外部識者等へのヒアリングによってパブリック・コメントを求めた。寄せられたコメントとおよび当委員会としての考え方を示した。

MOT 教育コア・カリキュラムに寄せられたコメントとそれに対する見解

No.	コメント	コメントに対する見解
1	MOT は技術をベースにした創造の段階から市場普及までをカバーするのであるとの観点からすると、示された内容は妥当。但し、創造性を重視する観点からすると、事業創造に関する項目（アントレプレナーシップ、事業開発論など）をもっと含めるべきではないか。（学識経験者 A）	起業や新事業創出は目指す成果の一つであり、重視している。ここで提示したのはそれらを実践する際に基盤となるミニマム・リクワイヤメントとしての知識群であり、創造的な取組みそのものは総合領域で行うように配慮している。
2	知識項目としては概ね妥当なものと思われる。大項目の立て方については種々異論もあり得るだろうが、重要なのは中項目以下の網羅性であり、チェックリストとしてのその有用性などの考え方も成り立つ。その点でかなり網羅性の高い体系になっているのではないかと考えられる。 小手先の経営技法の習得に留めない体系にすることが重要。 オペレーションズ・マネジメントが設定されているのは良いことだが、単純に製造業の生産管理に留めないように留意すべき。 （学識経験者 B）	指摘、留意点についてはその通りであると考えている。小手先の技法の習得に留めないために総合領域を設定している。オペレーションズ・マネジメントについては、製造業における狭義の生産管理より広い概念であることを意識してこのような名称にしている。

パブリック・コメント

3	イノベーション・マネジメントにおいて「イノベーションの収益化」の論点が取り上げられていないのは不満。収益化の代替手段の一つは特許であり、知的財産マネジメントにおいては近年、特許化せずノウハウとして秘匿する戦略の意義が高まっているがその点も考慮されていない。 （学識経験者 B）	指摘に対応するものとして、イノベーションは経済的価値の創出を伴うものであることを記載している。特許化せずノウハウとして戦略的に活用することは施策として採り得る選択肢の一つで、このような戦略的取組みを検討するための前提としてここではミニマム・リクワイヤメントとしての観点から知的財産マネジメントに関して最小限理解しておくべきことを示している。
4	本来はイノベーション・マネジメント、技術戦略、新製品開発、R&D マネジメントはセットであるべき。（通信）	それぞれが相互に強く関係しているのはその通りである。本文中にも記載したように、大・中項目は開講する科目名を表しているのではなく習得すべき内容の表示と理解を容易にするためのもので、教育に際しては項目の相互関係を考慮すべきと認識している。（コメント No. 5 参照）
5	重複する可能性のある項目がある。違う人が同じ知識について違うように教えてしまう危険性を争む。例えば技術戦略と経営戦略は重複を招きやすいが、それを避けるように整理して教育が実施されれば上手くまとまったものとなる。（民間教育機関）	項目は科目名などを表しているのではなく習得すべき内容を表示しているため、例示の技術戦略と経営戦略では戦略の基盤に関しては部分的な重複もあり得る。それは既習した内容を土台にしてさらに高度化するためであり、同一内容の単なる反復とは本質的に異なるものである。但し、教育のやり方次第では指摘の危険性について、否定はできない。それ故に、ここで示した内容に基づいて教育を行うためには各専門職大学院において教員がカリキュラムの全体構成と自身の担当分野の位置付けを把握、理解していることが重要で、教員間の十分な意思疎通に基づいた運営が求められる。

パブリック・コメント

6	MOT 教育のコア・カリキュラムができたことは評価できるが、MOT 教育のアウトカムズが不明のように見える。「2. 総合領域」を見ると MOT 教育は単なる知識の獲得ではなく、実社会において創造的問題解決に取り組む力の習得を目指す、とある。この目標に対してどのようにその水準を定め、その水準の達成度をどのように評価するのか。またどのような基準で達成度を判断するのか。水準や達成度を具体的に示せるような目標が必要ではないか。 （電機）	企業等の取組む活動内容が多様であることに対応して、総合領域において取組む内容も多様である。そのために総合領域において達成すべき目標の水準およびその評価法を客観的、普遍的なものとして定めるためには、研究・開発すべき課題が多くあり、継続して検討する必要がある。このような理由から、現時点では総合領域の成果についてはそれが最低限満たすべき質的要件で規定している。規定された質的要件を満たしているものであっても、成果の評価は個々の企業等によって異なることも考えられる。企業等による評価が必要に応じて実施できるように成果については報告書としての提示を求めている。
7	総合領域という区分がくわいが、修了研究として「実践的な取り組み」を認めるというのには良いと思う。ただし、修了研究だけで産業界に必要とされる全ての実践的スキルを習得させることは不可能である。せいぜい一分野、一事例であろうが、いずれにせよ「実践する」課程を設けるのは大変重要である。（学識経験者 A） 学んだものを実践する課程を設けることの意義は大きい。（化学）	修了研究だけで全ての実践的スキルを習得させることは不可能との指摘はその通りである。学生が課題に対して論理性やデータの信頼性の点で評価に耐えうる内容のものを成果として創出する取組みをしたことが重要と考える。総合領域は体系的な教育の成果が発揮される課程である。
8	全体としては、構成も含めて良い出来栄と思う。理想に近づけようとする改善したいことは無数に生じる。在職中の社会人学生が多い MOT 専門職大学院において、その時間的制約の中で、どれだけのものが可能かという点を今後も引き続き検討する必要がある。（総合電機）	教育内容は社会、経済、産業構造、科学・技術などの進歩、変化に応じて改定していくことが必要と考えており、それらを時間的制約の中でどう実現していくかについては、指摘の通り継続して検討していかなければならない。内容を継続的に充実させていくことについては本文中に記したとおりである。

あ と が き

我が国において高度専門職業人の育成を目指して平成15年度にスタートした専門職大学院の制度はその後様々な分野に広がり、今日では180あまりの大学院が開設されて社会人教育の中心的存在として認識されるようになった。専門職大学院においてその教育の質の確保を図るために認証評価制度と並んで、それぞれの専門分野において共通に学習すべき内容の標準化はきわめて重要なものであり、それによって社会的な認知の向上および国際的な職業資格の相互認証という課題にも応えるものとなる。しかしながら技術経営の場合には学術体系としての歴史が浅く特定の資格試験との結びつきをもたないことから、教育内容の標準化はなかなか困難な課題である。

我が国において技術経営の専門職大学院を有し「技術経営系専門職大学院協議会(MOT協議会)」を組織している10大学では、平成20年度から文部科学省の支援を受けてこの課題に取り組むこととし、「MOT教育コア・カリキュラム」の開発を進めてきた。このため、MOT協議会加盟の10大学代表者と産業界からの委員5名の方に参加していただいて「事業推進委員会」を組織し、さらに作業部会として「コア・カリキュラム開発委員会」を設けて1年余り検討を行った。これに加え検討の各段階において広く社会の意見を求めて3回にわたり公開のシンポジウムを開催、また関係する有識者の意見聴取やウェブ上でのパブリック・コメントの募集も行って幅広く意見を反映させ、その成果として「MOT教育コア・カリキュラム」を取りまとめたものである。今回の成果を活かしつつ、それぞれの技術経営系専門職大学院が個性ある教育に取り組んでいかれることを切望している。

これまでの検討に当り委員としてご参加いただいた関係者各位、および貴重なご意見を寄せていただいた皆様には深く感謝申し上げます。また毎回の委員会にオブザーバーとして参加していただいた文部科学省高等教育局専門教育課および経済産業省産業技術環境局大学連携推進課の関係者の方々に多大なご支援をいただいたことを、この場を借りて心より御礼申し上げます次第である。

さらに今回の成果を基にアジア地域を中心とした海外諸国と連携し、技術者・研究者を中心とする社会人のための大学院教育を行っている諸大学の参加を得て情報・意見交換を行い、相互の理解と協力関係を深めるためワークショップを開催したところであり、我が国および世界のMOT教育の一層の発展に向けて取り組んでいく所存である。

平成22年3月

山口大学大学院技術経営研究科長 上西 研

(技術経営系専門職大学院協議会会長)

MOT教育コア・カリキュラム開発委員会

■委員長

山口大学大学院 技術経営研究科 教授 久保元伸

■委員

芝浦工業大学大学院 工学マネジメント研究科 教授 田中秀穂

早稲田大学大学院 商学研究科 教授 山本尚利

東京理科大学大学院 総合科学技術経営研究科 教授 宮永博史

東京工業大学大学院 インノベーションマネジメント研究科 教授 藤村修三

東京農工大学大学院 技術経営研究科 教授 亀山秀雄

日本工業大学大学院 技術経営研究科 教授 宇野永敏

九州大学大学院 経済学研究院 准教授 朱 頌

長岡技術科学大学大学院 技術経営研究科 教授 三上喜貴

新潟大学大学院 技術経営研究科 教授 高橋直紀

株式会社東芝 研究開発センター 次長 内平直志

株式会社日立製作所 基礎研究所 所長 武田晴夫

日産自動車株式会社 執行役員 平井敬文

セントラル硝子株式会社 取締役 常務執行役員 森達也

日本ゼオン株式会社 顧問 山崎正宏

第5節 FD活動経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD活動の効果
技術経営 研究科	国際ワークショップ	講師旅費 3名	237	海外諸国と連携し、技術者・研究者を中心とする社会人のための大学院教育を行っている諸大学の参加を得てこの成果について情報・意見交換を行い、相互の理解と協力関係を深めることができた。
計			237	

第19章 連合獣医学研究科のFD活動

第1節 はじめに

山口大学大学院連合獣医学研究科は山口大学、鳥取大学、宮崎大学および鹿児島大学の農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備、施設を連合した基本的に修業年数4年の大学院博士課程である。大学院博士課程の学生は主指導教員の属する大学に配属されて研究指導を受ける。

教育活動

1. 共通ゼミナール
2. 各大学における特別講義
3. Eラーニング

第2節 共通ゼミナール

日 時：平成21年7月1日（水）～7月4日（土）

場 所：鹿児島大学

参加学生：66名（アンケート回収 56名分）

（1）統計学について

- ・実際にパソコンを使っでの講義は、大変良かったと思う。
- ・大変丁寧な説明で、分かりやすい講義だった。これから非常に役立つ内容だったと思う。

（2）英語論文の書き方について（基礎編）

- ・今回のセミナーで、一番有意義であった。
- ・とても丁寧な説明で、大変良い授業であった。もう少し時間を割いても良いと思う。
- ・過去に受けた講義の中で最もわかりやすく、研究に対し大変役立つと思った。

（3）英語論文の書き方について（実践編）

- ・基本的なポイントがおさえられており、参考になった。
- ・実際にどのように論文を構成していくのかを、自分の経験を基にまとめてあり、大変参考になった。
- ・より実践的なものの方が良かった。

（4）実践プレゼンテーション論について

- ・要点をまとめたスライドが分かりやすく、今後のプレゼンテーションに活用できる。
- ・プレゼンテーションの手技を実践されていたので、引き込まれた。来年の自分の発表に是非活かしたい。
- ・スライドのプリントなどの資料が欲しかった。

（5）研究交流会について

- ・自分の研究に関する情報交換ができ、自分にとって有効な場であった。
- ・もう少し時間を短くしてもいいと思う。
- ・留学生と交流できるいい機会だと思った。テーマの設定については、どういう意義があるのかわか

らないが、話すきっかけとしては必要なのかもしれないと思った。

- ・さらに小グループに分ければ、もう少し活発な意見交換ができるのではないかと思った。

(6) 学生研究紹介について

- ・聴講は、所属講座に限定するのではなく、他の講座の発表も自由に聴講できるようにしてほしい。
- ・一人あたりの時間をもっと短く凝縮した方が、集中力が続いて質問も出るのではないか。
- ・英語で発表をする機会は、一般社会の中でも確実に増えているし、学生の頃から経験しておくことは良いことだと思う。
- ・英語での発表をやめた方が良い。発表側、質問側の両方においてメリットがみられない。

(7) 特別講演について

- ・HGF の発見の歴史的背景から現在の臨床応用まで、興味深い内容を丁寧に説明いただき、非常に分かりやすかった。
- ・最先端の話を聴くことができ大変良かった。
- ・最近では注目すべき話題であり、非常に勉強になった。

(8) その他全体に関する意見、要望など

- ・日程を、土・日まで含むように設定して欲しい。
- ・勤務医であるため、患者さんの多い土・日に休暇をとるのがなかなか難しいため、今回のように土曜日までだと助かる。
- ・交流会、研究発表の割合が多いと思うので、他の講義をもう少し増やした方がいと思う。
- ・最後の報告会は、このゼミの反省、次回への対策、改善のために必要であると思った。続けて欲しい。
- ・交通費の補助について、支給条件を当日移動に限定するのは厳しい。鳥取の場合だと、時間的にも非常に厳しいので考慮してほしい。
- ・1年生は親睦をはかるためにも、合宿形式のほうが良いのではと思う。

第3節 各大学における特別講義

(1) 第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

実施日：平成21年6月12日（金）10時30分～12時00分

実施大学：鹿児島大学

担当教員名：山口大学 田浦 保穂 教授

『牛馬の画像診断 Diagnostic Imagings in Cattle and Horses』

鳥取大学 上原 正人 教授

『家畜網膜の輝板 Tapetum lucidum of the retina in the domestic animals』

(2) 第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

実施日：平成21年10月9日（金）10時20分～11時50分

実施大学：山口大学

担当教員名：鹿児島大学 宮本 篤 教授

『 Role of Magnesium Ion in Circulatory System 』

宮崎大学 後藤 義孝 教授

『マイコバクテリア（抗酸菌）の生物学－抗酸菌症の動物モデルと免疫機序－The biology of the mycobacteria – Animal models and immune mechanisms in mycobacterial infection－』

（３）第３回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

実施日：平成21年11月20日（金）10時30分～12時00分

実施大学：鳥取大学

担当教員名：山口大学 音井 威重 教授

『暑熱ストレスとウシ胚の発生能について

Heat stress on the development of bovine embryos』

宮崎大学 三澤 尚明 教授

『食中毒細菌カンピロバクター・ジェジュニの生活様式

Life style of Campylobacter jejuni, a foodborne pathogen』

（４）第４回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

実施日：平成21年12月11日（金）10時30分～12時00分

実施大学：宮崎大学

担当教員名：鳥取大学 上原 正人 教授 『哺乳類網膜の神経節細胞の分布』

山口大学 和田 直己 教授 『Vertebrate-Locomotion』

第４節 E-ラーニング

前年度に続き各教員のE-ラーニング録画と特別講義の記録が行われ、運用されている。

第５節 F D実施経費報告

部 局	F D研修・F D活動の内容	経費の用途	執行額（千円）	F D活動の効果
連合獣医学研究科	F D活動に経費を必要としなかった。		0	
		計	0	

平成 21 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	任 期	備 考
大学教育機構	機構長	小 嶋 直 哉		
大学教育センター	センター長	岩 部 浩 三		
学生支援センター	センター長	吉 村 誠		
保健管理センター	所長	平 田 牧 三		
留学生センター	センター長	Hintereder-Emde Franz		
人文学部	教授	本 田 義 昭	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
人文学部	教授	Alam , Djumali	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
教育学部	教授	葛 崎 偉	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
教育学部	教授	和 泉 研 二	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
経済学部	教授	内 田 恭 彦	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
経済学部	教授	武 居 奈 緒 子	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
理学部	教授	吉 川 学	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
理学部	教授	村 上 柳 太 郎	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
医学部	教授	中 村 和 行	H21. 4. 1～H23. 3. 31	医学部医学科
医学部	教授	清 俊 夫	H20. 4. 1～H22. 3. 31	医学部保健学科
工学部	教授	内 藤 裕 志	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
工学部	教授	田 中 俊 彦	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
農学部	教授	内 海 俊 彦	H21. 4. 1～H23. 3. 31	
農学部	教授	高 橋 肇	H20. 4. 1～H22. 3. 31	
学生支援部	学生支援部長	澤 田 敏 行		
学生支援部	教育支援課長	村 中 隆 実		
学生支援部	学生支援課長	藤 井 純 朗		

平成 21 年度 山口大学 学部・研究科 F D 担当者 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文学研究科	准教授	山本 真弓	
教育学部 教育学研究科	准教授	野村 厚志	
経済学部 経済学研究科	教授	河野 眞治	
理学部 医学系研究科 (理学) 理工学研究科 (理学)	教授	増山 博行	
医学部 (医学科) 医学系研究科 (医学)	准教授	川崎 勝	
医学部 (保健学科)	教授	堤 雅恵	
工学部 医学系研究科 (工学)	教授	羽野 光夫	
農学部 農学研究科 医学系研究科 (農学)	教授	内海 俊彦	
理工学研究科 (工学)	教授	田中 俊彦	
東アジア研究科	准教授	森野 正弘	
技術経営研究科	准教授	大島 直樹	
連合獣医学研究科	教授	和田 直己	

平成 21 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	岩部 浩三	
〃	教育企画・実施部主事	山本 隆	
〃	教育企画・実施部主事	マルク レール	
〃	教育評価部主事	中田 充	
〃	教授	小川 勤	
〃	准教授	吉田 香奈	
〃	准教授	木下 真	
〃	助教	岡田 耕一	
〃	教育コーディネータ	兼石 俊明	
〃	事務補佐員	野原 志帆	

平成 21 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」

平成 22 年 10 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083)933-5150 (学生支援部教育支援課)